

石川原遺跡  
(3)

縄文時代編

八ッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第77集

二〇二一

国 土 交 通 省  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 石川原遺跡(3)

—縄文時代編—

八ッ場ダム建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第77集

第2分冊 本文編2

2021

国 土 交 通 省  
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 第5項 配石墓

石川原遺跡では78基の配石墓が確認された。第9表に概要をまとめ、第459図～第464図に位置図を示したので参照して頂きたい。配石墓はいずれも遺構名称は振り替えており、この点については配石の項目で詳細を述べているので、これも参照頂きたい。

配石墓の時期は概ね縄文時代後期中葉から晩期前半まで認められ、その分布は大きく3箇所に分かれている。1箇所は後期壠之内2式新段階の6区95号竪穴建物に伴う列石(1号列石)背後の丘陵裾で、ここには3基の配石墓が等高線に沿って並んでいる。2箇所目は後期壠之内1式期の7区133号竪穴建物に伴う列石(12号列石)の前面から11号列石の前面にわたる地区で、ここでは72基の配石墓が重複して存在する。3箇所目は7区西側の一画にある。ここは、後期前半には4号・6号列石が配置され、後期後半から晩期には主要な居住域の一画となる地区である。配石墓は晩期初頭の107号竪穴建物に接する位置で3基確認されているが、そのうち2基は107号竪穴建物構築以前に造られており、1基は同建物廃絶後の埋土上面に造られている。

ここでは以上の3群を便宜的にA群・B群・C群とし、このうち2箇所目のB群72基は、12号列石の前面に集積する一群と11号列石の前面に集積する一群とに分けて、それぞれB1群・B2群としておきたい。

A群は1号列石の段上背後に構築されたもので、1号から3号の3基がこれにあたる。いずれも平成20年度に土坑として調査したもので、周囲にもういくつか配石墓とみられる遺構もあるが、確定できる資料のみを選択した。いずれにしても単位としては小規模であり、短期で収束したと考えられる。

B1群は12号列石の前面の直径25mほどの範囲に58基の配石墓が重複しながら繰り返し長期にわたって構築されている。4号から61号までの58基がこれに該当する。この一画には配石墓のほかにも配石・立石が数多く確認されており、その他にも4基の埋設土器を伴っている。

B2群には直径20mほどの範囲に14基の配石墓が構築

された。63号から76号までの14基がこれに該当する。B1群に比べて密度も少なく、重複するものも少ないが、上面に密度の高い礫群を作りうるものがあり、B1群との違いがどこにあったのかが気になる。なお、B2群は11号列石の前面としたが、11号列石は竪穴建物を作り通常の列石とは異なっており、配石墓を取り囲むような施設として構築された可能性もある。

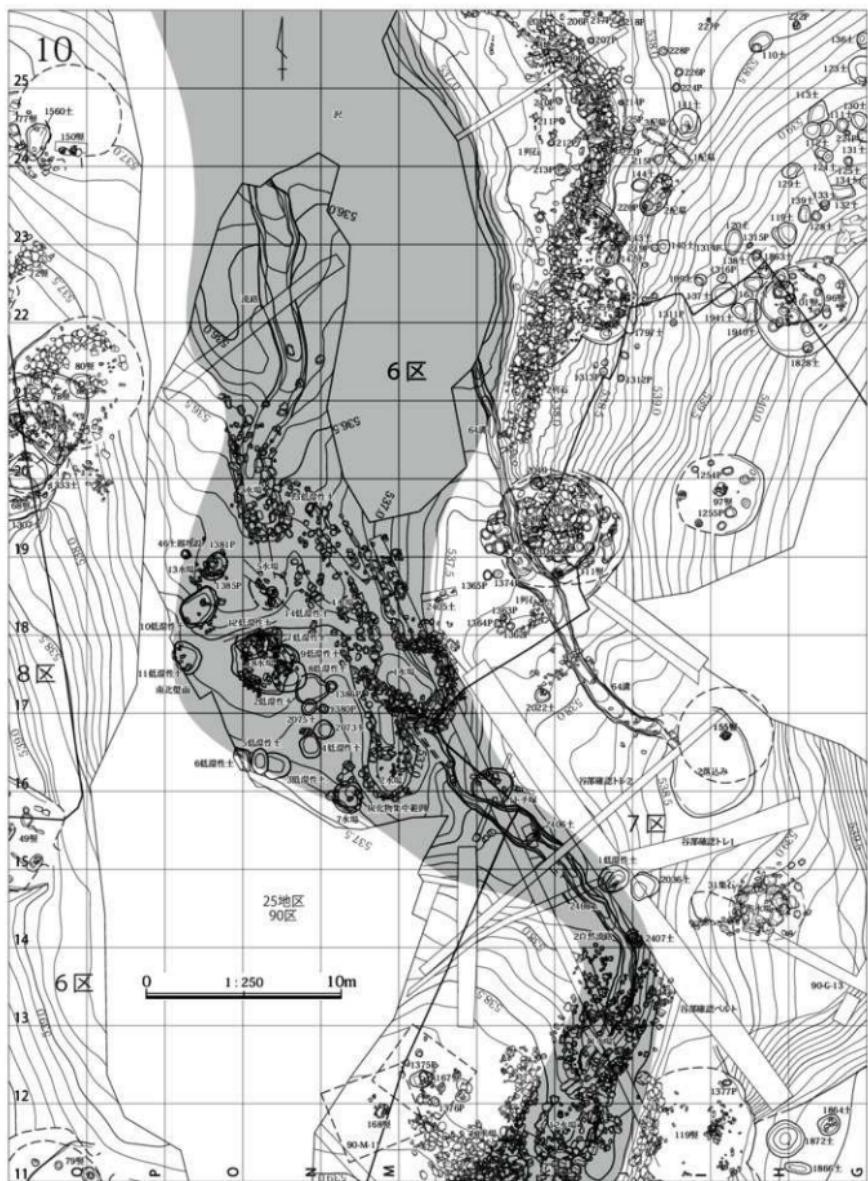
C群の3基はいずれも居住域の107号竪穴建物に接する位置で確認された配石墓で、62号・77号・78号がこれに該当する。この一群は時期はもとより、形態もそれぞれ特異な要素を備えており、列石を作らない点でも他のグループとは異なっているように見える。

なお、遺構名称に括弧をつけて調査時の名称も記載した。また、土層注記については第4分冊を参照いただきたい。

第9表 配石鑄一覽表

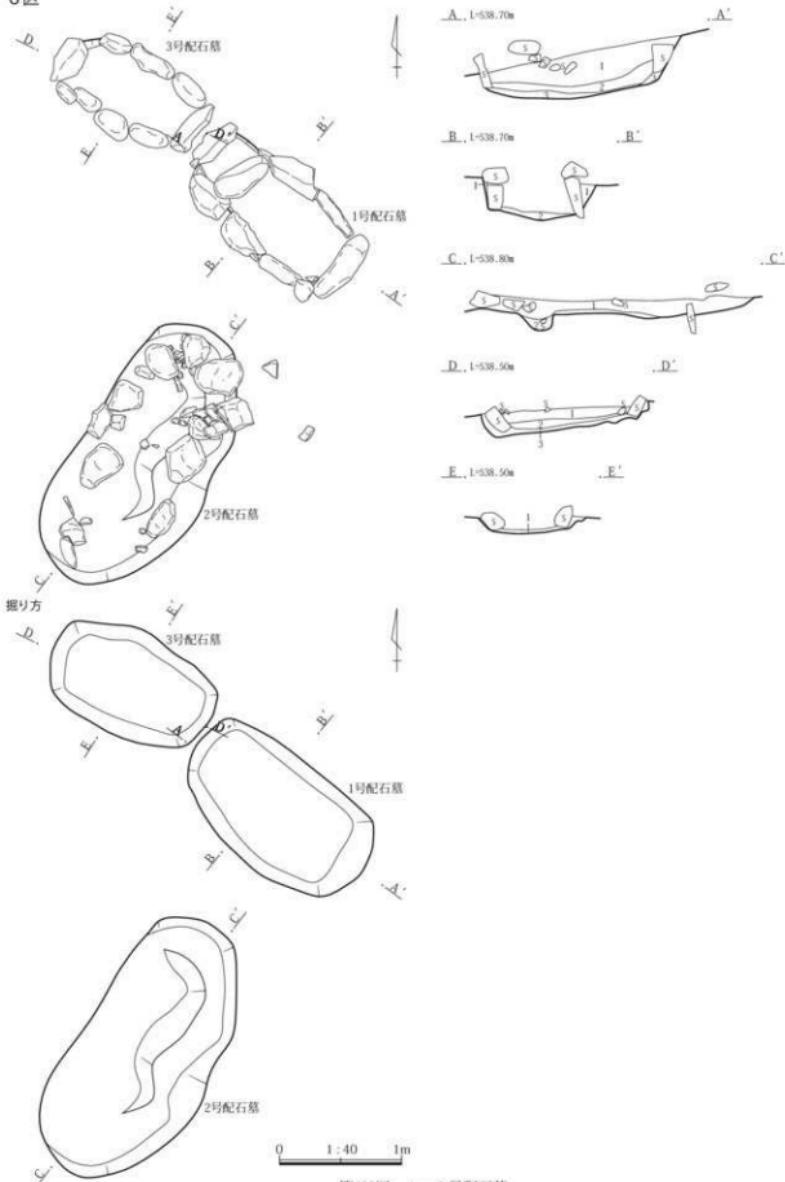
\*~09:號牌 61~79:臺 80~:黑





第459図 1～3号配石墓配置図

6区



第460図 1～3号配石墓

## 第2章 発見された遺構と遺物

### 1号配石墓(90区8号土坑)

調査年度 平成20年度

経過 A群3基のうちの1基である。6区沢に面して配置された1号列石の確認段階で、列石の段上背後で確認された。調査段階では90区8号土坑とされ、当初は南東側半分の石が見えていなかったが、その後の調査で長方形の石組みが判明した。

長軸方向 N-51°-W

規模 長軸132cm、短軸62cm、確認面からの深さは38cmである。

形状 長方形

構造 長さ30~50cmほどの扁平な川原石と地山礫の側面を立てて長方形に組み、その上に1段の小口積みをした状態が一部残っており、その小口積み部分に架けたと考えられる蓋石が1つだけ残った状態で確認された。底面の石敷きは認められない。

また、配石墓の方向は1号列石に準じた方角をとっている。本配石墓は主軸を1号列石主体部に直行させてい

る。

遺物 出土遺物は認められない。

所見 残っていた小口積みは1段のみであり、掘り方底面から蓋石まで35cmほどとやや浅いが、基本的な構造はB群の配石墓と共通している。また、他の3基も含めて、その方向性は1号列石に準じており、その点でもB群の配石墓と共通している。

### 2号配石墓(90区9号土坑)

調査年度 平成20年度

経過 1号の南西65cmに近接する。確認段階ですでに礫が上面に開いたような状態で並んでおり、その下から長軸が1号と直行する長楕円形状の掘り方が確認されたが、壁石と思われるものは認められなかった。

形状 確認できない。

遺物 調査に伴って中期加曾利E3式期の土器破片が出土した。

所見 残っていた石の大半は押し潰されて開いたように見えるが、小さな石は立てた状態を保っているものもあり、セクションC-C'では立っている石の一部と据えられていましたと見られる凹みが残っており、本来は配石墓だったと判断した。

### 3号配石墓(90区9号土坑)

調査年度 平成20年度

経過 1号の北西で確認された。1号と長軸を描えるようにしてほぼ接する位置にあり、北西側の1号列石との距離は\* mと近い。

長軸方向 N-60°-W

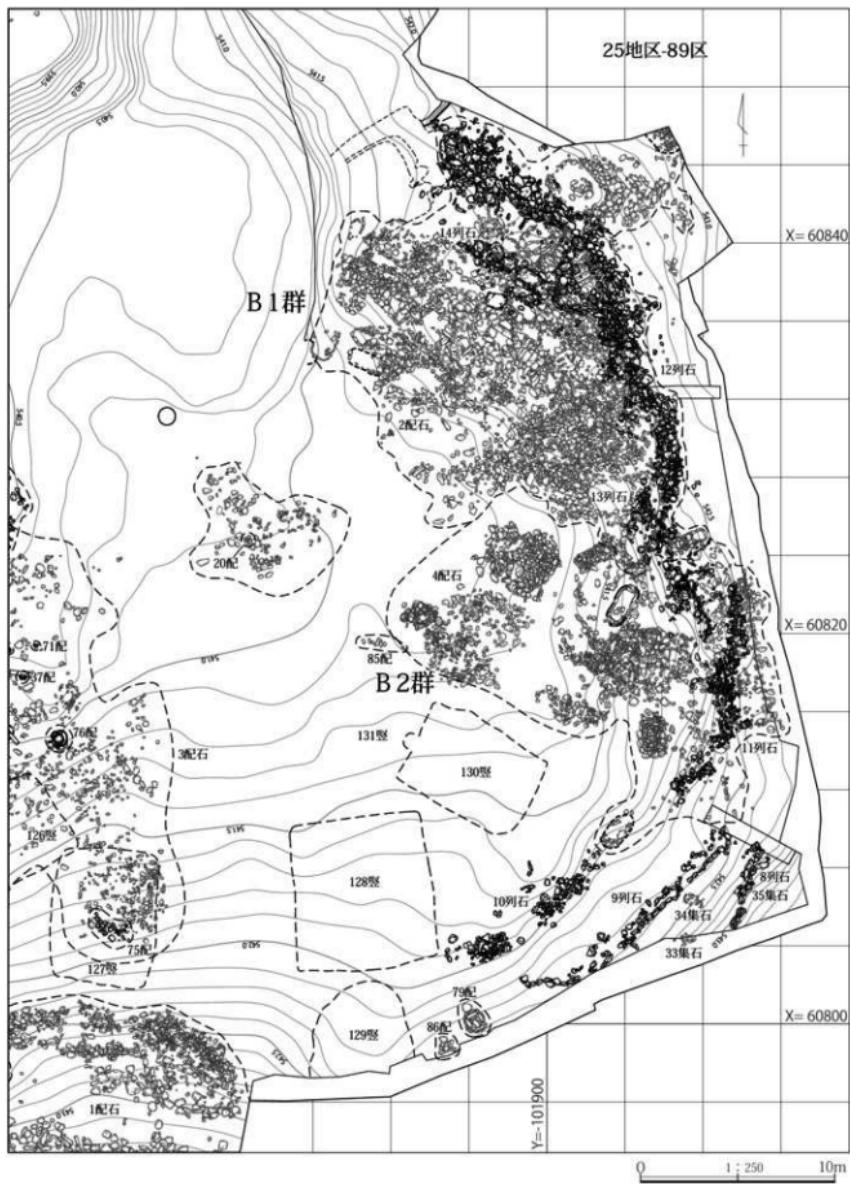
規模 長軸97cm、短軸44cm、確認面からの深さは18cmである。

形状 長方形

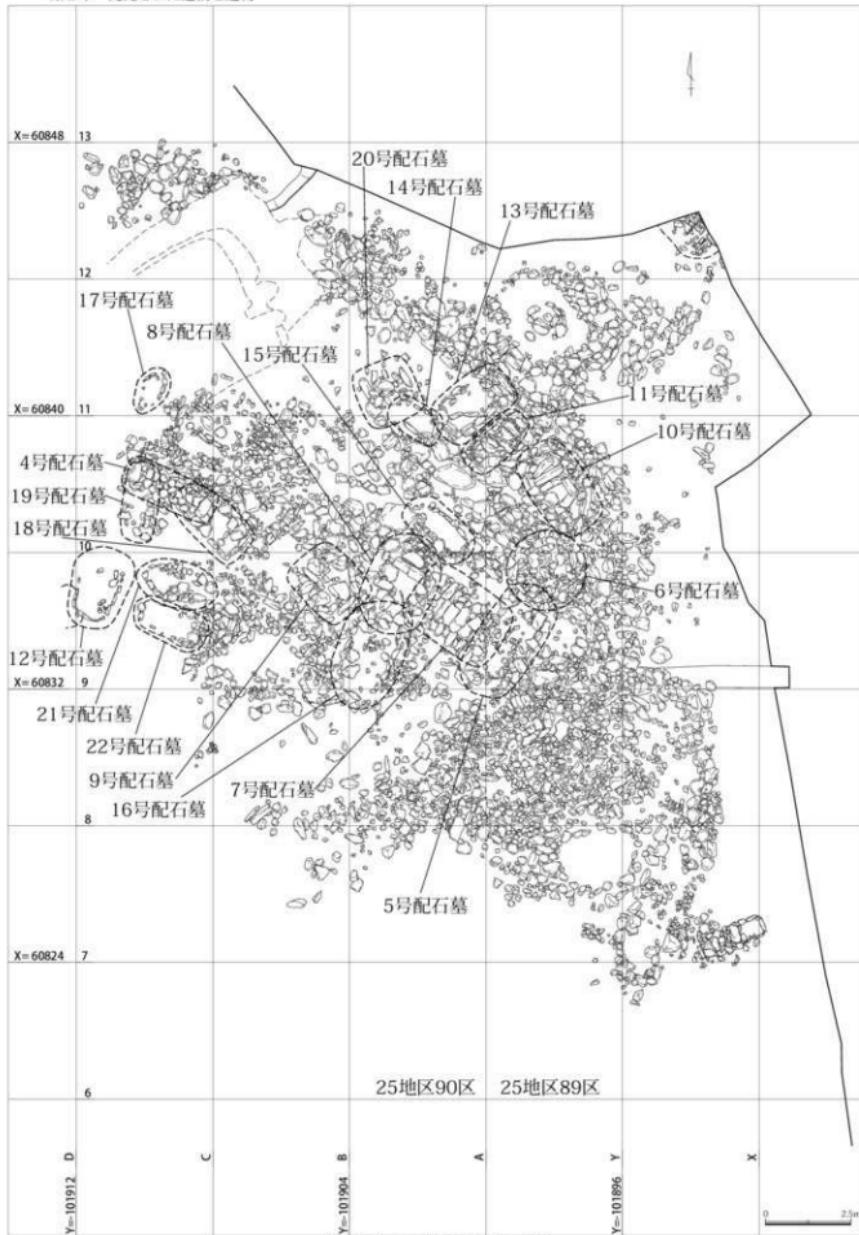
構造 長さ20~40cmほどの扁平な川原石と地山礫の側面を立てて長方形に組んでいる。1号よりやや小さな石を使用しており、外側にやや開いた状態で設置されたものが多い。もともと傾いた状態で設置されたのか、何らかの要因で開いてしまったのかは不明である。また、小口積みの石、および底面の石敷きは認められない。

遺物 確認できない。

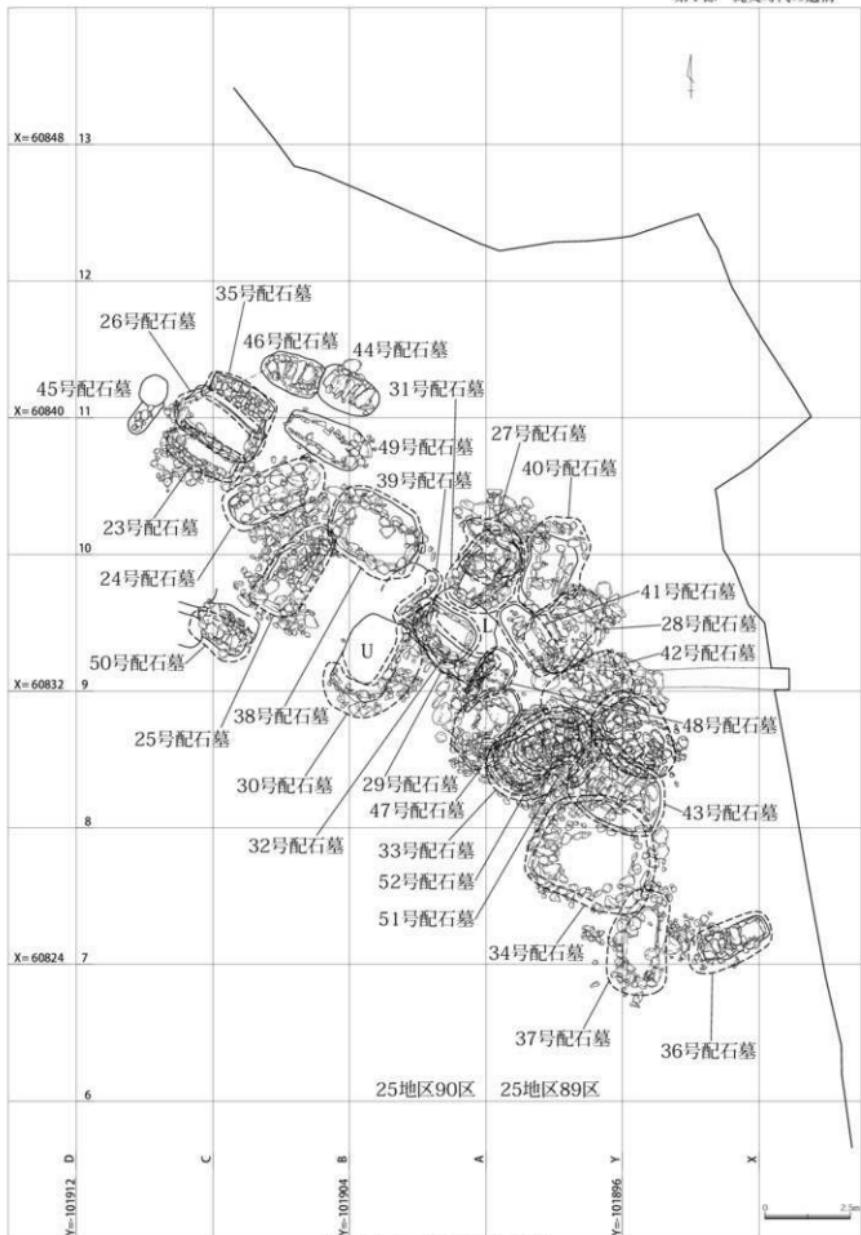
所見 形状はよく留めているが、確認面が低いため、残された手塙かりは少ない。



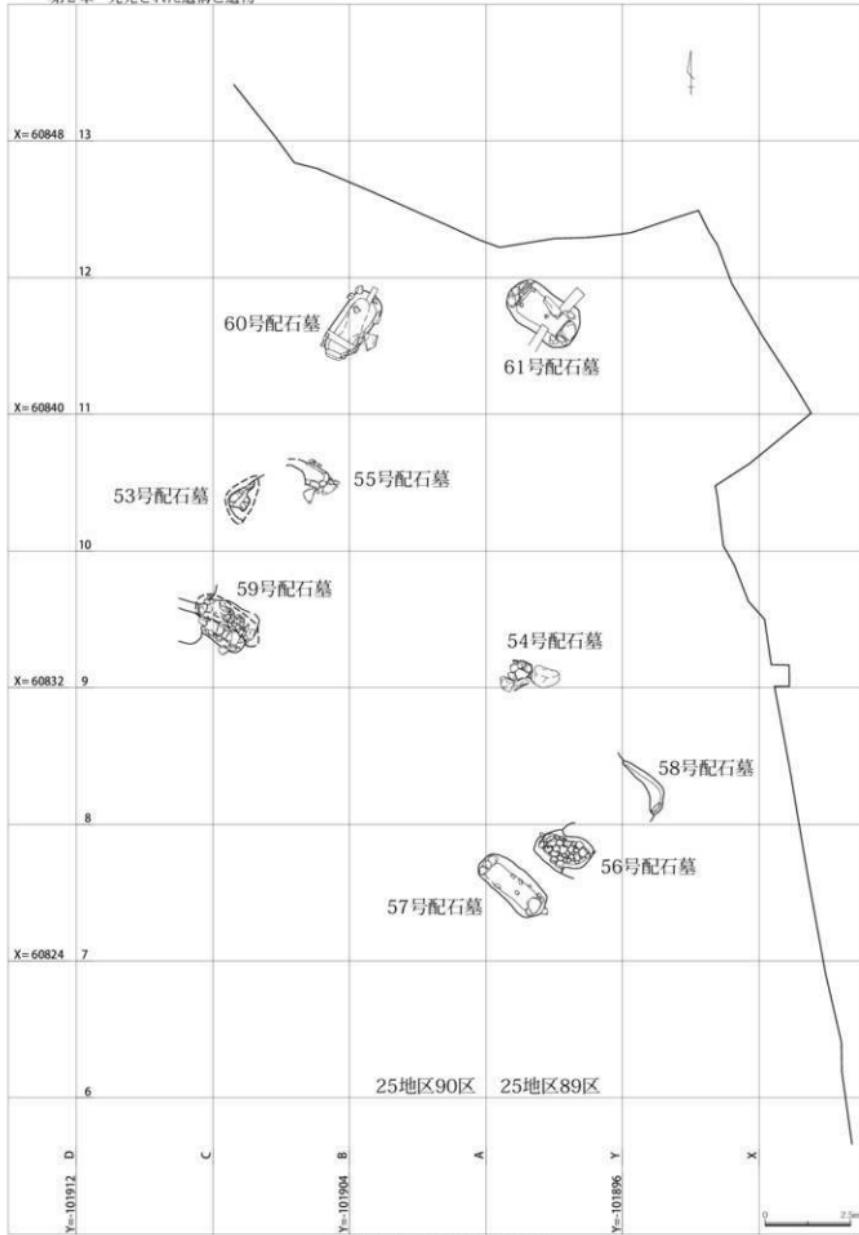
第461図 配石墓全体図



第462図 B1群配石墓調査1回目



第463図 B1群配石墓調査2回目



第464図 B 1群配石墓調査3回目

**4号配石墓(2号配石I)****調査年度** 平成30年度

**経過** 4号から61号までの58基がB1群に該当する。4号配石墓は7区のB1群の北西部で確認された最初の配石墓である。当時はまだ平安時代の堅穴建物等の調査が終盤に差し掛かった時期で、7区東側に突き出した丘陵部下の緩斜面に直径10m以上の範囲にわたって大型礫を大量に含む礫群が露出しており、その状態を確認しながら取り外していくと、一定範囲に小さな扁平円礫をきれいに並べた状態が確認された。配石墓底面の石敷きが露出した状態で検出されたもので、上部構造はすでに失っていたが、平成30年度の配石墓調査の契機となった。

**重複** 本配石墓の下から18号・19号配石墓が検出されており、これらを切る。

**長軸方向** N-62°-W

**規模** 長軸224cm、短軸64cm、確認面からの深さは最大で18cmである。

**形状** 長方形

**構造** 底面の石敷き部のみの検出であるが、概ね石敷きは残存していると判断した。長軸方向の両端に長さ60cmほどの扁平な川原石と板石を設置し、その間に20~30cmの扁平な川原石を中心に鉄平石や地山礫を交えて丁寧に敷き込んで、長方形の床面を構成している。壁石の痕跡等は確認されていない。

**遺物** 調査に伴って晩期佐野I b式期と晩期天神原式期の土器破片が出土した。

**所見** 本遺跡の配石墓の中では長さが最大規模の部類であり、長軸両端部の大きな石が底面石敷きの一部に該当するか否かが問題となるが、本遺跡の事例では底面敷石を施すタイプはいずれも壁石を設置していることから、底面石敷きの一部と判断した。

**5号配石墓(2号配石J)****調査年度** 平成30年度

**経過** 7区B1群の中央部南東側で確認した。一面に礫が集積するなかに、弧状にめぐる壁石頭部と小口積みの一部が検出され、調査となつた。調査を進捗するなかで埋土中層から大型の粗製土器2個体が横転した状態で出土し、北東側の底面付近からは耳飾りが対の状態で検出された。

**重複** 南西側の7号・29号配石墓を切り、北東側の長軸端部を6号配石墓に切られる。

**長軸方向** N-37°-E

**規模** 長軸180cm、短軸92cm、確認面からの深さは45cmである。

**形状** 楕円形

**構造** 底面に石敷きを施した楕円形の配石墓で、壁石は長軸を縱位に立てて設置しており、その上に小口積みの石を1段以上載せるが、大半を失っている。蓋石も不明である。

長軸南西側を一部失っているが、その他は概ね造墓時の状況を留めている。底面には10~20cm大の扁平な川原石を中心いて全面に敷き込み、長軸北東側の端部だけに長さ50cm大の大きな扁平礫を、あたかも枕石のように配置している。この枕石の南端石敷き上5cmから一対の耳飾りが検出されており、注目される。

**遺物** 耳飾り以外では、覆土中層から晩期前葉の粗製土器2個体が横転した状態で出土し、他に精製土器破片等も出土している。

**所見** 幅が広く楕円形の平面形状は34号・38号などと共に通しておらず、残存状況は悪いが6号も同類の可能性が高い。

**6号配石墓(2号配石K)****調査年度** 平成30年度

**経過** 5号配石墓の北東に接しており、円形状にめぐる壁石の内側に大型礫を多量に詰め込んだような状態で確認された。5号よりもやや大きな壁石を使用しており、壁石も底面も5号よりやや高い位置に設置されているために目立つが、その分上面の削平を受けているためか、小口積みの石や蓋石は認められない。

**重複** 5号および15号・40号配石墓を切る。5号とは壁石が背中合わせに接しているが、掘り方覆土の切り合いで関係から6号が5号を切っていると判断した。

**長軸方向** N-48°-E

**規模** 長軸140cm、短軸130cm、確認面からの深さは30cmである。

**形状** 円形に近い楕円形

**構造** 壁石のいくつかは原位置を保っているが、すでに動いているものや欠落したものも多い。また、小口積み

## 第2章 発見された遺構と遺物

の石や蓋石および底面の石敷きについては不明である。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B 2式～3式期の土器破片が少量出土した。

**所見** 円形状の形状を辛うじて保っているが、確認状況等から、当時すでに造墓に伴って礫群の廃棄・集積場所として改変されていた可能性が高い。

### 7号配石墓(2号配石L)

**調査年度** 平成30年度

**経過** 7区B1群中央のやや南側で確認された。小口積みおよび蓋石までのほぼ全てがよく揃った状態であり、一目で配石墓と認識されて調査となった。

**重複** 8号・29号・31号・32号配石墓を切り、長軸南東側上半部を5号配石墓に切られる。

**長軸方向** N-45°-W

**規模** 状輜187cm、短軸67cm、確認面からの深さは56cmである。

**形状** 長方形

**構造** 壁石を長方形に組んだ配石墓で、2～3段の小口積みの上に蓋石を5枚載せており、底面には石敷きを全面に施している。

長軸方向の壁石は、50cm前後の大きな棒状礫の側面を長手縦位に立てて設置し、その上に小口積みの石を2～3段に重ねている。短軸方向の壁石は、南東側は長軸方向と同様に大きな棒状礫を側面を長手縦位に立てて設置しているが、その上層は5号配石墓に切られて不明である。北西側は大きな扁平礫の縦軸を縦位に立てて3枚設置しており、その上に小口積みの石を1～2段重ねて高さを調整している。

蓋石は、長さ60～90cmの大きな鉄平石5枚を揃えて載せており、その上や狭間にも扁平礫や鉄平石を置いて調整している。

底面には、鉄平石を主体に大小様々な形の石を組み合わせて全面に敷き込んでいる。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B 2式期の土器破片が少量出土した。

**所見** 一部は重複で失っているが、壁石を長方形に組んだ配石墓で、小口積みおよび蓋石および底面の石敷きまでの各要素がほぼ完存状態で揃っている貴重な調査事例であり、本遺跡配石墓の一つのタイプを代表する事例と

言ってよいだろう。

### 29号配石墓(2号配石S)

**調査年度** 平成30年度

**経過** 7号配石墓の調査後半段階で、南側の半分に重複する状態で確認された。

**重複** 32号を切り、北側の半分を7号配石墓に切られる。

**長軸方向** N-55°-W

**規模** 長軸150cm、短軸不明、確認面からの深さは59cmである。

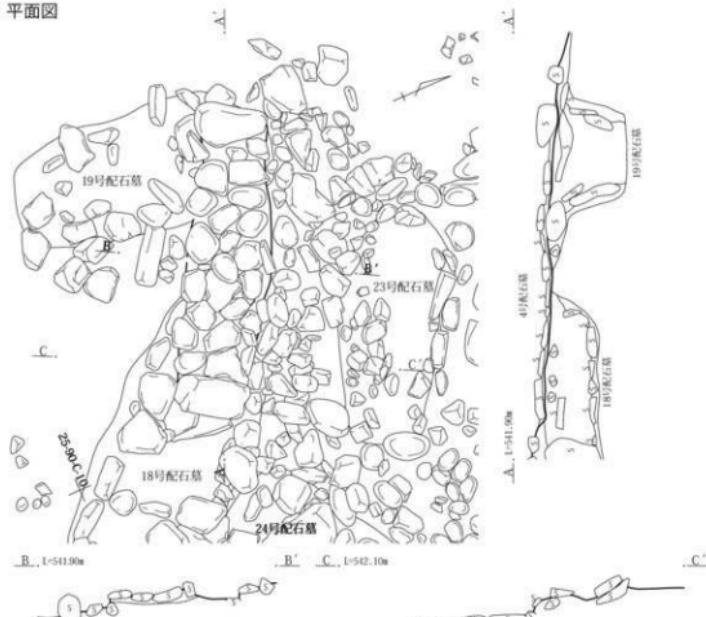
**形状** 楕円形

**構造** 壁石は、南側では棒状礫の側面を長手縦位に立てて設置し、その上に小口積みの石を2～3段重ねて構築しているが、北側では長軸を縦位に立てて設置し、その上に小口積みの石を1～2段重ねて構築している。蓋石は確認できない。底面には打ち欠いた鉄平石を主体に石敷きを全面に敷き込んでいるが、7号配石墓に切られたり乱れている。

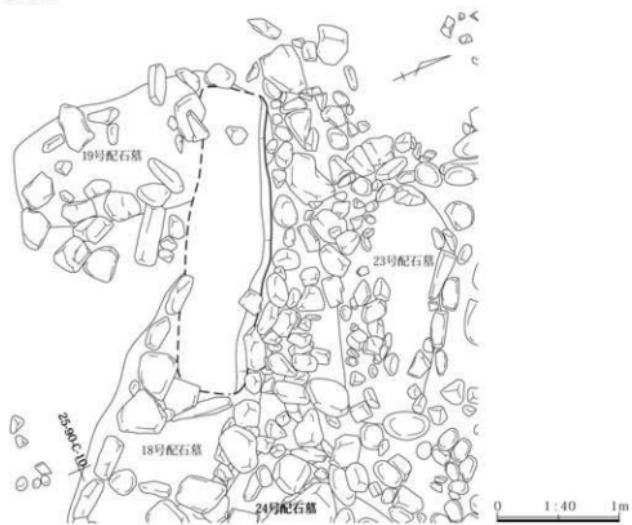
**遺物** 調査に伴って後期加曾利B 2式期の土器破片が僅かに出土した。

**所見** 底面の石敷きを施した楕円形の配石墓で、5号配石墓等に類似した形態だった可能性が高い。

平面図

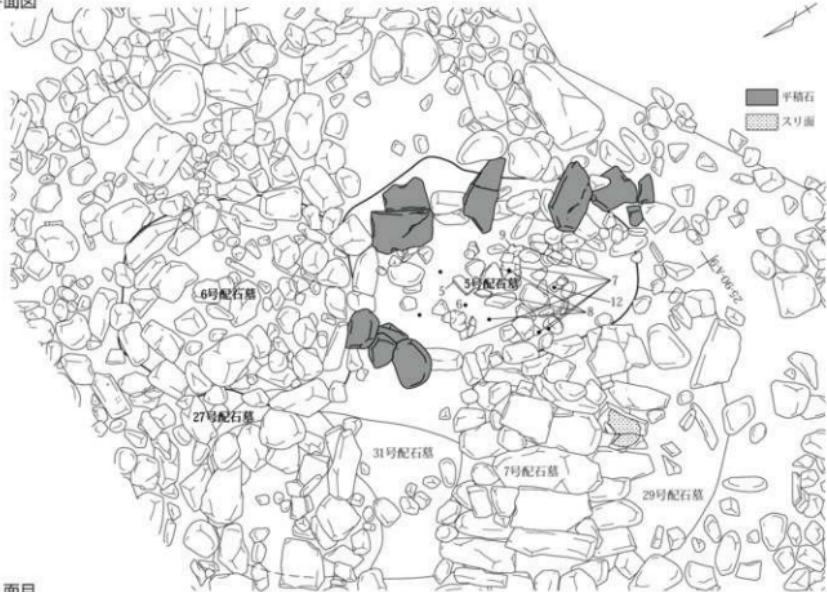


掘り方

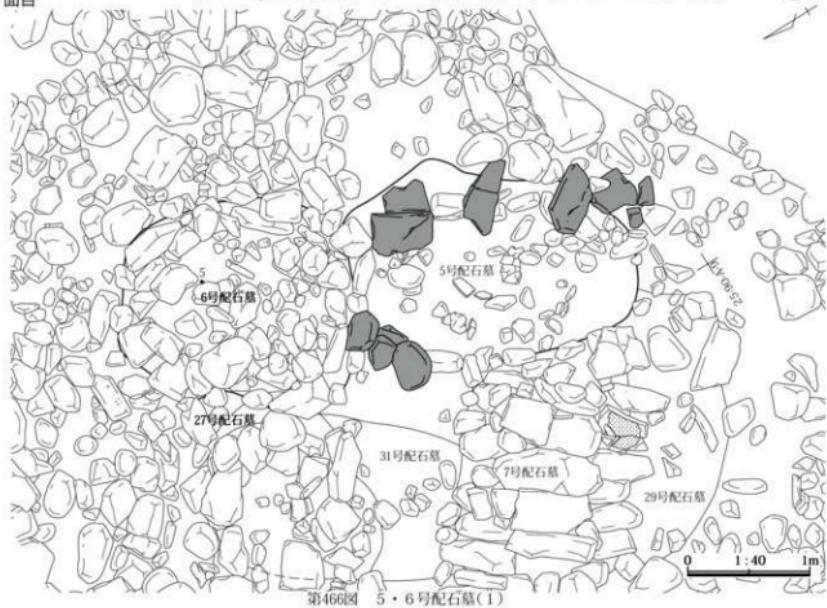


第465図 4号配石墓

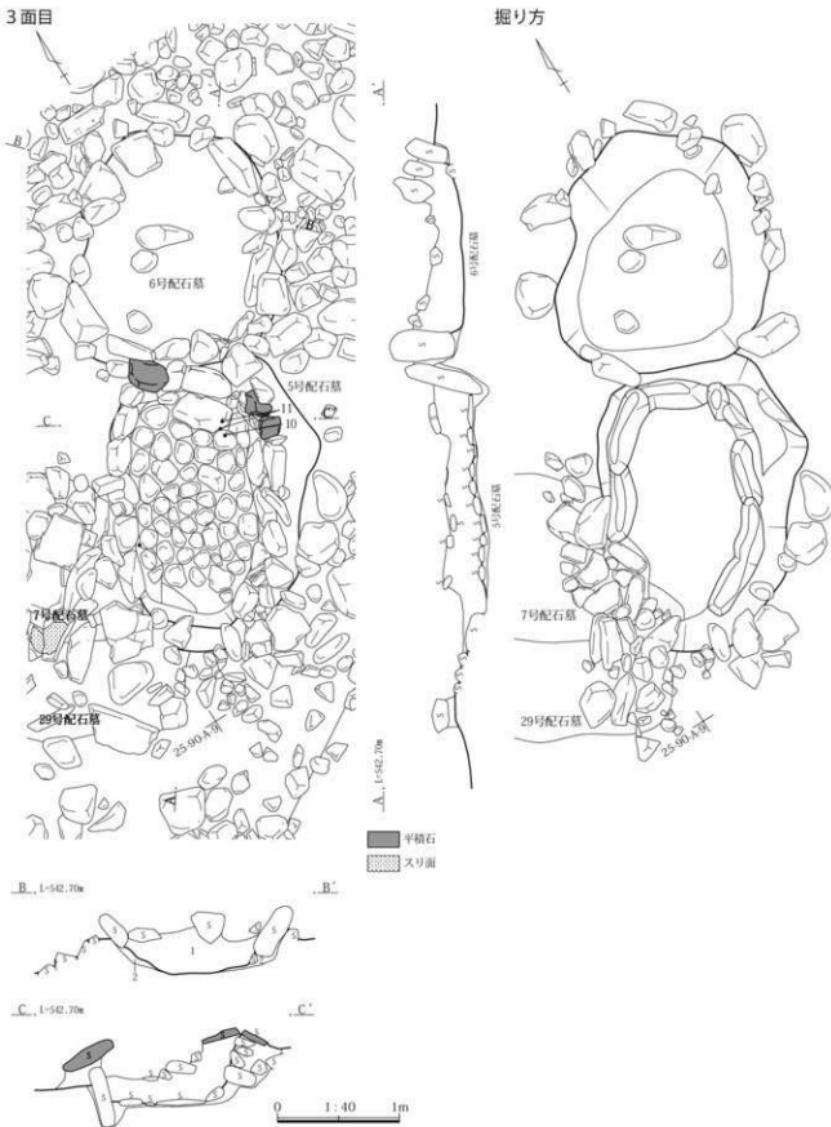
平面図



2面図

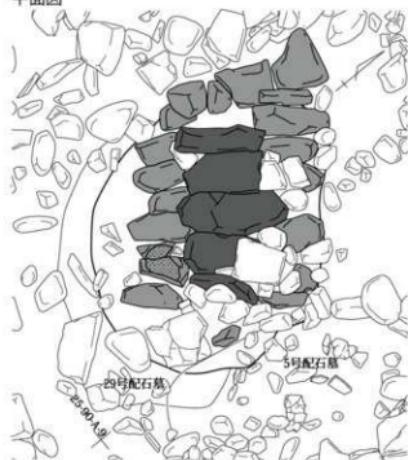


第466図 5・6号配石墓(1)

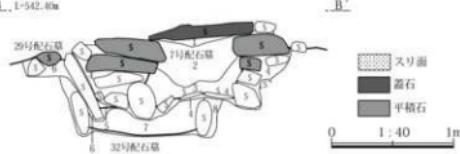
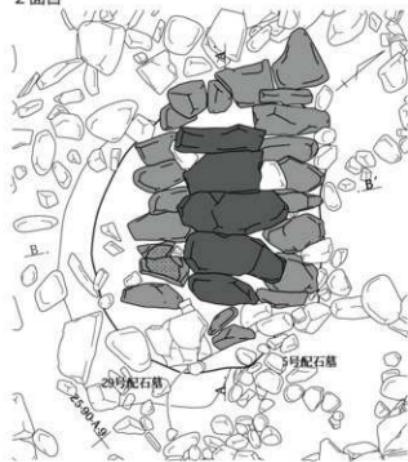


第467図 5・6号配石墓(2)

平面図



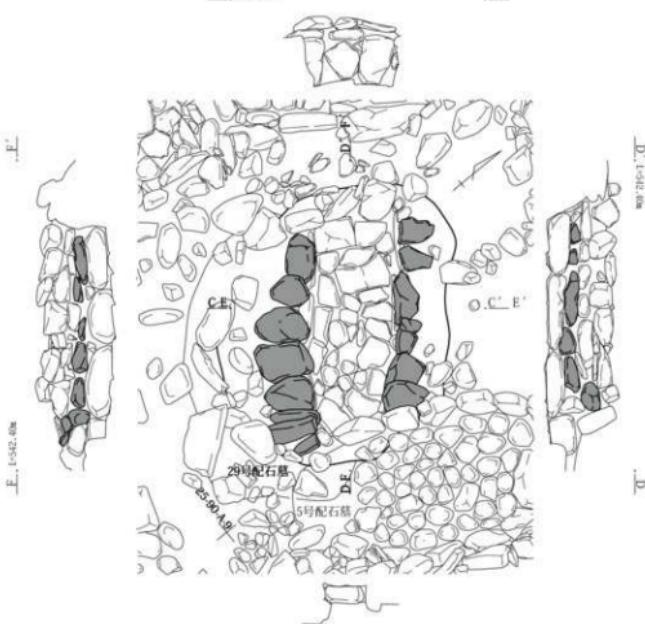
2面図



第468図 7・29号配石墓(1)

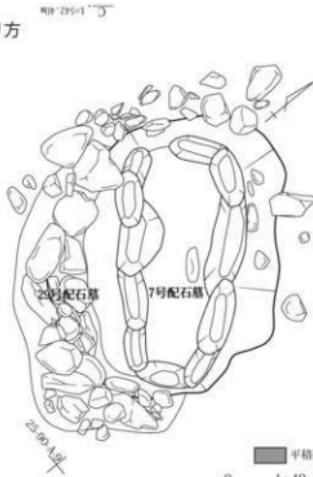
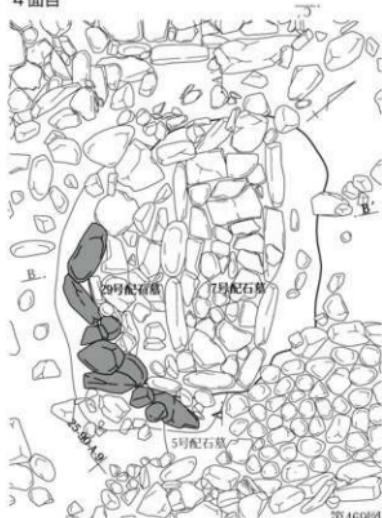
3 面目

E, L=542.40m



4 面目

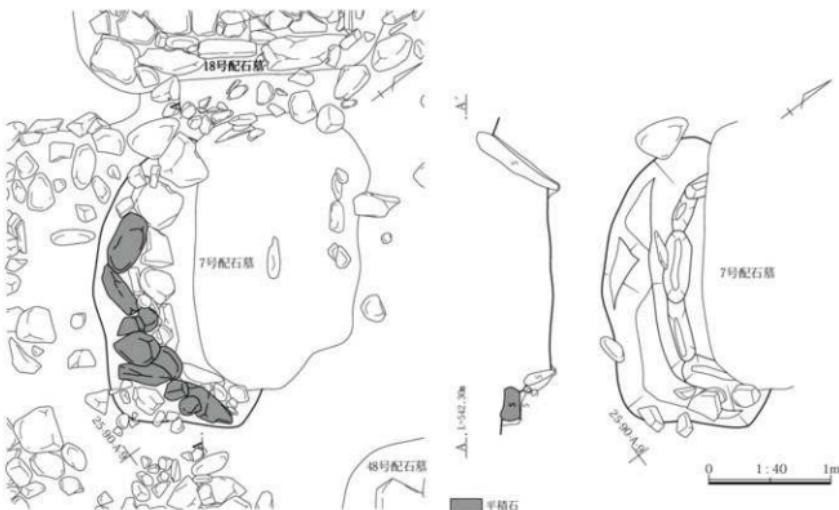
掘り方



第469図 7・29号配石墓(2)

■ 半積石  
0 1:40 1m

平面図



第470図 7・29号配石墓(3)

**32号配石墓(2号配石タ)****調査年度** 平成30年度

**経過** 7号および29号配石墓の掘り方調査に伴って、7号と29号配石墓の下で確認された。小口積みの石と蓋石は両配石墓に切られて残っていないが、北西側の長軸端部だけがかろうじて削平を免れていた。

**重複** 5号・7号・8号・29号配石墓に切られる。

**長軸方向** N-50°-W

**規模** 長軸179cm、短軸49cm、確認面からの深さは35cmである。

**形状** 長方形

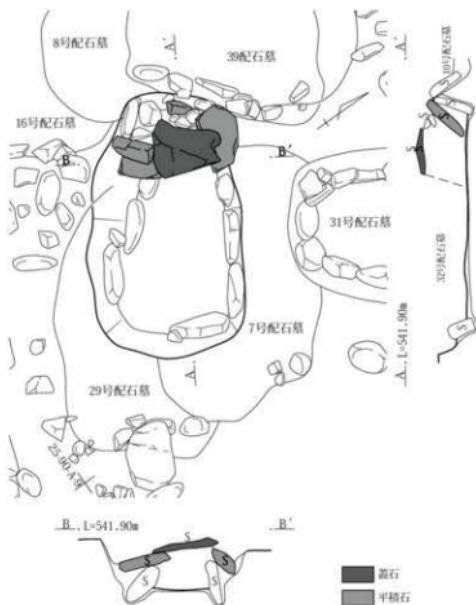
**構造** 壁石は、長さ40cm前後の扁平な礫の側面を長手縦位に立てて長方形の石組みを設置し、その上に小口積みの石を1～2段重ねて高さを調整している。蓋石は1枚のみの確認だが、長さ50cmほどの鉄平石を截せていた。底面の石敷きは無かったが、底面の3箇所からベンガラの赤色の分布が認められた。どのような状態でここに持ち込まれたのかは今のところ不明だが、かなり明瞭な状態で遺存しており、注目される。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B2式期の土器破片がわずかに出土した。

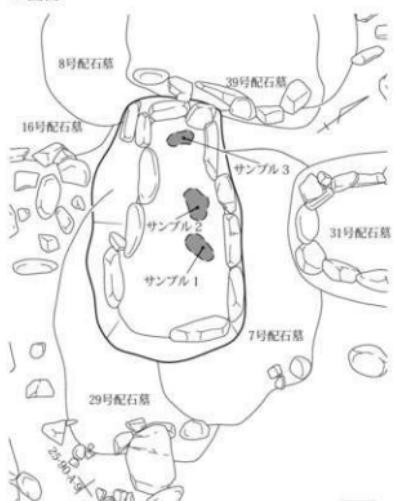
**所見** 比較的華奢で単純な造りだが、配石墓に必要な材料は一通り揃っており、これも一つのタイプとしてよいだろう。

また、底面のベンガラだが、本遺跡ではこれも含めて4箇所の配石墓の底面からベンガラの赤色が確認されており、偶然ではない。

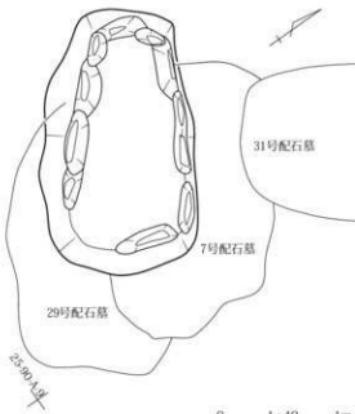
## 平面図



## 2面目

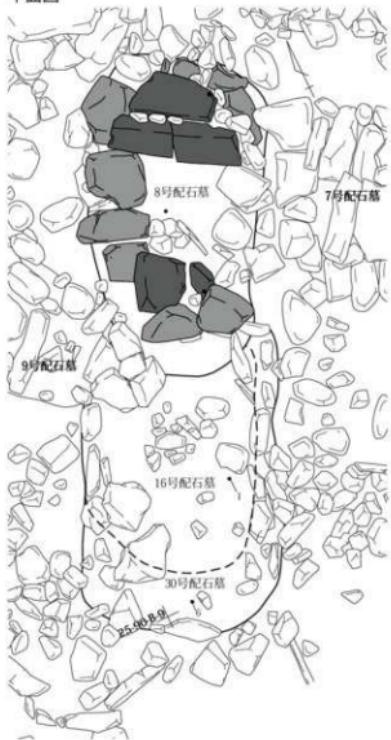


## 掘り方

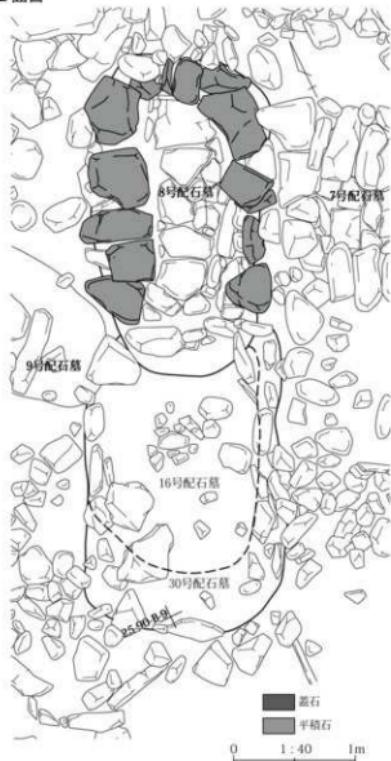


第471図 32号配石基

## 平面図



## 2面図



第472図 8・16・30号配石墓(1)

**8号配石墓(2号配石M)**

調査年度 平成30年度

経過 7区B1群中央のやや南側で確認された。蓋石が残る7号配石墓の北西側に接しており、7号と同時に調査がはじまった。

重複 7号・16号配石墓と重複し、これらに切られる。

長軸方向 N-27°-E

規模 長軸215cm、短軸70cm、確認面からの深さは46cmである。

形状 長方形

構造 長軸南側は重複する16号配石墓に一部切られているが、壁石を長方形に組んだ配石墓で、2~3段重ねの小口積みの上に蓋石を置き、底面には全面に石敷きを敷

き込んでいる。

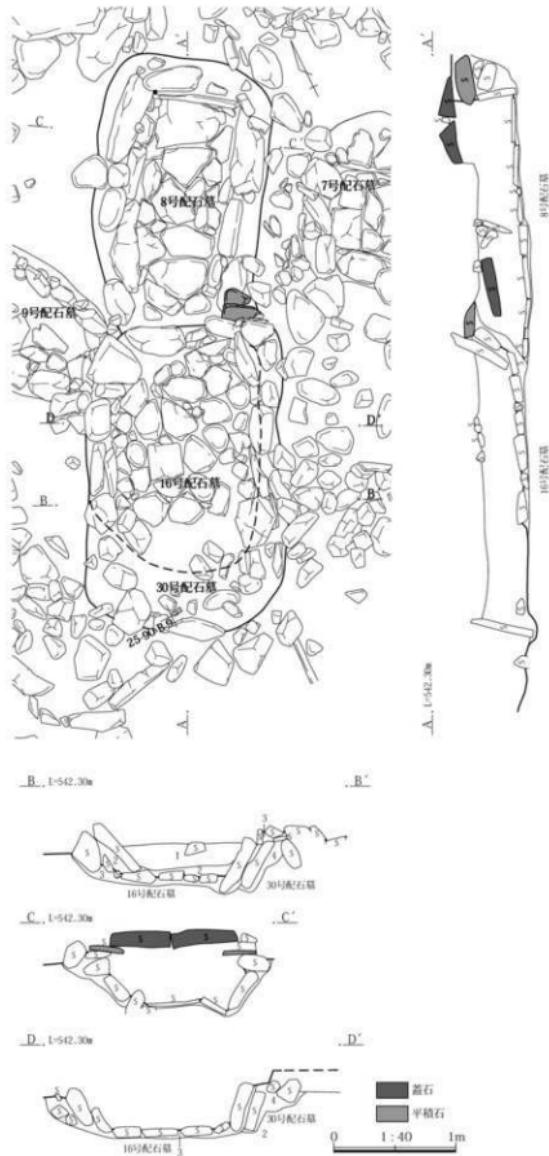
壁石は、長軸方向西側では棒状礫を使用して側面を長手縦位立てて設置しているが、長軸方向東側では大型の板石を使用して側面を長手縦位立てて使用し、その上に小口積みの石を2~3段重ねて高さを調整し、その上に蓋石を置いている。蓋石は長軸両端の3枚が残っていたが、長いものは折れていた。

底面の石敷きは、大型の鉄平石を主体に全面に敷き込んでいた。

遺物 調査に伴って後期加曾利B3式期の土器破片が少量出土した。

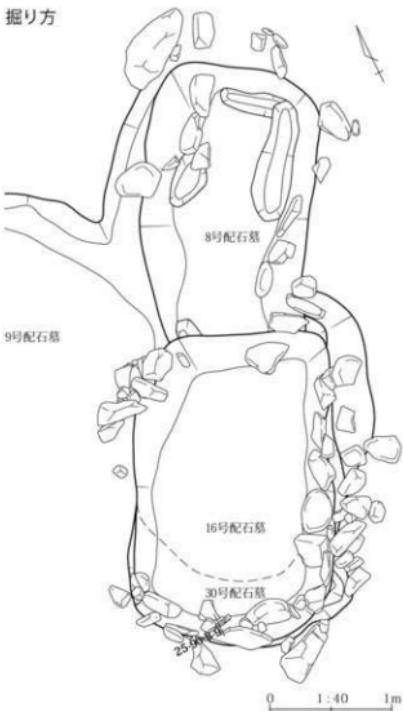
所見 南側を16号配石墓に切られて失っているが、底面に石敷きが施された長方形の配石墓で、蓋石まで残存す

3面目



第473図 8・16・30号配石墓(2)

## 掘り方



第474図 8・16・30号配石墓(3)

る良好な事例の一つである。大型の礫を使用している割には壁石が不揃いで、転用材の準備や力関係など、当時の状況が想像される。

## 16号配石墓(2号配石U)

**調査年度** 平成30年度

**経過** 8号配石墓の調査に伴って、8号の南側に一部重複する状態で確認された。確認当初は不揃いに壁石が楕円形状にめぐっているが、北側にあった数枚の長い石は内側に落下した蓋石の一部、もしくは小口積みの石だった。その後の調査で南側の一部を除いて壁石はほぼ揃っていることが判明した。

**重複** 8号・9号・30号配石墓を切る。大半を30号の内側に重なるようにして構築しているが、30号を切ってい

るはずの南側が不明瞭となっている。

**長軸方向** N-30°-E

**規模** 長軸230cm、短軸98cm確認面からの深さは45cmである。

**形状** 幅広の楕円形

**構造** 壁石を楕円形に組んだ配石墓で、底面の全面に石敷きを施している。

壁石の大半は長軸を縦位に立てて設置しており、その上に小口積みの石を積んで高さを調整していたと思われるが、大半が残っていない。底面の石敷きは鉄平石・川原石・地山礫を混在した状態で全面に敷き込んでいる。遺物 調査に伴って、後期加曾利B1式から晩期前半佐野I式期までの土器破片が少量出土した。

**所見** 壁石も不揃いで、小口積みの石もほとんど残っていないが、底面の石敷きを施した幅広楕円形の配石墓と判断した。

## 30号配石墓(2号配石セ)

**調査年度** 平成30年度

**経過** 16号配石墓の調査に伴って確認された。重複する16号との関係がはっきりしない部分もあるが、16号の外側をめぐる壁石を30号と判断した。

**重複** 16号配石墓に切られる。

**長軸方向** N-38°-E

**規模** 短軸110cm、確認面からの深さは45cmである。

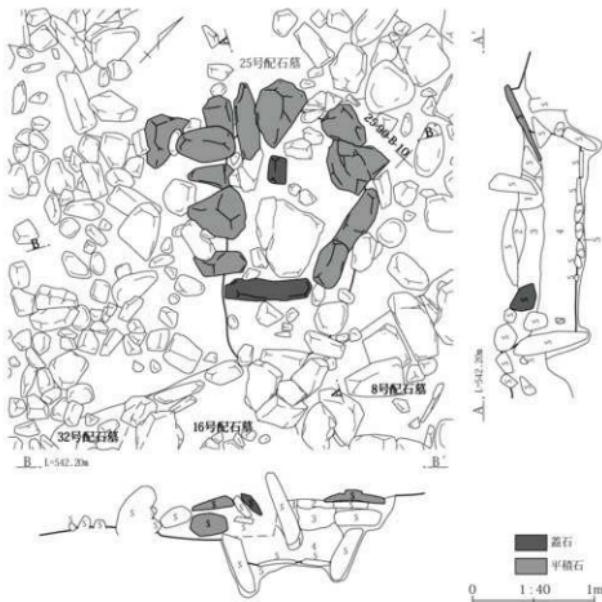
**形状** 幅広の楕円形

**構造** 壁石は16号の外側をめぐる部分のみに残っていたが、一部に食い違う部分もあり、長軸を縦位に立てて楕円形状に配置している。小口積みの石や蓋石は残っていない。底面の石敷きも確認されていない。

**遺物** 調査に伴って後期高井東式期の土器がわずかに出土した。

**所見** 一部の確認に留まったが、幅広楕円形の配石墓であったと判断した。

平面図



第475図 9号配石墓(1)

**9号配石墓(2号配石N)**

調査年度 平成30年度

**経過** 16号配石墓の調査に伴って確認された。確認当初は、大きな礫が円形状にめぐる状態で認められた。その中央部には長さ50cmほどの棒状礫が立っており、そのすぐ南東側には1辺60cm以上の大きな鉄平石が置かれていた。あたかも墓標と供物台のようにも見えた。それらを取り除くと、その下から配石墓の一部が現れたが、その墓標と供物台は配石墓の北西側中央にあったことになる。

**重複** 北西側端部が25号配石墓と重複してこれを切り、南東側端部を16号配石墓に切られる。

**長軸方向** N-36°-W

**規模** 長軸167cm、短軸69cm、確認面からの深さは49cmである。

**形状** 楕円形

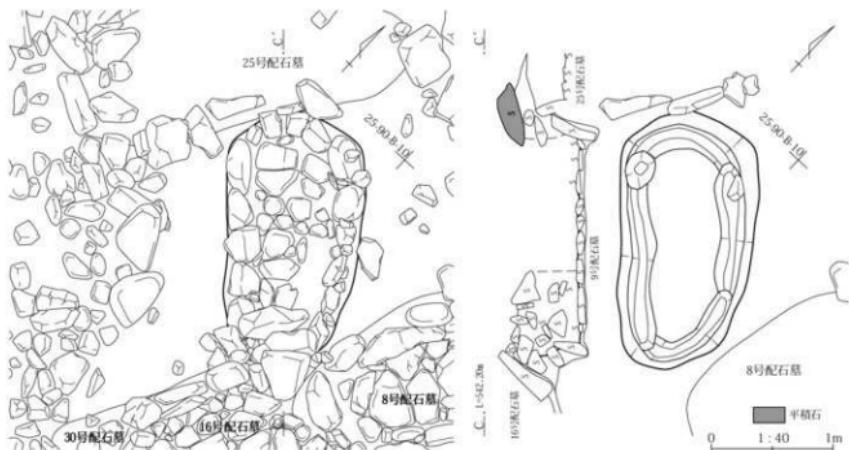
**構造** 壁石は長軸を縦位に立てて楕円形状に並べて設置

し、その上に小口積みの石を2~3段重ねて高さを調整し、南側ではその上に蓋石を置いている。底面には大小様々な形の鉄平石・川原石・地山礫を組み合わせて石敷きを施すが、南東側の一部や所々に空白が認められる。当初から空白があったのか、後に取り外されたのかははっきりしないが、壁石に乱れがないことから前者の可能性が高いと考える。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B2式から高井東式期の土器破片が少量出土した。

**所見** 壁石を楕円形に組んだ配石墓で、小口積みの石や蓋石の一部および底面の石敷きも残っており、良好な調査例の一つである。上面に認められた墓標と供物台を想定させる施設の存在も、今後の配石墓調査に一石を投じる資料と言えよう。

2面目



第476図 9号配石墓(2)

## 10号配石墓(2号配石O)

調査年度 平成30年度

経過 7区B1群の中央の北西側で確認された。ここはB1群とした配石墓群の契機となった12号列石中央部の段下にあたる。確認時は長さ70~95cmの棒状の大きな鉄平石4本が同じ方向に揃えたように並んでおり、1本は直行する方向によけたように置いてコの字状で確認された。こうした状況から配石墓の蓋石と判断し、調査となった。

重複 なし

長軸方向 N-35°-W

規模 長軸170cm、短軸56cm、確認面からの深さは37cmである。

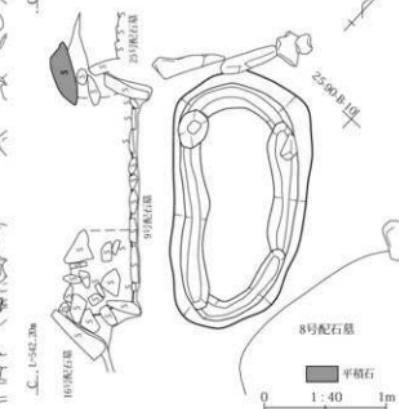
形状 幅狭の長方形

構造 壁石は、方形状の石の側面を立てて長方形に組み、その上に小口積みの石を2~3段重ねて高さを調整し、蓋石として棒状の大きな鉄平石を数本載せている。底面には子割した鉄平石を全面に敷き込んでいる。

遺物 小口積みの石下から後期加曾利B2式土器破片が出土しており、その他にも調査に伴って加曾利B1式~2式期の土器破片が少量出土した。

所見 壁石を幅狭の長方形に組んだ配石墓で、小口積みの石や蓋石、底面の石敷きも伴う良好な調査例である。

掘り方



## 11号配石墓(2号配石P)

調査年度 平成30年度

経過 10号配石墓のすぐ北西側で確認した。10号とは直行する方向に配置されており、すぐ北西に近接する13号配石墓は同方向に並んでいる。10号と同様に大きな蓋石が並んで確認されたことから調査となった。

重複 重複する遺構はない。

長軸方向 N-47°-E

規模 長軸150cm、短軸48cm、確認面からの深さは29cmである。

形状 幅狭の長方形

構造 壁石は側面を長手縦位に立てて長方形に組んだ配石墓で、小口積みの石を使わずに壁石の上に直接蓋石を載せており、底面に石敷きも施していない。

壁石は長さ40cm~75cmの石を長手に使用して、ほぼ同じ高さになるように配慮しているようにも見える。蓋石は長さ40cm~70cmの川原石や鉄平石をやや傾けて合わせ目を重ねるように設置している。

遺物 調査に伴って後期加曾利B3式期の土器破片が少量出土した。

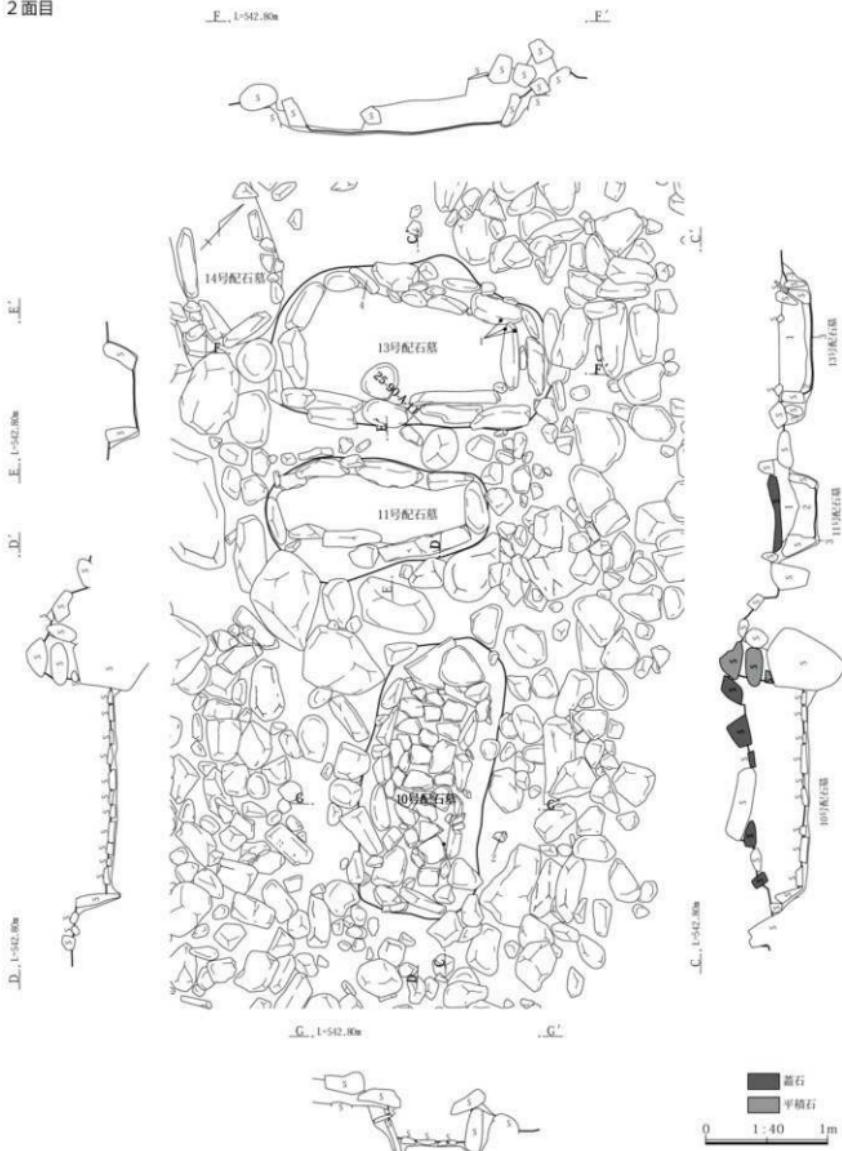
所見 やや小型の配石墓だが、確認面からの深さがあまりに浅く、本来は上層部分があったと考えたい。

## 平面図

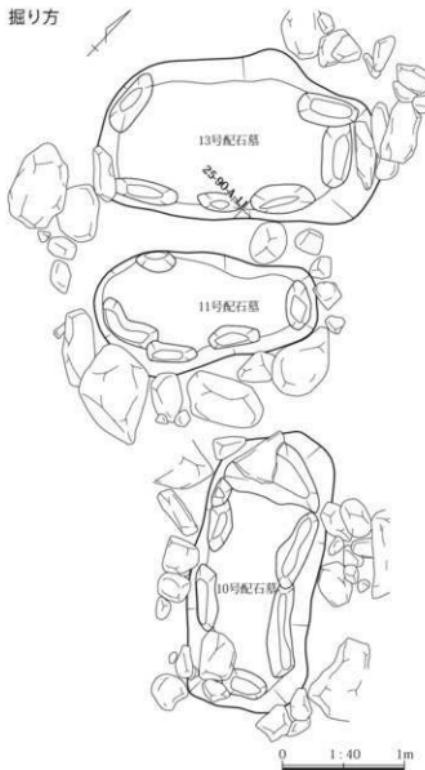


第477図 10・11・13号配石墓(1)

2面目



第478図 10・11・13号配石墓(2)



第479図 10・11・13号配石墓(3)

**13号配石墓(2号配石R)****調査年度** 平成30年度

**経過** 11号配石墓の北西側にほぼ接した状態で確認された。南西に14号配石墓が接している。ここは12号列石に伴う13号竪穴建物の出入り口部中央に位置しており、長軸方向の北東側は12号列石を一部切り込み、南西側には出入り口部に伴うひときわ大きな配石が取り囲むように鎮座している。また、本配石墓のちょうど中軸線上の南西側に直径が30cmほどあるやや扁平な丸石が配置しており、注目される。

**重複** ほぼ接する配石墓はあるが、重複関係は無い。

**長軸方向** N-53°-E

**規模** 長軸161cm、短軸72cm、確認面からの深さは26cmである。

**形状** 長方形

**構造** 壁石を長方形に組んだ配石墓で、小口積みの石や蓋石および底面の石敷きは確認されていない。

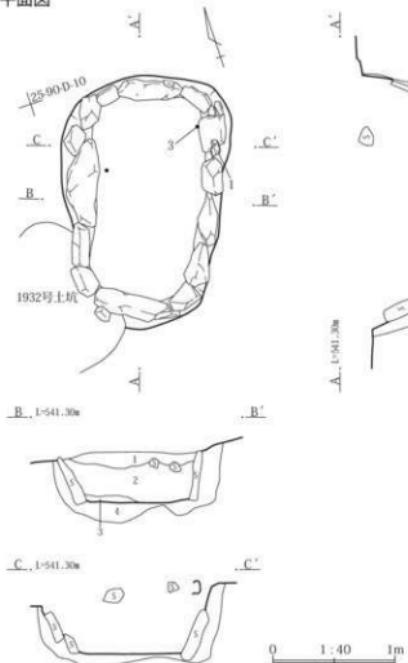
確認時に長さ40cm前後の扁平な礫が配石墓内側でいくつか確認されており、これらが小口積みの一部だった可能性はある。また、壁石の一部が2重の造りになっている点が特徴的である。

**遺物** 埋土上層から少量の後期加曾利B2式土器破片と石皿片が出土している。

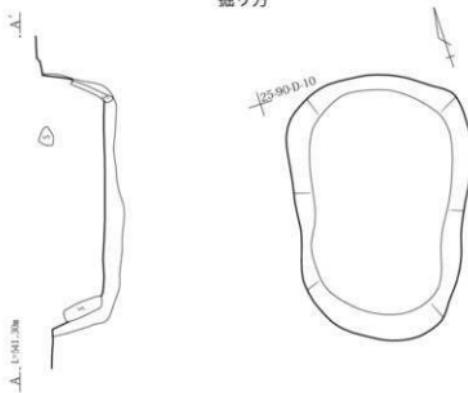
**所見** 本配石墓も、10号と同様に、上層部分が失われていると想定する。その理由は、規模に対して確認面からの深さがあまりに浅いこと、周囲の礫の高さよりかなり下がったレベルで確認されていること、などである。調査当初の写真等の記録を見ても、この場所は当初から礫の量が少ない。

なお、この配石墓はB1群の基準となる位置にあり、しかもその基準のラインにも沿った配置をしている点で注目するが、この点については後に触れたい。

平面図



掘り方



第480図 12号配石墓

## 12号配石墓(2号配石Q)

調査年度 平成30年度

経過 B1群の北西隅で確認した。隅にあることから、他よりもやや低い位置で確認された可能性が高く、本来は上面に小口積み等の造作があったかもしれない。

重複 西側を1932号土坑と重複し、これを切る。

長軸方向 N-15°-E

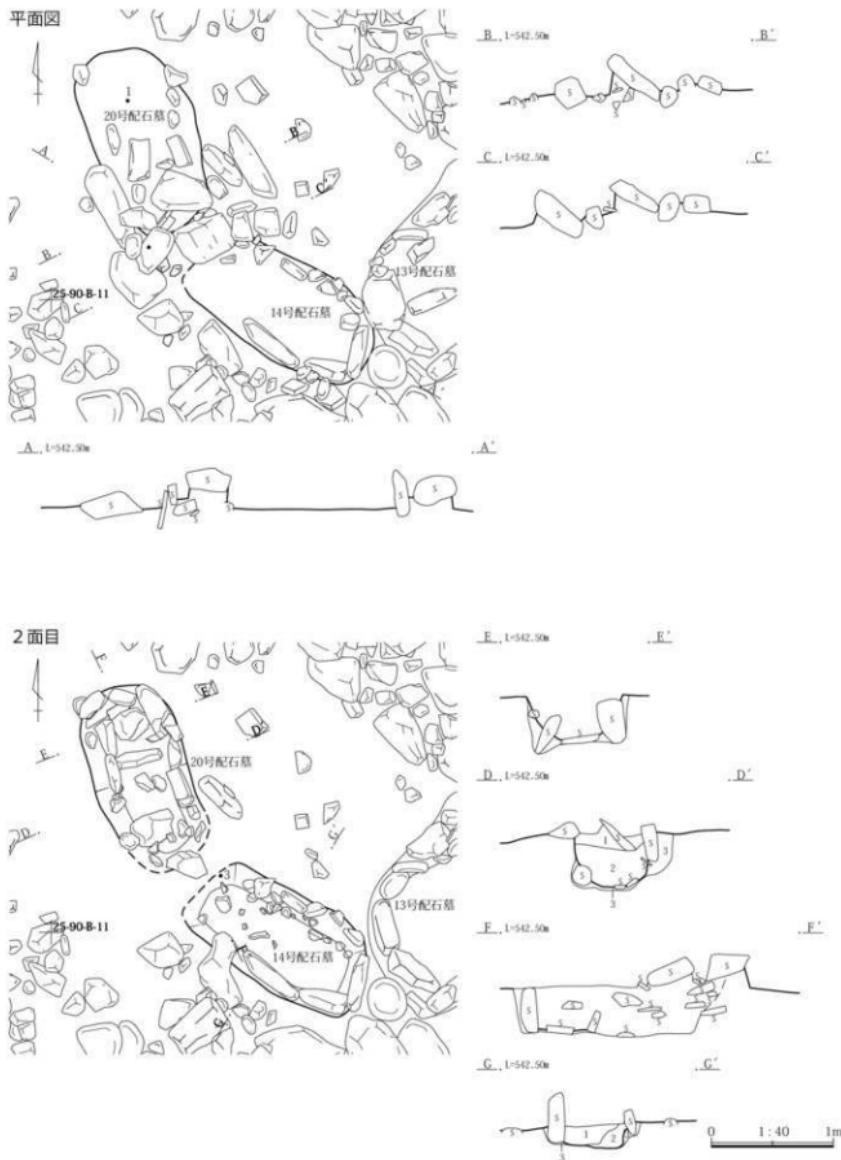
規模 長軸160cm、短軸84cm、確認面からの深さは42cmである。

形状 幅広の楕円形

構造 壁石の長軸を縱位に立てて幅広の楕円形に組んだ配石墓で、小口積みの石や蓋石および底面の石敷きは確認されていない。壁石の高さがかなり不揃いであり、本来は小口積みで調整していた可能性が考えられるが、未検出であり、なんとも言えない。

**遺物** 覆土中から少量の晩期前半の土器破片が出土している。特に北東隅の上層からほぼ完存状態の小型鉢が出土しており、これは副葬の可能性がある。

**所見** 幅広楕円形タイプの配石墓で、小口積み等の上層部分を失っている可能性が考えられる。また、北東部上層出土の小型鉢は、副葬もしくは供養的な品だったことを想定させる。



第481図 14・20号配石墓(1)

## 掘り方



第482図 14・20号配石墓(2)

## 14号配石墓(2号配石S)

調査年度 平成30年度

**経過** 13号配石墓の西側で確認した。主軸の方向が13号とは90度前後異なるので、13号の南西隅に14号の南東隅が接するような位置にあり、13号の長軸線南西に配置された丸石を共有するような状態になっている。また、北西側に近接する20号配石墓との間に大きな礫が数多くあったが、これらは上面に集積されたもので、配石墓の配置とは無関係であった。確認時から壁石の多くが欠落していたが、わずかに残った小さな石や掘り方調査によってその概要はかろうじて把握できた。

**重複** 重複する遺構はないが、南東側に13号、北西側に20号配石墓が近接する。

**長軸方向** N=59°—W

**規模** 長軸148cm前後、短軸50cm、確認面からの深さは28cmである。

**形状** 幅狭の長方形

**構造** 壁石は、長さ50cm前後の扁平礫の側面を立てて長方形に組んだ配石墓と判断するが、その多くは失っており、原位置に残っていたのは3石のみであった。そのほかに、添えられていたとみられる小さな石が北東側の側縁部にいくつか認められた。底面の石敷き及び小口積みの石等は確認できない。

**遺物** 調査に伴って後期後半期の土器破片が少量出土し

た。

**所見** 幅狭長方形の配石墓で、底面の石敷きは認められない。欠落する部分が多く、詳細は不明である。

## 20号配石墓(2号配石Z)

調査年度 平成30年度

**経過** 近接する14号配石墓の北西側で確認された。14号の北西側に集積していた大きな礫群の下で確認されたのだが、20号は14号より底面が深いレベルにあつたため当初は気付かれず、やや時間を置いてから調査となった。

なお、上面にあった大きな礫は、20号に使用された礫よりも厚手で大きなものを4石揃えて側面を立てて並べた状態で確認されており、20号もしくは周囲の配石墓で使われていたものの可能性が高い。

**重複** 確認されていない。

**長軸方向** N=24°—W

**規模** 長軸129cm前後、短軸40cm前後、確認面からの深さは43cmである。

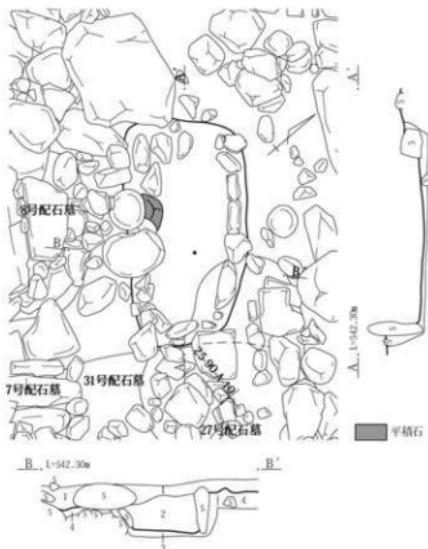
**形状** 幅狭の長方形

**構造** 薄手の鉄平石や扁平な川原石、厚手の山石など、多様な石を使って壁石を構成して幅狭長方形に組んだ配石墓であるが、壁石も不規則で傾いたものや欠落した部分も多い。そのなかで、北側に薄手の鉄平石を1枚差し込んで方形石團い状の一画を作り、その底面に扁平な石を敷き、上面にも石を置いている。

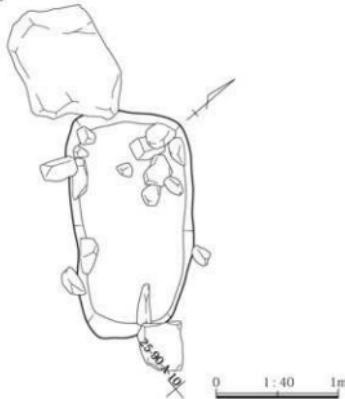
**遺物** 調査に伴って後期後葉期の土器破片が少量出土している。

**所見** 方形石團いの構造は、偶然に1石が落ちたとは考えにくく、意図して構築したものと想定する。その場合、後に供養的な意味合いでこうした構造を造ったのか、再利用の際に被葬者とはまったく切り離した状態で利用されたのか、等の問題が浮上するが、類例を待ちたい。

## 平面図



## 掘り方



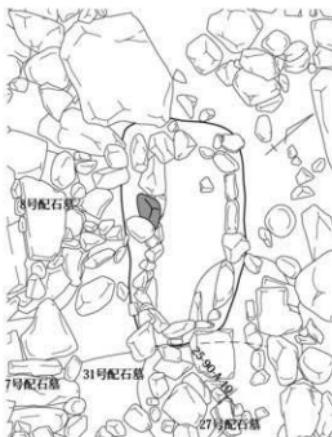
第483図 15号配石墓

## 15号配石墓(2号配石T)

調査年度 平成30年度

経過 8号配石墓の北東側で確認された。B1群のほぼ中央に位置し、周囲には大型の石が点在している。また、周囲には蓋石が残る配石墓も多いが、15号は上層部

## 2面図



を失っているものと想定する。

なお、確認時に南西側縁の中央部に大型の扁平円礫2石がのっており、合い向かいの北東側縁の中央部外側に直径25cm前後の球形の円礫が置かれていた。

**重複** 南西側を8号と、南東側を27号・31号配石墓と一部を重複し、これらを切る。

**長軸方向** N-51°-W

**規模** 長軸134cm前後、短軸56cm、確認面からの深さは32cmである。

**形状** 幅狭の長楕円形

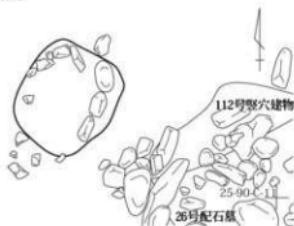
**構造** 壁石は長軸の側縁を立てて幅狭の長楕円形に組んだ配石墓で、底面の石敷きは無く、小口積みの石等は残っていない。北東側の側縁と南西端部の壁石はほぼ現況を保って残っていたが、南西側縁と北西端部の壁石は傾いたものや失った部分も多い。

なお、掘り方は長方形状の調査結果となっているが、残っている南西端部の壁石とその両側の側縁部の結合は弧状になっていること、反対側の北西端部の壁石は原状を保っていないことから、形状は長楕円形もしくは舟形だったと判断した。

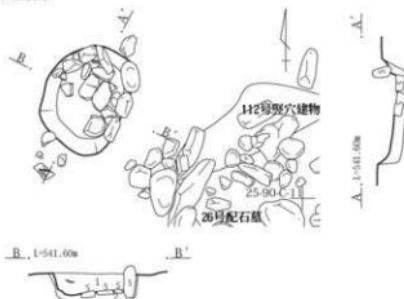
**遺物** 調査に伴って晚期前葉期の土器破片が少量出土している。

**所見** 依存状態はあまり良くなく、壁石も半数以上が失われている。小口積みの石や蓋石もあったと考えられ

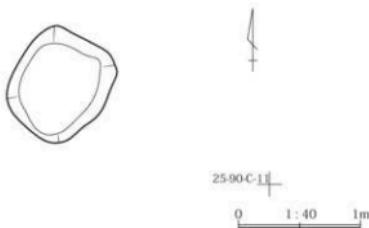
## 平面図



## 2面目



## 掘り方



第484図 17号配石墓

るが、後期後葉から晩期の配石墓で蓋石まで残っているものはほとんど無く、上層部分の構造物は転用もしくは除去された可能性が高い。

## 17号配石墓(2号配石V)

**調査年度** 平成30年度

**経過** B1群の北西端で確認された。最も北側で確認されたもので、上面は平安時代の竪穴建物に削平されており、これより北側で礫は認められない。

**重複** 南西部を45号配石墓と重複し、これを切る。

**長軸方向** N-35°-E

**規模** 長さ59cm前後、短軸54cm、確認面からの深さは22cmである。

**形状** 長さが短い小型の配石墓として調査されたが、疑問が残る。

**構造** 壁石の側面を立てて配置し、底面に石敷きを全面に敷き込んだ配石墓である。北東側の一部のみが残存し、掘方調査では楕円形の小さな配石墓と判断された。北東側の端部の壁石は内側に傾いた状態で1点が残っていたが、側縁の壁石は弧状に配置されており、楕円形に形状であったと考えられる。

なお、壁石以上の造作は平安時代の竪穴建物に切られて残っていない。

**遺物** 調査に伴って後期後半期の土器破片少量と、土器片加工円盤1点が出土している。

**所見** 壁石を楕円形に組んだ配石墓で、底面に石敷きを伴う。その後の調査で、南西側に底面の石敷きのみが残った45号配石墓が検出されたが、底面のレベルが異なるとの判断から別の配石墓とされたが、両者とも底面の石敷きは鉄平石・川原石・地山礫が混在するものであり、一体の配石墓だった可能性も否めない。

## 18号配石墓(2号配石W)

**調査年度** 平成30年度

**経過** 4号配石墓の底面石敷きの下で確認された。B1群の北西部にあり、周囲には多数の礫が点在している。この配石墓では埋土の除去段階で大量の焼骨が確認された。

**重複** 上面に4号配石墓がのっており、これに切られる。南東側に24号配石墓が接しているが、切り合い関係があったかははっきりしない。

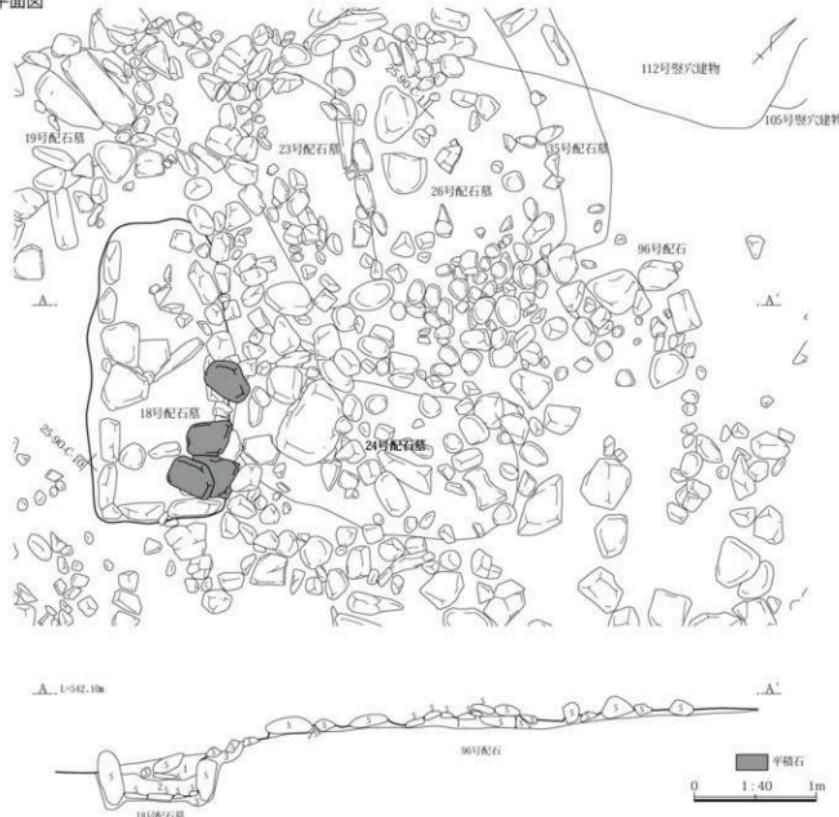
**長軸方向** N-45°-W

**規模** 長軸198cm前後、短軸72cm、確認面からの深さは33cmである。

**形状** 長方形

**構造** 壁石は長軸を縱位に立てて長方形に組んだ配石墓で、その上に小口積みの石を2段以上重ね、底面には石敷きを全面に施す。壁石はほぼ全周するが、北西側に端部を部分的に失っている。小口積みの石は内側にずれて

平面図



第485図 18号配石墓(1)

落ち込んでいるものが多く、蓋石は確認できない。底面石敷きは、薄手の鉄平石を中心に、扁平な地山礫も混在する。

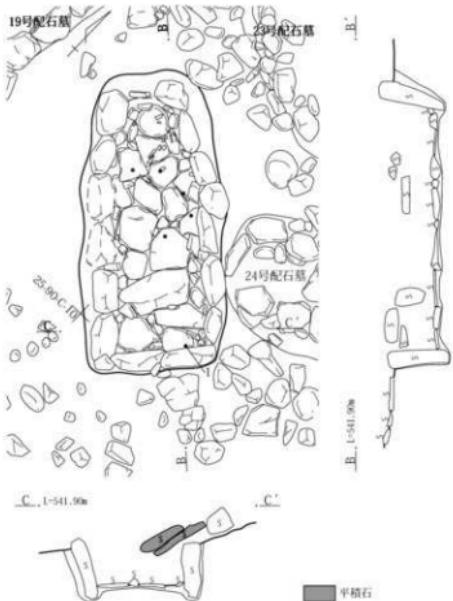
なお、調査初期の段階で南東側短辺の壁石から内側に50cmほどの位置に、長さ20cm前後の石を3石並べて配置した状態で確認された。この石は底面には届いていないことから、埋土の途中段階か完了後に設置されたと考えられる。

**遺物** 北西側の覆土中位から床面直上にかけて多量の焼骨破片が出土した。この焼骨片は、その後の分析で人骨

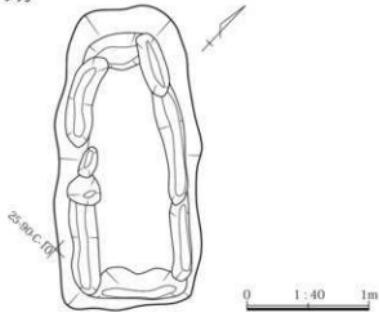
であることが判明しているが、配石墓の北西側に偏っていること、および覆土中に散在していること、などが気にかかる点である。なお、調査に伴って後期加曾利B3式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 壁石を縦位に立てて長方形に組んだ配石墓で、小口積みの石を2段以上重ね、底面には石敷きを全面に施した良好な資料である。また、南東側に仕切を持つことや、北西側の覆土中から多量の焼人骨破片が出土した点などは、配石墓を検討する上での新たな材料を提供することになった。

## 2面目



## 掘り方



第486図 18号配石墓(2)

## 19号配石墓(2号配石X)

調査年度 平成30年度

経過 18号配石墓のすぐ西側で確認された。B1群の北西部端に位置する一群であり、やはり北側の上面に4号配石墓の底面石敷きがのっている。

## 3面目



**重複** 北側上面に4号配石墓がのっており、これに切られる。

**長軸方向** N-8°-E

**規模** 長軸180cm、短軸45cm、確認面からの深さは48cmである。

**形状** 幅狭の長方形

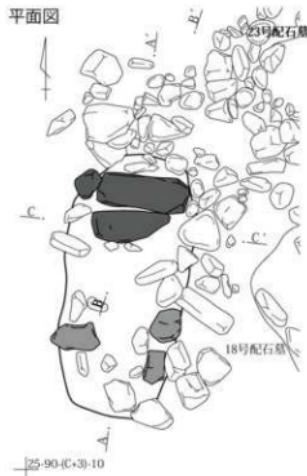
**構造** 壁石は長軸を縦位に立てたものと横位に立てたものを組み合わせて長方形に組んだ配石墓で、その上に小口積みの石を1段置いて高さを調整し、蓋石を置いている。底面の石敷きはない。

壁石は南側の端部を一部失っているが、その他はほぼ全周している。蓋石は北側の2石が残っているが、その他は確認できない。東側縁の中央付近外側に長さ50cmを超える大きな石があるが、これも蓋石の一部だった可能性がある。

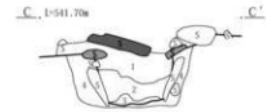
**遺物** 調査に伴って晩期前半期の土器破片が少量出土している。

**所見** 一部ではあるが、蓋石までの構造を確認できる好資料である。

平面図



[25-90-(C+3)-10]

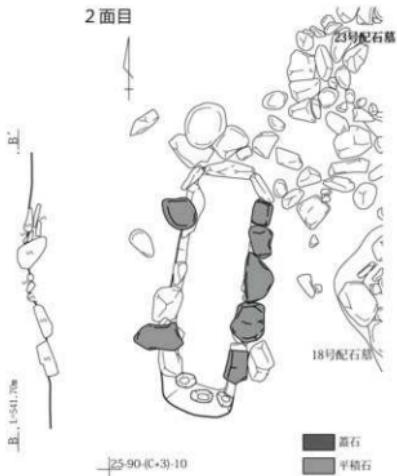


3面目



[25-90-(C+3)-10]

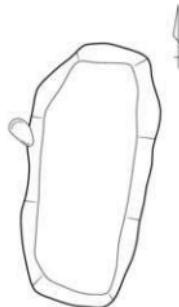
2面目



[25-90-(C+3)-10]

■ 蓋石  
■ 平積石

掘り方

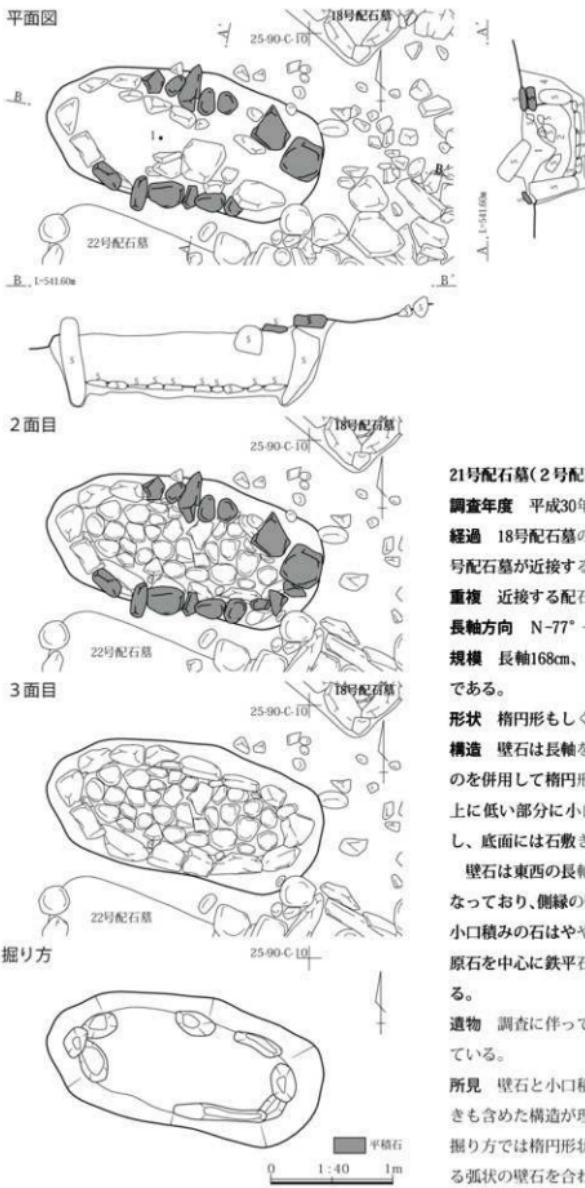


[25-90-(C+3)-10]

0 1:40 1m

第487図 19号配石墓

平面図



第488図 21号配石墓

**21号配石墓(2号配石イ)**

**調査年度** 平成30年度

**経過** 18号配石墓の南側で確認された。南側に22号・50号配石墓が近接する。

**重複** 近接する配石墓は多いが、切り合い関係はない。

**長軸方向** N-77° -W

**規模** 長軸168cm、短軸62cm、確認面からの深さは52cmである。

**形状** 楕円形もしくは舟形

**構造** 壁石は長軸を縦位に立てたものと横位に立てたものを併用して椭円形もしくは舟形状に組んでおり、その上に低い部分に小口積みの石を1段重ねて高さを調整し、底面には石敷きを全面に施している。

壁石は東西の長軸方向に棒状の石を1石ずつの配置となっており、側線の壁石は弧状に配置されている。また、小口積みの石はやや小さな石が多く、底面の石敷きは川原石を中心に鉄平石や扁平な地山石も交えて使用している。

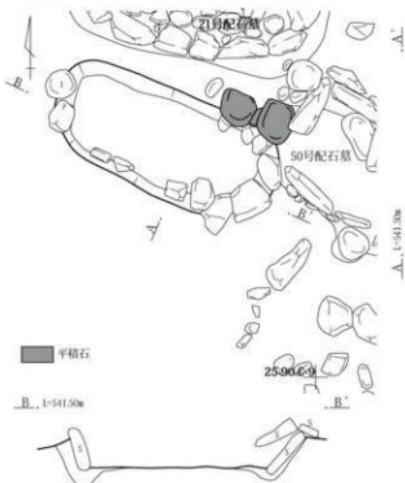
**遺物** 調査に伴って晩期前半期の土器片が少量出土している。

**所見** 壁石と小口積みの石との組み合わせや、底面石敷きも含めた構造が理解できる好資料である。平面形状は、掘り方では椭円形状になっているが、石の配置は対向する弧状の壁石を合わせた形状とするのが最も合致しており、舟形と呼んでおきたい。

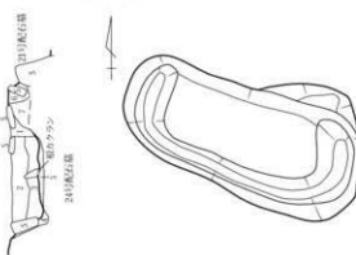
平面図



2面目



掘り方



25-90-C-9

0 1:40 1m

第489図 22号配石墓

**22号配石墓(2号配石室)****調査年度** 平成30年度

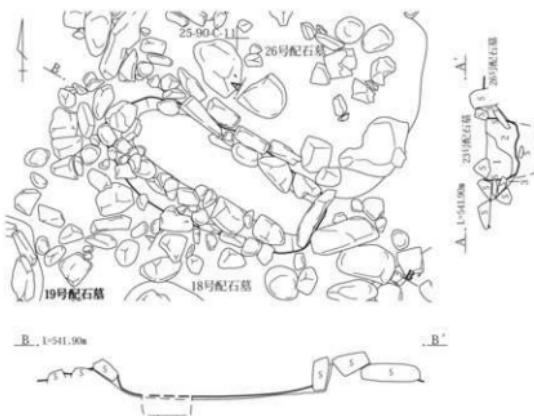
**経過** 21号配石墓のすぐ南側に並んだ状態で確認された。両者は形状や大きさ、主軸方向もほぼ共通しており、何らかの関係性を想定させる。また、両者の南東側に1m方形に石を組んだ99号配石があり、これについても両者との関係性が想定される。

**重複**隣接する21号との切り合い関係は認められないが、東側にある99号配石には一部を切られているものと判断する。また、その後の調査で99号配石の下から50号・59号配石墓が検出されており、本配石墓もそれらを切る。

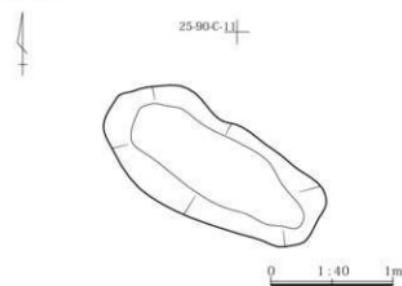
**長軸方向** N-67° -W

**規模** 長軸146cm、短軸70cm、確認面からの深さは20cmである。

## 平面図



## 掘り方



第490図 23号配石墓

## 形状 楕円形

**構造** 壁石は長軸を縦位に立てて楕円形に組んだ配石墓で、その上に小口積みの石を1段組んで高さ等を調整している。底面の石敷きは無い。

壁石が残っているのは東西方向の一部だけで、7割は失っている。

**遺物** 調査に伴って晩期前葉期の土器破片が少量出土している。

**所見** 残存する材料は少ないが、21号配石墓や99号配石との関係など、検討する内容が多い調査結果となった。

## 23号配石墓(2号配石カ)

## 調査年度 平成30年度

**経過** B1群で最初に調査した4号配石墓の北東側に隣接する。配石墓であることを確認するためにまず中央部を掘削して埋土と礫の状態を見極め、周囲の礫等も含めて点検・整理した。その結果、北東側に大型の26号配石墓と35号配石墓が並んでおり、本配石墓はそれよりかなり高い位置に構築されていること、壁石もかなり失っていることなどが判明した。

**重複** 北東側に26号配石墓が重複し、これに切られる。

## 長軸方向 N-57°-W

**規模** 長軸158cm、短軸40cm、確認面からの深さは26cmである。

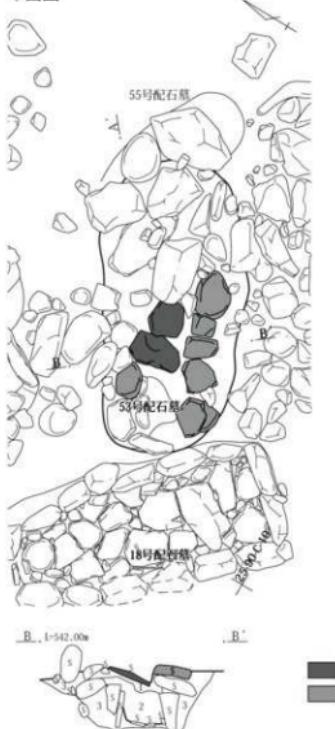
## 形状 幅狭の長方形

**構造** 壁石の側縁を立てて長方形に組んだ配石墓で、小口積みの石や底面の石敷きは確認できない。壁石も大半が傾いており、小さな添え石のみで失っている部分も多いが、南東側の長軸端部には長さ50cm前後の大きな扁平礫1石を直交方向に立てて配置しており、これを長方形の形状とする根拠とした。

**遺物** 調査に伴って晩期前葉期の土器破片が少量出土している。

**所見** 重複する26号に比べてかなり高い位置に構築されており、その分割平等で失った部分が多く、良好な材料とは言いたがたい。

平面図



2面目



第491図 24号配石墓(1)

**24号配石墓(2号配石キ)****調査年度** 平成30年度**経過** 23号配石墓のすぐ南東側で確認した。上面に大きな石を数多く使用しており、周囲にも大きな石が点在することから、検出段階でも目立つ存在となった。**重複** 長軸南端部が18号配石墓と接し、北東端部に53号配石墓と重複し、これらを切る。また、南西部掘り方内に55号配石墓が重複し、これも切る。**長軸方向** N-68°-E**規模** 長軸210cm前後、短軸48cm、確認面からの深さは52cmである。**形状** 幅狭の長方形**構造** 壁石を縦位に立てて長方形に組んだ配石墓、その

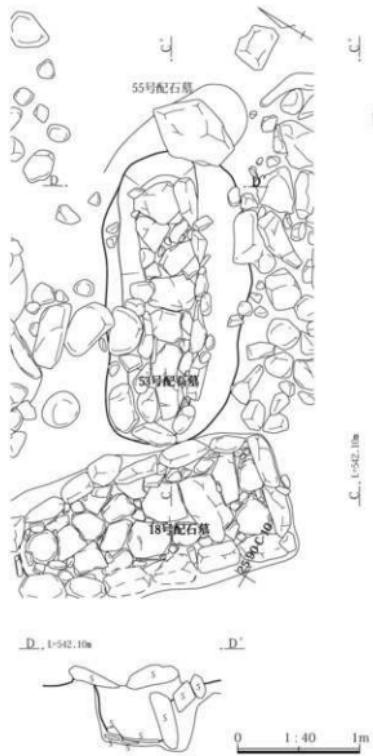
上に小口積みの石を1~2段重ねて高さ等を調整し、蓋石を載せている。底面には薄く大きな鉄平石を中心に石敷きを前面に施している。

蓋石は中央部付近にやや小さな石が2石残っていた。壁石は長軸北東部から北西側の一部を失っているが、底面の石敷きと掘り方は210cm前後まで続いている事から、全体の規模に大きな変化はないものと判断した。

**遺物** 調査に伴って後期後半期の土器破片が少量出土している。

**所見** 長さに比べてかなり幅が狭い配石墓であり、図ではわかりにくいが、壁石段階の写真では側縁部がやや弧を描いてことがわかる。底面の石敷きも伴っており、蓋石も一部だが残る残存状況の良好な事例である。

## 3面目



第492図 24号配石墓(2)

## 25号配石墓(2号配石)

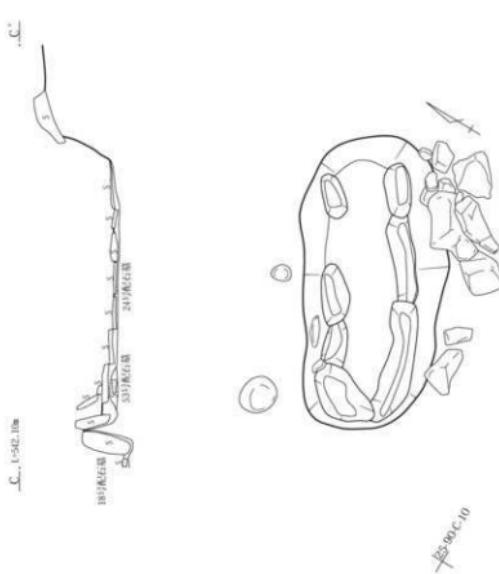
調査年度 平成30年度

**経過** 24号配石墓の南で確認した。南東側に接する9号配石墓を調査した際にすでに概要は把握されていたが、周囲に配石や立石が多数あり、これらとの関連等を確認した上で調査となった。

**重複** 南東側に9号配石墓が接しており、これを切る。また、北西側側縁部に108号・109号配石が、南西側角部に110号配石、南東側角部に111号配石が接近または接しており、これらに切られている可能性が高いが、明確な切り合い関係は不明である。

長軸方向 N-37°—E

## 掘り方



**規模** 長軸230cm前後、短軸80cm前後、確認面からの深さは28cmである。

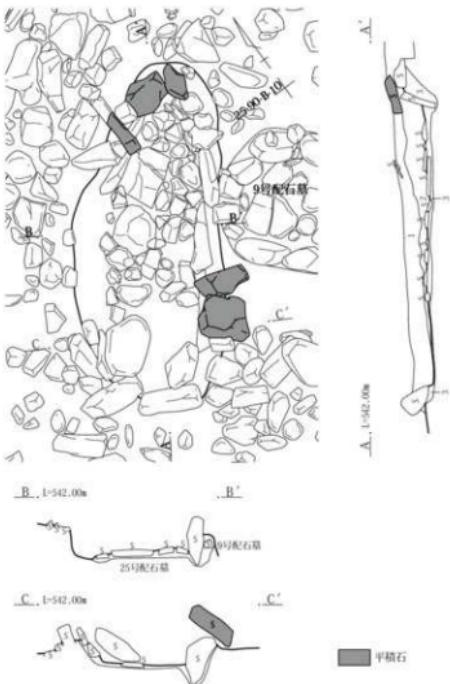
**形状** 幅広の長方形か

**構造** 壁石を長手に側縁を立てて方形状に組んだ配石墓で、底面には鉄平石を中心に川原石や扁平地山礫も交えて全面に石敷きを施したと推定されるが、南西側の石敷きは失っている。

壁石は、南東側縁は大きな石を用いて直線的に並べているが、その多くは上端部を打ち欠かれている。北西側縁は残っているものは少ないが、南東側とは異なって明らかに弧状の構造となっている。底面の石敷きも弧線に沿った部分では大きな石敷きが主体であるが、直線に沿った部分では小さな石が主体となっており、あたかも製作途中で変更があったかのように見えるが、石敷きは平坦で明瞭な段差等は認められていない。また、長軸南西側の壁石は南東側の側縁に並ぶ直線上の壁石にほぼ直交しており、整合的であるが、その左手にある南西側の側縁の石は弧線に沿ってかなり開いて配置されている。

**遺物** 調査に伴って晩期初頭前後の土器破片が少量出土

## 平面図



している。

**所見** 本例は左右で異なる構造のように見えるが、現状では明確な判断はできない。重複・改修も視野に入れて検討の必要性がある。

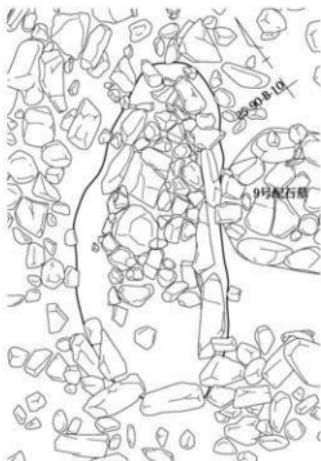
## 26号配石墓(2号配石ケ)

**調査年度** 平成30年度

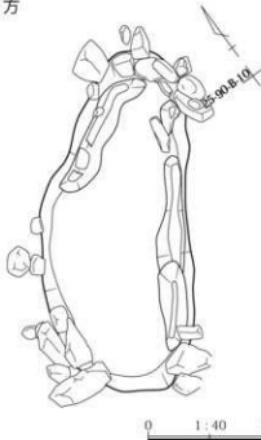
**経過** 23号配石墓に接してその北東側で確認した。本配石墓の上面には大型の川原石が2個乗っており、その東側には小さな円盤状の川原石を多量に集積した96号配石があり、その間に長さ36cmほどの棒状砾を立てた立石(97号配石)が位置する。調査当初の段階では、こうした特徴的な配石がその中心であったが、やがてその下から本配石墓が検出されることになる。

**重複** 兩側に重複する23号・35号配石墓を切り、上面に

## 2面図



## 掘り方



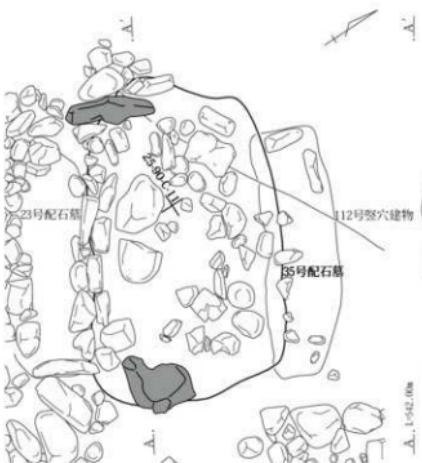
第493図 25号配石墓

の96号・97号配石に切られる。なお、97号配石は本配石墓を示す墓標であった可能性がある。なお、北側を斜めに横切るラインは、平安時代の112号竪穴建物の範囲を示す。

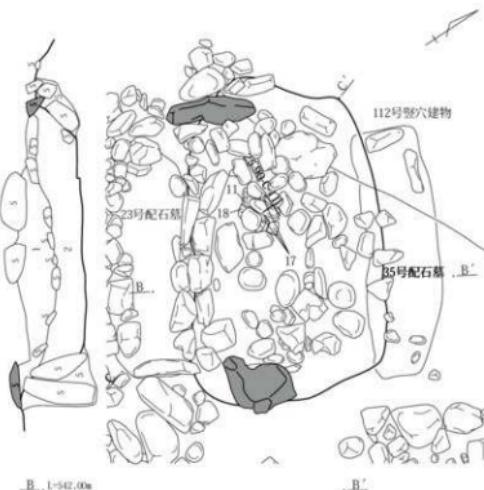
**長軸方向** N-62°-W

**規模** 長軸182cm、短軸120cm、確認面からの深さは55cmである。

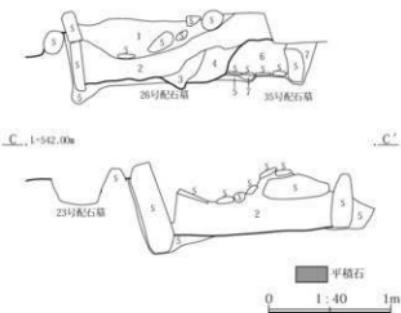
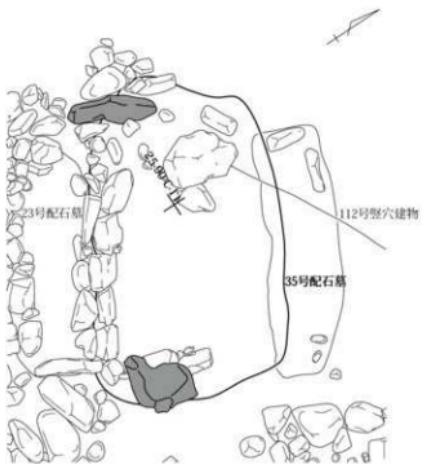
## 平面図



## 2面図



## 3面図



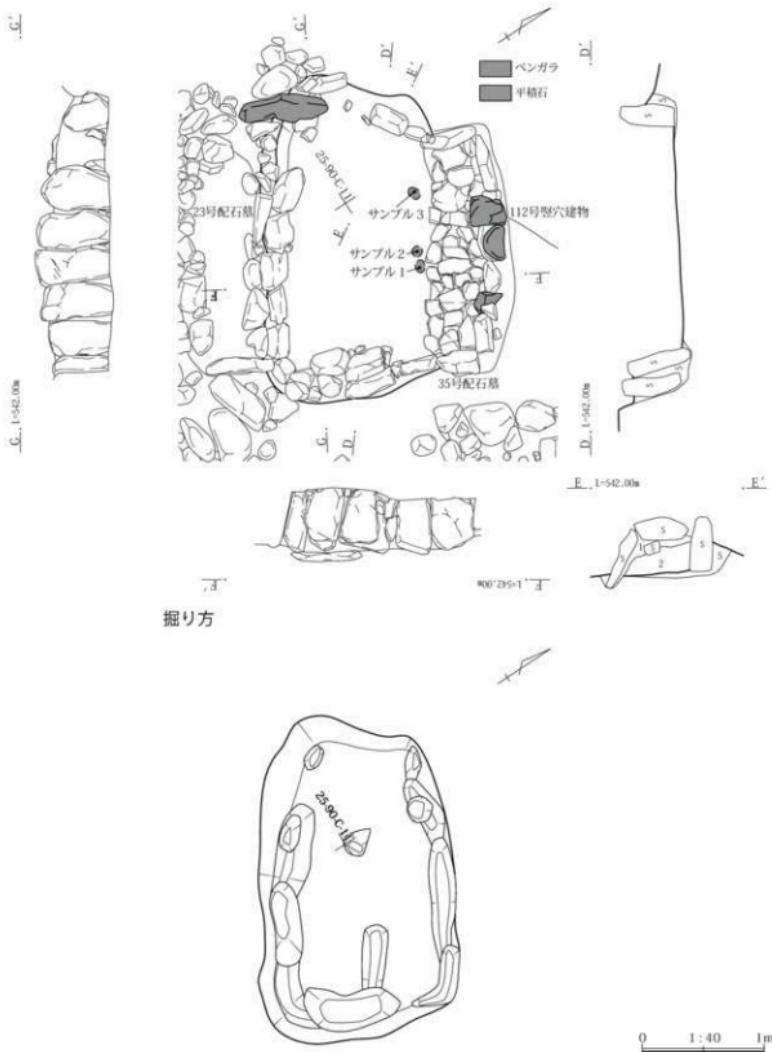
## 形状 幅広の長方形

**構造** 壁石の長軸を縱位に立てて長方形に組んだ配石墓で、底面に石敷きは施されないが、北東側の長辺沿いの底面の3箇所からベンガラと思われる赤色の散布が認められた。南西側の長辺と南東側の短辺は壁石がほぼ揃っているが、北西側の短辺は3石のみで、北東側の長辺は皆無である。また、南東側の短辺では壁石の一部が2枚合せた二重構造になっている。壁石の上にのる小口積みの石も明確なものは残っていない。

掘り方調査では、北西側の短辺以外では壁石を据えた痕跡が溝状に明瞭に残っているが、南東部の底面に短軸のちょうど半分の位置に50cmほどの長さで同様の痕跡が

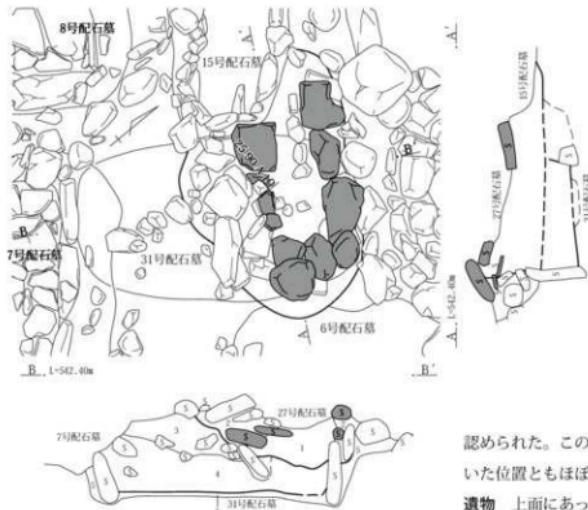
第494図 26号配石墓(1)

## 4面目

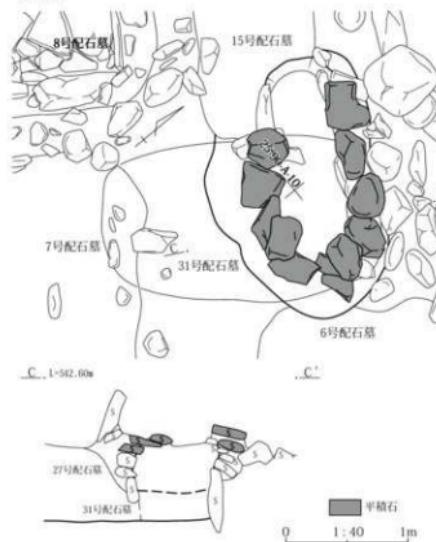


第495図 26号配石墓(2)

## 平面図



## 2面目



第496図 27号配石墓(1)

認められた。この痕跡の位置は壁石が二重構造になっていた位置ともほぼ符合する。

**遺物** 上面にあった大きな川原石の下から晩期の鉢・深鉢の大型破片がまとめて出土した。その面には円礫を主体に10数個の石を並べたように置いてあり、晩期の土器と一体の構造であった可能性が高い。

その他では、調査に伴って後期後半期の土器破片が少量出土している。

**所見** 以上の結果から、本配石墓は長方形の2つの配石墓が横位に重複したものと判断したい。この結果はセクションBの断面図とも符合しており、北東側の35号を切って底面にベンガラが散布された配石墓に造られ、さらに南西側の二重壁石の配石墓が造られたと考えられる。

なお、その北西側の長辺壁石が残っていないのは、底面に10数個の石を敷いて晩期の土器を手向けられた被葬者が追葬された際に取り除かれたためではないかと想定したい。その追葬は、セクションBの断面図1の土層に該当する。

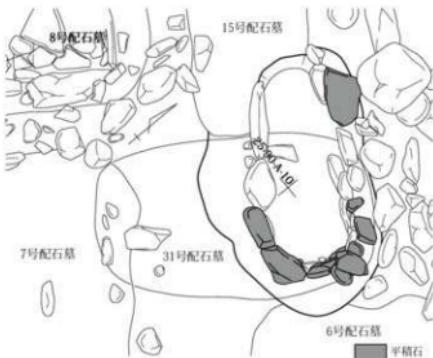
## 27号配石墓(2号配石室)

**調査年度** 平成30年度

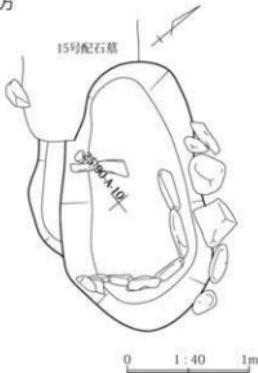
**経過** 15号配石墓の南東に重複した状態で確認された。B1群のほぼ中央に位置する。

**重複** 南東側を6号・31号配石墓と、北西側を15号配石墓と重複し、31号を切り、6号・15号に切られる。

3面目



掘り方



第497図 27号配石墓(2)

長軸方向 N-55° -W

規模 長軸177cm、短軸58cm、確認面からの深さは60cmである。

形状 幅狭の長方形

**構造** 壁石の長軸を縱位に立てて長方形に組み、その上に小口積みの石を2～4段も重ねて高さ等を調整した配石墓で、底面の石敷きはない。北東側の壁石は重複する15号配石墓に切られて無いが、その他は残っている。壁石は小さな石が多く使われているので、高さがまちまちであるが、その上に小口積みの石を数多く重ねることで、配石墓全体の高さも大きくしている。

なお、掘り方調査で重複する31号配石墓の壁石を検出した。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 小さな石を多用しているが、小口積みの石を数多く重ねることで必要な容積を確保している。壁石よりも小口積みの石のほうが高い場所もあり、工夫が窺える。

#### 28号配石墓(2号配石シ)

調査年度 平成30年度

**経過** B1群の中央よりやや東側にあり、5号・6号配石墓の南東側で確認された。5号配石墓の調査時に南西側の一部が見つかっていたが、蓋石までほぼ完全保存された配石墓であり、周辺の石の整理が整った段階での調

査となった。確認当初の状況(PL.225、226、第498図1面目)を見ると、蓋石はまだ2点しか見えないが、その周囲を長さ50cm以上の大きな石で直径1.8mほどの円形状に囲っていることがわかる。

**重複** 40号・41号・42号配石墓を切り、5号・6号配石墓に切られる。

長軸方向 N-48° -E

規模 長軸178cm、短軸42cm、確認面からの深さは84cmである。

形状 幅狭の長方形

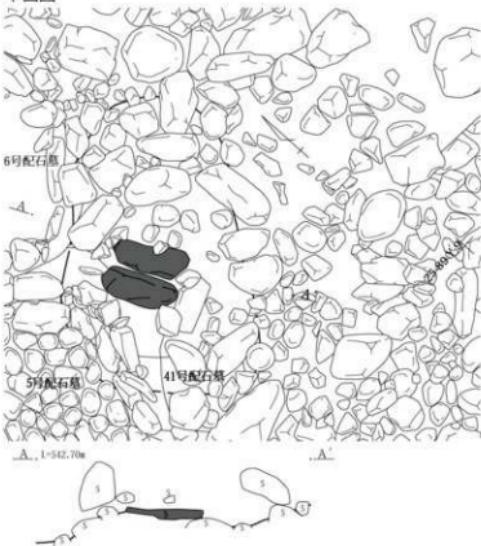
**構造** 壁石は側縁を長手に立てたものと長軸を縱位に立てたものを併用して長方形に組み、その上に小口積みの石を最大7段も重ねて高さと容積を確保し、その間に長さ50cm以上の大きな扁平礫を4石並べて蓋石としている。底面の石敷きはない。

この配石墓も27号と同様にやや小ぶりの石を数多く使用しているが、上層部には大きな石を使用する傾向が認められる。なお、掘り方調査で重複する41号配石墓の壁石の一部を検出した。

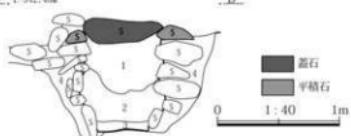
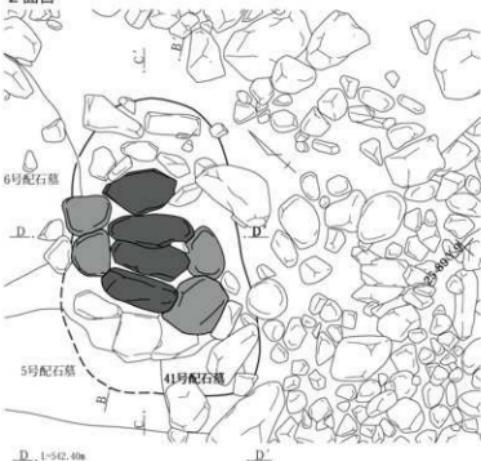
**遺物** 調査に伴って後期加曾利B2式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 壁石から蓋石までのほぼ全体が把握できる貴重な調査例である。経過で触れた上面の円形状の配石がこの墓に伴うものであれば、これも貴重な事例であり、注目しておきたい。

平面図

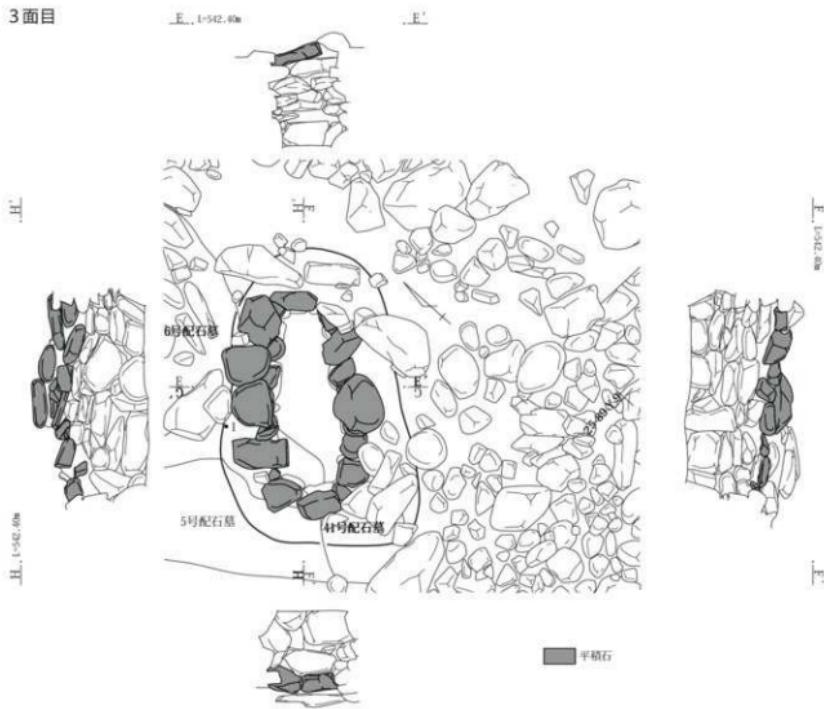


2面目

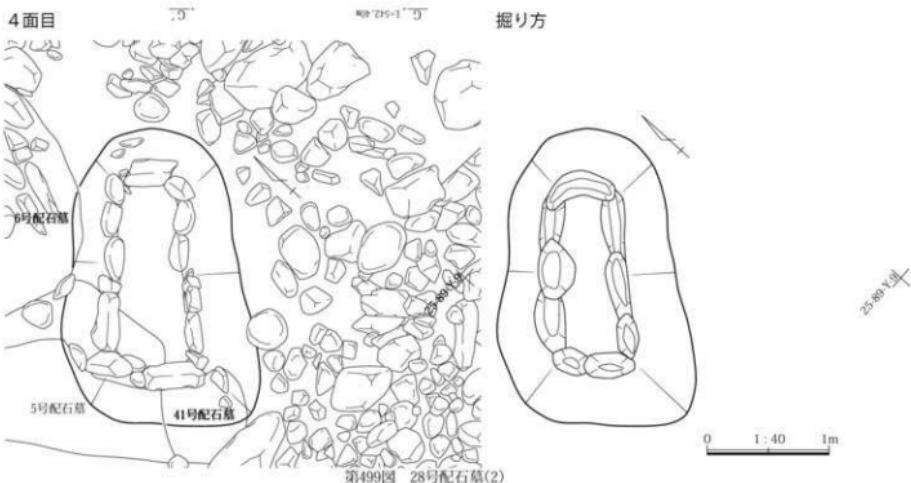


第498図 28号配石墓(1)

3面目

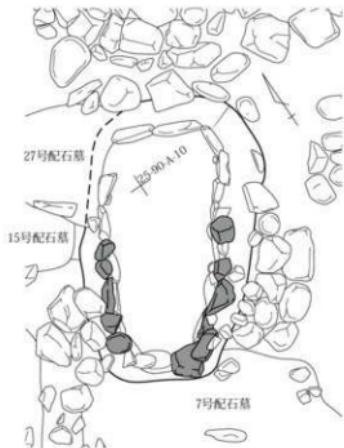


4面目

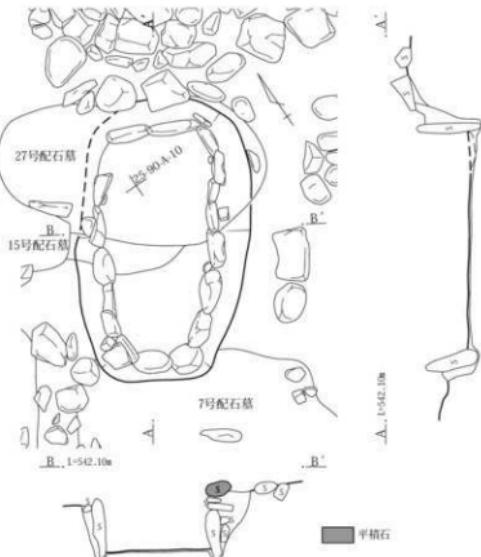


第499図 28号配石墓(2)

平面図



2面図



掘り方



第500図 31号配石墓

**31号配石墓(2号配石ソ)**

調査年度 平成30年度

経過 28号配石墓の北西側、5号・6号配石墓を跨いだ位置で確認した。B1群のほぼ中央にあり、27号配石墓の掘り方調査で北東部分の壁石が検出され、調査となった。

重複 南西側の一部を7号配石墓と、北東側を27号配石墓と重複し、これらに切られる。

長軸方向 N-38°-E

規模 長軸180cm、短軸88cm、確認面からの深さは53cmである。

**形状 幅広の長方形**

構造 壁石は長軸を縦位に立てて長方形に組んだ配石墓で、その上に小口積みの石1~2段重ねている。底面の石敷きはない。

小口積みの石は南西部では残っているが、北東部は重複する27号配石墓に切られて残っていない。壁石は長辺がやや曲線的で楕円形にも近いが、短辺の石は2枚を横にして並べていることから、長方形と判断した。なお、壁石のうち、南西角の1箇所だけが小口積みとなっている。

遺物 調査に伴って後期後葉高井東式期等の土器破片が少量出土している。

所見 幅広の形状は楕円形の配石墓に多く使われており、本例も楕円形に近似している。中間的なものかもしれないが、平面形態の違いが何に起因するのかを検討する必要がある。

なお、本配石墓の周囲にも34号とよく似た削平下平坦面がめぐらしく、その周囲大きな石が配置されている状態が写真記録に残っており、今後検討する必要がある。

平面図

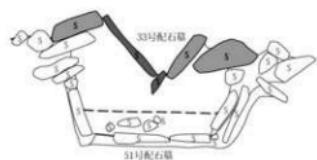


第501図 33号配石墓(1)

## 2面目



スケール 1:542.70m



## 33号配石墓(2号配石チ)

**経過** B1群の南東側で確認した。大きな扁平礫が集積した状態で認められ、壁石や蓋石が落ち込んだ状況に見えることから調査となつた。

**重複** 42号・43号・51号・52号配石墓と重複し、南西側の上面一部を43号に切られ、その他を切る。

**長軸方向** N-61°-E

**規模** 長軸219cm、短軸113cm、確認面からの深さは60cmである。

**形状** 幅広の楕円形

**構造** 壁石は長軸を縱位に立てて楕円形に組んだ配石墓で、その上に小口積みの石を2~5段重ねて高さ等を調整し、その間に蓋石を並べている。底面の石敷きは無い。

## 3面目



## 4面目

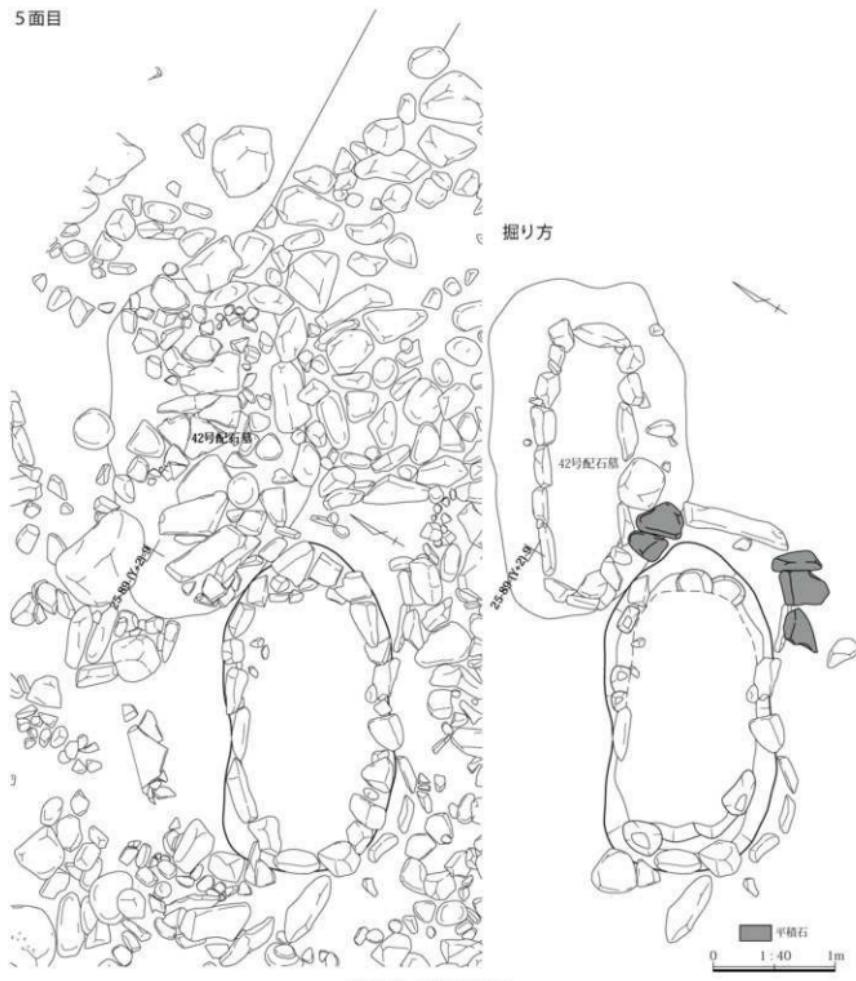


■ 蓋石  
■ 扁平礫

0 1:40 1m

第502図 33号配石墓(2)

5面目



第503図 33号配石墓(3)

壁石はほぼ残っているが、小口積みの石は南西側が一部欠落しており、蓋石は北東形の約3分の1が内側に落ち込んだ状態で残っていた。

なお、写真では北東側3分の2に底面の石敷きが写っているが、これは重複する51号配石墓の底面で、調査時にも当初は気付かなかった。

**遺物** 調査に伴って後期後半段階の土器破片が少量出土している。耳飾り(5)は北東側長辺に小口積みの石の間から、粗製土器の大型破片(6)は落ち込んだ蓋石の上からの出土である。

**所見** 一部が欠落しているが、蓋石までの構造がよく残っており、椭円形の配石墓の好例の一つである。

## 第2章 発見された遺構と遺物

### 34号配石墓(2号配石ツ)

調査年度 平成30年度

経過 B1群の南東部で確認された。配石墓調査当初は、この地区は一面に礫を敷き詰めたような状態が続いており、そうした中に大きな楕円形の空白部があり、これが調査の契機となった。これを半分掘り下げてみると、壁石が検出された。

重複 西側に56号配石墓が重複し、これを切る。

長軸方向 N-78°-W

規模 長軸204cm、短軸136cm、確認面からの深さは56cmである。

形状 幅広の楕円形

構造 壁石は長軸を縦位に立てて楕円形に組んだ配石墓で、壁石の頂部を目安に外側に50~70cmの幅で削平して平坦面を作り、そこに小石や小口積みの石を重ねて集積している。底面の石敷きは無く、蓋石は確認されていない。

壁石の外側に削平面をもつ配石墓はこれ以外に無く、小さな壁石を2段に重ねているような部分も認められた。また、西側の壁石の上に長さ1mほどの棒状礫を配置して、そのうちの約半分が配石墓内に突き出すようにしているが、意図的な配置なのかは不明である。

遺物 調査に伴って、覆土を中心には晩期中葉の土器破片が少量出土している。半粗製深鉢(14)は覆土中からの出土である。

所見 本遺跡では異例の構造を備えた配石墓で、西壁に設置した棒状礫の存在が興味深い。

### 35号配石墓(2号配石テ)

調査年度 平成30年度

経過 26号配石墓の北東側で確認した。確認当初は35号の手掛かりはほとんど認められなかったが、26号の調査段階で本配石墓の姿が明確になった。

重複 南西側を26号配石墓と重複し、これに切られる。

長軸方向 N-62°-W

規模 長軸174cm、短軸50cm、確認面からの深さは43cmである。

形状 幅狭の長方形

構造 壁石は側縁を長手にして長方形に組んだ配石墓で、底面には鉄平石を主体に全面に石敷きを施している。小口積みの石はほとんど残っていないが、1段だけ積ん

だものが2箇所で確認されている。26号と重複する南西側の壁石は全て消失しているが、掘り方調査では長方形に組んだ壁石の痕跡が明瞭に確認されている。

遺物 遺物の出土はなかった。

所見 北西側を失っているが、壁石や底面の石敷きは明瞭であり、幅狭長方形タイプの好例である。

### 36号配石墓(2号配石ト)

調査年度 平成30年度

経過 B1群の南東端部で確認された。便宜的ではあるが、B1群の中で最も端にある配石墓で、B2群の範囲に含まれるほどである。また、B1群のなかで12号列石の段上にある配石墓は2例だけだが、36号はその1つに該当する。

重複 重複する遺構は無い。

長軸方向 N-66°-E

規模 長軸168cm、短軸44cm、確認面からの深さは22cmである。

形状 幅狭の長方形

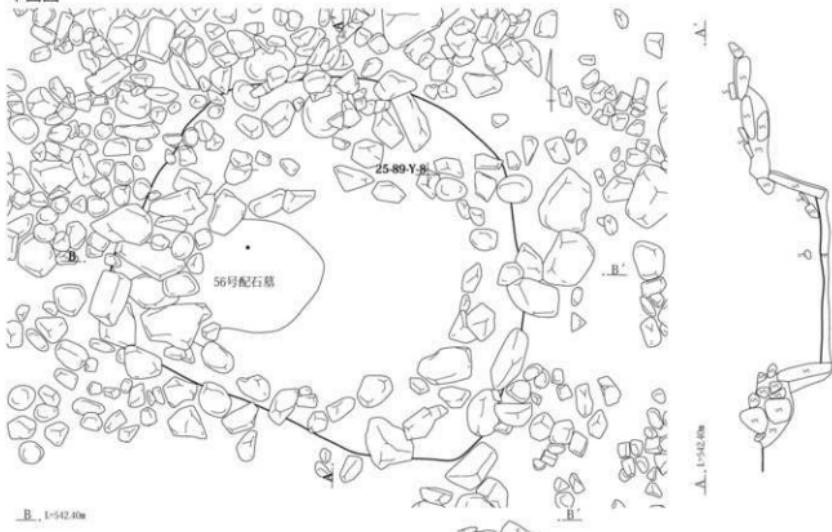
構造 壁石は側縁を長手にして長方形に組み、その上に小口積みの石を1段重ねて、その上に蓋石を載せている。底面の石敷きは無い。

壁石は大半が残っており、小口積みの石と蓋石は南西側の半分程度は残存しているが、地山が高い北東側はほとんど失っている。

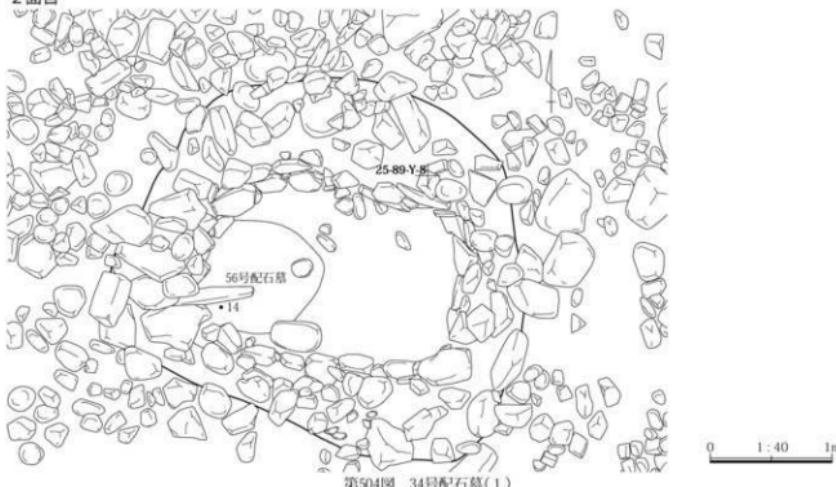
遺物 蓋石が残らなかった短辺に南東角の床面から、横倒した状態で文無の小型鉢が完形で出土した。

所見 12号列石の段上という異例の位置に構築された配石墓で、底面から蓋石のまでわずか20cm前後という異例の構造となっている。それは、壁石は細長い礫を長手に置き、小口積みの石は1段程度で蓋石を載せているためである。小口積みの石を多段に重ねて壁石以上に高さを大きくしている配石墓が数多くあるなかで、意図してコンパクトな構造を選択したこととその関係性は検討を要する。

## 平面図

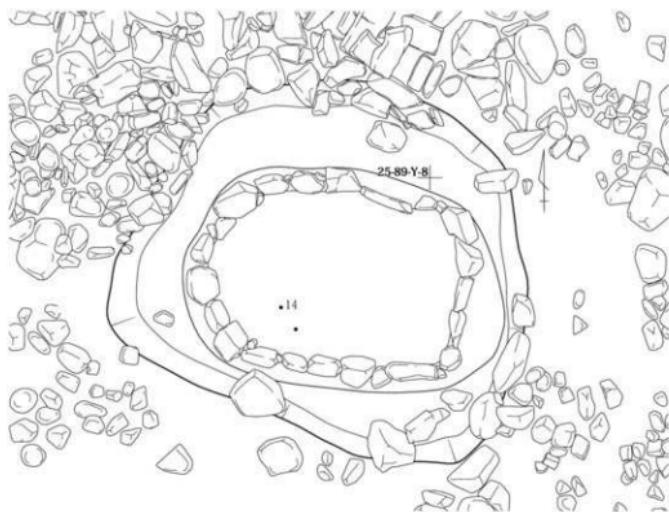
 $1:500$ 

## 2面図

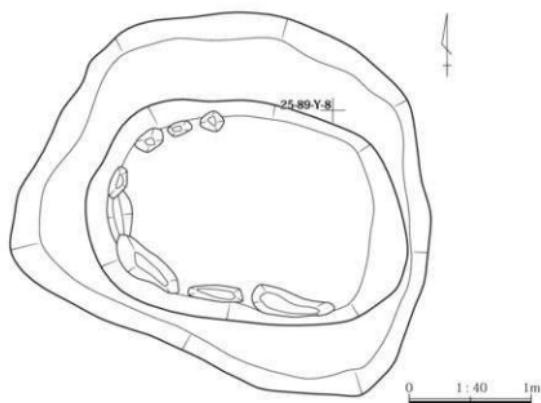


第504図 34号配石墓(1)

3面図

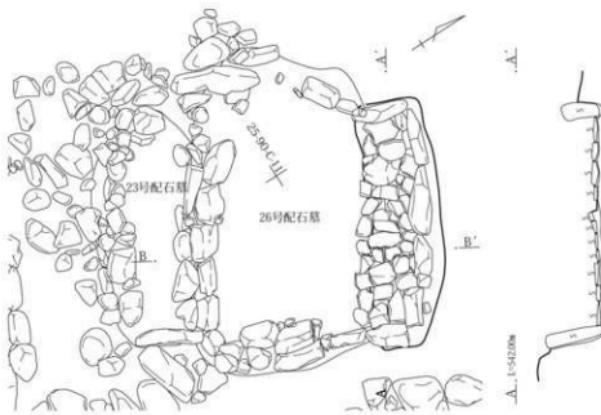


掘り方

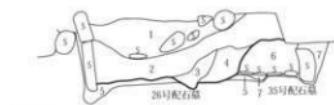


第505図 34号配石墓(2)

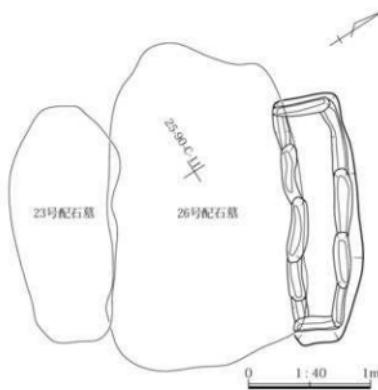
平面図



B, L=542.00m

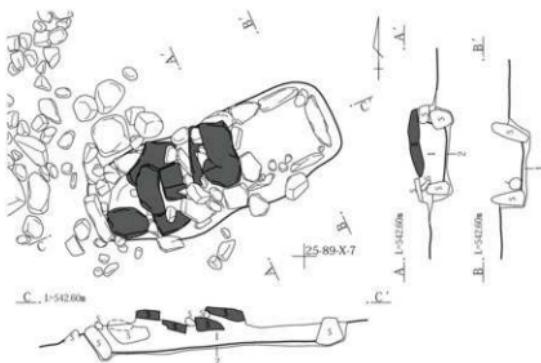


掘り方



第506図 35号配石墓

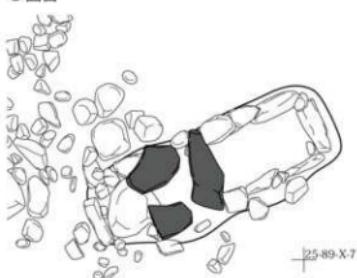
平面図



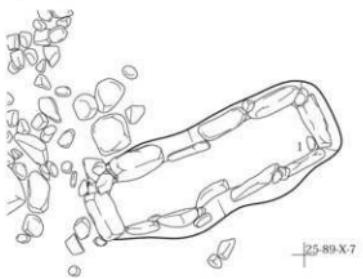
2面目



3面目



4面目

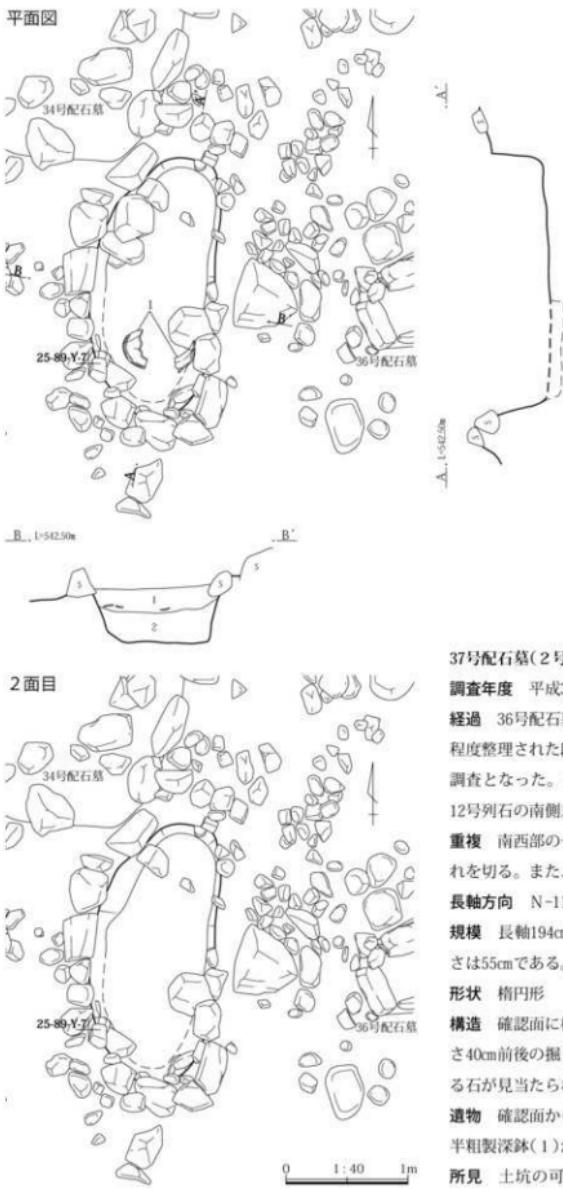


掘り方



石  
0 1:40 1m

第507図 36号配石墓

**37号配石墓(2号配石ナ)****調査年度** 平成30年度

**経過** 36号配石墓の西側で確認された。周辺の礫がある程度整理された段階で、梢円形状に残る礫の範囲があり、調査となつた。ちなみに、東側に近接する大きな礫は、12号列石の南側末端の位置を示す石である。

**重複** 南西部の一部をB2群の68号配石墓と重複し、これを切る。また、北西部に34号配石墓が近接する。

**長軸方向** N=11°-E

**規模** 長軸194cm前後、短軸70cm前後、確認面からの深さは55cmである。

**形状** 梢円形

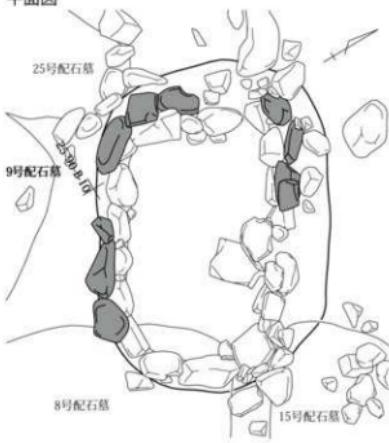
**構造** 確認面に梢円形状に石が並んでおり、そこから深さ40cm前後の掘り込みも認められるが、壁石と認定できる石が見当たらない。

**遺物** 確認面から20cmほど下で晩期中葉期のやや大型の半粗製深鉢(1)が出土している。

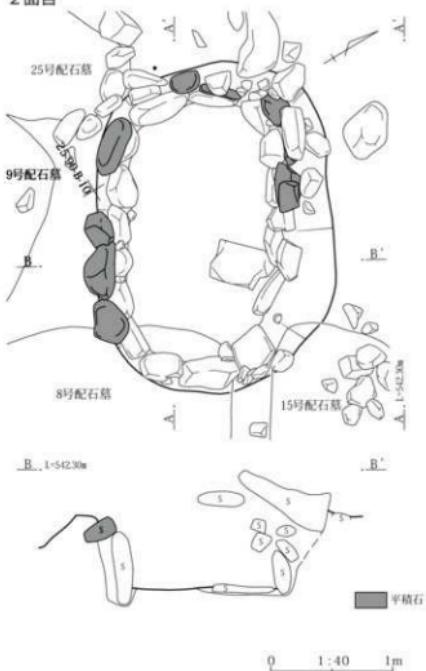
**所見** 土坑の可能性もあるが、ここでは配石墓として扱っておくこととする。

第508図 37号配石墓

## 平面図



## 2面図



第509図 38号配石墓

## 38号配石墓(2号配石ヌ)

調査年度 平成30年度

経過 B 1群の中央よりやや北西側で確認した。8号配石墓の調査段階で南東部の壁石が一部露出しており、周囲の石が整理された段階で楕円形の形状が判明し、調査となった。平面図には示していないが、本配石墓の上面には長さ50cm前後の石が数多く載っており、北東部上面には一辺80cmほどの大きな石も認められた。これらは蓋石だった可能性もある。

重複 南東側に8号・15号・39号配石墓が重複し、39号を切り、8号・15号に切られる。

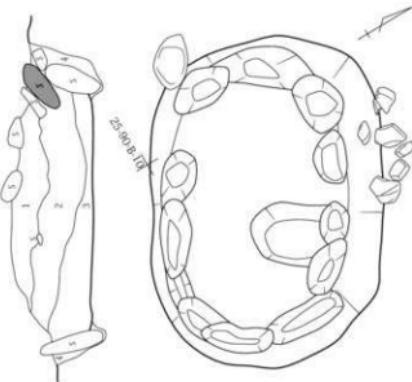
長軸方向 N-58°-W

規模 長軸196cm、短軸118cm、確認面からの深さは50cmである。

形状 幅広の楕円形

構造 壁石は長軸を縱位に立てて楕円形に組んだ配石墓

## 掘り方

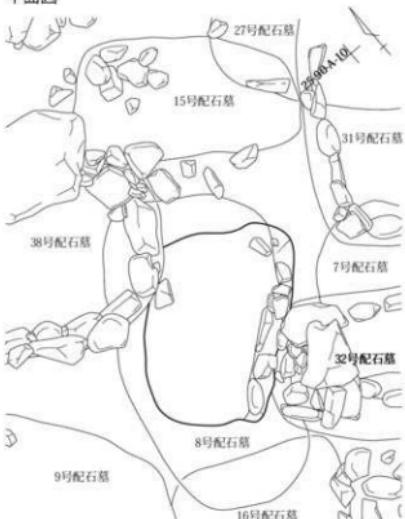


で、その上に小口積みの石を2～3段重ねて調整しているが、蓋石は未確認である。底面の石敷きは無いが、北東部上面の大きな石を除去したところ、そのしたの床面に薄い鉄平石が1枚確認された。

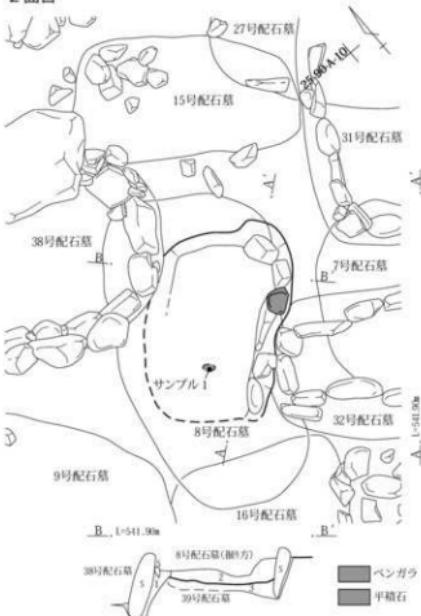
遺物 調査に伴って後期加曾利B 2式～3式期の土器破片が少量出土している。

所見 幅広楕円形タイプの好例である。写真しか残っていないが、上面にあった数多くの石が蓋石だとすれば、こうした幅広の配石墓では石を数多く載せることで蓋とした可能性がある。

## 平面図



## 2面図



## 39号配石墓(2号配石室)

調査年度 平成30年度

経過 38号配石墓のすぐ南東側で確認した。上面に8号配石墓が裁り、南東側には32号配石墓が接している。

重複 8号・38号配石墓に切られ、32号配石墓を切る。

長軸方向 N-44° - E

規模 長軸134cm以上、短軸85cm前後、確認面からの深さは28cmである。

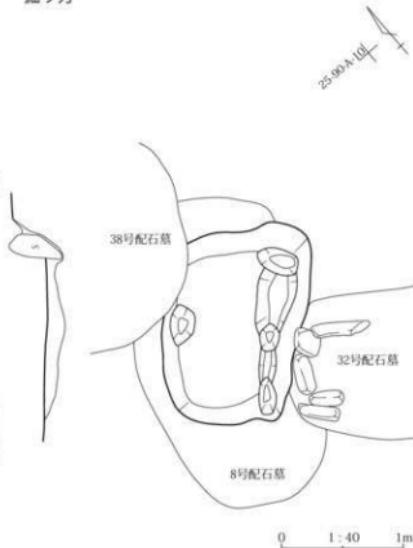
形状 長方形か?

構造 壁石は長軸を縦位に立てたものと長手に立てたものを併用して長方形形状に組んだ配石墓で、その上に小口積みの石を重ねるが、背反を失っている。底面の石敷きは無く、蓋石も確認できない。

遺物 出土は認められない。

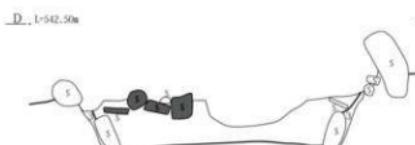
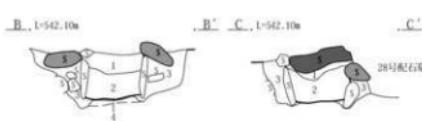
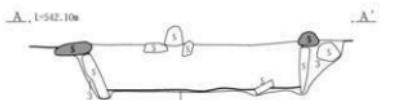
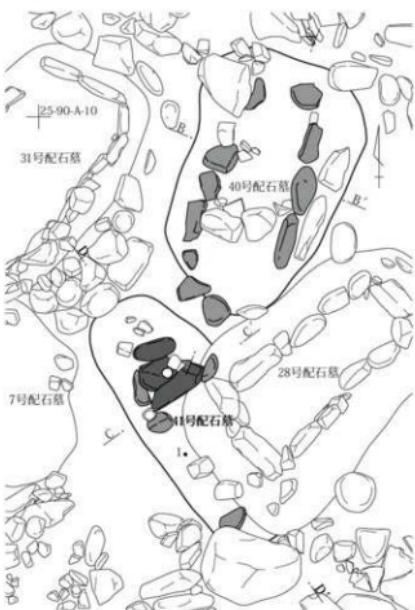
所見 重複その他で多くの部分を失っているが、ここにも配石墓があったことを明瞭に示している。

## 掘り方



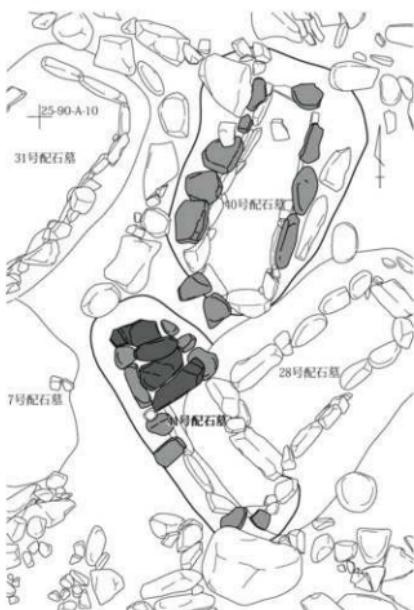
第510図 39号配石墓

平面図



第511図 40・41号配石墓(1)

2面図



40号配石墓(2号配石ノ)

調査年度 平成30年度

経過 6号配石墓の下で確認された。B1群の中央東側にあり、12号列石に近い位置にある。上面の礫が整理された段階で長方形に重ねた小口積みの石が検出され、調査となった。

重複 上面を6号配石墓に切られ、南東端を一部28号配石墓に切られる。

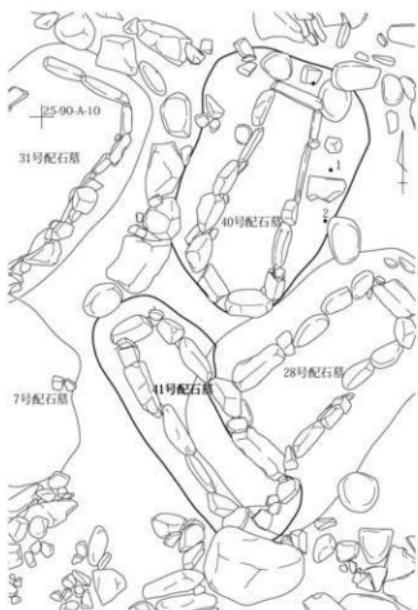
長軸方向 N-35°-W

規模 長軸160cm、短軸47cm、確認面からの深さは40cmである。

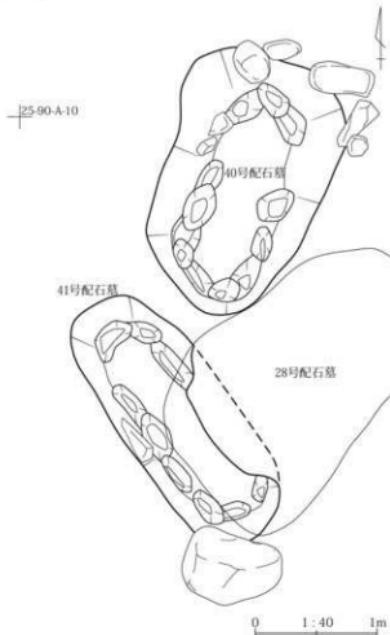
形状 幅狭の長方形

構造 壁石は長軸を縦位に立てて長方形に組んだ配石墓で、その上に小口積みの石を1段以上重ねているものと思われるが、残っていない。底面の石敷きは無い。確認

## 3面目



## 掘り方



第512図 40・41号配石墓(2)

時に覆土上面にいくつか石が認められたが、おそらく小口積みの石がズレたのであろう。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B2式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 本遺跡ではオーソドックスなタイプだが、壁石も全て揃っており、小口積みの石も截った好例である。

**41号配石墓(2号配石ハ)**

**調査年度** 平成30年度

**経過** 40号配石墓の南側で確認された。南東側を大きく28号配石墓に切られているが、その他の部分は良好な状態で残されていた。

**重複** 南東側の長辺を28号配石墓に切られて失っている。

**長軸方向** N-20°—E

**規模** 長軸160cm、短軸47cm、確認面からの深さは40cmである。

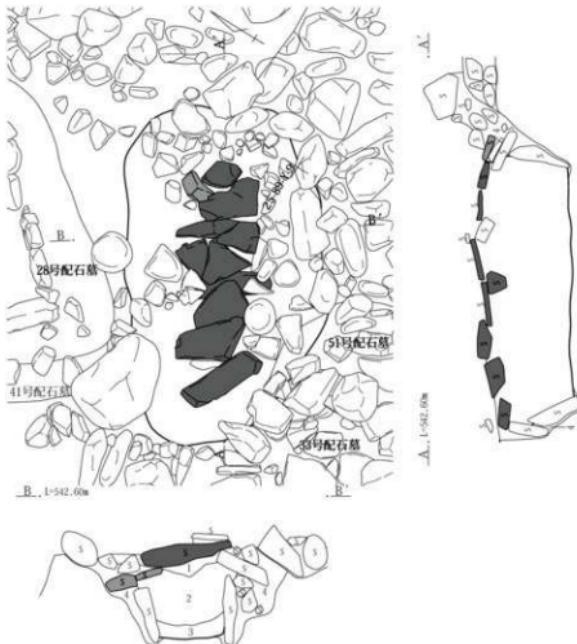
**形状** 幅狭の長方形

**構造** 壁石は長軸を縱位にしてたものと長手のものを併用して長方形に組んだ配石墓で、必要なところにはその上に比較的小さな石を当てがって高さ等を調整し、細長い碟を揃えて蓋石として載せている。底面の石敷きはない。

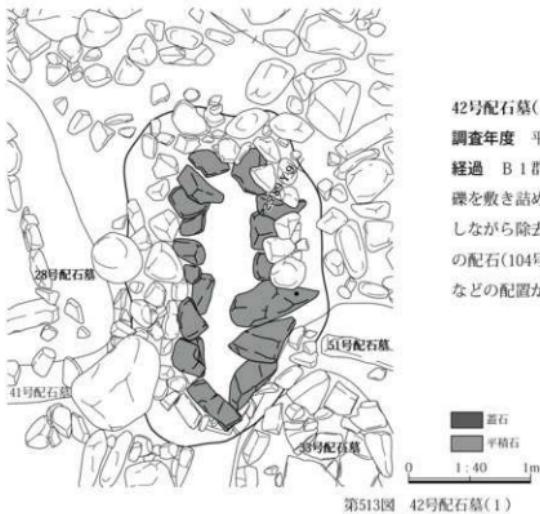
**遺物** 調査に伴って後期加曾利B1式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 小口積みの石を多用する配石墓があるなかで、本例は必要最小限の石を当てがって蓋石との構造を調整しているように見える。また、本例は42号・44号配石墓とともに、本遺跡で確認した配石墓では、最も古い段階の遺物が出土している点でも注目しておきたい。

平面図



2面図



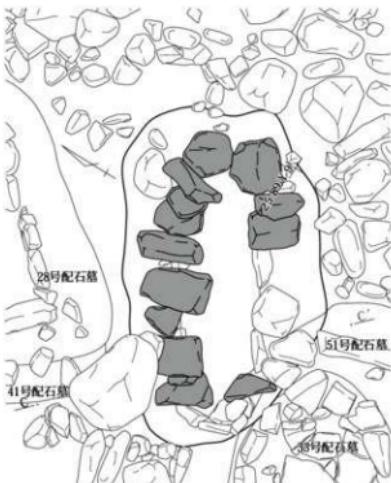
42号配石墓(2号配石ヒ)

調査年度 平成31年度

経過 B1群の南東側で確認された。調査当初は一面に礫を敷き詰めたような状態だったが、礫の配置等を確認しながら除去・整理するなかで、南東側に接する楕円形の配石(104号配石)や上面に載る蓋石と球形に近い丸石などの配置が判明し、調査となった。

第513図 42号配石墓(1)

3面目



C, L=542.00m

C'

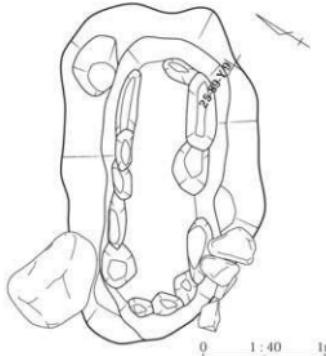


■ 平積石

4面目



掘り方



0 1:40 1m

第514図 42号配石墓(2)

**重複** 南西側を51号・33号配石墓と重複するが、切り合  
い関係は不明瞭。

**長軸方向** N-58°-E

**規模** 長軸188cm、短軸54cm、確認面からの深さは72cm  
である。

**形状** 幅狭の長方形

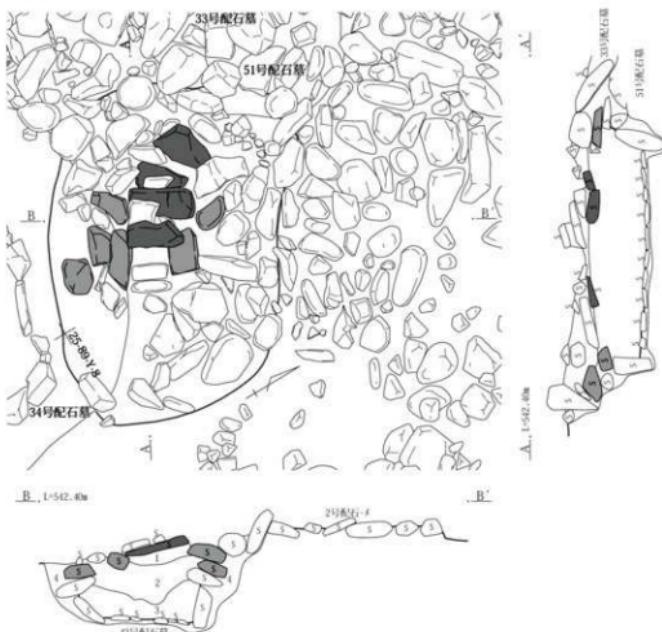
**構造** 壁石は長軸を縱位に立てたものと長手に立てたも  
のを併用して長方形に組んだ配石墓で、その上に小口積

みの石を2~3段重ねて高さ等を調整し、その上に長い  
石を描えて並べて蓋石としている。底面の石敷きは無い。

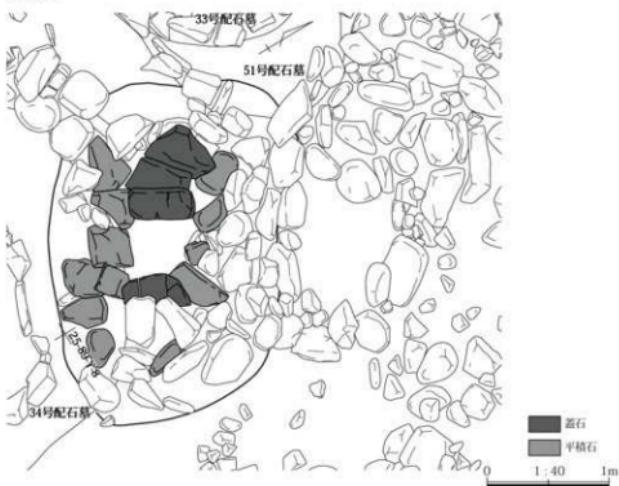
**遺物** 調査に伴って後期堀之内2式期から加曾利B1式  
期の土器破片が少量出土している。

**所見** 壁石から蓋石までの構造が欠損なくほぼ全て描つ  
た希少な事例である。しかも、41号・44号配石墓とともに  
本遺跡で最も古い段階の遺物を伴っている点でも注目  
しておきたい。

平面図

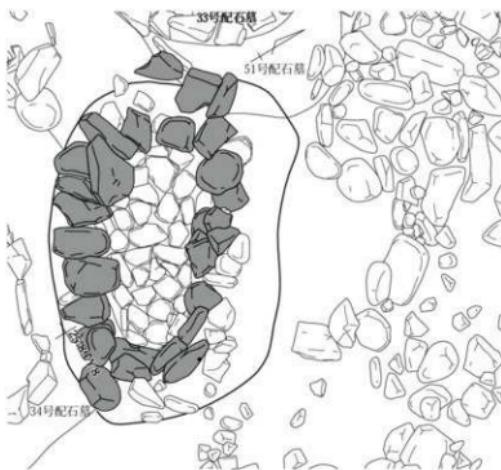


2面图

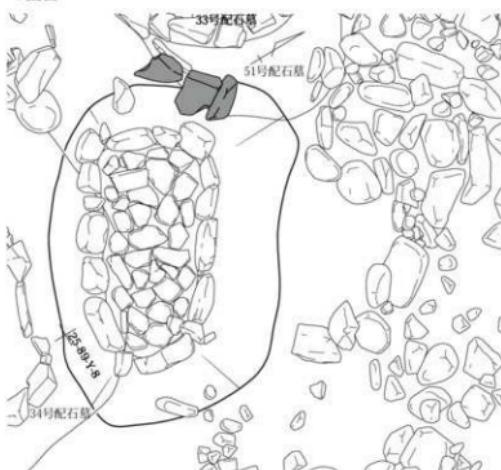


第515図 43号配石墓(1)

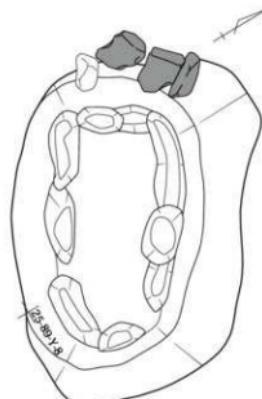
3面目



4面目



掘り方



第516図 43号配石墓(2)

**43号配石墓(2号配石フ)**

調査年度 平成31年度

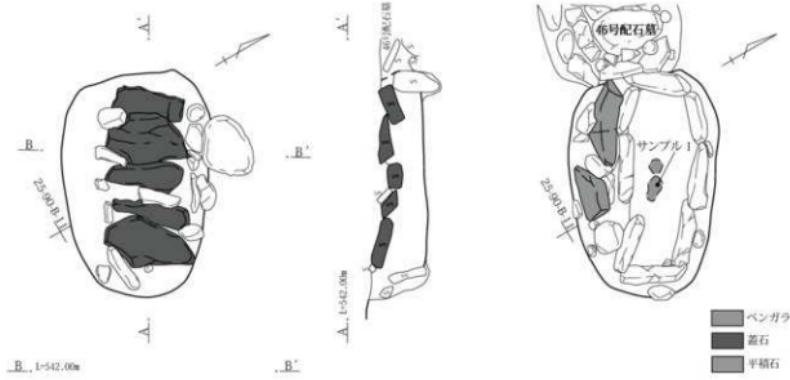
経過 42号配石墓の南東側で確認された。これも42号と同様に周辺は疊を敷き詰めたような状況だったが、調査を進めるなかで、蓋石や小口積みの特徴が徐々にわかつ

てきた。本配石墓も均質な鉄平石を蓋石として並べており、調査となつた。

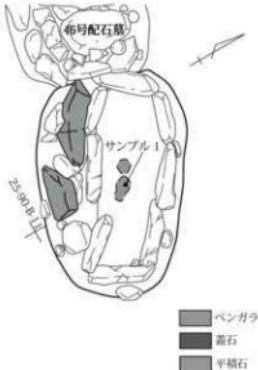
重複 北西側で33号・51号配石墓と、南西側で34号配石墓と、北東側で104号配石と重複し、これらの遺構を切る。

長軸方向 N-57°-W

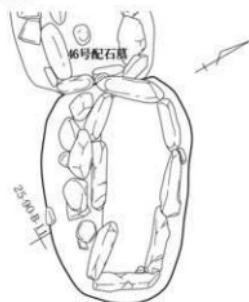
## 平面図



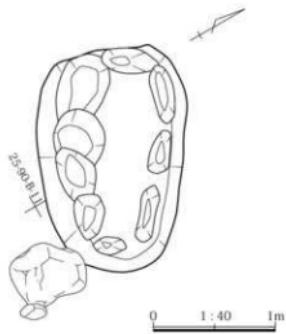
## 2面目



## 3面目



## 掘り方



第517図 44号配石墓

**規模** 長軸170cm、短軸75cm、確認面からの深さは50cmである。

**形状** 楕円形

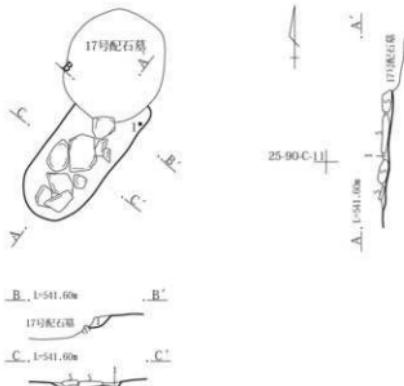
**構造** 壁石は長手を主体に一部長軸を縦位に立てたものを交えて楕円形に組んだ配石墓で、その上に小口積みの石を3~4段に重ねて高さ等を調整し、その上に形の描った鉄平石を主体に並べて蓋石としている。底面には

鉄平石を主体とする石敷きを全面に施している。

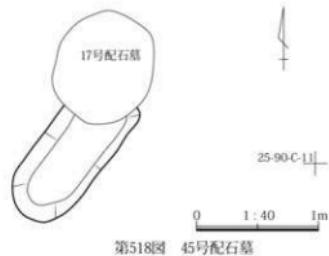
**遺物** 調査に伴って後期末葉の土器破片が少量出土している。

**所見** 壁石から蓋石までの構造が概ね残っており、底面の石敷きを作らう楕円形タイプの好例である。調査に伴って出土した土器破片の時期を考慮すれば、後期中葉から晩期の中間をつなぐ好例となる可能性が高い。

## 平面図



## 掘り方



## 44号配石墓(2号配石マ)

調査年度 平成31年度

経過 B1群の北西部にあり、14号配石墓の西側で確認された。B1群の調査当初の段階では礫の分布が比較的少ない地区であり、その段階では本配石墓の蓋石は露出していなかったが、調査の進捗で全体を掘り下げた段階で蓋石が確認され、調査となった。

重複 東北側に14号配石墓が近接するが、切り合い関係は不明である。また、調査中に北西側に接した状態で46号配石墓が検出され、これを切っていることがわかった。

長軸方向 N-62° -W

規模 長軸144cm、短軸54cm、確認面からの深さは25cmである。

形状 幅狭の長方形

**構造** 壁石は長軸を長手にして長方形に組んだ配石墓で、小口積みの石は必要な場所に小さな石を置いて調整し、その上に長さ70cm前後の大きな石の長軸を合わせて並べ、蓋石としている。底面に石敷きは無いが、中央部付近にベンガラと思われる赤色の散布が認められた。

なお、掘り方調査で南西側長辺壁石の外側に幅40cmほどのスペースがあり、ここに大小様々な形の礫10個ほどが集積されていた。この礫は確認段階では見えておらず、壁石段階でも判らず、掘り方段階で存在が判明した。配石墓制作時に余ったものをその場で対処したのであろうか。

**遺物** 調査に伴って後期高井東式併行の土器破片が少量出土している。

**所見** 蓋石の大半が残る好資料で、小口積みの石をほとんど使用しないため、蓋石と底面の間は20cm前後と非常に狭い造りになっている。こうした特徴は36号配石墓と共に通しており、やや小型の幅狭長方形タイプであることも類似している。

また、底面の石敷きが無く、ベンガラと思われる赤色の散布が確認された配石墓はB1群では他に3例あるが、いずれも幅狭長方形タイプの可能性が高い。

## 45号配石墓(2号配石マ)

調査年度 平成31年度

経過 17号配石墓の南西側で検出された配石墓で、B1群で最も北西側で確認されたものになる。本配石墓を調査した段階ではすでに周囲の調査は終了し、最終の遺構確認面まで掘り下げた状態で底面石敷きの一部が検出された。

長軸方向 N-46° -E

規模 確認できた長軸は長さ90cm、短軸37cmである。

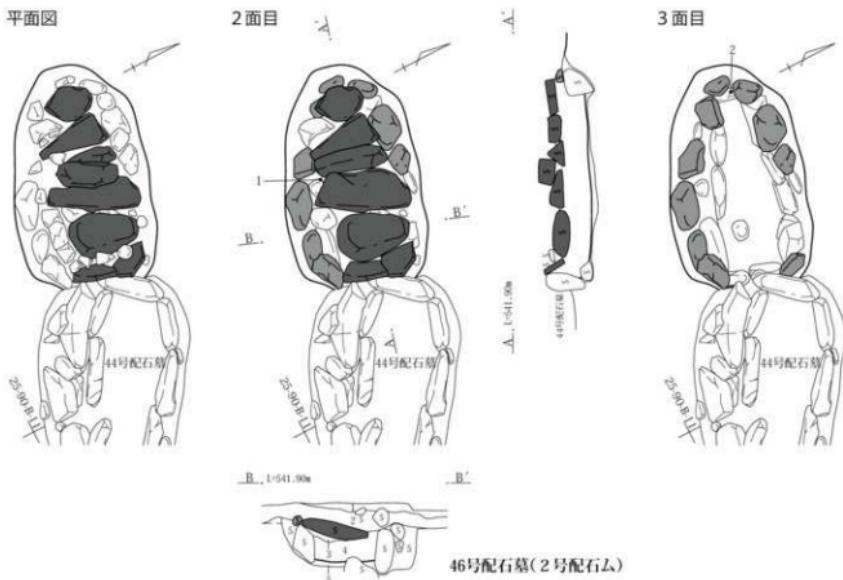
形状 不明

**構造** 確認できたのは底面石敷きの一部のみである。石敷きには鉄平石や扁平な地山礫・川原石が併用されている。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B2式期の土器破片は少量出土した。

**所見** 重複する17号配石墓と一体の可能性が高く、その際は壁石を楕円形に組んで、底面に石敷きを施した配石墓となる。

## 平面図



## 掘り方



第519図 46号配石墓

0 1:40 1m

## 46号配石墓(2号配石ム)

調査年度 平成31年度

経過 B1群の北側、44号配石墓の北西側で確認された。44号よりやや低い位置にあるため、44号の確認段階では本配石墓の石は見えなかったが、北西側を最終確認で掘り下げた段階で蓋石などが検出された。

重複 南東側を44号と一部接しており、これに切られる。

長軸方向 N-73°-W

規模 長軸138cm、短軸50cm、確認面からの深さは32cmである。

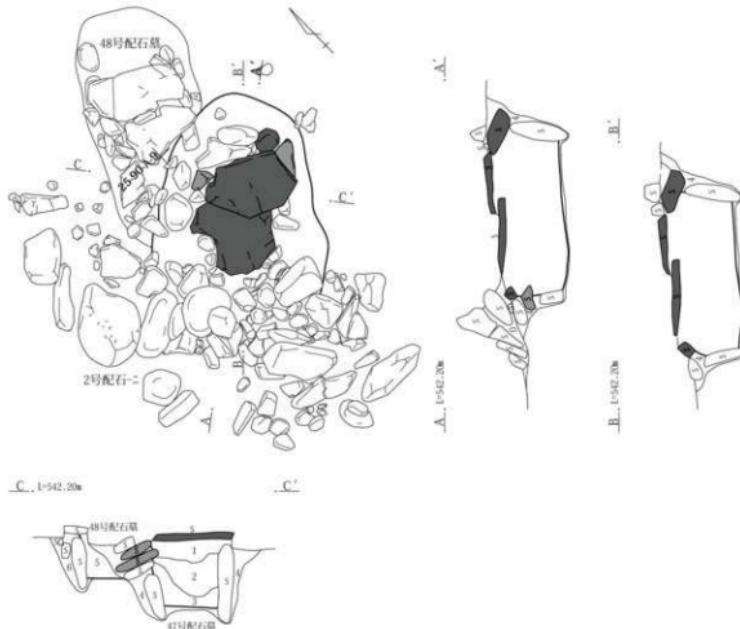
形状 幅狭の長方形

構造 壁石は長軸を長手に置いて側縁を立てて長方形に組み、必要なところに石を置いて調整し、大きな長い石の側縁を描えて蓋石としている。底面の石敷きは無い。

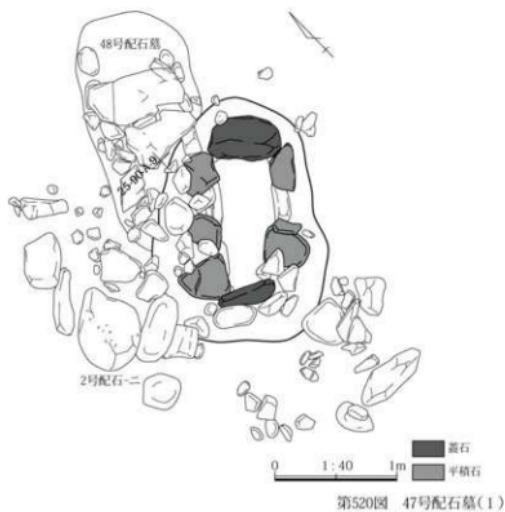
遺物 調査に伴って後期加曾利B2式期の土器破片が少量出土している。また、壁石とその上に置いた石の間から、耳飾りの破片(2)が出土した。

所見 壁石を幅の狭い長方形に組んだやや小ぶりの配石墓で、小口積みの石はほとんど使用しないことや、蓋石と底面の間が20cm前後と非常に狭い造りであることなどは、南東側に接する44号と共通しており、両者はかなり親密な関係者である可能性が高いと考える。

## 平面図



## 2面図



第520図 47号配石墓(1)

3面目



4面目



掘り方

**47号配石墓(2号配石ヤ)****調査年度** 平成31年度

**経過** B 1群の中央より南側、42号配石墓の西側で確認した。B 1群の南西側の範囲を示す立石群が並んだ中央部付近に長軸70cm前後の大型多孔石があり、あたかもB 1群のランドマークのような存在だが、本配石墓はそのすぐ横に位置している。

**重複** 北西側で48号配石墓と重複し、これを切る。

**長軸方向** N-40° - E

**規模** 長軸120cm、短軸44cm、確認面からの深さは56cmである。

**形状** 幅狭の長方形

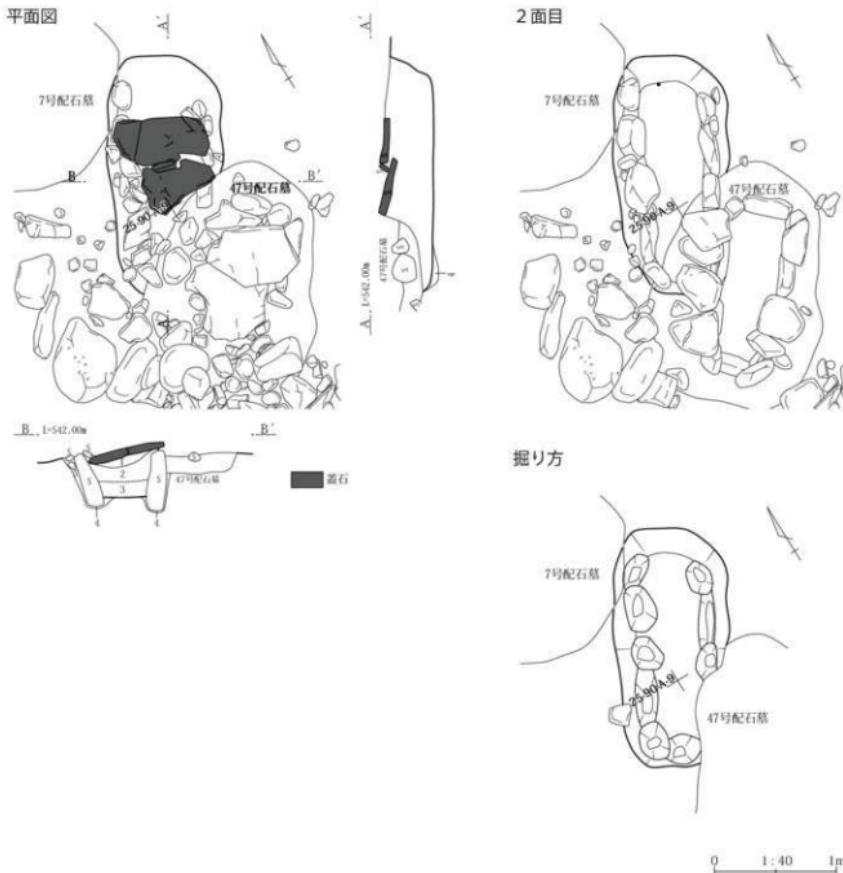
**構造** 壁石は長軸を縱位に立てたものと長手に立てたものの併用して長方形に組み、その上に小口積みの石を必要に応じて1~3段重ねて高さ等を調整し、その上に長辺70cm前後の大きな鉄平石2枚を一部重ねるように置き、その両側にやや小ぶりの石を加えて蓋石としている。底面の石敷きは無い。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B式期の土器破片がわずかに出土している。

**所見** やや小型だが、壁石から蓋石までほぼ欠落無く揃った好例である。



第521図 47号配石墓(2)



第522図 48号配石墓

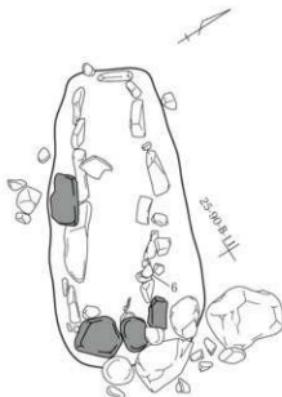
**48号配石墓(2号配石コ)****調査年度** 平成31年度**経過** 47号配石墓の北側で確認された。**重複** 南東側を47号配石墓と重複し、これに切られる。**長軸方向** N-30°-W**規模** 長軸153cm、短軸36cm、確認面からの深さは38cmである。**形状** 幅狭の長方形**構造** 壁石は長軸を長手にして側縁を立てて長方形組

み、小口積みの石は使わずに、その上に細長い鉄平石を直接載せて蓋石としている。底面の石敷きは無い。壁石は北東側短辺の石を失っており、蓋石も原位置で載っているのは2枚だけである。

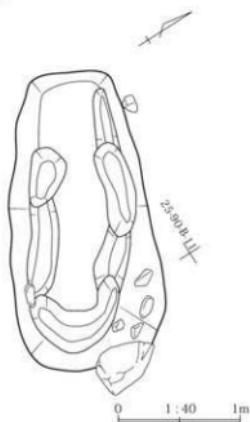
**遺物** 調査に伴って後期加曾利B3式期の土器破片わずかに出土している。

**所見** 小口積みの石をほとんど使わない事例はいくつか認められたが、本例も蓋石までの構造がわかる事例で、蓋石から底面まで30cmほどしかない。

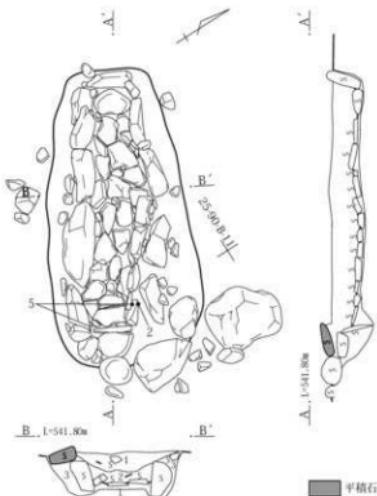
平面図



掘り方



2面図

**49号配石墓(2号配石ヨ)****調査年度** 平成31年度

**経過** B 1群の北西側、44号配石墓の南西部で確認した。上面では小口積みの石がいくつか見えるだけではっきりしなかったが、やや掘り下げたところで長方形に並ぶ壁石が確認されて、調査となった。

**重複** 認められない。**長軸方向** N-60°-W

**規模** 長軸194cm、短軸47cm、確認面からの深さは32cmである。

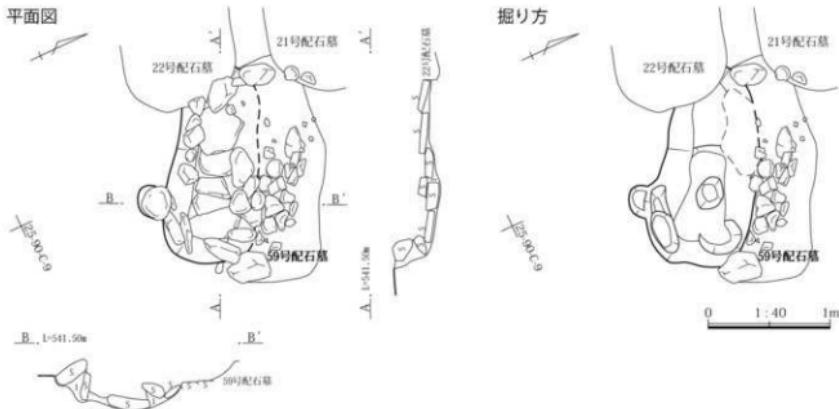
**形状** 幅狭の長方形

**構造** 壁石は長軸を長手にして長方形に組んでおり、小口積みの石はいくつかのところに1段残っている程度であり、その上の状態は不明である。底面には小さな鉄平石を主体に全面に石敷きを施している。

**遺物** 調査に伴って、覆土中を中心後期加曾利B 3式期から高井東式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 壁石の上端が欠けているものもあり、上方から押されて形もやや歪んでいるが、底面石敷きを伴う好例である。

第523図 49号配石墓



第524図 50号配石墓

**50号配石墓(2号配石ラ)****調査年度** 平成31年度**経過** B1群の北西部、22号配石墓の南東側で確認した。

上層部分を削平されており、壁石も大半を失っている。

**重複** 北西部を22号配石墓と、北東側を59号配石墓と重複し、22号に切られ、59号を切る。**長軸方向** N-63°-W**規模** 長軸132cm前後、短軸62cm、確認面からの深さは32cmである。**形状** 長方形か**構造** 原位置を保っている壁石は1~2枚程度しか残っていない。底面の石敷きは、大きな鉄平石を敷いた状態を示すが、重複する22号配石墓に切られた際に動いたのか、南西側から押されたようにいくつかがズレて重なっている。また、底面石敷きの両側に沿って円礫や鉄平石が並んでいるが、これらは底面よりわずかに浮いた状態で並べられており、違和感を覚える。**遺物** 確認されていない。**所見** 本配石墓の規模に不釣り合いな底面石敷きの大きさとズレ方、その両側に並ぶ浮いた状態の石に違和感を覚える。**51号配石墓(2号配石ル)****調査年度** 平成31年度**経過** 47号配石墓の南東側、33号配石墓の下で確認され

た。33号調査時に本配石墓の底面石敷きが検出され、当初は33号の底面と見ていたが、その後の調査で本配石墓のものと判明し、調査となった。

**重複** 南西側を33号・52号配石墓と重複し、33号に切られ、52号を切る。また、北東側をわずかに42号・43号配石墓と重複し、これらを切る。

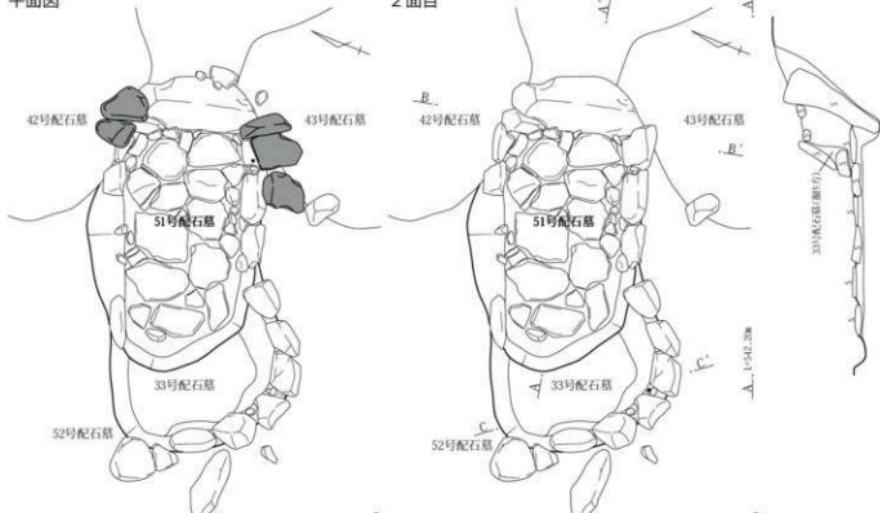
**長軸方向** N-79°-E**規模** 長軸172cm、短軸100cm、確認面からの深さは54cmである。**形状** 幅広の長方形**構造** 壁石は長軸を縦位に立てて長方形に組み、その上に小口積みの石を重ねるが、現状では北東側の一部に1石が残っているのみで、その上の状態は確認できない。底面には、やや大きな鉄平石を主体に石敷きを前面に施している。

北東側の短辺には長さ1.1mの大きな石を1石置いて壁石としているが、南西側の短辺の壁石は33号に切られて不明である。なお、掘り方調査では南西側の壁石を掘えた痕跡が残っており、これをもって本配石墓の全体像は把握できると判断する。

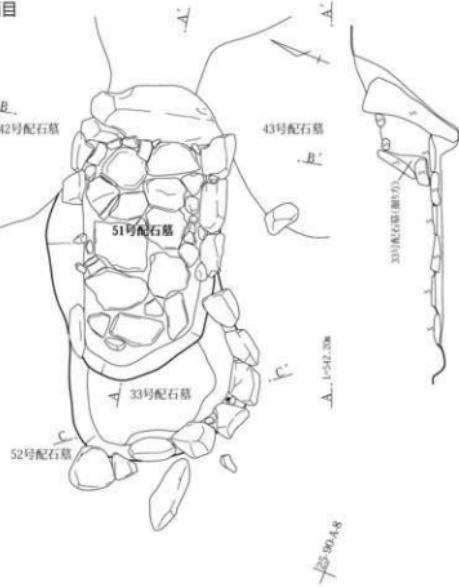
**遺物** 調査に伴って、後期後半期の土器破片がわずかに出土している。

**所見** 小口積みの石の重ね方と蓋石は確認できないが、底面の石敷きを伴う幅広長方形タイプの配石墓の好例と考える。

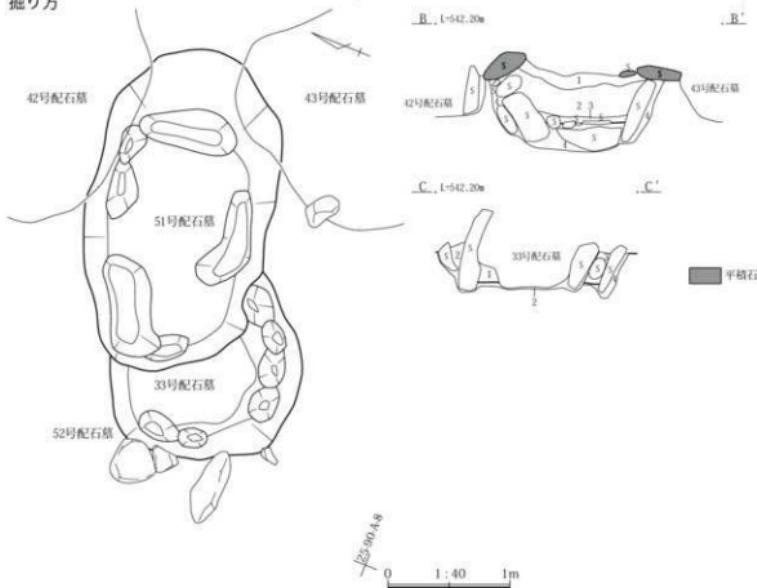
平面図



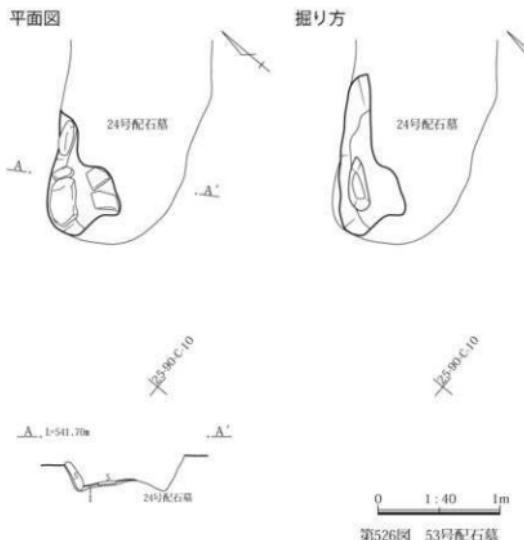
2面図



掘り方



第525図 51・52号配石墓



第526図 53号配石墓

**52号配石墓(2号配石レ)**

調査年度 平成31年度

経過 51号配石墓の南西側で確認された。

重複 33号・51号配石墓と重複し、これらに切られる。

長軸方向 N-48° - E

規模 長軸不明、短軸100cm前後、確認面からの深さは26cmである。

形状 幅広の楕円形

構造 壁石は長軸を縦位に立てて長方形に組んだ配石墓であったと判断した。図には示していないが、底面の高さは51号より1段高い位置にあるため、残念ながら壁石の上の構造は確認できていない。

遺物 出土していない。

所見 33号・51号配石墓に切られて不明な部分も多いが、33号・51号および52号はいずれも幅広タイプの配石墓であり、これらが前後関係を持って継続していることは希少な事例であると考える。また、幅狭と幅広の違い、方形と楕円形の違い等を検討する上でも、有効な調査例となるであろう。

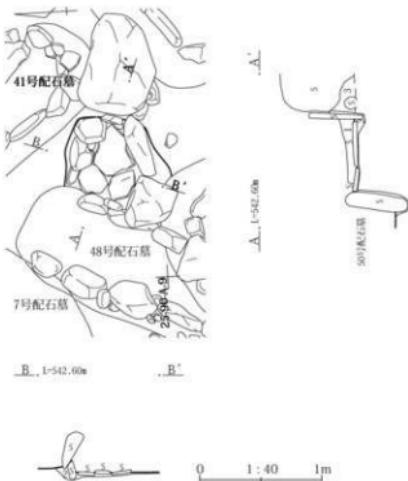
**53号配石墓(2号配石ワ)**

調査年度 平成31年度

経過 B1群の北西側にある24号配石墓の掘り方で確認した。24号は幅の狭い長方形の配石墓で、壁石から蓋石までの構造が残り、底面石敷きも伴う良好な状態で調査された。各所の石を取り除いて掘り方調査を実施し、終了したが、南西側の一部でその下から壁石2石と底面の石敷き2石が表出し、再調査となつた。

所見 このケースでは、壁石・敷石に使った石の質も違っている点も考慮しての判断だが、配石墓の場合は改修あるいは作り直しを実証するのはかなり難しい。

平面図



掘り方



第527図 54号配石墓

54号配石墓(2号配石ヲ)

調査年度 平成31年度

経過 B1群の中央よりやや南東側、48号配石墓の北東部に重複した状態で確認した。

重複 南西側を47号・48号配石墓と重複し、これに切られる。

長軸方向 不明

規模 長軸は現状で68cm、短軸74cm、確認面からの深さは35cmである。

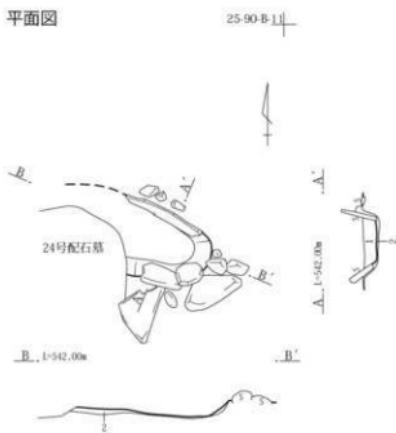
形状 長方形

構造 壁石を立てて長方形に組んだ配石墓で、底面に鉄平石を全面に施していると想定する。

遺物 出土していない。

所見 北東部の一部のみの確認で、長軸方向もはっきりしないが、底面に石敷きを施す配石墓であることは間違いない。

平面図



掘り方

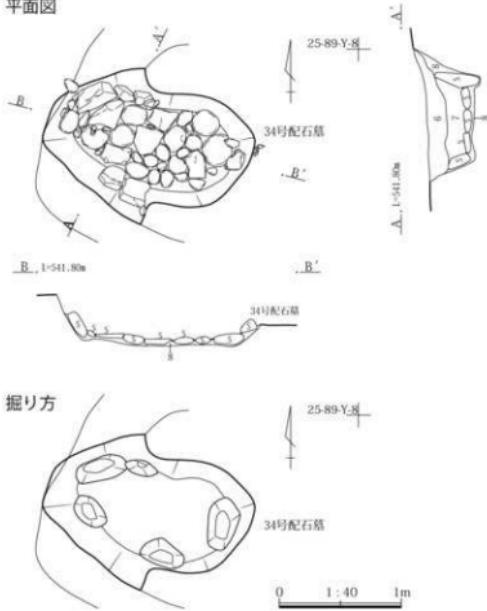


第528図 55号配石墓

## 55号配石墓(2号配石①)

**調査年度** 平成31年度**経過** B 1群の北西側、24号配石墓の北東側端部に重複した状態で確認された。**重複** 南西部を24号配石墓と重複し、これに切られていると考えられる。**長軸方向** N-68°-W**規模** 長軸は現状で110cm、短軸35cm、確認面からの深さは25cmである。**形状** 幅狭の長方形か**構造** 壁石はやや薄い鉄平石を長手に立てて長方形に組んだもので、残っているのは北東側の長辺に1石、南西側の長辺に2石のみである。底面の石敷きも無い。**遺物** 調査に伴って晩期のものと思われる大型浅鉢の底部破片が出土した。**所見** 壁石に薄手の鉄平石を使用したもので、はたして配石墓だったかも含めて検討の余地がある。残存部が少なく判断は難しいが、これほど薄手の石材を壁石に使用した例は本遺跡ではこの例のみである。

## 平面図



第529図 56号配石墓

## 56号配石墓(2号配石②)

調査年度 平成31年度

経過 B 1群の南西側、34号配石墓の西側下で確認された。34号の掘り方調査ではほとんど見えていなかったが、掘り方内に色調の異なる部分があり、トレンチを入れて確認したところ、本配石墓の石が表出した。

重複 34号配石墓と重複し、これに切られる。

長軸方向 N-75°-W

規模 長軸126cm、短軸54cm、確認面からの深さは40cm以上である。

形状 幅狭の楕円形

構造 壁石は長軸を縦位に立てて楕円形に組み、底面には川原石を主体に石敷きを全面に施している。壁石の多くは34号配石墓等により失っている。

遺物 調査に伴って後期加曾利B 3式期の土器破片が少量出土している。

所見 やや小ぶりだが底面石敷きを伴う楕円形タイプの

配石墓の好例で、壁石も大きなものを使用しており、深さも現状よりあったと考えられる。

## 57号配石墓(2号配石③)

調査年度 平成31年度

経過 B 1群の南側、56号配石墓の南西で確認した。これはB 2群の範囲内にあり、南側にはB 2群の配石墓が数多く隣接する。本配石墓は長軸の両端部にだけ石を配置するタイプで、これも石の配置がもとで調査となった。

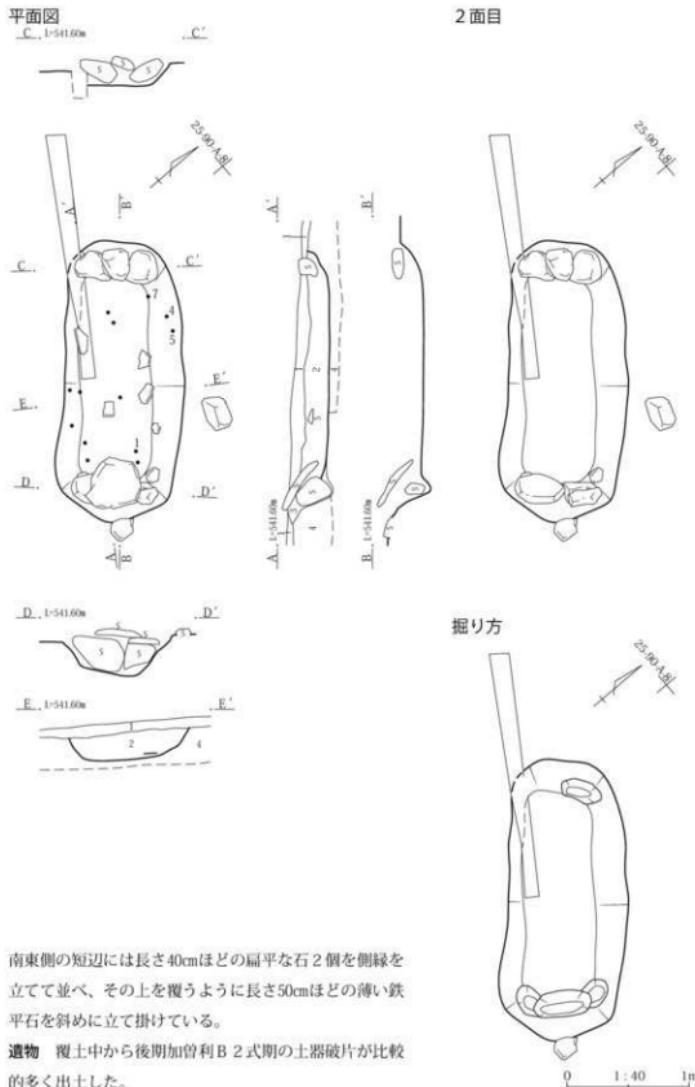
重複 重複する遺構は無い。

長軸方向 N-48°-W

規模 長軸169cm、短軸60cm、確認面からの深さは32cmである。

形状 幅狭の長方形

構造 長軸の両端部にだけ石を配置するタイプの配石墓である。北西側の短辺に長さ30cm前後の石2個を並べるように置き、その上に小さな川原石1個を載せている。



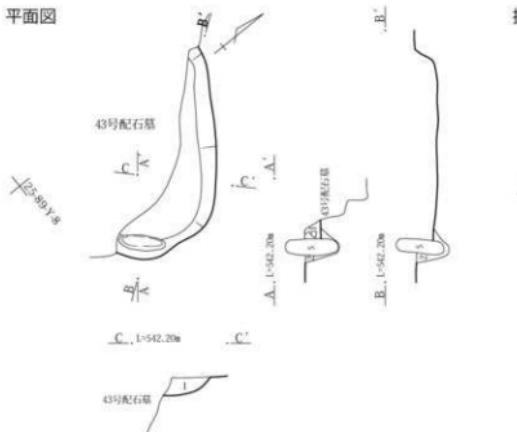
南東側の短辺には長さ40cmほどの扁平な石2個を側縁を立てて並べ、その上を覆うように長さ50cmほどの薄い鉄平石を斜めに立て掛けている。

**遺物** 覆土中から後期加曾利B2式期の土器破片が比較的多く出土した。

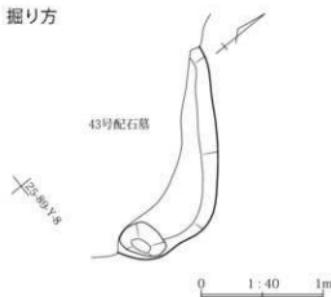
**所見** 長軸の両端部にだけ石を配置するタイプの配石墓で、B1群では数少ない事例だが、こうしたタイプの配石墓もあると認識したことで、その後の調査に大いに役立つこととなった。

第530図 57号配石墓

平面図



掘り方



第531図 58号配石墓

## 58号配石墓(2号配石④)

調査年度 平成31年度

経過 57号配石墓の北東側、43号配石墓の南東部で確認した。43号の掘り方調査で、南東部の立ち上がり土部に立った状態の石があり、調査となった。

重複 西側を大きく43号配石墓と重複し、これに切られる。

長軸方向 計測不能

規模 現状で長軸140cm前後、短軸68cm前後、確認面からの深さは29cmである。

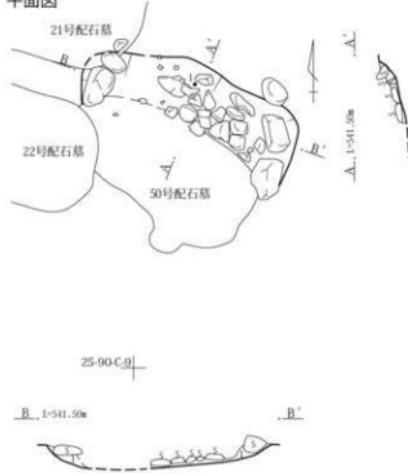
形状 楕円形か

構造 長軸方向の両端部に1個だけ石を配置するタイプの配石墓で、南東側の短辺中央に長さ40cmほどの扁平な川原石を長手に立てて設置している。覆土中に小さな石が多く含まれていたが、配置したと判断できるものはなかった。

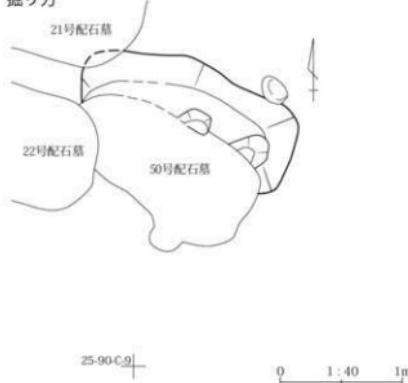
遺物 調査に伴って土器片加工円盤が1点出土した。

所見 このタイプの配石墓はB1群ではこの事例のみだが、B2群では複数の事例が確認されている。

平面図



掘り方

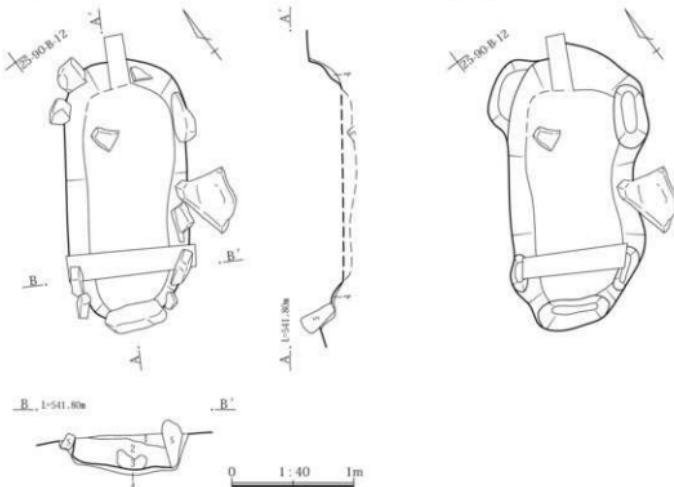


第532図 59号配石墓

**59号配石墓(2号配石)****調査年度** 平成31年度**経過** B 1群の北西側で、50号配石墓と重複した状態で確認された。**重複** 南西側を50号配石墓に切られ、北西隅を21号配石墓に切られる。**長軸方向** N-70° -W**規模** 現状で長軸134cm、短軸36cm、確認面からの深さは11cmである。**形状** 残っている部分が不明瞭**構造** 底面に小さな鉄平石・川原石等で石敷きを全面に施しているものと思われるが、現状は欠落している場所も多い。石敷きの周囲に立てた壁石は無く、長軸の両端部に長さ30cm前後の石2石を並べて置いてある。**遺物** 調査に伴って、後期高井東式期の土器破片がわずかに出土している。**所見** 確認面からの深さが10cmほどしかなく、不明な部分が多い。

なお、底面石敷きに使われている石のなかに、直径10cm前後の薄手で丸い川原石が数個認められたが、こうした石は96号配石や100号配石等で備蓄されていたものの実用事例に該当しよう。

## 平面図



## 掘り方



第533図 60号配石墓

## 60号配石墓(2号配石)

**調査年度** 平成31年度

**経過** 遺構や礫の少ない場所であるが、最終確認で掘り下げたところ、立った状態の石がコの字状に確認され、調査となった。

**重複** 重複する遺構は無い。**長軸方向** N-35°-E

**規模** 長軸180cm、短軸81cm、確認面からの深さは38cmである。

**形状** 幅広の楕円形

**構造** 壁石は側縁を長手に立てて楕円形に組んでいるが、残っているものはわずかで、3分の2以上を失っている。底面の石敷きも無い。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B3式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 想定される形態からすれば残された要素はごくわずかだが、この場所までは配石墓があったことを示す役割を果たしている。

## 61号配石墓(2号配石)

**調査年度** 平成31年度

**経過** B1群配石墓および12号列石の調査が終盤になり、93号配石中央の立石を取り外すために半裁して底面を確認したところ、その下に礫を伴う大きな土坑があることが判明し、調査となった。

**重複** 133号・136号竪穴建物・93号配石と重複し、133号・136号を切り、93号に切られる。

**長軸方向** N-53°-W

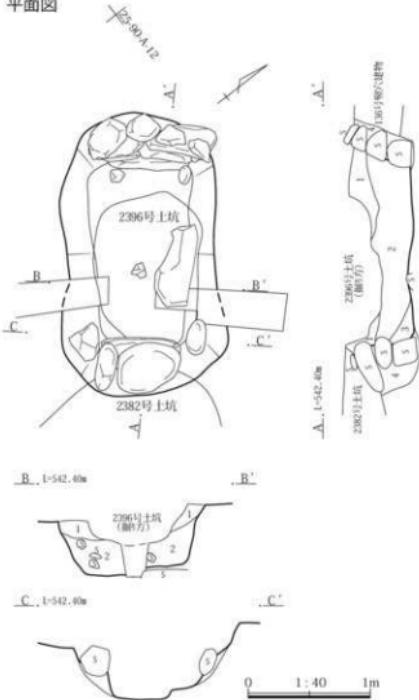
**規模** 長軸140cm、短軸82cm、確認面からの深さは56cmである。

**形状** 幅広の長方形

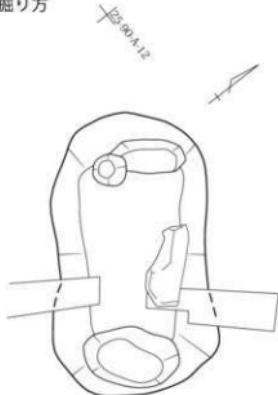
**構造** 基本的には両側に両端部にだけ石を配置するタイプの配石墓と思われるが、構造は独特である。

北西側の短辺には、一番下に長さ70cm前後の棒状礫を置き、その上に大きな棒状礫を2個ずつ2段に重ね、さらにその上にやや小さな棒状礫4個を縦位に並べて置いて、高さ等を調整している。

平面図



掘り方



第534図 61号配石墓

南東側の短辺では、一番下に長さ70cm前後の棒状砾を置いてその上にほぼ同サイズの棒状砾を重ね、その上には長さ50cmほどの楕円形の川原石とやや小さな棒状砾を並べて置いて、高さを合わせている。

石を重ねた高さはいずれも53cmに合わせており、南西側では底面の石の両端に小さな石が置いてあり、南東側では2段目の位置に合わせて両側にやや大きな石を配置している。

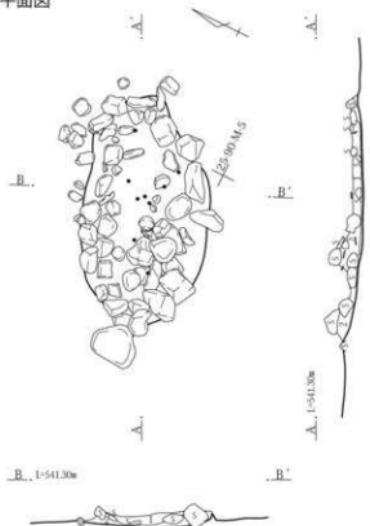
なお、掘り方調査で北東側の長辺の下から長さ70cmの大きな石を検出したが、これが底面に見えていたかどうかは微妙である。

**遺物** 覆土中から中期末～後期初頭の土器破片がわずかに出土した。

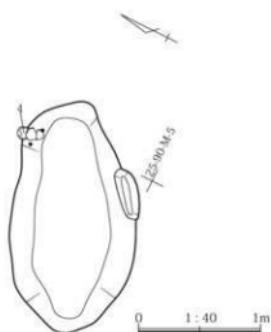
**所見** B 1群で12号列石の段上に構築された配石墓は、確認できたなかでは36号とこの61号だけであり、特に61号は12号列石の構築者と目される133号竪穴建物の出入り口部に位置する点でも注目される。また、61号は両側の短辺だけに大きな石を重ねた重厚な構造の配石墓で、本遺跡でも特異な存在である。

特に、南西側底面の両端に置かれた小さな石と、南東側中段の両側に配置された石は、場所は異なるが、何かを据えるための構造のように見える。これらがどのような目的で配置されたのかを示す証拠はないが、想像を逞しくし、木棺等に遺体を入れて埋葬したと仮定すれば、それを正の位置に据えるための目印ないしは構造かもしれない。

平面図

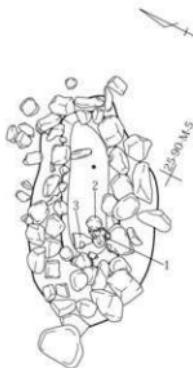


掘り方



第535図 62号配石墓

2面図



## 62号配石墓(3号配石E)

調査年度 平成30年度

経過 107号竪穴建物上面の北西側で確認した。107号の輪郭がまだ判明していない段階で確認されたもので、調査時には3号配石Eとしたが、その後の検討で配石墓と判断するに至った。

重複 107号竪穴建物の上面に重複し、これを切る。

長軸方向 N-64° - E

規模 長軸164cm、短軸58cm、確認面からの深さは10cm前後である。

形状 幅広の長方形

構造 当初は長さ10~30cmの石を舟形状に集積したような形状であったが、その内側の南西部から壺形土器や台付土器・石棒などがまとまって出土し、集積した石を整理すると、一定の間隔を置いて直線的に並ぶ長辺が判明し、北東側の短辺にやや大きな石2個を置いた状態が判明した。

遺物 配石墓内面の南西側底面に、大型の無文深鉢の大きな破片が内面を上にして置いてあり、その傍らに台付鉢を伏せた状態、その横に小型の壺が倒れた状態であった。また、小型壺の口縁部に差し込んだような状態で欠損した石劍が出土している。これらの遺物は晩期初頭段階に比定されよう。

所見 側縁を立てた壁石は見い出せないが、こうした配石墓も存在するものと判断した。

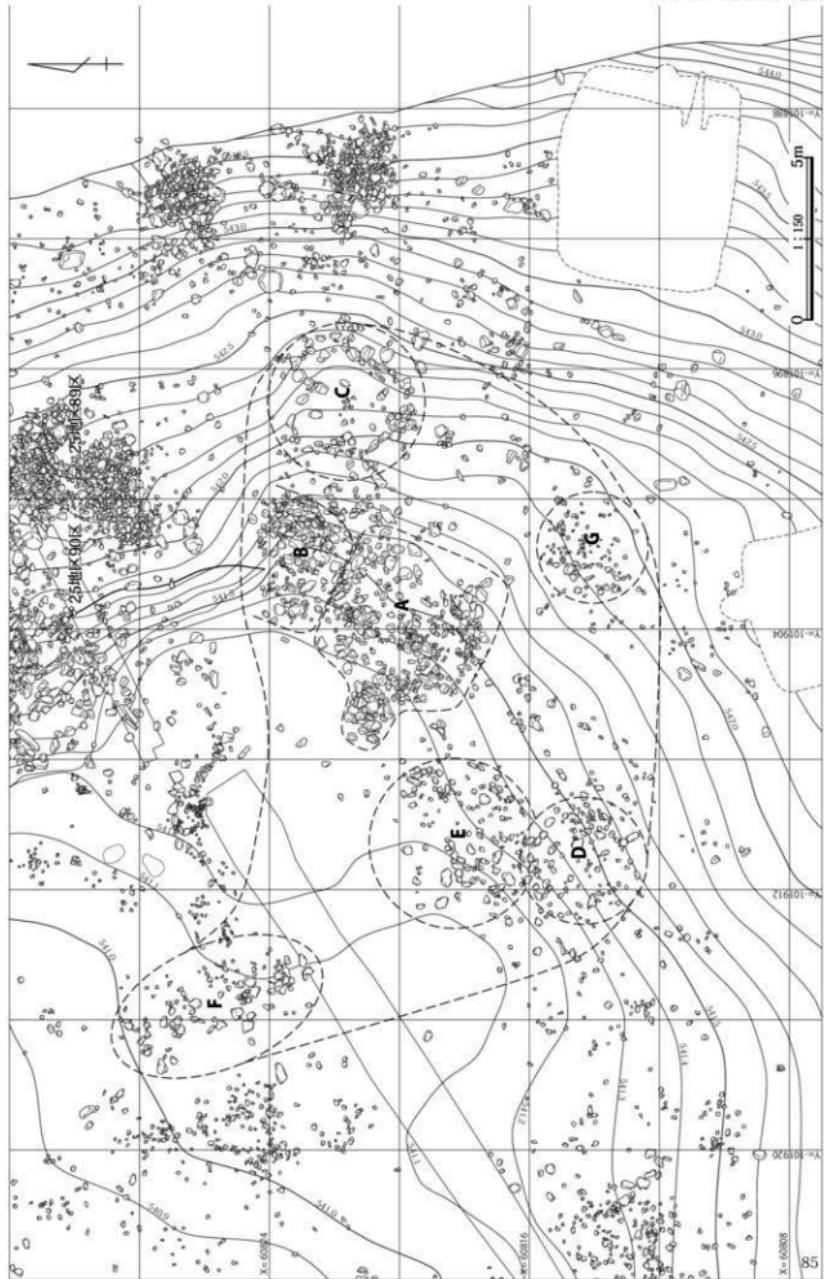
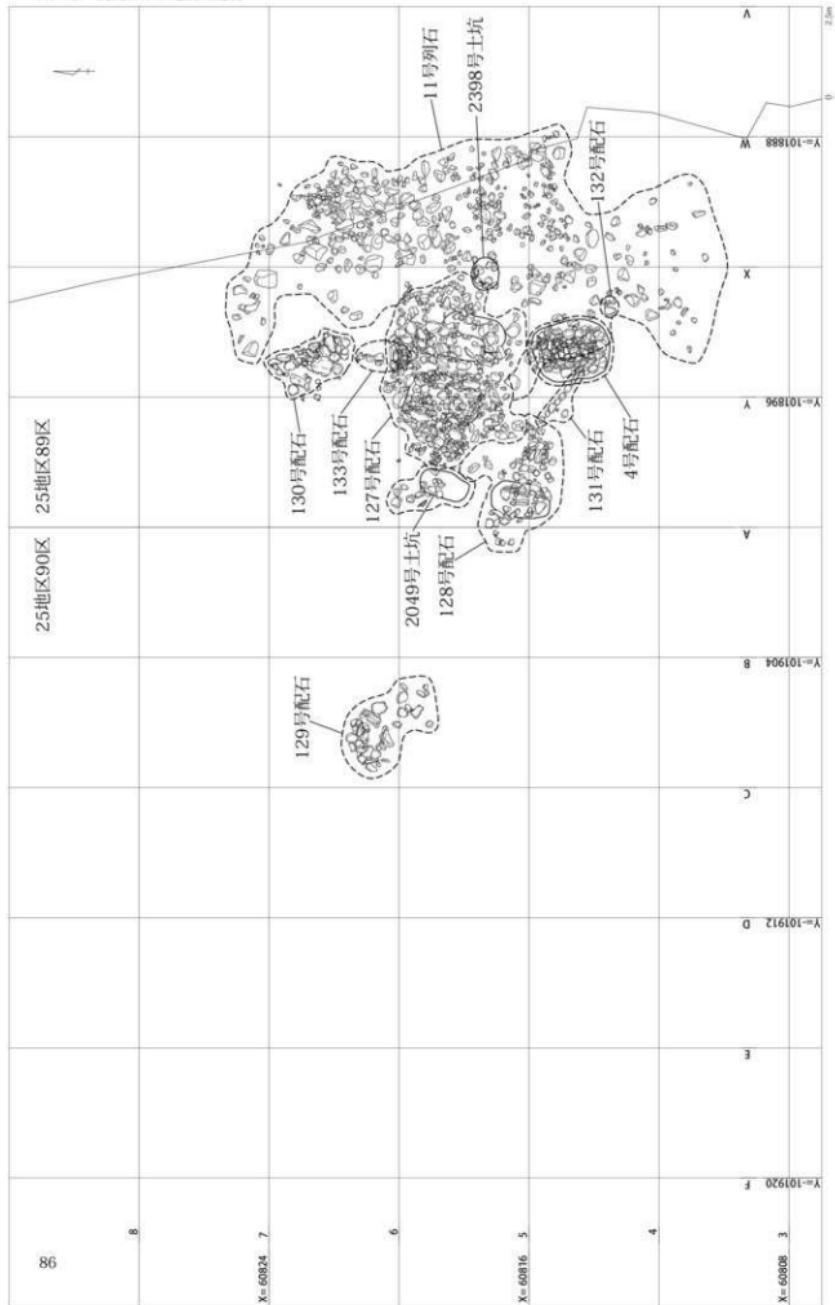
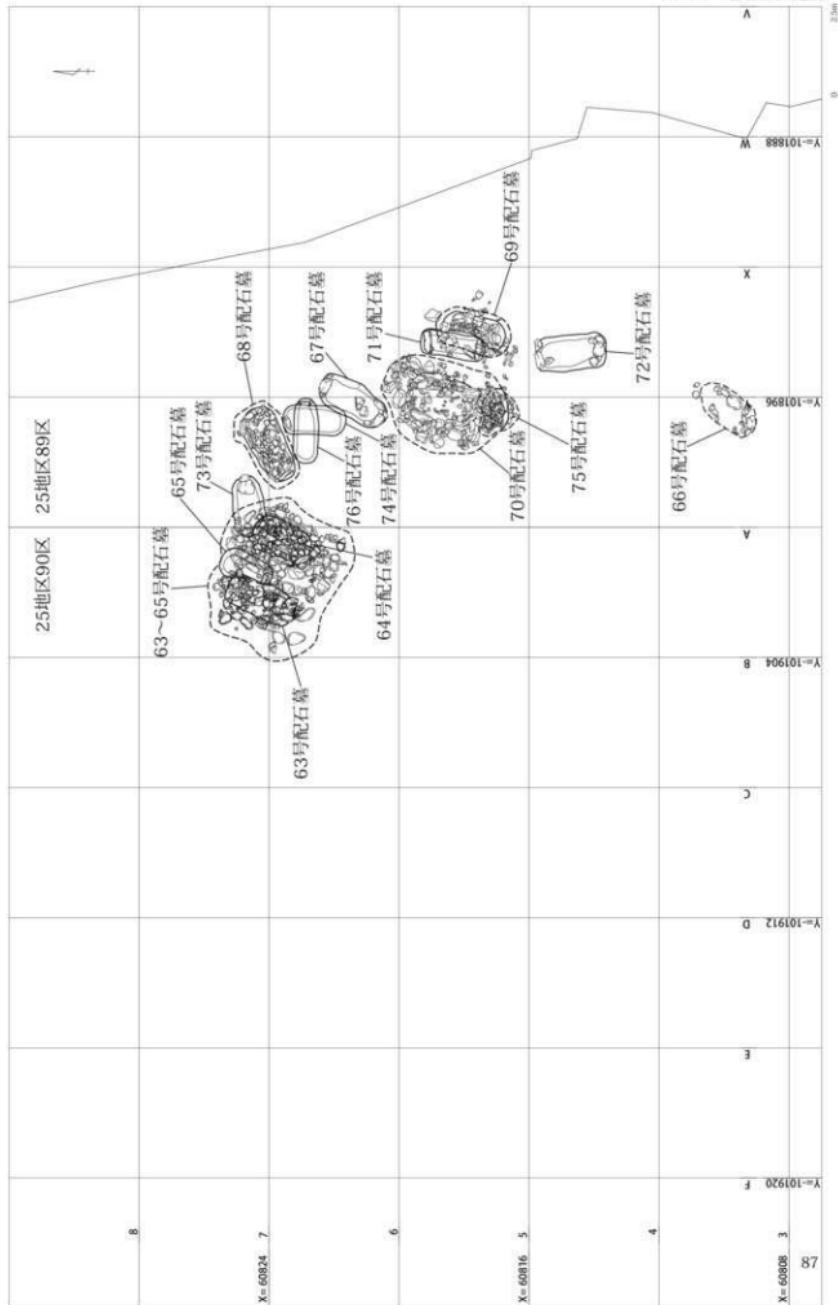


図536団 B2群確認当時の状況図



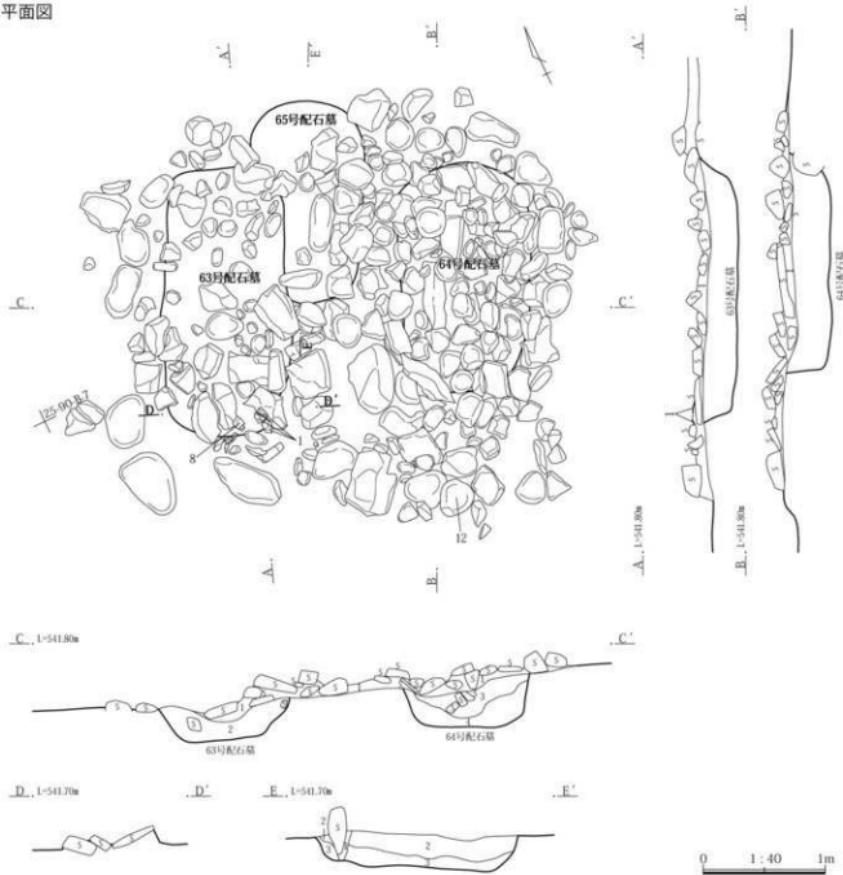
第537図 B 2群配石墓測量1回目

第1節 繩文時代の遺構



第538図 B2群配石墓調査2回目

## 平面図



第539図 63～65号配石墓(1)

## 63号配石墓(4号配石L-1)

調査年度 平成31年度

**経過** 調査初期段階では礫が一定範囲に集積していることから4号配石Bとしたが、掘り下げて礫を整理した段階で $4 \times 3$ mの方形状に礫を敷き詰めたような状態が認められた(4号配石L)。さらに調査を進めると礫が2箇所に集中したので断ち割り調査を行い、その下から配石墓を確認した。本配石墓はその南西側のものにある。

**重複** 北東側を65号配石墓と重複し、これを切る。

長軸方向 N-25°-E

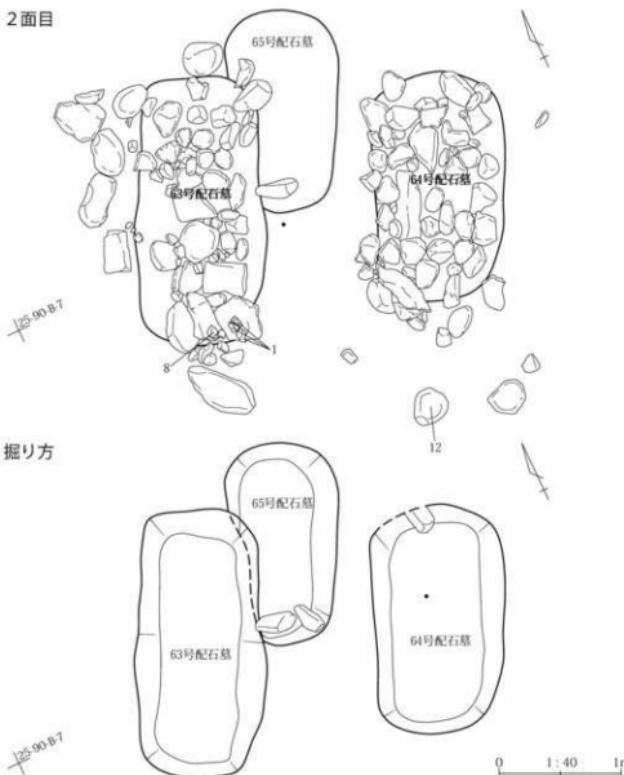
**規模** 長軸186cm、短軸63cm、確認面からの深さは32cmである。

**形状** 長方形

**構造** 長方形の墓穴の上面に40~60cm大の鉄平石・地山石・川原石を多量に集積している。これらの礫は、壁石や小口積みの石に匹敵する大きさだが、ここでは全て上面を覆う事に使用している。

**遺物** 遺物は4号配石Lとして一括の扱いになっている

2面目



第540図 63~65号配石墓(2)

が、調査に伴って晩期佐野I a式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 壁石で囲う、あるいは両端部に石を配置する配石墓とは異なるが、石を使って上面を覆うものも配石墓の一つの形と判断した。上面を多量の石で覆う行為は、動物等に振り返される危険性を防止する意図があったと考える。

#### 64号配石墓(4号配石L-2)

**調査年度** 平成31年度

**経過** 63号配石墓の南東側に隣接して確認された。

**重複** 重複する遺構は無い。

**長軸方向** N-26°-E

**規模** 長軸164cm、短軸87cm、確認面からの深さは47cmである。

**形状** 幅広の楕円形

**構造** 63号配石墓と同様に、幅広楕円形の墓穴の上面に63号とほぼ同様の大きさの石を多量に集積している。

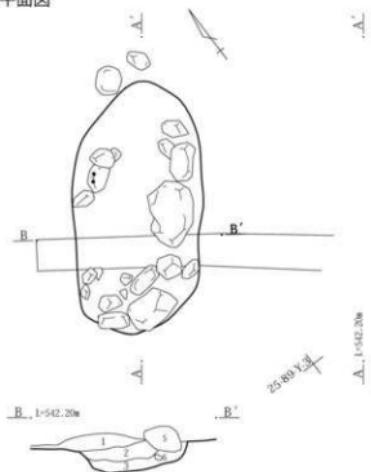
**遺物** 63号と同様に、調査に伴って晩期佐野I a式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 63号配石墓と同様である。

#### 65号配石墓(4号配石L-3)

**調査年度** 平成31年度

平面図



掘り方



第541図 66号配石墓

**経過** 63号配石墓の北東に重複した状態で確認された。63号の調査段階で中央東側に長さ30cm前後の川原石1石が側縁を立てた状態で確認され、調査となつた。

**重複** 南西側を63号配石墓と重複し、これに切られる。

**長軸方向** N-25°-E

**規模** 長軸140cm、短軸60cm、確認面からの深さは44cmである。

**形状** 長方形

**構造** 南西側短辺の中央に方形状の川原石1石を立てている。北東側に石は残っていないが、63号か64号に転用された可能性もある。

**遺物** 63号と同様に、調査に伴って晩期佐野Ia式期の土器破片わずかに出土している。

**所見** 両短軸の中央に石を立てて配置したタイプの配石墓である。65号では上面を覆う礫は少なかったが、これも重複する63号に転用された可能性が考えられる。

#### 66号配石墓(4号配石O)

**調査年度** 平成31年度

**経過** 64号配石墓の南13mのところで確認した。B2群で最も南側で確認された配石墓で、10号列石の北東側末

端にほぼ重なる位置にある。この場所は調査当初の段階でも礫の分布は少なく、期待させる場所ではなかったが、数少ない礫が楕円形に集まつた状態で出現し、調査となつた。

**重複** 2349号土坑と重複し、これを切る。

**長軸方向** N-37°-E

**規模** 掘り方は長軸200cm前後、短軸106cm前後、確認面からの深さは30cm前後である。

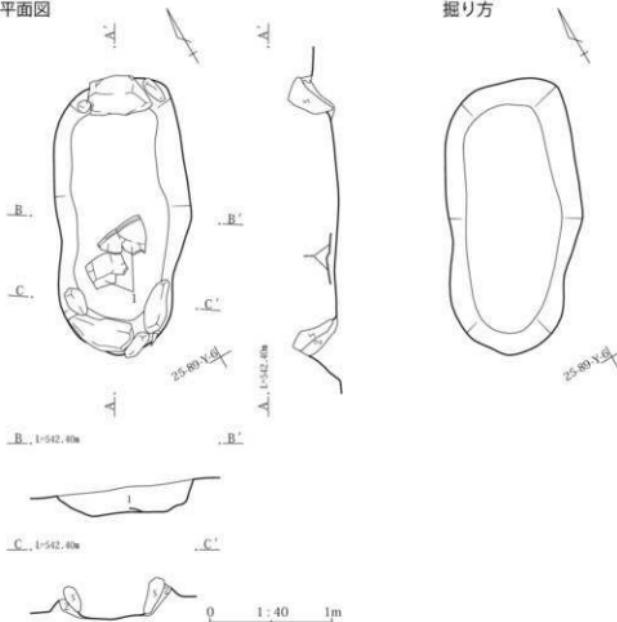
**形状** 楕円形か

**構造** 石が残っていない箇所もあるが、長さ20~50cm前後の石10数個が楕円形に並んでおり、大半は傾いて倒れているが、いくつかの石は側縁を立てた状態を保っている。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B3式期の土器破片がわずかに出土している。

**所見** B2群の南限を示す位置で検出されたが、多くの要素を失っており、配石墓と確定しきれない部分も残している。

平面図



第542図 67号配石墓

## 67号配石墓(4号配石P)

調査年度 平成31年度

経過 64号配石墓の南東側3.7mで確認した。B2群調査当初の段階では、周囲も含めて大きな礫は分布していたが散漫な状態であり、本配石墓の上面に礫の集積は認められなかった。全体を掘り下げるなかで大きな石が向かい合った状態で確認され、断ち割ってみたところ、底面から深鉢の大型破片が出土した。

重複 北西側長辺の中央付近に74号配石墓がわずかに重複するが、切り合い関係ははっきりしない。

長軸方向 N-30°-E

規模 長軸169cm、短軸53cm、確認面からの深さは31cmである。

形状 幅狭の長方形か

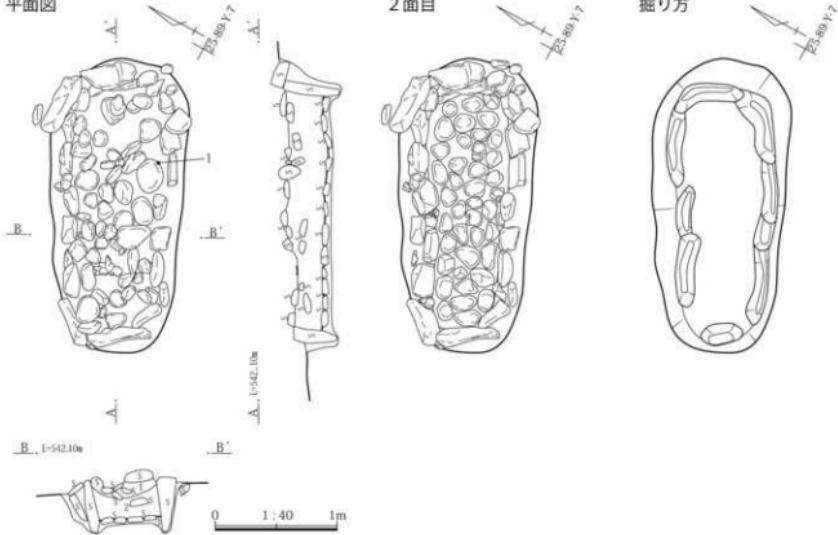
構造 対向する短辺に長さ50cm前後の大きな石を長手に置いて、側縁を外開きぎみにして配置し、北東側ではその両側に小さな川原石を底面から浮いた状態で立てて

置き、南西側では片側に大きな川原石を長手に立てて据え、もう片方には小さな川原石を底面から浮いた状態で据えている。

遺物 南西側の底面から晩期佐野式期深鉢の大型破片が置いた状態で出土した。

所見 確認当初から長辺部分の壁石は認められなかった、南西側に長手に立てて置いた壁石が1石あり、その他にも壁石に添えたとみられる石もあることから、本来は壁石で長方形に組んだ配石墓であったと判断したい。

## 平面図



第543図 68号配石墓

## 68号配石墓(4号配石Q)

調査年度 平成31年度

**経過** 64号配石墓のすぐ東側で確認した。B2群の北側にあり、B1群の配石墓と一部を重複する。B2群調査初期段階で上面に礫の分布は無かったが、掘り下がった段階で楕円形に礫を集積した状態が確認され、調査となつた。

**重複** 北東側の一部をB1群の37号配石墓と重複し、周囲の配石をこれに切られているものと考える。

長軸方向 N-64°-E

**規模** 長軸192cm、短軸50cm、確認面からの深さは32cmである。

形状 幅狭の長方形

**構造** 壁石は長軸を縦位に立てて長方形に組んでおり、南東側の短辺付近に小口積みの石が一部認められたが、その他には無く、蓋石の代わりに壁石の範囲内にやや小ぶりな川原石をほぼ全面に敷き込んでいる。また、底面にも小さな川原石を使用した石敷きを全面に施している。

なお、図には表現していないが、写真図版を見ると、本配石墓の周囲、特に北東側に棒状の川原石を伴う集石

が一部認められる。B1区の28号配石墓で認められた円形状の配石がここにもあった可能性を想定したい。

**遺物** 覆土中を中心に後期加曾利B2式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 壁石を長方形に組み、底面の石敷きを伴う配石墓で、蓋石の代わりに上面にも川原石を敷いた好例である。

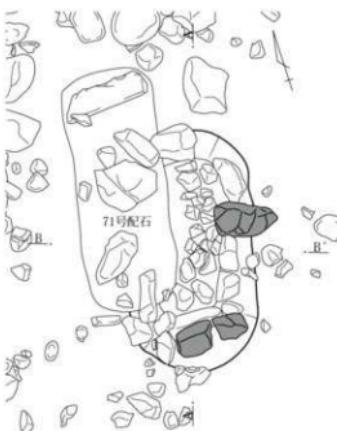
なお、覆土中から扁平な川原石がランダムな状態で数多く出土している。これらの川原石は、底面や上面に使われたものと同様のものであり、埋土の際に周囲に置いてあった川原石が混在したのか、意図的に混入したのか、などの事情が気にかかる。

## 69号配石墓(4号配石R)

調査年度 平成31年度

**経過** B2群の南東形、68号配石墓の南側4mで確認された。B2群調査当初の段階ではこの地区に礫の分布は少なかったが、2段階目では北西側の70号配石墓まで含めた範囲に多量の礫が敷き詰めたように集積し、整理しながら掘り進めると、69号と70号の側縁をつなぐ直径3m前後の円形状に大きな礫がめぐった状態が認められ

平面図



2面図



掘り方



0 1:40 1m

第544図 69号配石墓

た(第544図、PL.280)。

**重複** 北西側に71号配石墓が重複し、これに切られる。

**長軸方向** N-15° - E

**規模** 長軸123cm、短軸40cm前後、確認面からの深さは28cmである。

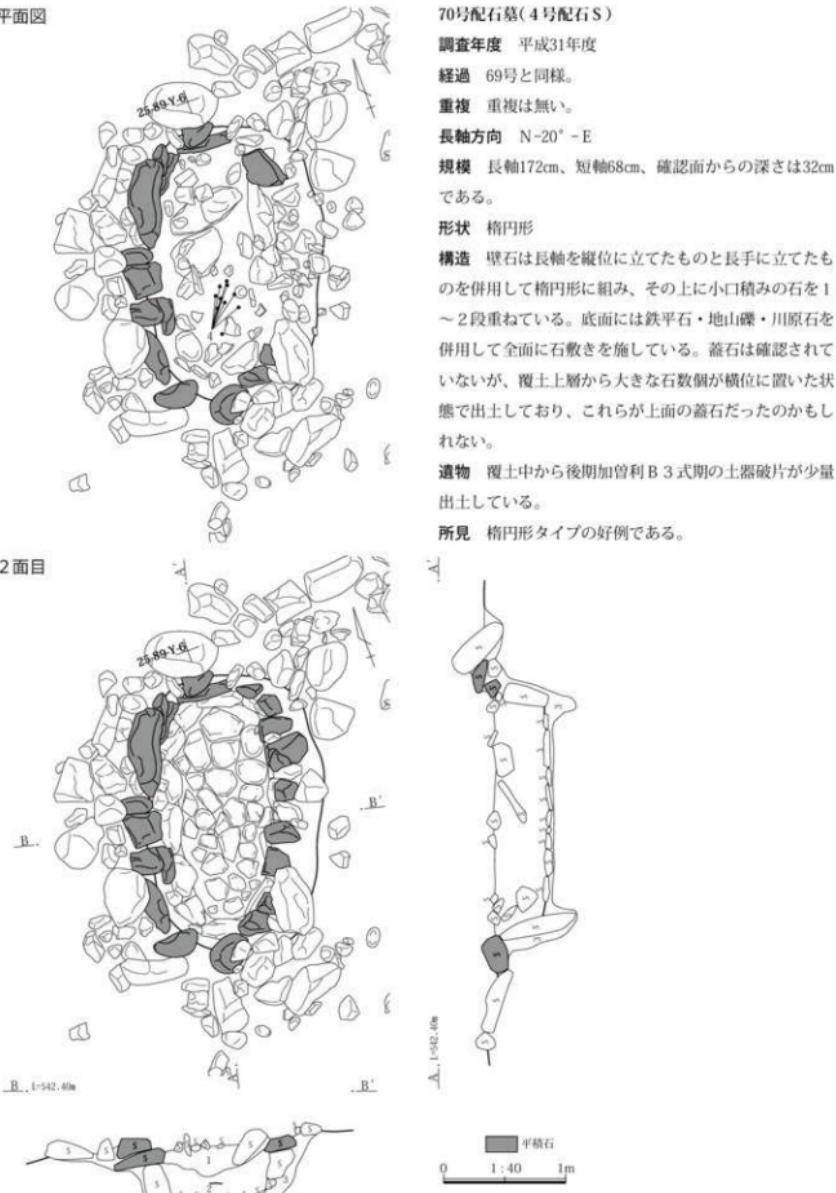
**形状** 幅狭の長方形

**構造** 壁石は、厚手の地山石を主体に、長軸を縱位に立てて長方形に組み、その上に小口積みの石を重ね、底面には薄手の鉄平石を主体に石敷きを全面に施している。北西側の長辺は71号に切られており、欠落する部分も多い。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B2式期の土器破片がわずかに出土している。

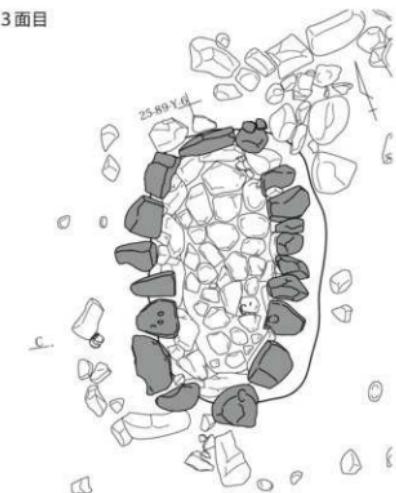
**所見** 68号配石墓と共にB2群では最も古い段階に想定される配石墓で、欠落する部分も多いが基本構造は留めている。

## 平面図



第545図 70号配石墓(1)

3面目



4面目



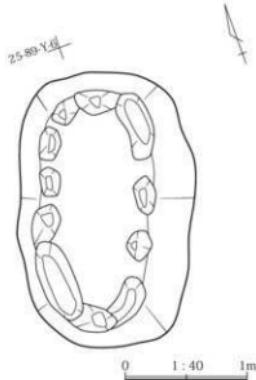
C, l=542.0m

C'



掘り方

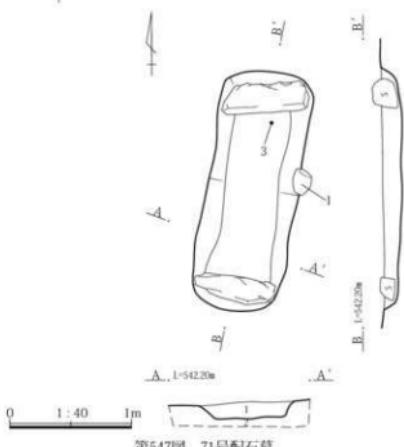
■ 平積石



第546図 70号配石墓(2)

## 平面図

25-89-Y.6



第547図 71号配石墓

## 71号配石墓(4号配石T)

調査年度 平成31年度

**経過** 69号配石墓の北西側で確認した。69号の調査当初は、北西側に大きな石が数個点在した状態で、配石墓とは認識できなかったが、69号の掘り方調査が終了した段階で南北の短辺の石が対向する位置にあることが判明した。

**重複** 南東側を69号配石墓と重複し、重複部分の69号の構造物が失われていることから、これを切っているものと判断した。

長軸方向 N-10°-E

**規模** 長軸200cm、短軸78cm、確認面からの深さは18cmである。

**形状** 長方形

**構造** 南北の短辺に長さ70cm前後の大きな柱状の鉄平石を置いた配石墓である。69号確認時に71号の範囲に長さ50cm前後の厚手の鉄平石が数個のっており、これらが71号の蓋石だった可能性が高い。

また、掘り方調査で南北の短辺に据えた石の下から小さな薄い鉄平石が出土している。高さ、あるいはぐらつきの調整であろうか。

**遺物** 覆土中から晩期前半期の粗製深鉢大型破片等が出

土し、北側短辺の石の内側から完形の耳飾り(3)が1点出土している。

**所見** 両側の短辺に石を配置するタイプの好例であり、北側に据えた石の内側からの耳飾りの出土は注目に値する。

## 72号配石墓(4号配石U)

調査年度 平成31年度

**経過** 69号配石墓のすぐ南側で確認した。B2群調査初期段階ではこの付近に礫の分布は少なかったが、2段階目で上面に大きく楕円形状に礫を敷き詰めた状態が確認され、4号配石Kとした。その後、その下で本配石墓が検出された。調査時には上面の配石とは別構造としたが、63号・64号・68号配石墓と同様の施設と判断した。

**重複** 図には示していないが、西側の131号配石と重複し、これを切っているものと思われる。

長軸方向 N-6°-W

**規模** 長軸220cm、短軸110cm、確認面からの深さは50cm前後である。

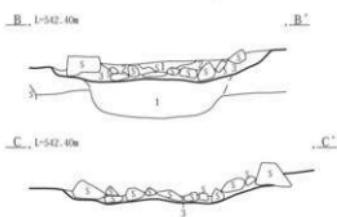
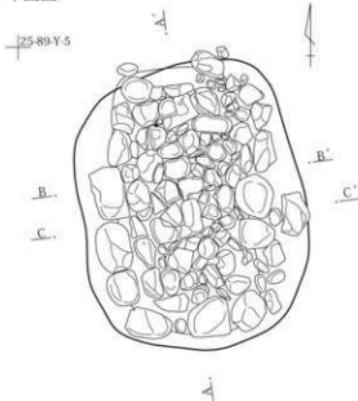
**形状** 幅広の楕円形

**構造** 南北両側の短辺に長さ50cm前後の大きな石を据え、その両側にいくつかの壁石を立てて置いている。長辺には壁石は認められないことから、両側の短辺にだけ石を据えるタイプであろうか。

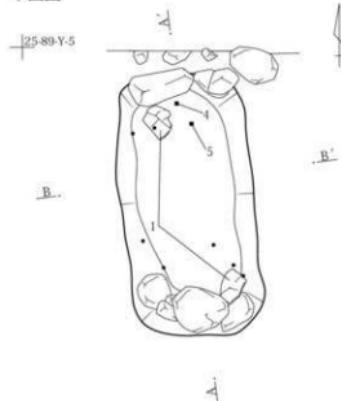
**遺物** 南北両側の短辺に据えた石の内側覆土中から、晩期前半期の粗製深鉢大型破片等が出土している。また、北側短辺に据えた石の内側覆土中から石鏡2点(4)と石製品(5)が出土しており、注目される。

**所見** 調査時に別の遺構とした配石を上面に蓋石として判断した。また、北側から出土した石鏡と石製品は注目される成果だが、1点が未実測であることを明記しておきたい。

## 平面図



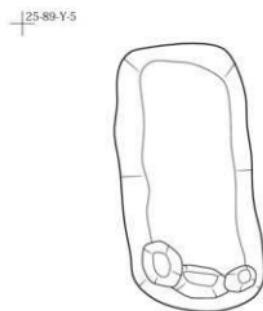
## 平面図



## 掘り方



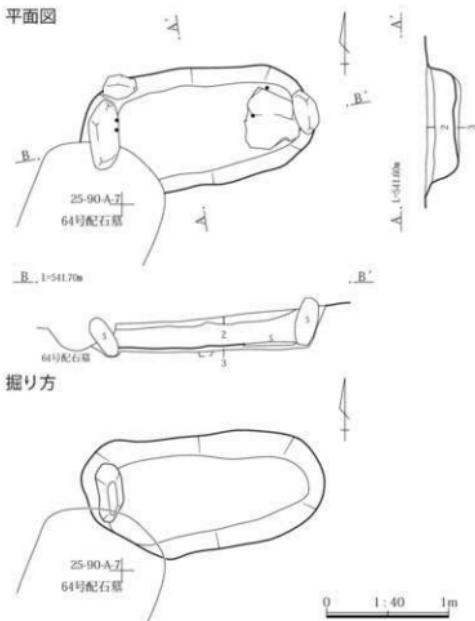
## 掘り方



0 1:40 1m

第548図 72号配石墓

平面図



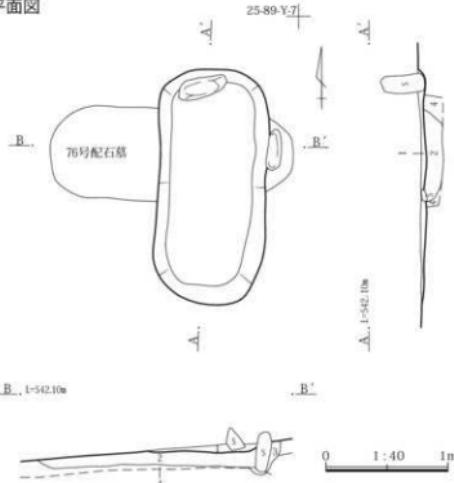
第549図 73号配石墓

**73号配石墓(4号配石W)****調査年度** 平成31年度**経過** B2群の北西側、64号配石墓の北側で確認した。64号掘り方調査時に、北側の壁面に川原石の一部が露出しており、対向する東側で壁石が確認された。**重複** 南西側端部に64号配石墓が重複し、これに切られる。**長軸方向** N-82° - E**規模** 長軸147cm、短軸74cm、確認面からの深さは40cmである。**形状** 長方形**構造** 西側の短辺に長さ60cm前後の川原石を長手に立てて据え、29号配石墓の片側に壁石1個を付けている。東側の短辺には長さ40cmほどの川原石を縱位に立てて据え、その底面に大きな薄い鉄平石1石を敷いている。**遺物** 調査に伴って後期加曾利B3式期の土器破片が少量出土している。また、北東側の覆土上層から欠損した

石剣が出土しているが、図は未掲載である。

**所見** 両側の短辺に壁石を1石ずつ配置するタイプの配石墓であろう。このタイプで底面に石敷きを伴うものは本遺跡では無いが、一部の石敷きに留めている点が興味深い。

平面図



第550図 74号配石墓

**74号配石墓(4号配石X)****調査年度** 平成31年度**経過** B 2群の北側、67号と68号配石墓の間で確認した。

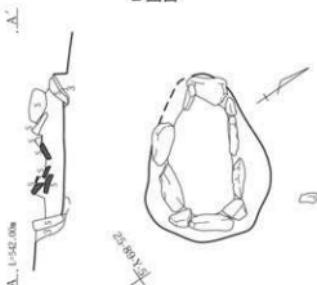
68号調査時に南側に側縁を立てて据えた川原石があり、これが本配石墓の北側短辺に据えた石だったが、その時点では判らなかった。

**重複** 南東側を67号と中央を76号配石墓と重複し、76号を切り、67号に切られていると判断する。**長軸方向** N-3°-E**規模** 長軸159cm、短軸70cm、確認面からの深さは36cmである。**形状** 長方形**構造** 南北の両短辺に壁石を1石ずつ立てたタイプと判断するが、南側の壁石は失っている。**遺物** 調査に伴って無文土器の小破片が出土した。**所見** 73号と同様に両短辺に壁石を1石ずつ配置するタイプの配石墓で、重複する同タイプの76号と直行した状態で重複する点も含めて貴重な調査事例と考える。

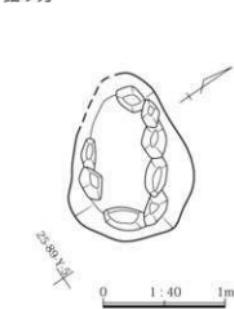
平面図



2面目



掘り方



第551図 75号配石墓

**75号配石墓(4号配石Y)****調査年度** 平成31年度

**経過** B 2群の南側、重複する70号配石墓の確認段階で、70号の南西側に大きな礫が多量に集積した状態が認められ、その下で75号を確認した。調査中に南側で南東方向に直線的に並ぶ69号配石が検出されたが、これは本配石墓の直近南から72号配石墓の中央部に延びており、その性格と関連性が問題となる。

**重複** 北側に70号配石墓が近接するが、切り合い関係はない。

**長軸方向** N-62° -W

**規模** 長軸92cm、短軸43cm、確認面からの深さは24cmである。

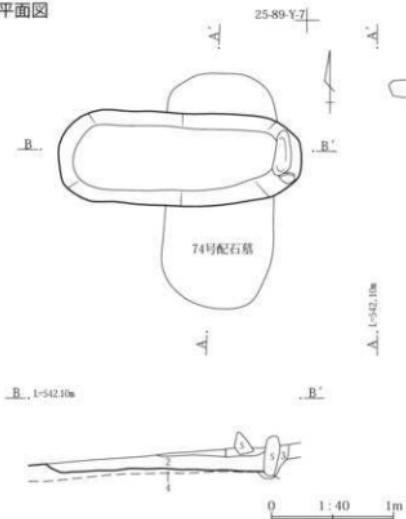
**形状** 小型の長方形

**構造** 壁石は長軸を長手に置いて側縁を立てて長方形に組み、必要な場所に小口積みの石を1段重ねて調整し、その上に多量の礫を集めして蓋石としている。底面の石敷きは無い。南西側に長辺が外側に弧状に開いているが、小口積みの石が大きく重いために歪んだのであろう。

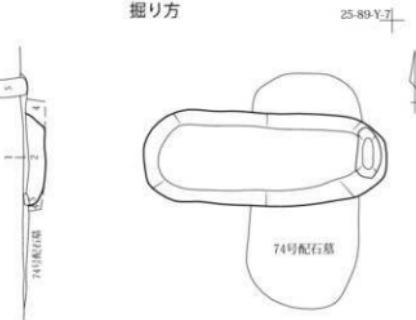
**遺物** 調査に伴って後期高井東式期の土器破片が少量出土した。

**所見** 小型だが、壁石から小口積みの石、蓋石までよく残っており、好い事例となった。

平面図



掘り方



第552図 76号配石墓

**76号配石墓(4号配石ア)****調査年度** 平成31年度

**経過** B 2群の北側、74号配石墓の下で確認した。74号調査時に北東側の長辺に壁石状に立てた石があり、当初は74号の壁石と見たが、掘り方下まで続いており、本配石墓の存在が判明した。

**重複** 74号と直交した状態で重複し、これに切られる。

**長軸方向** N-89°-W

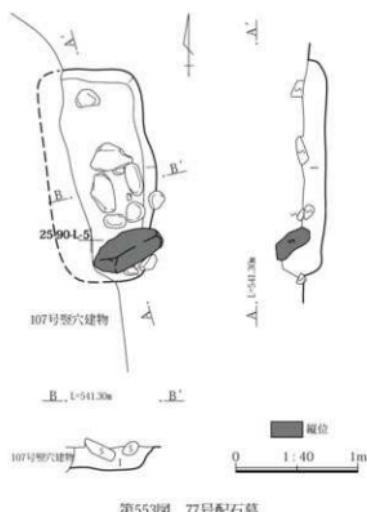
**規模** 長軸169cm、短軸50cm、確認面からの深さは30cmである。

**形状** 幅狭の長方形

**構造** 東西の両短辺に壁石を1石ずつ立てたタイプであると判断した。西側の壁石を失っているが、直交する74号と同じタイプと考えられる。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B 3式期の土器破片が少量出土している。

**所見** 74号と同様。



第553図 77号配石墓

**77号配石墓(52号配石)****調査年度** 平成30年度

**経過** C群の一つで、107号竪穴建物の調査が終了し、周囲を掘り下げた段階で107号の東壁に一部重複した状態で確認された。調査時は52号配石としたが、両短辺に壁石を1石ずつ立てたタイプと共通することから、配石墓と判断した。

**重複** 西側長辺を107号竪穴建物と重複し、これに切られる。

**長軸方向** 未計測

**規模** 長軸120cm前後、短軸60cm前後、確認面からの深さは30cm前後と推定する。

**形状** 小型の長方形か

**構造** 南北の両短辺に壁石を1石ずつ立てて据えたタイプと想定した。南側の壁石は長さ60cmほどの厚手の地山礫で、上方に開いてやや傾いた状態で据えている。北側の壁石の位置には欠損した小さな石があったが、これが壁石かどうかは不明である。また、南側の壁石の内側底面に3個の小さな川原石と2個の厚手の地山礫を楕円形状に組んだ状態で据えてあった。

**遺物** 調査に伴って後期加曾利B3式期から高井東式期の土器破片と土製円盤が少量出土している。

**所見** 形態は67号・72号配石墓や73号・74号配石墓と同様であり、壁石が傾斜している点では前者に類似する。なお、底面で確認された楕円形状の組み物は何を示しているのか、検討を要する。

**78号配石墓(58号配石)****調査年度** 平成30年度

**経過** これもC群の一つで、77号配石墓と同様に107号竪穴建物の周囲を掘り下げた段階で107号の北壁に一部重複した状態で確認した。調査時は58号配石としたが、形態が71号配石墓と共通することから、配石墓と判断した。

**重複** 南側を一部107号竪穴建物と、北側を125号竪穴建物の推定範囲と重複し、両建物に切られる。

**長軸方向** 未計測

**規模** 長軸140cm、短軸90cm、確認面からの深さは20cm以上と想定される。

**形状** 幅広の長方形か

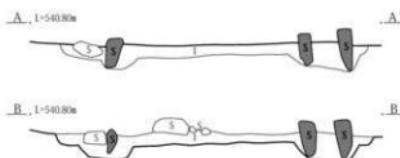
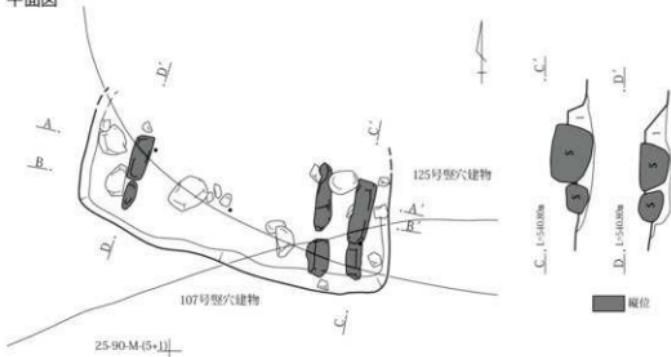
**構造** 厚手の扁平礫2石の側縁を立てて並べたものを西側に1列、東側に2列配置している。使用した石は横幅が20~30cmであるが、据えた場所には明瞭な掘り方が残っており、石の上面の高さを合わせる意図で設置していることがわかる。

なお、この設置した石の他にもいくつかの大きな石を確認したが、その他の構造は解らなかった。

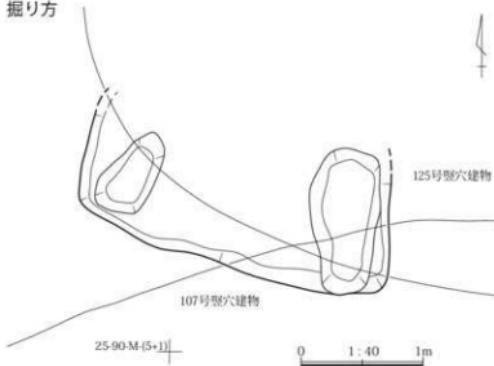
**遺物** 調査に伴って後期加曾利B3式期から高井東式期の土器破片がわずかに出土している。

**所見** 78号は基本的構造が71号配石墓と共通している。

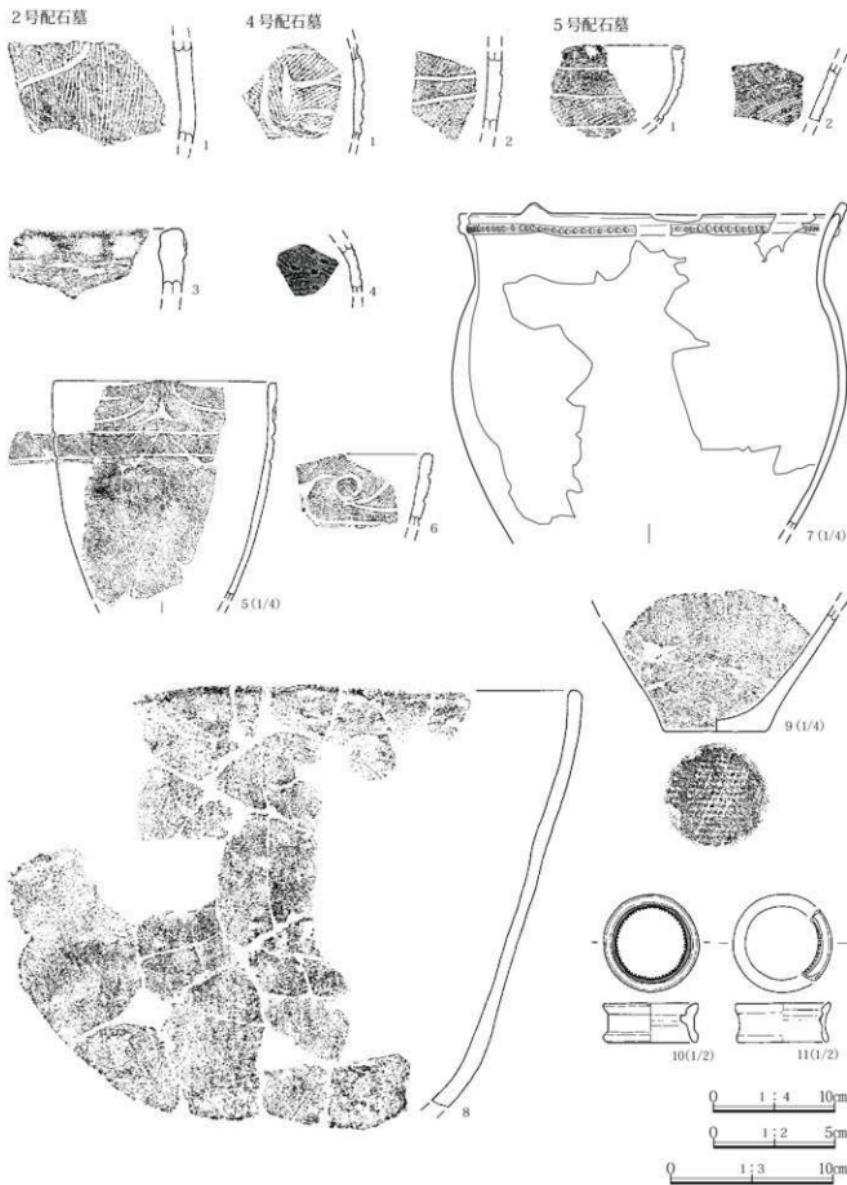
平面図



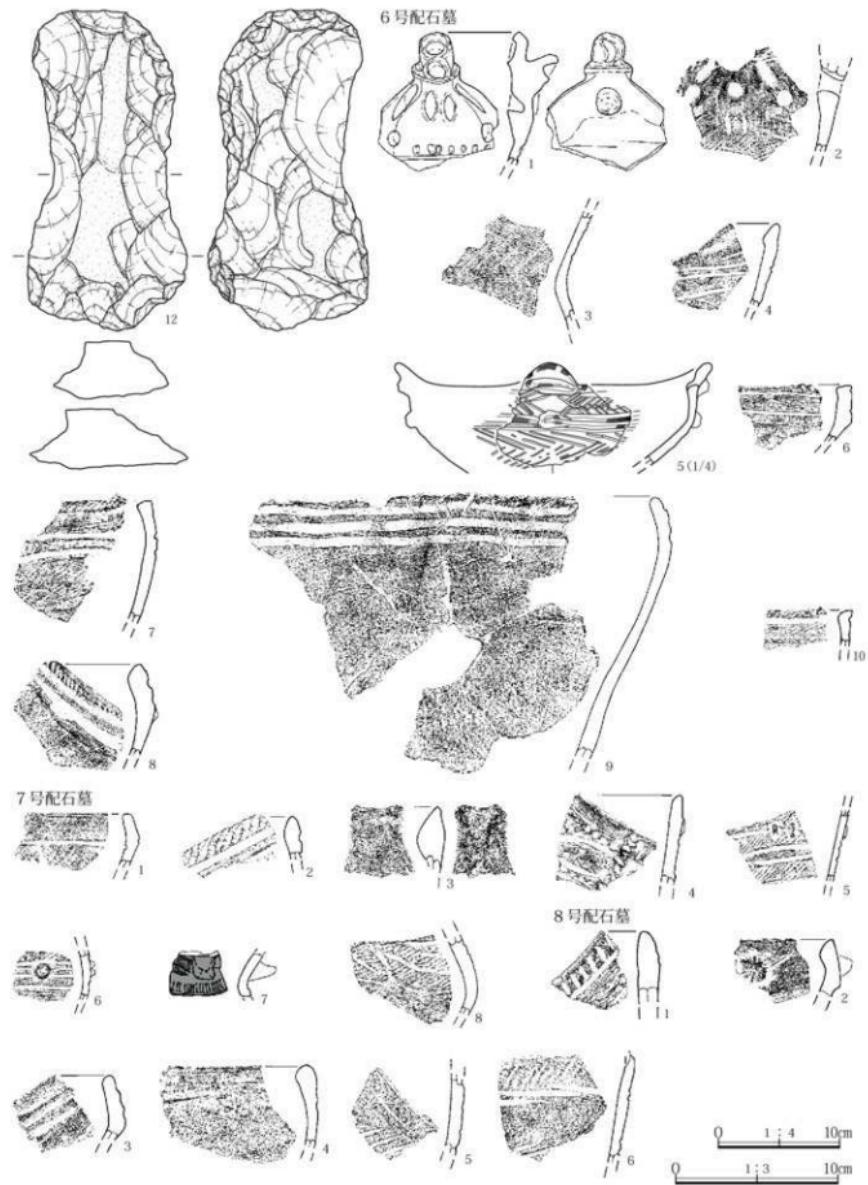
掘り方



第554図 78号配石墓

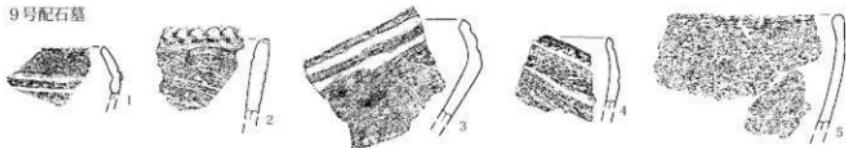


第555図 6・7区2・4・5号配石墓出土遺物

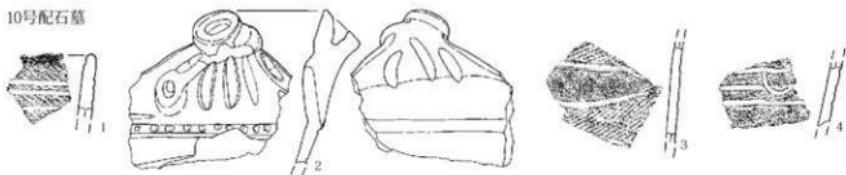


第556図 7区5～8号配石墓出土遺物

9号配石墓



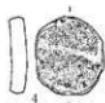
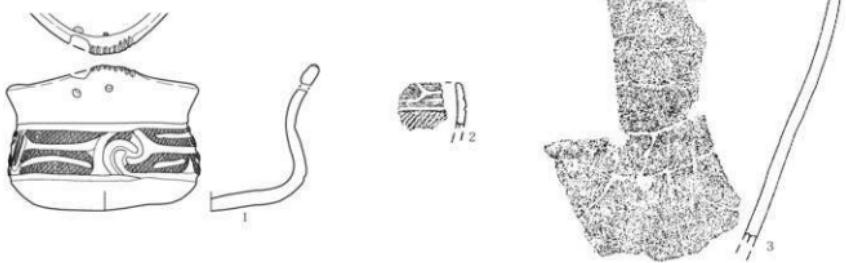
10号配石墓



11号配石墓



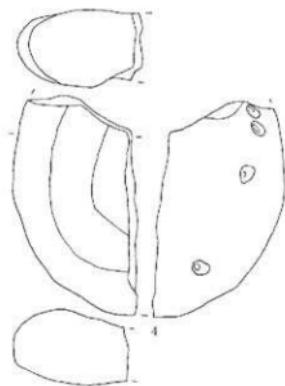
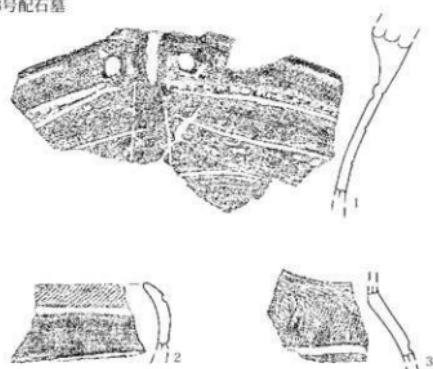
12号配石墓



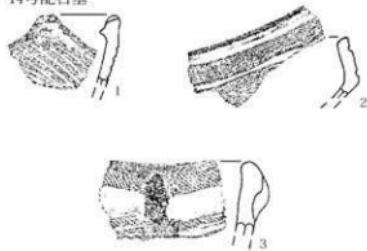
0 1:4 10cm  
0 1:3 10cm

第557図 7区9~12号配石墓出土遺物

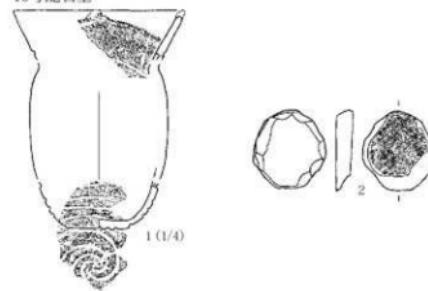
## 13号配石墓



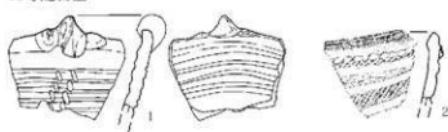
## 14号配石墓



## 15号配石墓



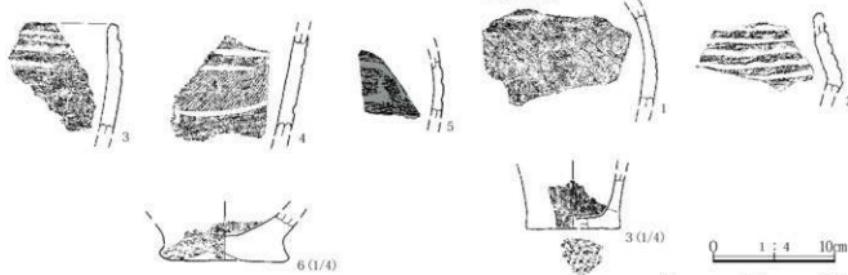
## 16号配石墓



## 17号配石墓



## 18号配石墓

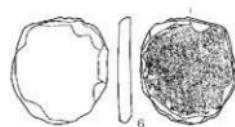
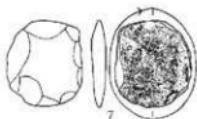
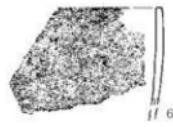
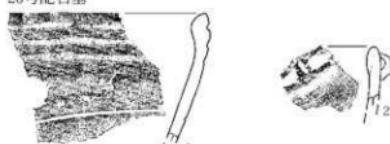


第558図 7区13~18号配石墓出土遺物

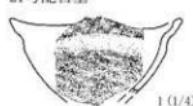
19号配石墓



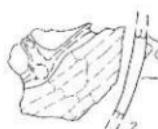
20号配石墓



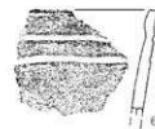
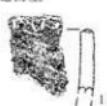
21号配石墓



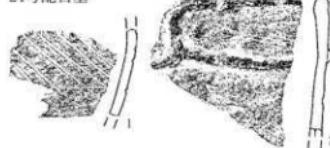
23号配石墓



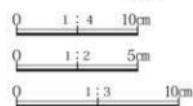
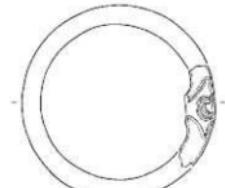
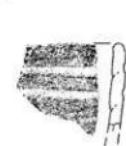
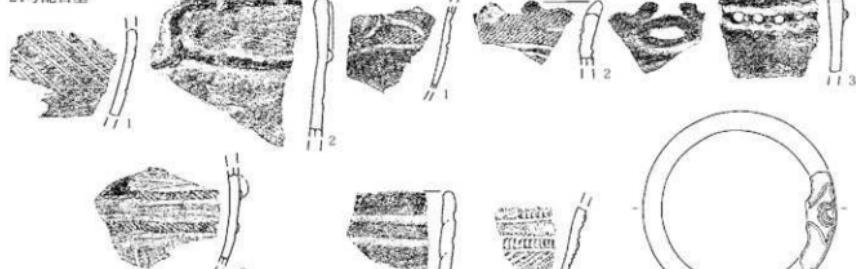
22号配石墓



24号配石墓

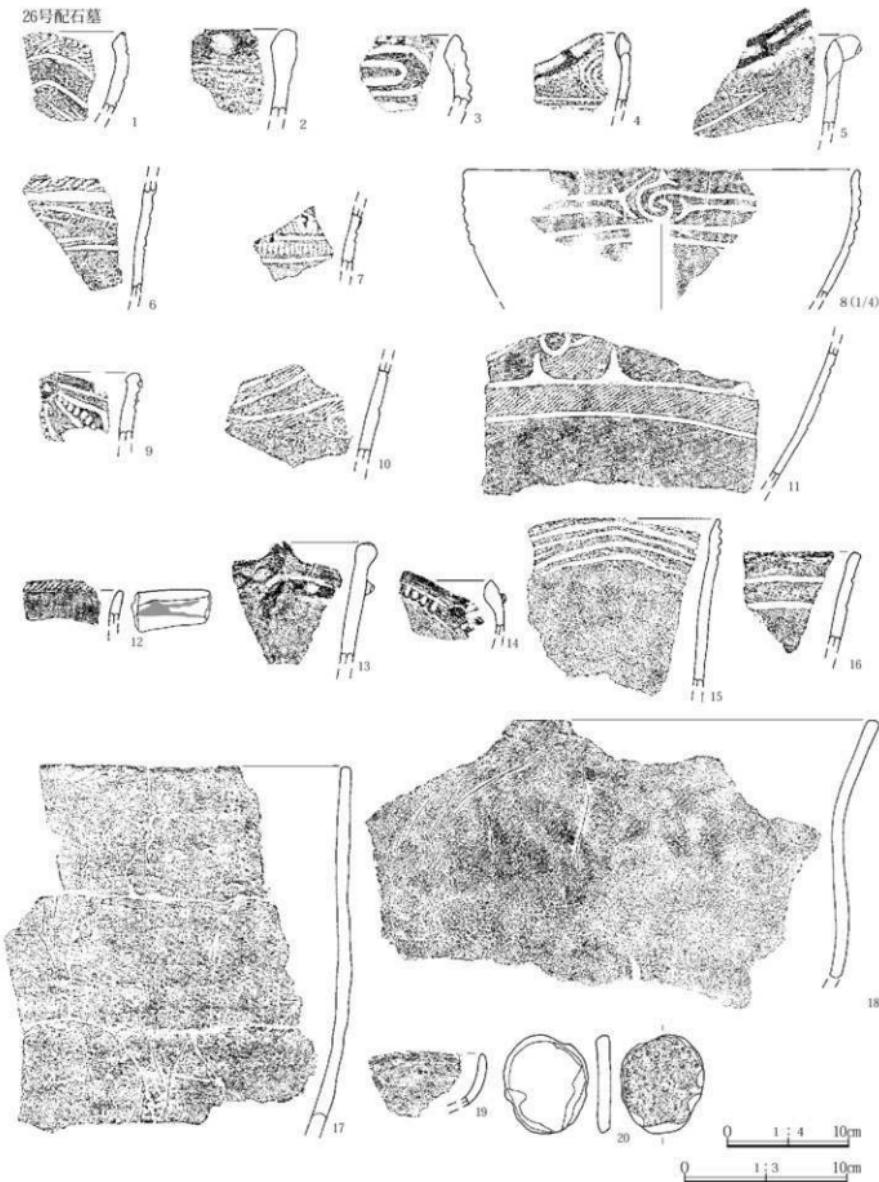


25号配石墓



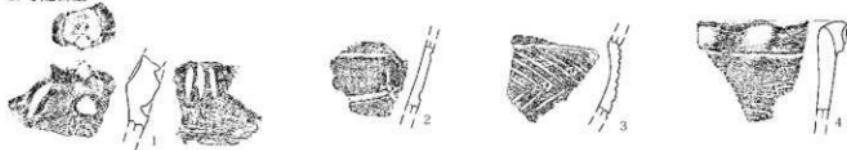
第559図 7区19～25号配石墓出土遺物

26号配石墓

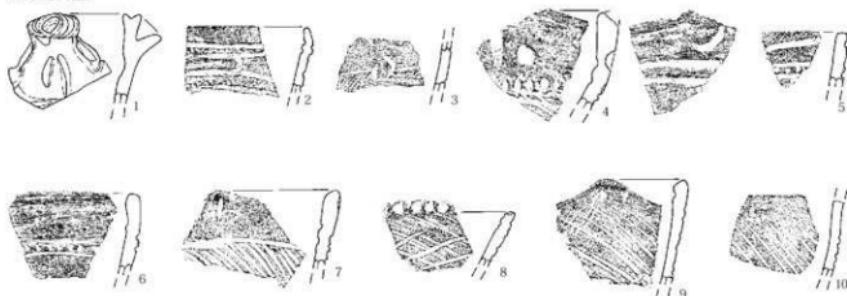


第560図 7区26号配石墓出土遺物

27号配石墓



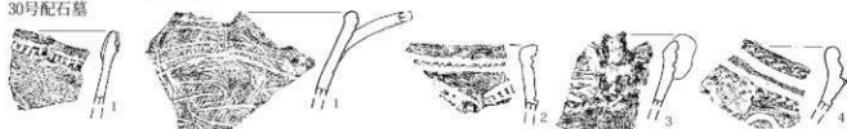
28号配石墓



29号配石墓

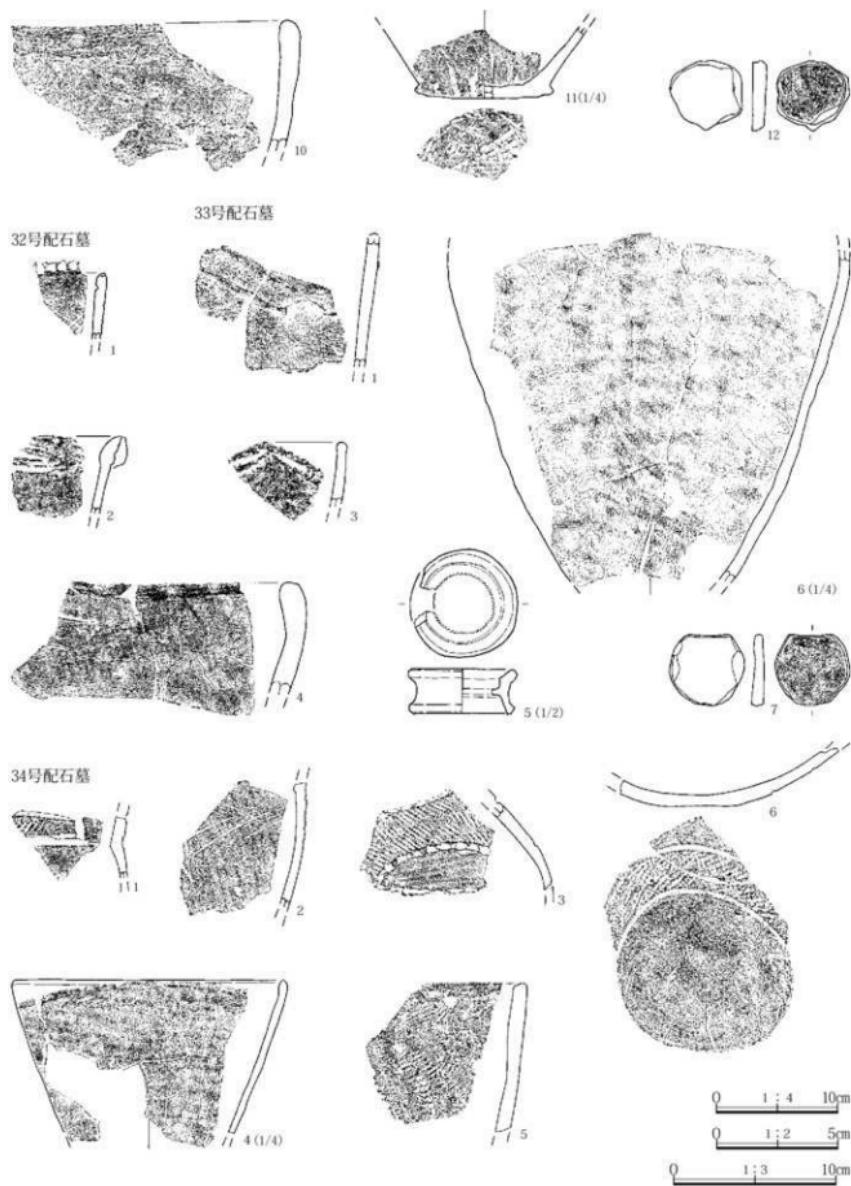


30号配石墓

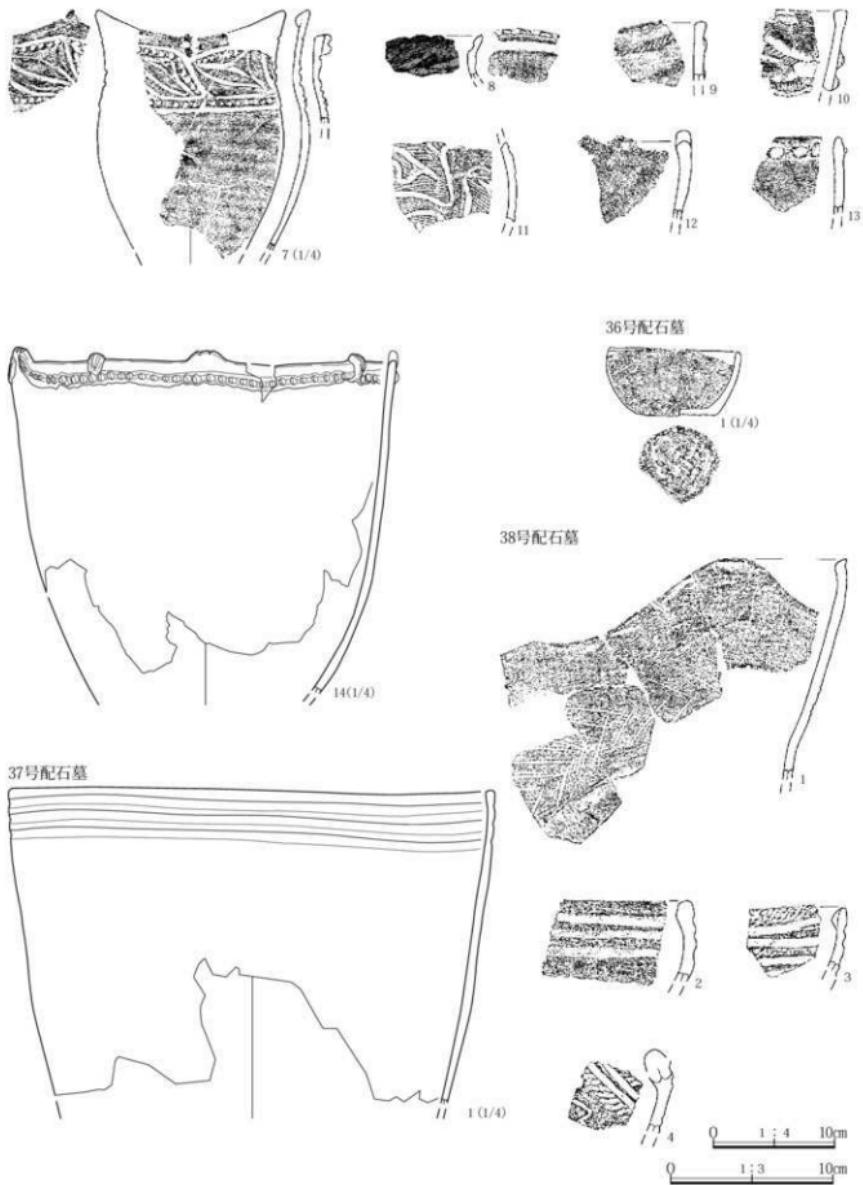


0 1:3 10cm

第561図 7区27~31号配石墓出土遺物

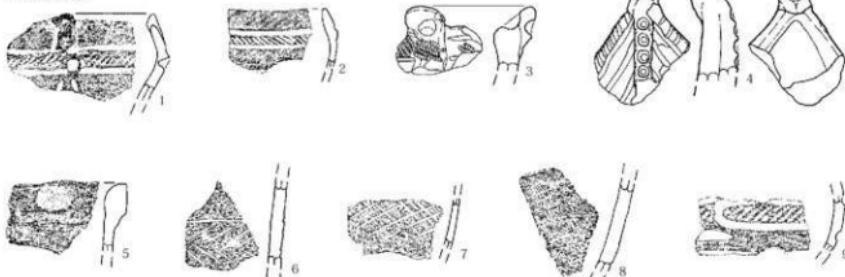


第562図 7区31~34号配石墓出土遺物

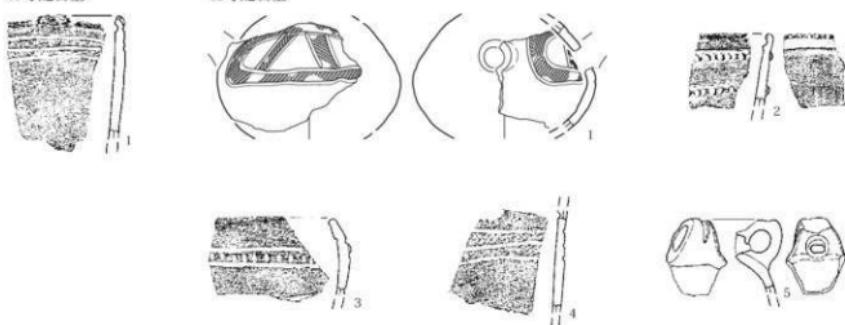


第563図 7区34・36～38号配石墓出土遺物

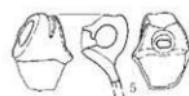
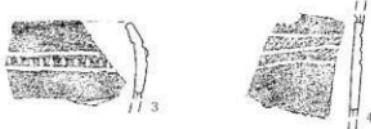
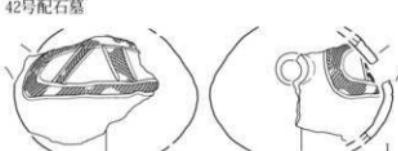
40号配石墓



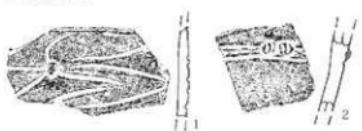
41号配石墓



42号配石墓



43号配石墓



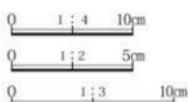
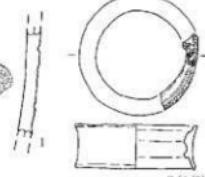
44号配石墓



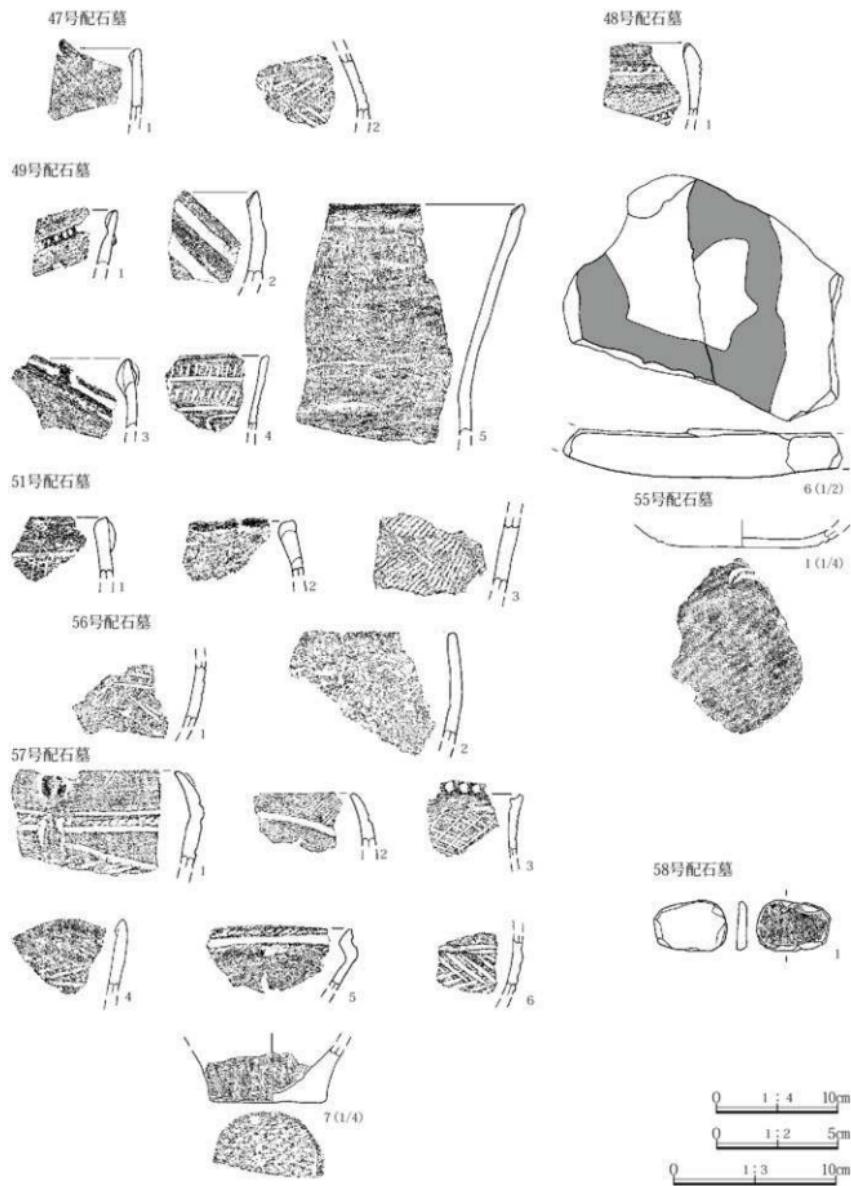
45号配石墓



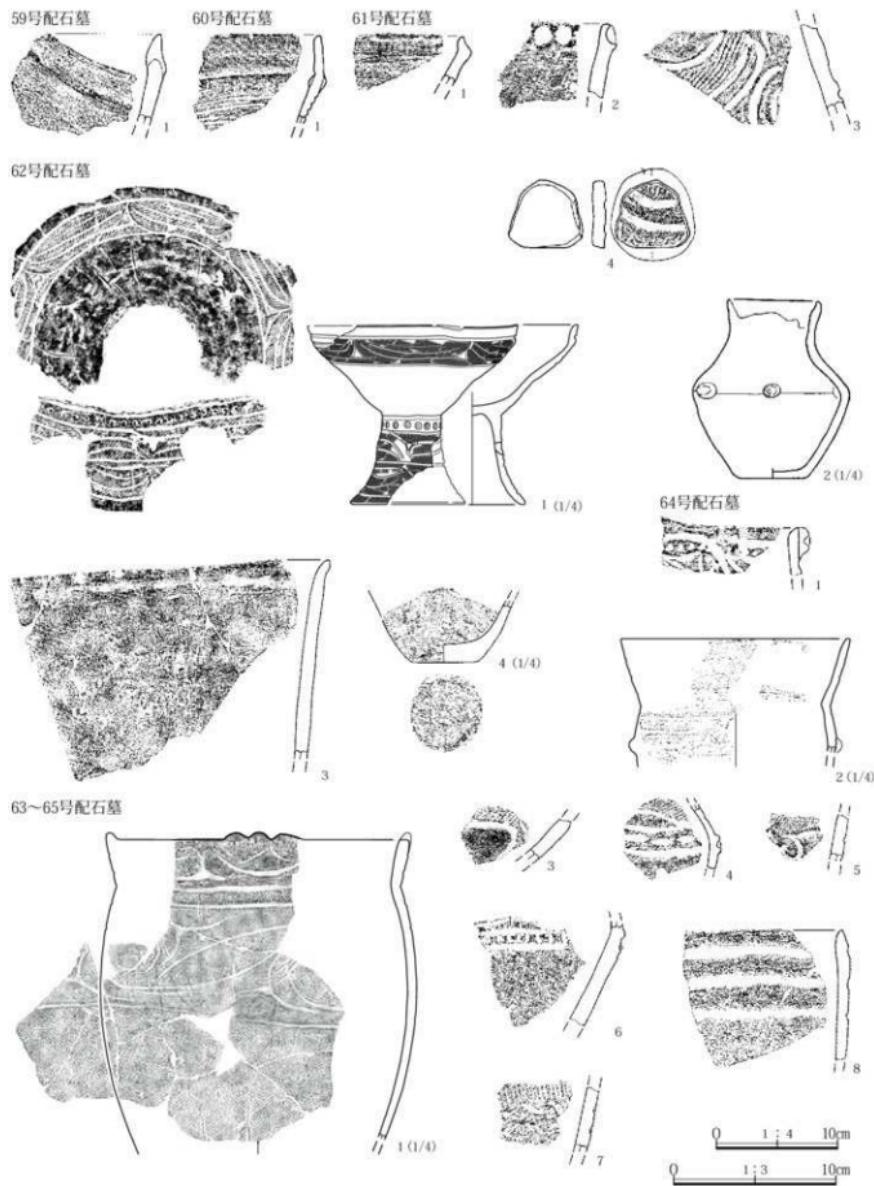
46号配石墓



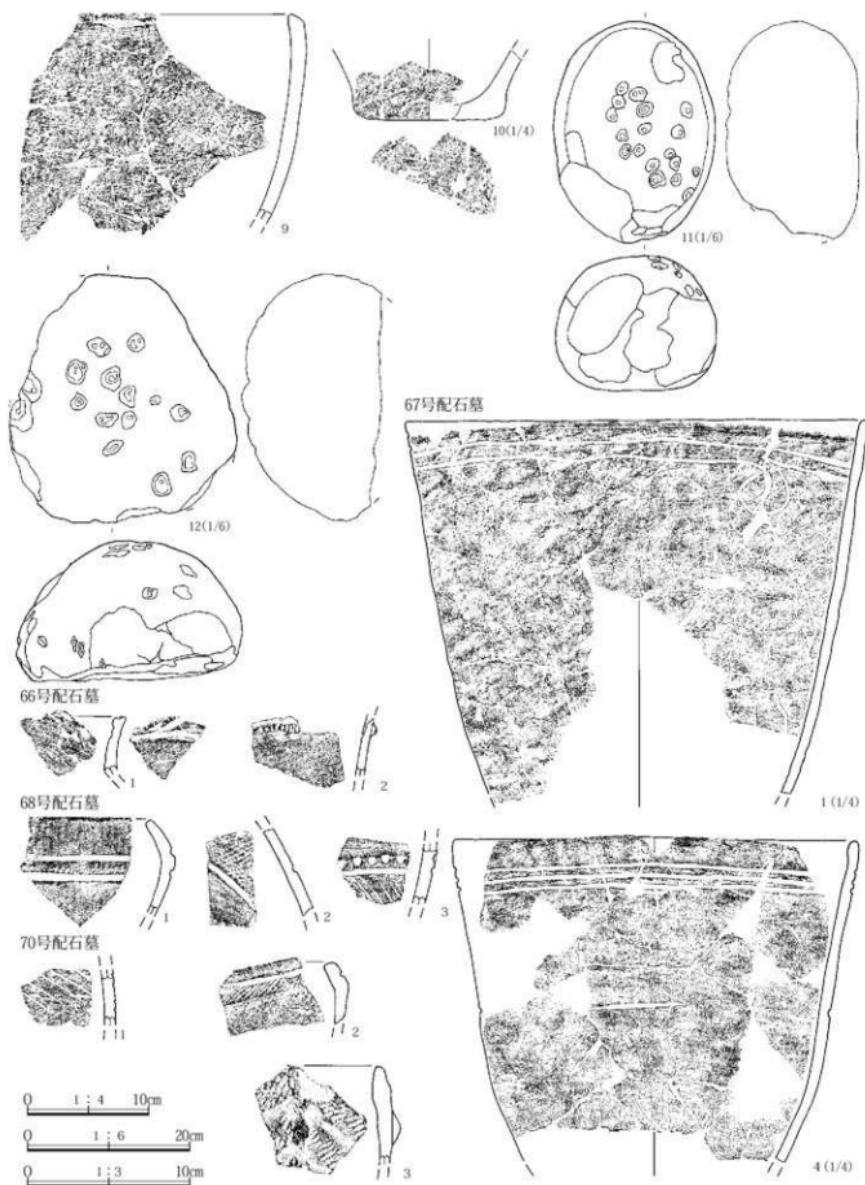
第564図 7区40~46号配石墓出土遺物



第565図 7区47~49・51・55~58号配石墓出土遺物

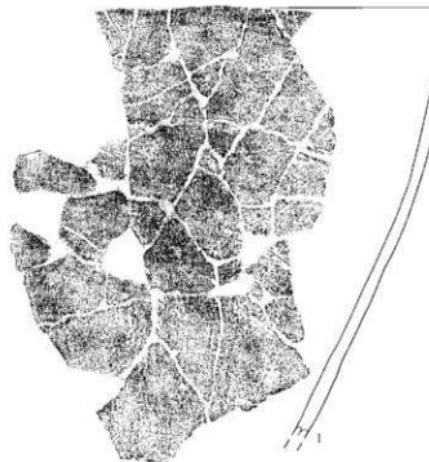


第566図 7区59～65号配石墓出土遺物

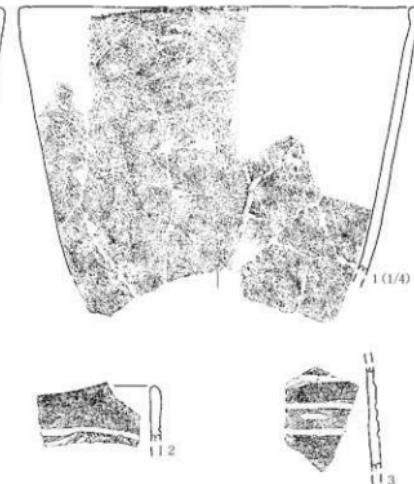


第567図 7区63~68・70号配石墓出土遺物

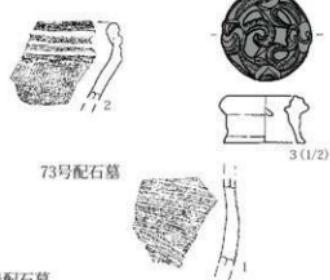
71号配石墓



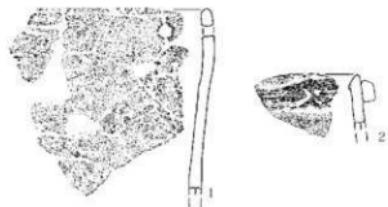
72号配石墓



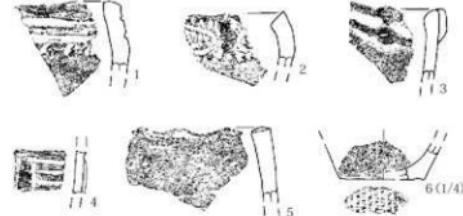
73号配石墓



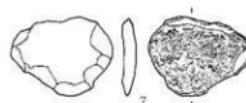
75号配石墓



78号配石墓



0 1 : 4 10cm  
0 1 : 2 5cm  
0 1 : 3 10cm  
0 1 : 1 5cm



第568図 7区71~73・75・78号配石墓出土遺物

## 第2章 発見された遺構と遺物

なお、第569図～第578図に配石墓に転用した台石類及び第579図～第581図に配石墓群内に配置された丸石その他のものを一括して掲載し、それぞれの一覧を第12表と第13表にまとめた。これらは配石墓の構造物として使用されたと判断したもの、及びそれらに配置されたと思われるものを含んでいる。

ここで言う台石とは、扁平な川原石や鉄平石・地山石の平坦面に磨り面が認められるもので、一部で無縁石皿と称されるものに該当すると思われるが、本報告ではこれらを特化するために取て台石と仮称する。

台石は、配石墓を中心に一部列石や堅穴建物等からも出土しており、本遺跡では調査中に観察し、認定したものが255点であった。このほかにも水場や配石墓群中にあって、100kgをはるかに超えて移動不可能なものがいくつか認められたが、これらについては遺構図に磨る面等を示したものもある。ここで取り上げる255点について、その出土傾向を点数と重量で示したのが第10表である。この表では台石がいかに配石墓に数多く転用されたかを示している。また、第11表には台石が転用された点数を、残存の善し悪しは問わずに、多いものから順に示した。

以上の結果から想定されることは、本遺跡は水場での活動を中心とする集落であり、多量の台石はそのことを示していること、そして配石墓の造墓活動が盛んだったために、本来なら残らなかった台石が造墓の材料として適していたために転用され、残ってしまったことを示していると考えられる。

また、台石以外の石器では、丸石と多孔石に注目したい。丸石とは球形に近い形をした石を指すが、こうした石はウォーターホールなどで自然に整形されたもので、この地域では白砂川方面から供給される石英閃緑岩製の

第10表 石川原遺跡出土台石一覧

器種	遺構名	点数	重量(kg)
台石	2号配石	180	0.71
	2号配石以外の配石	38	0.15
	列石	4	0.02
	住居・土坑・グリッド	33	0.13
	計	255	5474.31

器種	遺構名	点数	重量(kg)
台石	2号・4号配石	191	0.75
	2号・4号配石以外の配石	27	0.11
	列石	4	0.02
	住居・土坑・グリッド	33	0.13
	計	255	5474.31

ものが大半を占める。なかには一部に手を加えたものもあるが、多くは石製品で、本遺跡では様々な箇所で多用している。特に配石墓群では大きな丸石が数多く使われており、B1群のすぐ南西部で確認された94号配石では、大小200個前後の丸石が1箇所に備蓄されていた。特に大きな丸石はB1群で配石墓の傍らに置いてあつたり、配石墓群の南西側を画す立石群と共に配置されており、注目される。国に掲載した5～8・22はいずれも30kgを越える大きなものである。一方、多孔石では11が注目される。これは100kgとしたが、実際は計測できない大きさのもので、B1群配石墓群の南西側を画す立石群の中央にある、101号配石の南東横に置かれていたもので、大きさもさることながら、その配置が注目される。

第11表 石川原遺跡配石墓出土台石一覧

遺構名	時期	点数
1 43号 配石墓		15
2 18号 配石墓		9
3 38号 配石墓		8
4 40号 配石墓		8
5 42号 配石墓		8
6 28号 配石墓		7
7 47号 配石墓		7
8 46号 配石墓		5
9 16号 配石墓		4
10 31号 配石墓		4
11 34号 配石墓		4
12 41号 配石墓		4
13 48号 配石墓		4
14 24号 配石墓		3
15 25号 配石墓		3
16 30号 配石墓		3
17 44号 配石墓		3
18 4号 配石墓		2
19 7号 配石墓		2
20 9号 配石墓		2
21 20号 配石墓		2
22 51号 配石墓		2
23 54号 配石墓		2
24 56号 配石墓		2
25 6号 配石墓		1
26 8号 配石墓		1
27 10号 配石墓		1
28 11号 配石墓		1
29 15号 配石墓		1
30 14号 配石墓		1
31 29号 配石墓		1
32 26号 配石墓		1
33 29号 配石墓		1
34 33号 配石墓		1
35 45号 配石墓		1
36 55号 配石墓		1
37 58号 配石墓		1
38 63号 配石墓		1
39 64号 配石墓		1
40 65号 配石墓		1
41 70号 配石墓		1
42 75号 配石墓		1
43 76号 配石墓		1
	合計	132

第12表 石川原遺跡出土台石一覧 (対象: 254点、5474.31kg) \*川原石は○で表示 \*1~90は実測図掲載

器種名	区	取上遺構名	取上番号	新遺構名	石質	重量(kg)	川原石	大きさcm(長辺×短辺×厚さ)	欠損の有無	磨り面数	その他
1 台石	7区	2号配石	タ 3	47 配石墓	安山岩	63.6	○	53×38×13	無し	1面	
2 台石	7区	2号配石	タ 9	47 配石墓	安山岩	60.2	○	53×51×13	無し	2面	
3 台石	7区	2号配石	タ 8	47 配石墓	安山岩	55.3	○	70×41×14	無し	1面	
4 台石	7区	2号配石	タ 1	47 配石墓	安山岩	—	鉄平石	—	無し	2面	
5 台石	7区	2号配石	シ 3	28 配石墓	安山岩	51	○	67×41×16	一部欠損	2面	
6 台石	7区	2号配石	シ 1	28 配石墓	安山岩	28.2	鉄平石	63×36×12.5	無し	2面	
7 台石	7区	2号配石	424	—	安山岩	36.5	鉄平石	54×52×9	無し	2面	1面ツル、2面削り
8 台石	7区	2号配石	シ 4	28 配石墓	安山岩	6.9	○	26×25×3.5	1/2欠損	2面	1面ツル、2面削り
9 台石	7区	2号配石	タ 5	13 配石墓	安山岩	26.6	鉄平石	76×22×11	無し	1面	
10 台石	7区	3号配石	タ 3	—	安山岩	11.6	鉄平石	35×31×6.5	1/2欠損	2面	よく使ってる
11 台石	7区	2号配石	ハ 2	41 配石墓	安山岩	5.1	鉄平石	29×20×3.5	1/2欠損	2面	よく使ってる
12 台石	7区	2号配石	ノ 1	40 配石墓	安山岩	2.3	鉄平石	17×12.5×5.5	破片	2面	被熱
13 台石	7区	2号配石	フ 1	43 配石墓	安山岩	10.5	鉄平石	36×24.5×6	1/2欠損	2面	よく使ってる
14 台石	7区	47号配石	1	—	安山岩	28.4	○	38×36×16	無し	2面	はがれ
15 台石	7区	65号配石	16	—	安山岩	21.3	鉄平石	47×22×12	(1/2)欠損	2面	
16 台石	7区	2号配石	エ 7	16 配石墓	安山岩	24.8	鉄平石	60×37×5	一部欠損	1面	
17 台石	7区	2号配石	エ 27	18 配石墓	安山岩	50.2	○	44×41×15.5	無し	2面	
18 台石	7区	2号配石	407	—	安山岩	35	○	—	無し	1面	
19 台石	7区	2号配石	タ 1	25 配石墓	安山岩	51.7	○	58×42×14	無し	1面	弱い
20 台石	7区	2号配石	タ 4	9 配石墓	安山岩	38	○	45×38×16	無し	1面	良好
21 台石	7区	2号配石	タ 5	20 配石墓	安山岩	23.6	○	35×28×12	1/2欠損	2面	
22 台石	7区	2号配石	タ 4	25 配石墓	安山岩	50	○	49×42×19	無し	1面	弱い
23 台石	7区	48号配石	2	—	安山岩	52	○	53×42×14	無し	2面	良好
24 台石	7区	36号配石	32	—	安山岩	22.4	○	41×38×9	無し	2面	
25 台石	7区	2号配石	タ 1	11 配石墓	安山岩	9.4	鉄平石	44×26×4	欠損	2面	
26 台石	7区	50号配石	33	—	安山岩	13.1	鉄平石	42×31×7	欠損	2面	良好
27 台石	7区	2号配石	リ 1	4 配石墓	安山岩	7.1	鉄平石	38×27×4	欠損	2面	
28 台石	7区	2号配石	タ 1	26 配石墓	安山岩	8.5	○	31×22×8	欠損	2面	
29 台石	7区	2号配石	タ 1	7 配石墓	安山岩	30	鉄平石	34×38×18	(1/2)欠損	2面	
30 台石	7区	2号配石	292	—	安山岩	20	○	45×21×15	無し	2面	良好
31 台石	7区	2号配石	343	—	安山岩	16	○	42×27×8	一部欠損	2面	
32 台石	7区	65号配石	18	—	安山岩	21.1	鉄平石	42×25×11	無し	2面	
33 台石	7区	51号配石	5	—	安山岩	22.4	○	42×31×11	無し	2面	
34 台石	7区	2号配石	タ 2	4 配石墓	安山岩	5.4	鉄平石	31×27×3	欠損	2面	
35 台石	7区	2号配石	タ 2	—	安山岩	17.8	○	32×23×11	無し	2面	良好
36 台石	7区	2号配石	コ 1	堅穴建物か	安山岩	20.2	鉄平石	38×30×17	欠損	1面	石壁?
37 台石	7区	2号配石	タ 9	4 配石墓	安山岩	15.9	鉄平石	48×35×8	欠損	1面	
38 台石	7区	57号配石	3	—	安山岩	58.8	○	44×30×27	無し	2面	良好
39 台石	7区	2号配石	タ 8	—	安山岩	47.2	○	62×29×17	無し	1面	弱い
40 台石	7区	2033上土	3	—	安山岩	6.1	鉄平石	29×23×7	欠損	2面	良好
41 台石	7区	2号配石	タ 24	18 配石墓	安山岩	53.1	○	52×36×16	無し	2面	良好
42 台石	7区	2号配石	タ 21	18 配石墓	安山岩	91	○	54×31×15	無し	1面、側面	ツルツル
43 台石	7区	2号配石	ル 3	51 配石墓	安山岩	47.9	○	52×43×13	無し	1面	
44 台石	7区	2号配石	タ 2	38 配石墓	安山岩	50.7	○	58×31×14	無し	2面	
45 台石	7区	2号配石	タ 9	38 配石墓	安山岩	38.7	○	44×36×14	無し	1面	ツルツル
46 台石	7区	4号配石?	タ 5	—	安山岩	9.3	鉄平石	46×45×3	?	2面	ツルツル
47 台石	7区	2号配石	タ 2	—	安山岩	25.2	○	47×30×11	無し	1面	ツルツル
48 台石	7区	2号配石	タ 6	38 配石墓	安山岩	19.1	○	48×18×14	欠損	2面	石棒を転用
49 台石	7区	2号配石	タ 6	47 配石墓	安山岩	28.2	○	46×38×12	無し	1面	
50 台石	7区	2号配石	タ 14	43 配石墓	安山岩	36.4	鉄平石	44×37×12	2面		
51 台石	7区	2号配石	タ 446	—	安山岩	35.9	鉄平石	62×46×6	欠損	2面	良好
52 台石	7区	2号配石	タ 4	42 配石墓	安山岩	10.9	鉄平石	37×25×7	1/2欠損	2面	良好
53 台石	7区	2号配石	タ 8	42 配石墓	安山岩	27.8	鉄平石	44×30×13	1/2欠損	2面	良好
54 台石	7区	2号配石	タ 4	31 配石墓	安山岩	27.9	○	42×32×14	無し	1面	良好
55 台石	7区	2号配石	タ 3	40 配石墓	安山岩	34.1	○	39×36×14	無し	1面	良好
56 台石	7区	2号配石	タ 1	31 配石墓	安山岩	19.6	○	33×29×15	(1/2)欠損	2面	良好
57 台石	7区	2号配石	タ 7	46 配石墓	安山岩	16.9	○	35×31×13	無し	1面	良好
58 台石	7区	2号配石	タ 7	49 配石墓	安山岩	24.6	○	44×30×13	1/2欠損	?	
59 台石	7区	2号配石	タ 12	16 配石墓	安山岩	25.8	○	54×30×14	一部欠損	1面	
60 台石	7区	2号配石	タ 462	—	安山岩	19.4	鉄平石	45×30×8	欠損	2面	被熱、変色
61 台石	7区	2号配石	タ 551	石川原縄縫	22.7	○	35×32×15	無し	2面	2面ともツルツル	
62 台石	7区	90-J-7	1410	—	安山岩	17.4	○	46×18×13	無し		
63 台石	7区	2号配石	タ 1	—	安山岩	23.1	○	39×36×10	一部欠損	2面	1面ツル、2面被熱欠損
64 台石	7区	2号配石	タ 444	—	安山岩	37.8	○	55×38×14	?	2面	1面ツル
65 台石	7区	2号配石	タ 1	21 配石墓	安山岩	65.2	○	42×34×29	無し	2面+	部分的使用痕あり
66 台石	7区	2号配石	タ 2	48 配石墓	安山岩	38.5	○	40×34×13	無し	2面	弱い

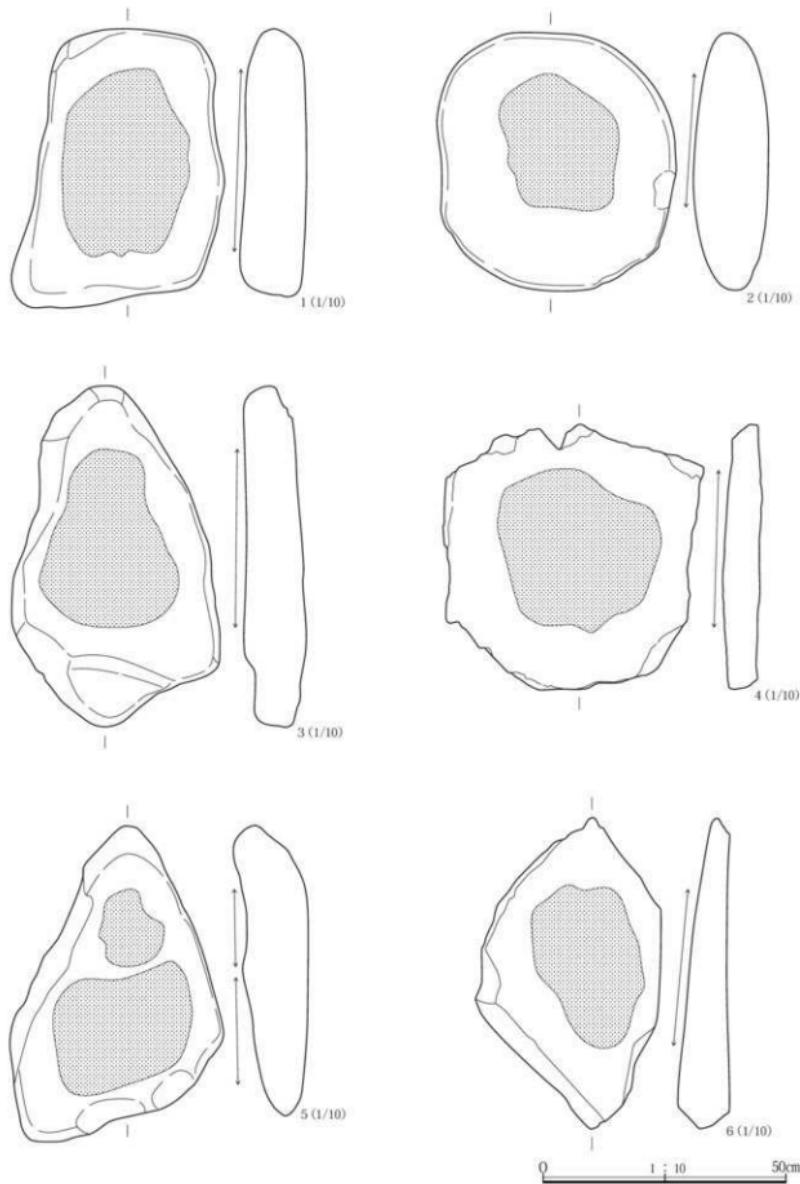
## 第2章 発見された遺構と遺物

部種名	区	取上遺構名	取上番号	新遺構名	石質	重量 (kg)	川原石	大きさcm(長辺 ×短辺×厚さ)	欠損の有無	磨り面数	その他	
67 台石	7区	2号配石	番7	安山岩	16.6	○	32×30×10	1/2欠損	1面	8と接合		
67 台石	7区	2号配石	番8	安山岩	17	○	29×28×10	1/2欠損	1面	7と接合		
68 台石	7区	2号配石	502	安山岩	43.8	○	47×32×12	無し	2面	1面ツル、剥落あり		
69 台石	7区	2号配石	コ4	48配石墓	安山岩	42.5	○	47×37×12	無し	1面	ツルツル	
70 台石	7区	2号配石	コ3	49配石墓	安山岩	20.3	○	42×22×11	無し	2面	良好	
71 台石	7区	2号配石	フ6	43配石墓	安山岩	9.4	○	37×27×8	欠損	2面	良好	
72 台石	7区	2号配石	436	安山岩	10.4	○	36×36×6	欠損	2面	スス付き・良好		
73 台石	7区	2号配石	ソ5	18配石墓	安山岩	25.2	○	44×31×12	無し	2面	良好	
74 台石	7区	2号配石	ヒ1	42配石墓	安山岩	10.5	○	42×38×5	欠損	2面+穿孔	良好	
75 台石	7区	2号配石	フ5	43配石墓	安山岩	32.1	○	42×31×12	無し	2面	良好	
76 台石	7区	2号配石	ヨ8	49配石墓	安山岩	29.3	○	47×42×12	欠損	1面	被熱、変色	
77 台石	7区	2号配石	マ5	44配石墓	安山岩	53.4	○	58×38×17	無し	1面	良好	
78 台石	7区	2号配石	セ2	42配石墓	安山岩	42.5	○	77×33×13	欠損	1面	良好	
79 台石	7区	2号配石	ム3	46配石墓	安山岩	47.7	○	60×40×13	無し	2面	良好	
80 台石	7区	2号配石	ミ3	38配石墓	安山岩	41.9	○	54×43×14	無し	2面		
81 台石	7区	2号配石	メ10	38配石墓	安山岩	34.9	○	43×42×12	無し	2面	ツルツル	
82 台石	7区	2号配石	ヒ7	42配石墓	安山岩	30.2	○	47×34×9	無し	2面		
83 台石	7区	2号配石	メ5	38配石墓	安山岩	39.7	○	44×38×11	無し	2面		
84 台石	7区	2号配石	フ15	43配石墓	安山岩	12.1	○	37×23×11	無し	2面		
85 台石	7区	2号配石	461	安山岩	21.3	○	40×26×12	無し	1面	ツルツル		
86 台石	7区	2号配石	ノ4	40配石墓	安山岩	41.5	○	52×31×15	無し	2面	良好	
87 台石	7区	2号配石	ツ5	34配石墓	安山岩	42.4	○	50×44×15	無し	1面	良好	
88 台石	7区	2号配石	ム8	46配石墓	安山岩	20	○	37×31×11	無し	2面	良好	
89 台石	7区	2号配石	ム4	46配石墓	安山岩	13.9	○	46×26×4	(1/2)欠損	2面	良好	
90 台石	7区	2号配石	439	安山岩	9.5	○	45×20×8	欠損	2面	良好		
91 台石	7区	1号配石	4601	安山岩	21.5	○	35×25×21	無し		多孔石兼用		
92 台石	7区	2号配石	リ1	55配石墓	安山岩	12.3	○	47×22×10	欠損	1面	ツルツル	
93 台石	7区	2号配石	リ1	56配石墓	安山岩	3.7	○	45×23×4.5	1/2欠損	2面		
94 台石	7区	2号配石	リ2	56配石墓	安山岩	3	○	45×20×5	1/2欠損	2面		
95 台石	7区	2号配石	リ4	58配石墓	安山岩	37.1	○	43×35×12	無し	2面		
96 台石	7区	2号配石	リ3	安山岩	31.8	○	55×28×15	無し	1面	弱い		
97 台石	7区	2号配石	リ3	立石	安山岩	8	○	27×22×7	無し	2面	弱い	
98 台石	7区	2号配石	リ1	立石	安山岩	12.4	○	45×22×9	無し	2面	弱い	
99 台石	7区	2号配石	リ2	63配石墓	安山岩	8.2	○	45×27×5	1/2欠損	2面		
100 台石	7区	2号配石	リ3	64配石墓	安山岩	7	○	47×22×8	2/3欠損	1面		
101 台石	7区	2号配石	リ2	65配石墓	安山岩	6.9	○	27×23×5.5	一部欠損	2面	弱い	
102 台石	7区	2号配石	リ2	安山岩	12	○	30×27×11	欠損	1面	弱い		
103 台石	7区	2号配石	リ3	6 配石墓	安山岩	27.1	○	47×20×22	無し	平坦面2面	断面三角柱状の釋を使用	
104 台石	7区	2号配石	リ2	7配石墓	安山岩	36.3	○	42×34×15	無し	1面	良好	
105 台石	7区	2号配石	リ6	8配石墓	安山岩	4.3	○	45×20×6.5	3/4欠損	1面		
106 台石	7区	2号配石	リ1	9配石墓	安山岩	8.4	○	45×21×9	欠損			
107 台石	7区	2号配石	リ5	14配石墓	安山岩	5.8	○	29×19×10	2/3欠損	1面	弱い	
108 台石	7区	2号配石	リ8	16配石墓	安山岩	12.8	○	43×27.5×8	1/2欠損	2面	1面ツル、2面弱い	
109 台石	7区	2号配石	リ9	16配石墓	安山岩	2.7	○	45×20×3	欠損	2面		
110 台石	7区	2号配石	リ9	18配石墓	安山岩	19.8	○	35×30×10	無し	2面	良好	
111 台石	7区	2号配石	リ10	18配石墓	安山岩	31.4	○	48×34×12	無し	1面	弱い	
112 台石	7区	2号配石	リ22	18配石墓	安山岩	48	○	54×40×13	無し	2面	弱い	
113 台石	7区	2号配石	リ25	18配石墓	安山岩	30.2	○	61×28×18	無し	1面		
114 台石	7区	2号配石	リ26	18配石墓	安山岩	35.8	○	36×28×17	無し	2面		
115 台石	7区	2号配石	リ28	18配石墓	安山岩	65.9	○	56×44×16	無し	2面		
116 台石	7区	2号配石	リ2	20配石墓	安山岩	8.4	○	45×20×39	欠損	2面		
117 台石	7区	2号配石	リ7	27配石墓	安山岩	12.1	○	42×28×9	1/2欠損	2面		
118 台石	7区	2号配石	リ8	安山岩	30.2	○	44×29×13	無し	2面			
119 台石	7区	2号配石	リ9	安山岩	13.1	○	29×26×10	1/2欠損	2面	1面はわずか		
120 台石	7区	2号配石	エ4	安山岩	28.2	○	37×36×12	無し	2面	1面ツル		
121 台石	7区	2号配石	キ2	24配石墓	安山岩	27.2	○	42×38×14	無し	2面	良好	
122 台石	7区	2号配石	キ4	24配石墓	安山岩	32.5	○	50×34×12	(1/2)欠損	1面	弱い	
123 台石	7区	2号配石	キ6	24配石墓	安山岩	39.5	○	45×41×16	無し	1面		
124 台石	7区	2号配石	キ3	25配石墓	安山岩	14.9	○	42×37×5	無し	2面	内面ツル	
125 台石	7区	2号配石	シ2	28配石墓	安山岩	11.2	○	47×33×7	?	1面		
126 台石	7区	2号配石	シ5	28配石墓	安山岩	19.2	○	49×26×10	一部欠損	2面		
127 台石	7区	2号配石	シ7	28配石墓	安山岩	9.8	○	31×20×11	(2/3)欠損	1面	弱い	
128 台石	7区	2号配石	シ8	28配石墓	安山岩	19.7	○	36×33×12	無し	2面		
129 台石	7区	2号配石	ス3	29配石墓	安山岩	53.9	○	53×36×9	無し	2面	スレ弱い、敷石住居の足蹠レしか?	
130 台石	7区	2号配石	セ1	30配石墓	安山岩	26.2	○	43×37×13	無し	1面	弱い	
131 台石	7区	2号配石	セ4	30配石墓	安山岩	13.1	○	35×24×11	2/3欠損	2面		
132 台石	7区	2号配石	セ5	30配石墓	安山岩	43.1	○	52×40×18	一部欠損	2面	裏面被熱、剥落	
133 台石	7区	2号配石	ソ2	31配石墓	安山岩	16.5	○	52×26×11	無し	1面	良好	

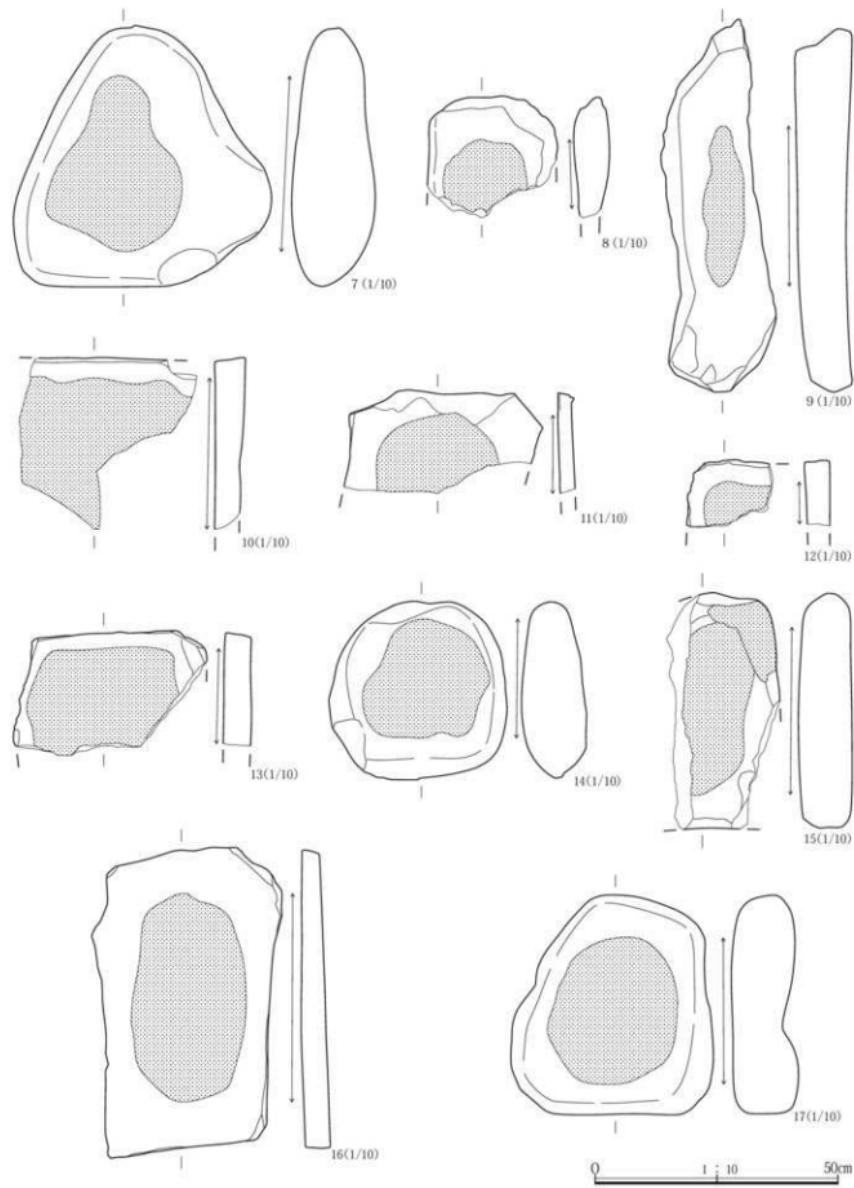
器種名	区	取上遺構名	取上番号	新遺構名	石質	重量 (kg)	川原石	大きさcm (長辺 ×短辺×厚さ)	欠損の有無	磨り面数	その他
134	台石	7区2号配石	ソ3	配石塙	安山岩	19	鉄平石	45×26×16	欠損	1面	弱い
135	台石	7区2号配石	チ5	配石塙	安山岩	30	○	45×33×12	1/2欠損	1面	弱い
136	台石	7区2号配石	ツ3	配石塙	安山岩	35.4	○	47×37×10.5	無し	2面	弱い
137	台石	7区2号配石	ツ6	配石塙	安山岩	13.5	○	40×20×7	無し	2面	弱い
138	台石	7区2号配石	ツ9	配石塙	安山岩	5.2	鉄平石	38×20×6	欠損	1面	弱い
139	台石	7区2号配石	メ4	配石塙	安山岩	39.2	○	41×36×18	無し	1面	弱い
140	台石	7区2号配石	メ8	配石塙	安山岩	9.2	○	29×21×8	2/3欠損	1面	
141	台石	7区2号配石	ノ2	配石塙	安山岩	15.9	鉄平石	45×25×10	欠損	1面	良好
142	台石	7区2号配石	ノ5	配石塙	安山岩	3.5	鉄平石	30×18×5	欠損	1面	弱い
143	台石	7区2号配石	ノ6	配石塙	安山岩	27.8	○	43×33×11	無し	2面	
144	台石	7区2号配石	ノ7	配石塙	安山岩	11	鉄平石	38×29×7	欠損	2面	良好
145	台石	7区2号配石	ノ8	配石塙	安山岩	6.2	鉄平石	33×20×5	欠損	1面	弱い
146	台石	7区2号配石	ハ3	配石塙	安山岩	14.7	○	39×25×11	欠損	1面	弱い
147	台石	7区2号配石	ハ4	配石塙	安山岩	35.4	○	47×34×13	無し	1面	
148	台石	7区2号配石	ヒ5	配石塙	安山岩	40.2	○	46×40×10	無し	2面	弱い
149	台石	7区2号配石	ヒ6	配石塙	安山岩	20.3	鉄平石	33×27×11	?	1面	弱い、被熱
150	台石	7区2号配石	ヒ9	配石塙	安山岩	12.7	鉄平石	45×16×11	一部欠損	2面	弱い
151	台石	7区2号配石	フ2	配石塙	安山岩	26.3	鉄平石	47×34×8	無し	?	?
152	台石	7区2号配石	フ3	配石塙	安山岩	35.1	○	46×32×13	1/2欠損	2面	
153	台石	7区2号配石	フ4	配石塙	安山岩	27.1	○	46×31×11.5	一部欠損	2面	
154	台石	7区2号配石	フ7	配石塙	安山岩	9.8	○	24×22×13	欠損	2面	弱い
155	台石	7区2号配石	フ8	配石塙	安山岩	8.2	鉄平石	31×26×6.5	無し	2面	少し弱い
156	台石	7区2号配石	フ10	配石塙	安山岩	13.1	鉄平石	40×25×11	欠損	1面	弱い
157	台石	7区2号配石	フ11	配石塙	安山岩	12.8	○	29×28×12	欠損	1面	弱い
158	台石	7区2号配石	フ12	配石塙	安山岩	18.8	鉄平石	51×23×11	欠損	2面	弱い
159	台石	7区2号配石	フ13	配石塙	安山岩	9.4	鉄平石	31×23×9	欠損	1面	弱い
160	台石	7区2号配石	フ16	配石塙	安山岩	18.7	鉄平石	37×25×10	欠損	1面	
161	台石	7区2号配石	フ17	配石塙	安山岩	1.8	鉄平石	33×17×5	欠損	1面	良好
162	台石	7区2号配石	ホ1	立石	安山岩	19.8	○	34×27×11.5	1/3欠損	1面	ツル。1孔あり
163	台石	7区2号配石	マ2	配石塙	安山岩	47.2	鉄平石		無し	2面	
164	台石	7区2号配石	マ4	配石塙	安山岩	35.6	鉄平石	52×27×14	欠損	2面	
165	台石	7区2号配石	ミ1	配石塙	安山岩	7.9	鉄平石	32×22×8.5	1/2欠損	2面	
166	台石	7区2号配石	ム2	配石塙	安山岩	12.3	鉄平石	38×28×7	無し	2面	よく使ってる
167	台石	7区2号配石	メ2	配石塙	安山岩	53.9	○	50×35×12	無し	1面	やや弱い
168	台石	7区2号配石	キ4	配石塙	安山岩	11.3	○	50×19×8	欠損	1面	良好
169	台石	7区2号配石	キ5	配石塙	安山岩	35.9	○	45×43×12	1面	弱い	
170	台石	7区2号配石	キ7	配石塙	安山岩	33.3	○	45×41×12	無し	1面	
171	台石	7区2号配石	コ3	配石塙	安山岩	35.2	○	56×23×14	無し	2面	棒状
172	台石	7区2号配石	コ5	配石塙	安山岩	42.7	○	45×44×14	無し	1面	弱い
173	台石	7区2号配石	ラ1	配石塙	安山岩	6.9	鉄平石	32×22×6	一部欠損	2面	弱い
174	台石	7区2号配石	ラ4	配石塙	安山岩	12.1	鉄平石	46×28×6	一部欠損	2面	
175	台石	7区2号配石	ル4	配石塙	安山岩	9.8	鉄平石	27×22×11	1/2欠損	2面	
176	台石	7区2号配石	ロ3	配石塙	安山岩	13	鉄平石	42×23×8	?	2面	弱い
177	台石	7区2号配石	リ1	配石塙	安山岩	19.3	鉄平石	37×23×9	欠損	2面	弱い
178	台石	7区2号配石	リ2	配石塙	安山岩	7.5	鉄平石	44×33×4	欠損	1面	弱い
179	台石	7区2号配石	389	配石塙	安山岩	9.2	○	36×17×12	2/3欠損	1面	1孔の多孔石
180	台石	7区2号配石	396	配石塙	安山岩	26.1	○	43×29×12	無し	2面	
181	台石	7区2号配石	423	配石塙	安山岩	9.7	鉄平石	43×19×6	1/2欠損	2面	
182	台石	7区2号配石	424	配石塙	安山岩	65.8	○	57×49×16	無し	1面	
183	台石	7区2号配石	435	配石塙	安山岩	46.1	○	40×30×21	無し	2面	弱い
184	台石	7区2号配石	437	配石塙	安山岩	5.7	鉄平石	21×20×8	欠損	1面	弱い
185	台石	7区2号配石	438	配石塙	安山岩	36.3	○	43×38×11	無し	2面	
186	台石	7区2号配石	440	配石塙	安山岩	7.3	鉄平石	33×20×7	欠損	1面	弱い
187	台石	7区2号配石	441	配石塙	安山岩	15	鉄平石	39×29×10	欠損	1面	弱い
188	台石	7区2号配石	442	配石塙	安山岩	6.3	鉄平石	31×19×6	欠損	2面	弱い
189	台石	7区2号配石	443	配石塙	安山岩	36.5	○	42×42×15	無し	1面	
190	台石	7区2号配石	483	配石塙	安山岩	43.4	○	58×40×18	無し	1面	
191	台石	7区2号配石	485	配石塙	安山岩	20.5	○	40×29×11	無し	1面	被熱、剥落
192	台石	7区2号配石	524	配石塙	安山岩	30.2	鉄平石	38×34×16	無し	1面	ツルツル
193	台石	7区2号配石	527	配石塙	安山岩	28.4	○	47×33×12	無し	?	弱い
194	台石	7区2号配石	550	配石塙	安山岩	23.2	○	45×26×13	無し	2面	
195	台石	7区2号配石	551	配石塙	安山岩	21.6	鉄平石	無し	欠損	2面	接合
196	台石	7区4号配石	L16	配石塙	安山岩	7.5	○	32×17×10	欠損	1面	弱い
197	台石	7区4号配石	L17	配石塙	安山岩	11.9	鉄平石	21×35×8	欠損	1面	弱い
198	台石	7区4号配石	L19	配石塙	安山岩	9.3	○	28×23×9	無し	1面	弱い
199	台石	7区4号配石	Y5	配石塙	安山岩	13.1	鉄平石	35×25×11	1/2欠損	2面	ツルツル
200	台石	7区4号配石	ア1	配石塙	安山岩	26.8	○	35×32×11	無し	?	弱い
201	台石	7区4号配石	2	配石塙	安山岩	19.1	○	42×20×16	欠損		石棒を転用。砾石か

## 第2章 発見された遺構と遺物

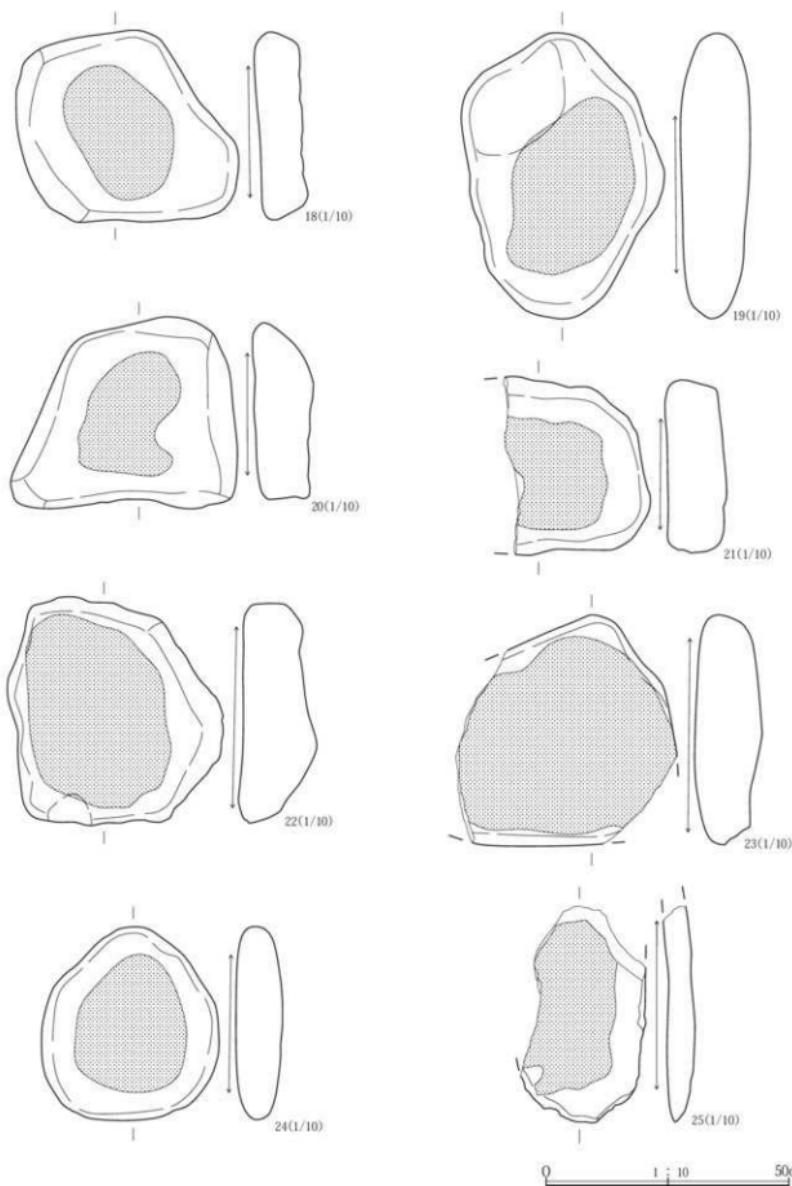
部種名	区	取上遺構名	取上番号	新遺構名	石質	重量 (kg)	川原石	大きさcm(長辺 ×短辺×厚さ)	欠損の有無	磨り面数	その他
202	台石	7区 4号列石	2	安山岩	18.5	○	36×24×14	無し	1面		
203	台石	7区 22号配石	26	安山岩	49.2	○	56×34×14	無し	2面	良好	
204	台石	7区 24号配石	7	安山岩	7.7	○	24×25×8	欠損			
205	台石	7区 36号配石	29	安山岩	20.9	○	39×29×11	無し	2面	弱い	
206	台石	7区 36号配石	33	安山岩	31.9	○	46×30×19	無し	1面	弱い	
207	台石	7区 44号配石	3	安山岩	12.8	○	28×18×19	欠損	2面		
208	台石	7区 44号配石	4	安山岩	9.8	△	25×24×11	欠損			
209	台石	7区 49号配石	2	安山岩	12.6	△	35×23×14	欠損	2面		
210	台石	7区 49号配石	3	安山岩	6.9	○	29×18×10	欠損	2面		
211	台石	7区 49号配石	13	石内側岩	22.1	○	39×28×15	無し			
212	台石	7区 49号配石	15	安山岩	6.1	△	铁平石 27×13×12	欠損	1面	弱い	
213	台石	7区 50号配石	31	安山岩	3.6	○	21×17×5.5	無し			
214	台石	7区 50号配石	32	安山岩	3.7	○	29×14×5	無し			
215	台石	7区 52号整建	4	安山岩	5.1	○	30×19×8	無し		弱い	
216	台石	7区 52号配石	2	安山岩	13.8	△	35×28×9	無し	2面	弱い	
217	台石	7区 58号配石	4	安山岩	8.1	△	铁平石 30×21×8	欠損	2面	弱い	
218	台石	7区 63号配石	1	安山岩	2.3	△	铁平石 25×7×7	欠損	2面		
219	台石	7区 64号配石	4	安山岩	13.9	○	43×14×15	無し	3面	良好	
220	台石	7区 65号配石	12	安山岩	16.1	○	31×30×13	無し	2面	弱い	
221	台石	7区 79号配石	1	安山岩	7.4	○	25×23×8	一部欠損	?		
222	台石	7区 12号列石	19	安山岩	19.3	○	32×27×11	無し	2面	弱い	
223	台石	7区 12号列石	35	安山岩	26	○	36×35×11	無し	2面	1面弱い	
224	台石	7区 12号列石	71	安山岩	34.7	○	50×26×17	無し	?	磨り面不明瞭	
225	台石	7区 10号整建	628	安山岩	5.2	△	铁平石 26×19×8	欠損	1孔	弱い	
226	台石	7区 12号整建	29	安山岩	10.8	○	27×18×17.5	欠損		浅間石	
227	台石	7区 12号整建	163	安山岩	6.7	△	铁平石 34×25×4	欠損	1面		
228	台石	7区 12号整建	P-1	安山岩	4.6	○	18×24×6	欠損			
229	台石	7区 12号整建	13	安山岩	6.1	○	23×16×10	欠損	2面		
230	台石	7区 12号整建	17	安山岩	12.2	△	铁平石 40×38×5	欠損	2面?		
231	台石	7区 124号整建	18	安山岩	17.5	△	铁平石 34×31×10	欠損			
232	台石	7区 133号整建	13	安山岩	5.5	△	铁平石 46×23×4	欠損(割)	2面	写真無し	接合
233	台石	7区 133号整建	16	安山岩	7.1	△	铁平石 28×24×6	欠損	2面	写真無し	
234	台石	7区 135号整建	6	安山岩	4	△	铁平石 41×30×5	欠損	2面	写真無し	
235	台石	7区 2043土坑		安山岩	2.31	△	铁平石 16×12×8	欠損	1面		
236	台石	7区 2211号土坑	2	安山岩	6.7	△	铁平石 31×21×7	欠損	1面		
237	台石	7区 2354号土坑	3	安山岩	8.3	△	铁平石 41.5×26×5.5	欠損	2面		
238	台石	7区 2371号土坑	1	安山岩	3	△	铁平石 30×17×4	欠損	2面		
239	台石	7区 80-C-25		安山岩	7.6	△	铁平石 35×24×8	欠損	1面	弱い	
240	台石	7区 80-J-25	865	安山岩	6.7	○	23×15×13	欠損			
241	台石	7区 90-9-2		安山岩	5.6	○	25×18×12	欠損	1孔	弱い	
242	台石	7区 90-9-2		安山岩	13.1	△	铁平石 35×25×15	欠損	1面	弱い	
243	台石	7区 90-E-2		安山岩	6.9	△	铁平石 36×24×5	欠損	1面	良好	
244	台石	7区 90-E-2		安山岩	5	△	铁平石 27×20×6	欠損	2面		
245	台石	7区 90-E-3		安山岩	8.35	△	铁平石 31×25×7.5	欠損	2面		
246	台石	7区 90-G-13	7	安山岩	8.45	○	23×20×12	欠損			
247	台石	7区 90-H-4	988	安山岩	4.2	○	31×14×7	無し	2孔(多孔)	弱い	
248	台石	7区 90-I-5	1171	石内側岩	2.7	○	21×14×5	無し	2面	弱い	
249	台石	7区 90-I-5	1172	安山岩	2.2	△	铁平石 26×17×2.5	欠損	2面		
250	台石	7区 90-I-5	1320	安山岩	16.2	△	铁平石 38×34.5×6	欠損(割)	2面	接合	
251	台石	7区 90-J-7	1409	安山岩	18.5	△	铁平石 37×24×14	欠損	2面		
252	台石	7区 90-K-4	1246	安山岩	3.45	△	铁平石 21×15×7	欠損	2面		
253	台石	7区 90-K-4	1248	安山岩	2.35	△	铁平石 18×17×6.5	欠損	2面	單孔?	
254	台石	7区	E 7	安山岩	7	△	铁平石 30×17.5×6	無し	平坦面2面		



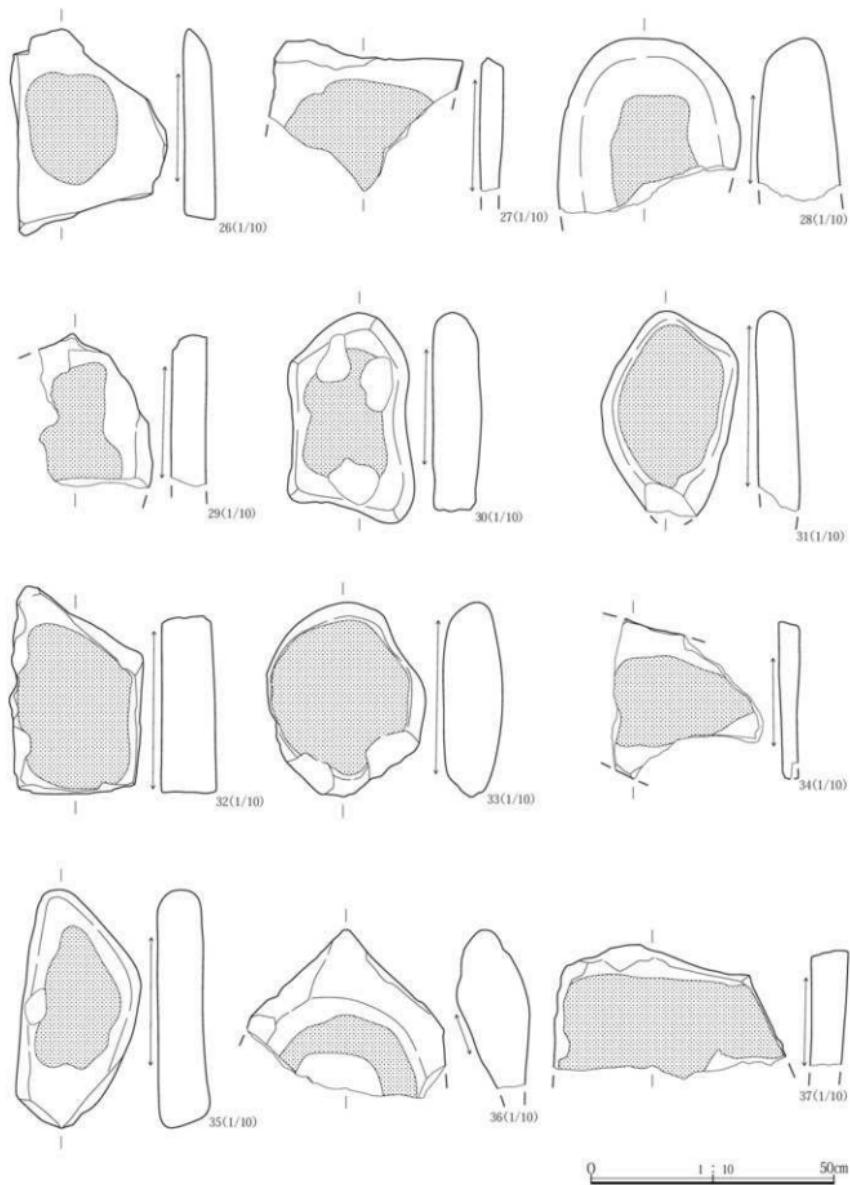
第569図 台石(1)



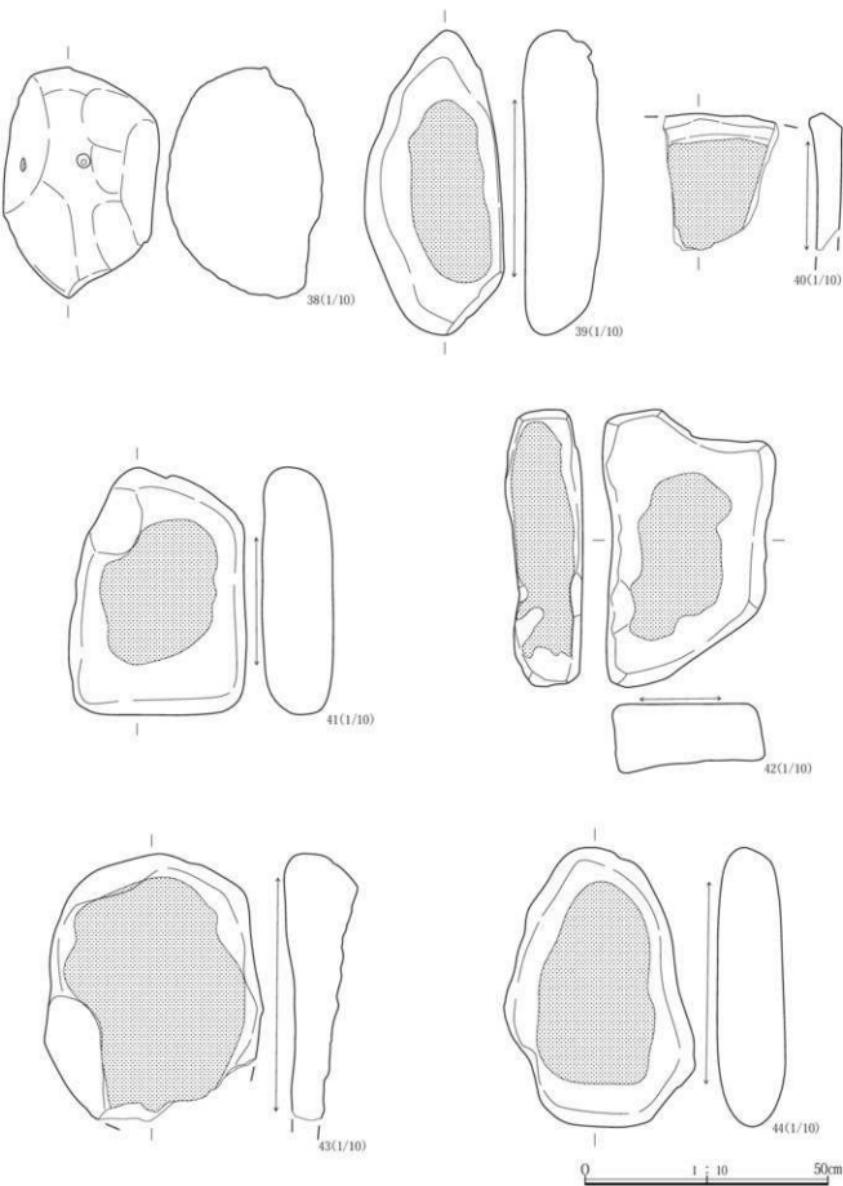
第570図 台石(2)



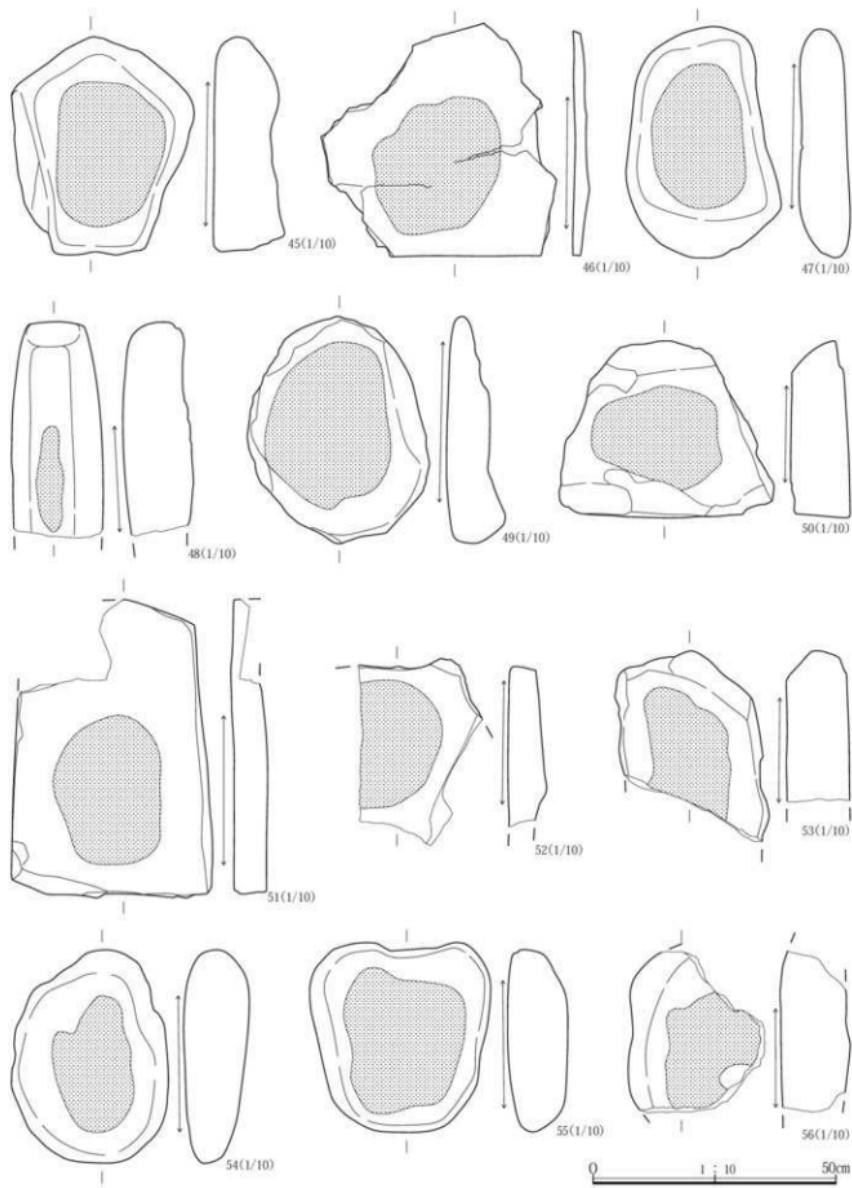
第571図 台石(3)



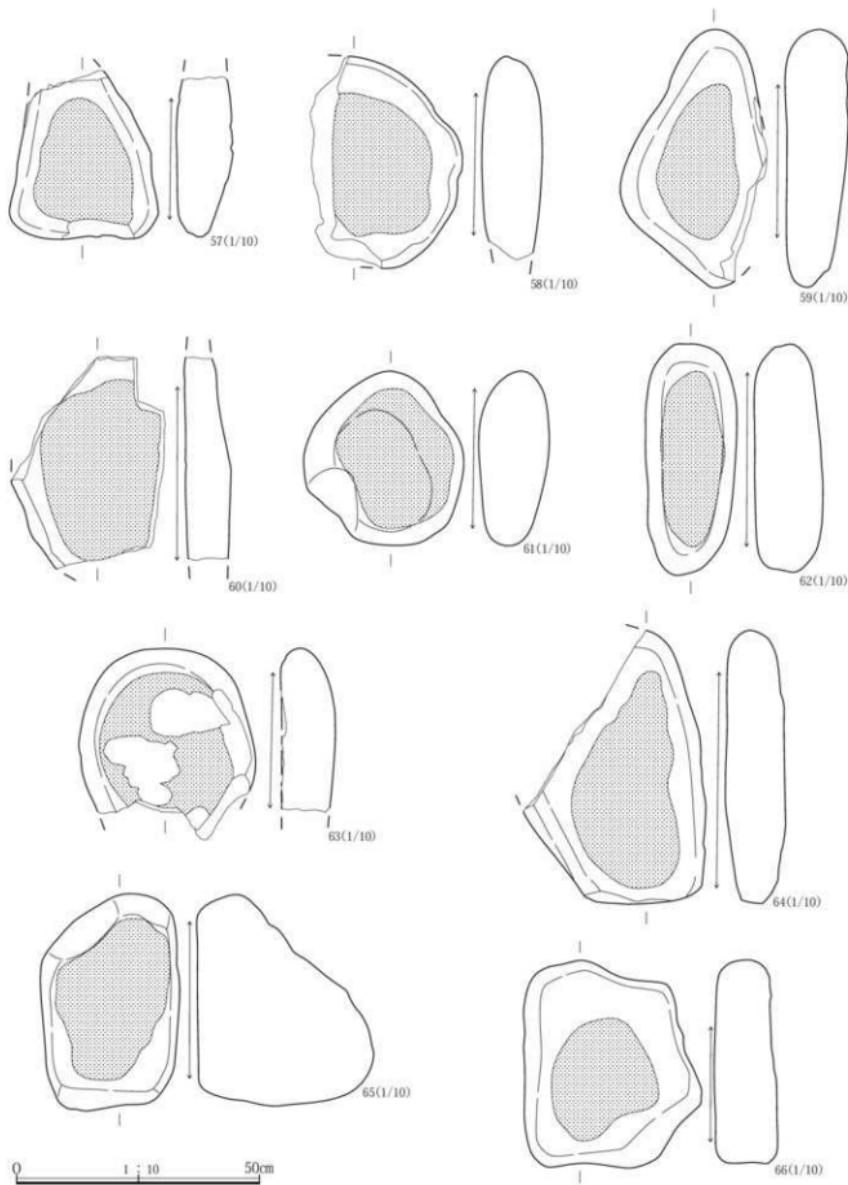
第572図 台石(4)



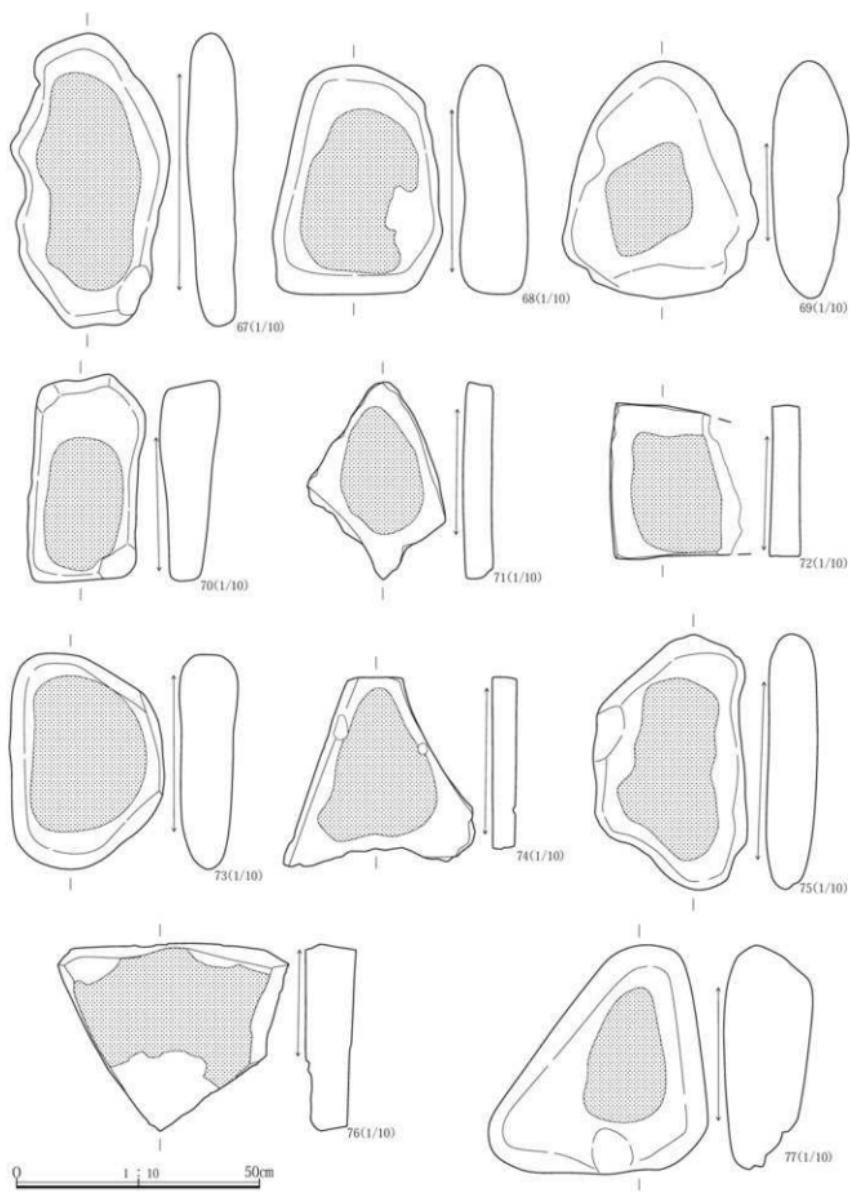
第573図 台石(5)



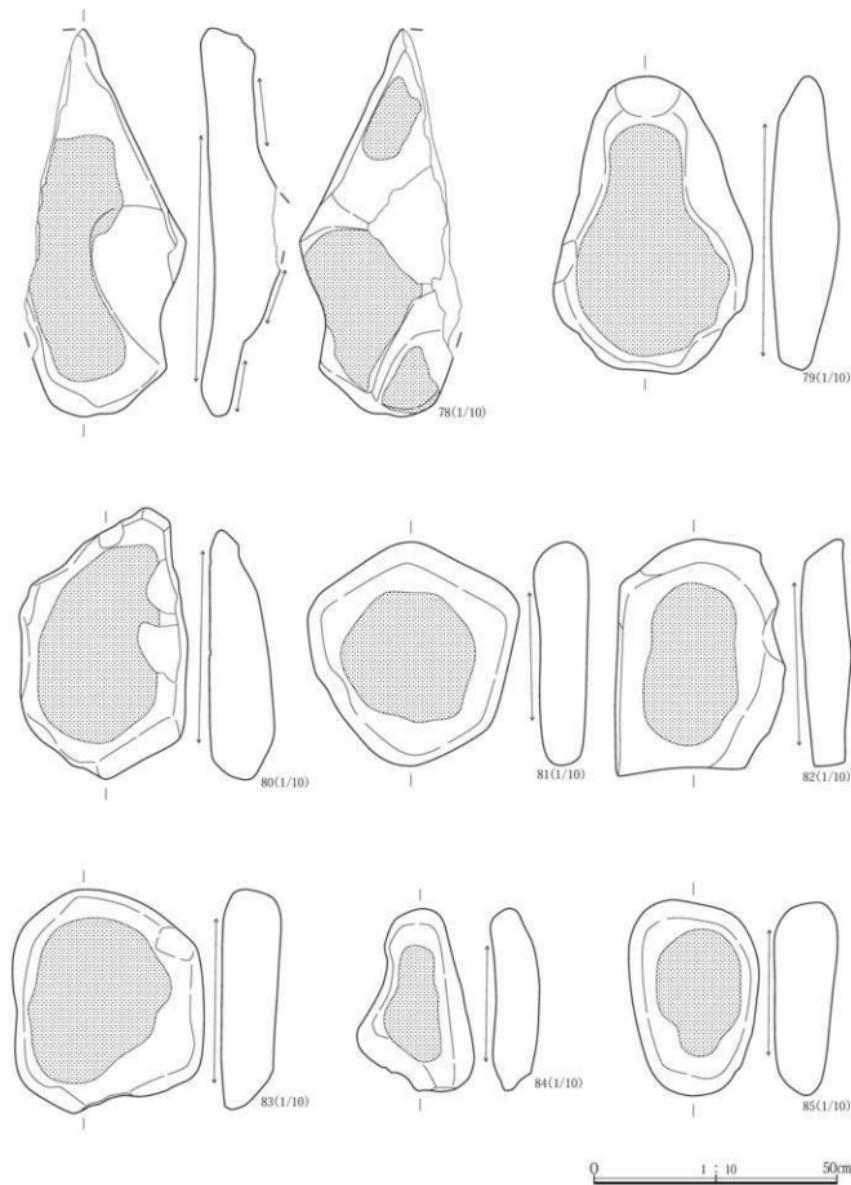
第574図 台石(6)



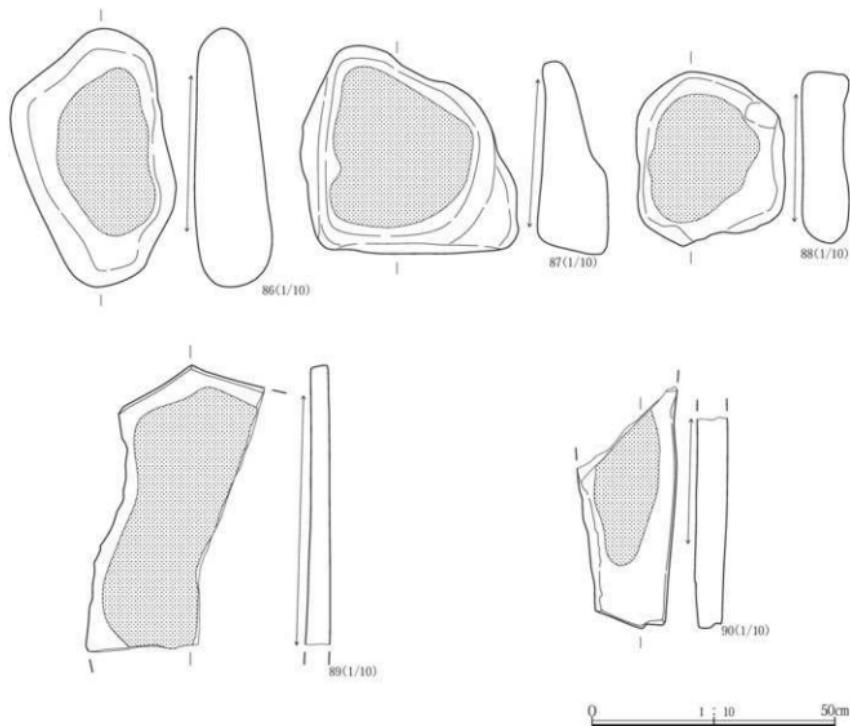
第575図 台石(7)



第576図 台石(8)



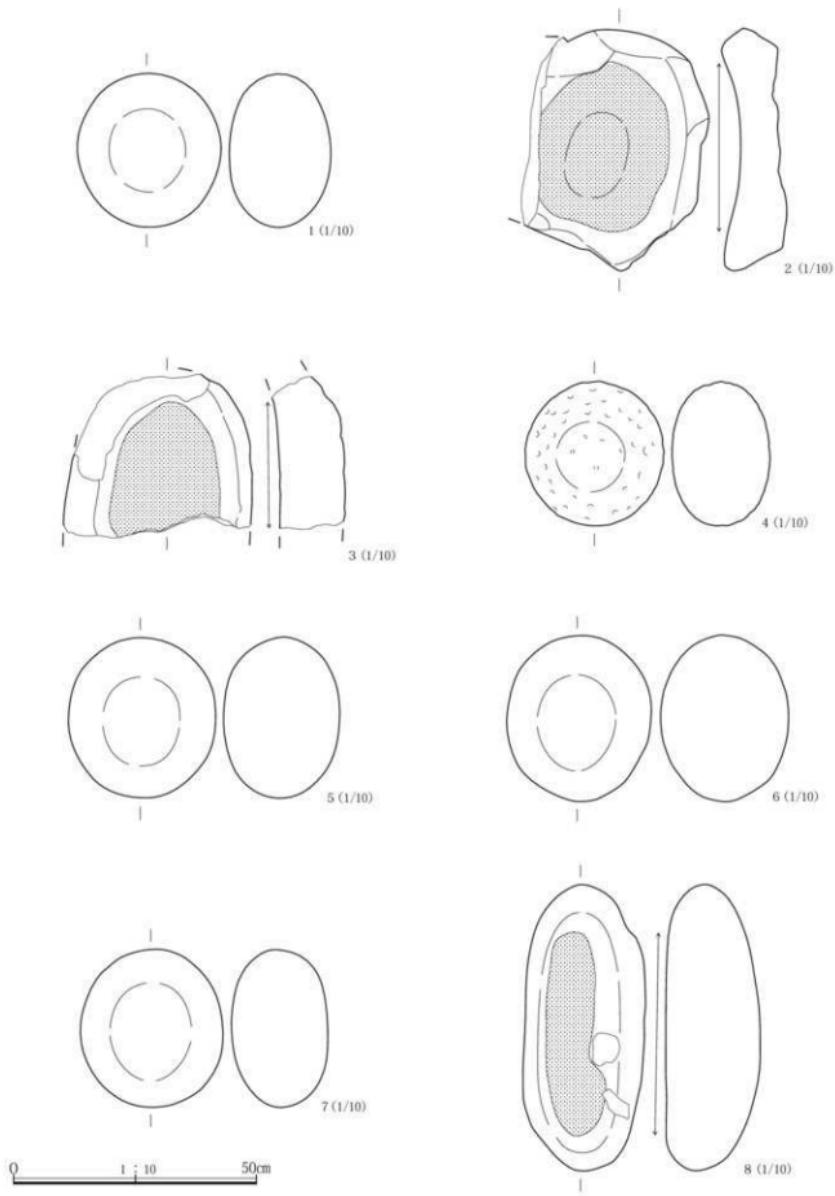
第577図 台石(9)



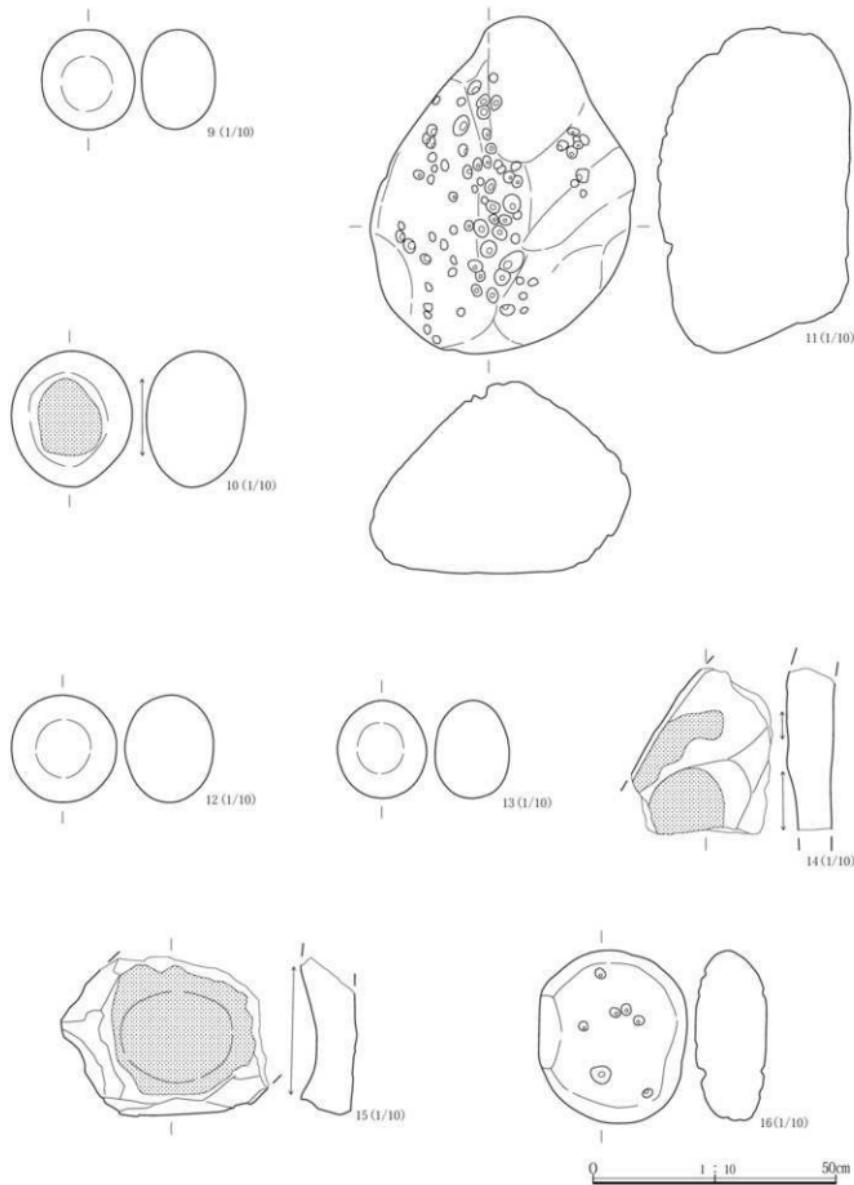
第578図 台石(10)

第13表 石川原遺跡出土大型石器一覧(台石以外:63点、979.05kg) \*川原石は○で表示 \*1~24は実測図掲載

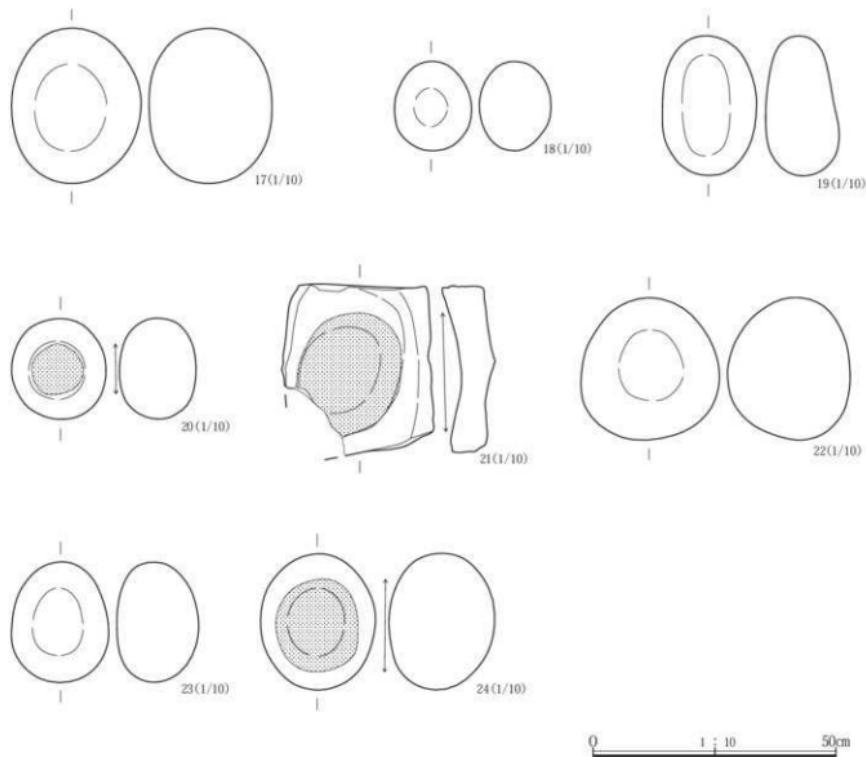
器種名	区	遺構名	取上番号	新遺構名	重量(kg)	石質	川原石	大きさcm(長辺×短辺×厚さ)	欠損の有無	その他	
1 丸石	7区	2号配石	129		28	石英閃緑岩	○	31×29×20	無し	すり 良好	
2 石皿	7区	4号配石	1		29.4	安山岩	○	48×34×12	一部欠損	裏面そのまま	
3 石皿	7区	65号配石	27		26.8	安山岩	○	(32)×38×14	(1/2)欠損	良好	
4 丸石	7区	27号配石	17		24.3	石英閃緑岩	○	29×28×21	無し		
5 丸石	7区	2号配石	55		34.9	石英閃緑岩	○	32×30×26	無し	良好	
6 丸石	7区	28号配石	10		36.3	安山岩	○	33×29×26	無し	良好	
7 丸石	7区	27号配石	18		31.2	石英閃緑岩	○	32×29×20	無し	良好	
8 多孔石	7区	65号配石	17		46.4	安山岩	○	50×25×19	無し	2箇所に穿孔	
9 丸石	7区	2354土坑	4		8.7	石英閃緑岩	○	20×19×15	無し	良好	
10 丸石	7区	2139土坑	2		19.9	石英閃緑岩	○	30×20×24	無し	良好	
11 多孔石	7区	2号配石	二 2		100	安山岩	○	69×54×39	無し	配石墓群の中心的存在	
12 丸石	7区	2号配石	504		12.3	石英閃緑岩	○	22×22×19	無し		
13 丸石	7区	2号配石	三 1		7.9	石英閃緑岩	○	20×17×15	無し		
14 石皿	7区	2号配石	二 1		11.5	安山岩	鉄平石	36×28×13	2/3欠損		
15 石皿	7区		1513		18.7	安山岩	鉄平石	43×33×14	欠損		
16 多孔石	7区	4号配石	四 1		20.7	安山岩	○	35×30×15	無し	面内多孔石	
17 丸石	7区	2号配石	/ 9 40	配石墓	石英閃緑岩	○	31×27×25.5	無し			
18 丸石	7区	12号列石	54		6.2	石英閃緑岩	○	20×17×17	無し		
19 丸石	7区	2号配石	529		12.5	石英閃緑岩	○	29×19×14	無し	表裏平坦面に磨り面	
20 丸石	7区	90-1-14	24		9.4	安山岩	○	19×17×16	無し		
21 石皿	7区	2号配石	391		15.9	安山岩	鉄平石	40×35×14	欠損		
22 丸石	7区	2号配石	六 4		33.5	安山岩	○	28×28×26	無し		
23 丸石	7区	25号石	18 1	60	配石墓	12.2	石英閃緑岩	○	24×20×16	無し	平坦部スレ
24 丸石	7区	2号配石	505		20.3	石英閃緑岩	○	28×22×25	無し	平坦部スレ	
25 丸石	7区	2号配石	6 1		16.4	石英閃緑岩	○	23×23×18	1/3欠損		
26 丸石	7区	2号配石	29 8		10	安山岩	○	30×32×8	一部欠損		
27 丸石	7区	25号配石	39 2	64	配石墓	3.9	石英閃緑岩	○	15×15×12	無し	
28 丸石	7区	2号配石	1 9 4	4	配石墓	34	石英閃緑岩	○	30×27×25	無し	
29 丸石	7区	2号配石	才 1	22	配石墓	20.2	石英閃緑岩	○	28×23×20	無し	良好
30 砥石	7区	2号配石	322		22.5	安山岩	○	44×20×18	欠損	右側を砥石に転用	
31 丸石	7区	2号配石	506		5.4	石英閃緑岩	○	20×15×12	無し	平坦部スレ	
32 丸石	7区	2号配石	528		14.2	石英閃緑岩	○	24×22×18	無し		
33 丸石	7区	4号列石	30		6	安山岩	○	18×16×13	無し		
34 丸石	7区	22号配石	21		20.3	石英閃緑岩	○	24×28×17	無し		
35 丸石	7区	28号配石	6		5.5	安山岩	○	18×16×14	無し		
36 多孔石	7区	35号配石	17		6.6		○	24×18×12	無し		
37 丸石	7区	36号配石	26		1.4	石英閃緑岩	○	11×10×8	無し		
38 石皿	7区	49号配石	11		6.6	安山岩	○	25×18×11	無し		
39 丸石	7区	12号列石	23		11.6	石英閃緑岩	○	24×20×17	無し	弱い	
40 丸石	7区	3号列石	31		8.6	石英閃緑岩	○	22×19×13	無し		
41 多孔石	7区	3号列石	43		17.2	安山岩	○	32×18×18	1/2欠損	円柱状、被熱	
42 丸石	7区	22号集石	1		13.3	石英閃緑岩	○	15×12×16	無し	良好	
43 丸石	7区	28号集石	11		12.2	安山岩	○	28×19×16	欠損		
44 丸石	7区	30号集石	7		7.3	安山岩	○	20×15×15	無し		
45 丸石	7区	30号集石	8		5.6	安山岩	○	19×17×12	無し		
46 丸石	7区	30号集石	11		6.1	石英閃緑岩	○	18×16×13	無し		
47 丸石	7区	30号集石	15		7.9	安山岩	○	23×17×15	無し		
48 丸石	7区	30号集石	96		24.1	安山岩	○	28×24×23	無し		
49 丸石	7区	31号集石	32		5	安山岩	○	20×15×16	無し	すり良好	
50 石皿	7区	31号集石	433	2	安山岩	○	18×13×7	欠損			
51 多孔石	7区	31号集石	802		9.65	安山岩	○	23×18.5×17.2	欠損		
52 丸石	7区	32号集石	67		11.1	石英閃緑岩	○	21×20×19	無し		
53 磨石	7区	21号整建			0.6	安山岩	○	10.5×7.5×5	欠損	写真無し	
54 多孔石	7区	106号整建	1		7.5	安山岩	○	21×17×16	無し		
55 多孔石	7区	122号整建	2 104		10.7	安山岩	○	30×21×18	無し?	良好	
56 石皿	7区	122号整建	2 107		13.9	安山岩	○	(27)×37×12	(1/2)欠損		
57 多孔石	7区	122号整建	2 110		10.1	安山岩	○	22×19×16	無し	良好	
58 くぼみ石	7区	124号整建	28		3.5	安山岩	○	24×14×9	無し		
59 丸石	7区	2136号土坑	42		8.7	石英閃緑岩	○	20×18×16	無し	弱い	
60 磐	7区	80-F-2			6.6	須恵器	○	18×18×16	(1/2)欠損	原石	
61 多孔石	7区	90-G-3			9	安山岩	○	22×20×11.5	無し		
62 くぼみ石	7区	90-H-3	896		22.8	安山岩	○	32×25×23	無し		
63 石皿	7区	90-K-5	793		4.4		○	21×18×10	欠損		



第579図 丸石・磨石類(1)



第580図 丸石・磨石類(2)



第581図 丸石・磨石類(3)

## 第6項 配石

### 調査の概要

石川原遺跡では、河原石や地山礫を用いた遺構が主体を占め、竪穴建物や水場遺構などにも多用されていた。特に7区調査時には、意図的に配したとみられる石と不規則な集積した石が無作為に調査区一面に広がっていた。

### 遺構名称について

発掘調査時、平成29年度の7区調査では、礫の集中する範囲について竪穴建物を想定して1号・2号・3号・4号配石として設定し、調査を行った。さらに個別の遺構として捉えたものについては、2号配石は2号配石A～G、3号配石は3号配石A～D、4号配石は4号配石A～Gまで細分化した。

平成30、31年度調査では、配石遺構などの調査の進展によって、さらに個別の単位を捉えることが可能になつたため、1～4号配石の範囲内をさらに細分化し、1号配石は、106号竪穴建物「1号配石A」、「1号配石B」、「列石部」に細分化された。2号配石は、配石墓群が密集、重複するしていることが判明し、2号配石H～@、3号配石は、3号配石E～Nまで名称を付け、3号配石Aを108号竪穴建物、3号配石Cを107号竪穴建物へ変更した。4号配石は2号配石から続く配石墓の延長が確認され、4号配石H～エまで追加した。1～4号配石の範囲外では、枝番をつけるやり方に不都合が生じたことから、5号配石以下は遺構毎に通し番号をつけることとした。新たに確認された配石については、5号配石から名称を設定した。

令和2年からの整理作業では、枝番が振られた配石番号と単体の配石番号が混在していたことから、遺構の性格をもとに遺構の整理を行った。配石下部に長方形または圓丸方形状の掘り込みを持ち、側面に石を配するまたは配さないものを「配石墓」、石を不規則に集中させた遺構を「集石」、柱穴の根積み石を「土坑」、竪穴建物の周礫等、施設の一部だった場合、「竪穴建物」、石の配置や形状に意図があると判断した遺構を「配石」とした。配石として扱った遺構の中には、石に規則性がなく、遺物が集中するものがあり、「欠番」として扱った。遺構振替については、第14表のとおりである。

欠番となった遺構から出土した遺物は、2～4号配石は、上部配石も関わっており、配石が構築された期間を把握するため、配石一括に、その他の配石から欠番となった遺物は、グリッド一括として扱った。

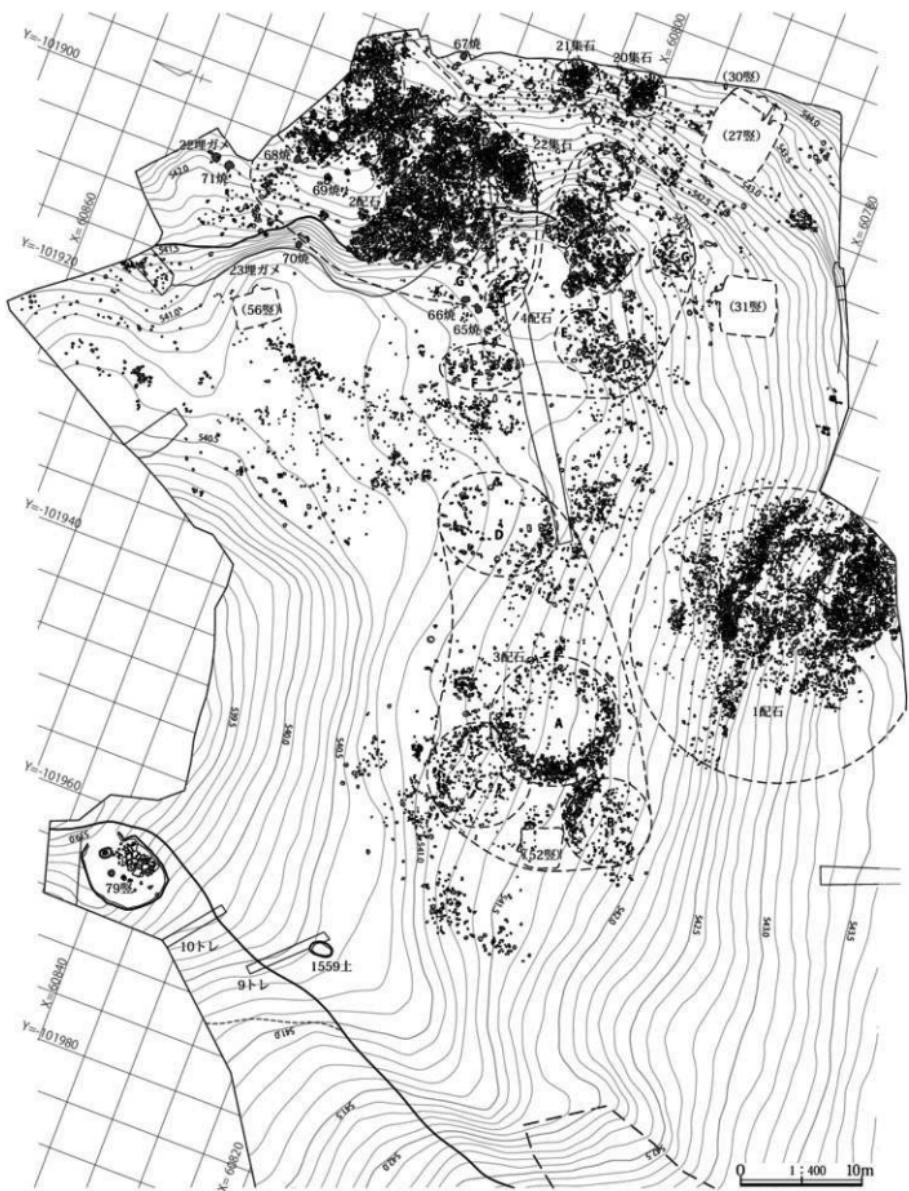
### 石川原遺跡の配石遺構

以上のような遺構整理の結果、配石は88基確認した。後期前葉から晩期後葉まで確認された。後期前葉から構築が開始され、後期後葉から晩期中葉を中心構築された。配石の性格は、水場遺構に伴うもの(22、27～29、33号配石)、立石を伴うもの(39～48、60～64、67～71号配石)、立石を中心配石で囲むもの(49、79号配石)、土坑内に石を巡らせるもの(56、64号配石)、石を孤状に巡らせるもの(57号配石)、道路状遺構(65、66号配石)、箱形状に石を巡らせるもの(77号配石)、石を並べたもの(82、84、85号配石)、丸石を基軸に置いたもの(86号配石)、配石の上部配石などの形態がみられた。立石と土坑に石を並べたものについては、柱穴の可能性もある。配石の上部配石については、配石墓との間に間層が確認できるものはほとんどなく、頻繁に「遺構更新」(阿部2005)が行われていたと想定される。また第614図～616図の全体図の割図に関しては、調査時の名称で掲載した。整理作業時に振り替えた名称は、第14表を参照されたい。

第14表 配石一覽表







第582図 7区5面H29年度調査時配石位置図

## 1号配石～4号配石

1～4号配石は、平成29年度に大枠として設定された配石である。各配石の範囲内でまとまりが見いだせたことから、枝番号を振った。整理作業時では、枝番号を振った配石遺構について、配石や集石、配石墓など様々な主体の遺構が混在していたことから、遺構の種類別に分類し、新規の遺構名を設定した。その際、1～4号配石や平成29年度に設定、調査した配石遺構は欠番となった。枝番を振る前の平成29年度調査段階では、上部配石として石が積まれていた。下記では、1号配石～4号配石の平成29年度段階の様相と遺物の様相について扱う。遺構の分布は、第582図の通りである。

1号配石(第583～586図 PL.273)

調査年度 平成29、30年度

位置 80区G-25

経過 7区南側の丘陵裾に位置する。平成29年度調査で認知され、平成30年度調査では下部から106号竪穴建物や埋設土器等が確認された。整理作業時には、埋設時や配石の形状などから、4棟の重複を確認し、竪穴建物廃絶後に、上部配石が構築されたと捉えた。調査では、1号配石内に10cm程の円礫を斜位に並べた1号配石A、孤状に配列する1号配石Bを設定した。整理作業時には前者を15号列石、後者を106号竪穴建物の一部として認識

した。

**規模** 直径15m程の範囲内に大小様々な多量の礫が集積し、中央部に礫の少ない楕円形の空白部が認められた。

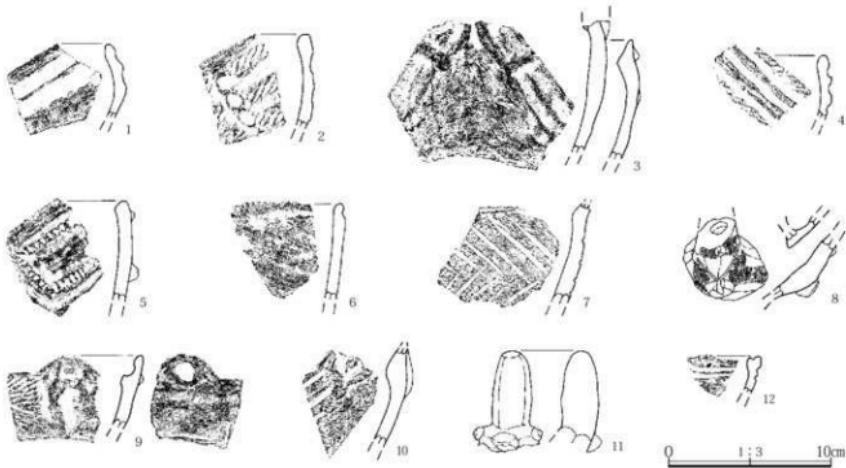
**重複** 1号配石は、出土遺物から後期後半から晩期にかけて構築されたと考えられ、下部には106号竪穴建物の他4軒の竪穴建物が確認された。

**形状** 不整円形

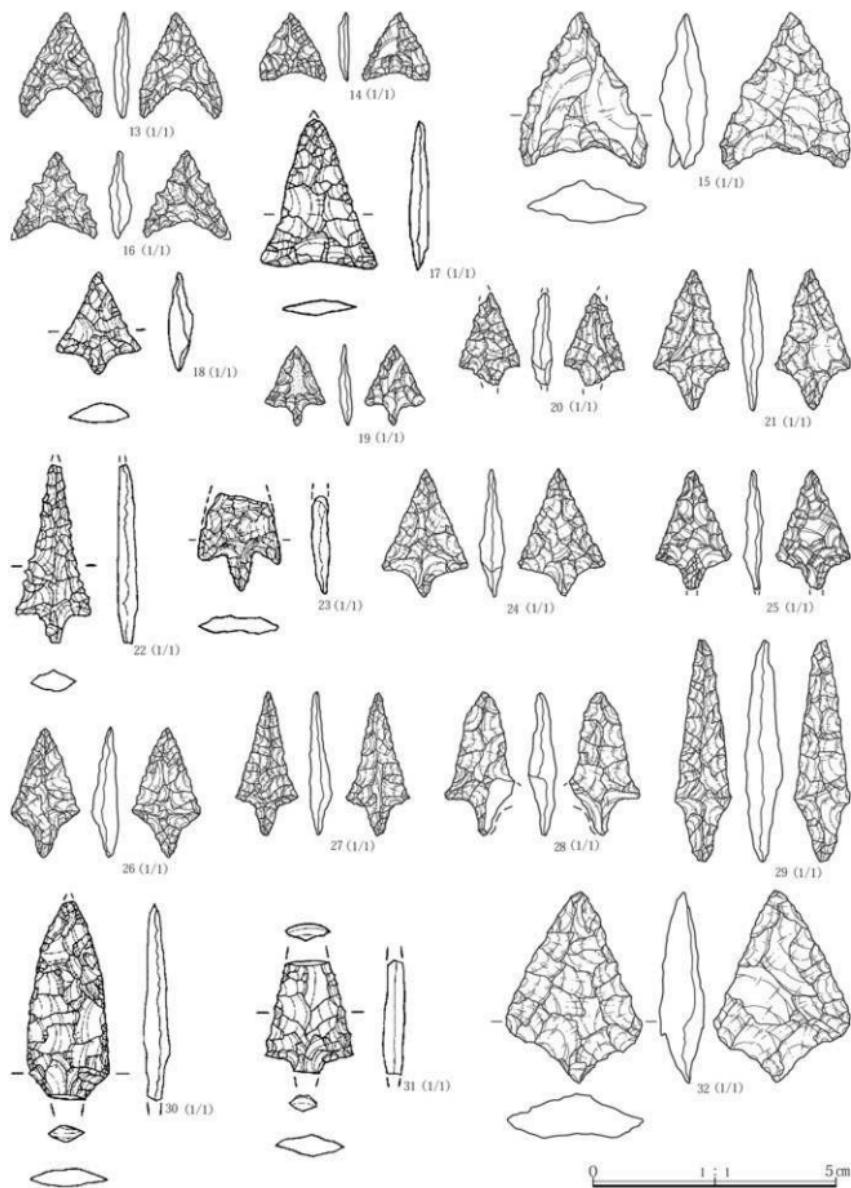
**構造** 調査当初は直径15m程の範囲内に大小様々な多量の礫が集積し、中央部に礫の少ない楕円形の空白部が認められた。その後の調査でこの下に106号他4軒の竪穴建物があり、そのうち2軒は出入り口部に列石を伴うものであった。竪穴建物はいずれも後期前半期のものだが、その後本配石の北側斜面には多量の礫と土器が集積されており、1号配石の中央部で晩期初頭の埋設土器も確認されている。そうしたなかで、本集積の北東で直径7cm、厚さ1cm前後の小さな円盤状の川原石12枚(PL.273-5)を揃えて置いた状態で確認された。その目的は不明だが、当時の誰かがここに揃えて置いたことは間違いないので、これを1号配石として記録しておきたい。

**遺物** 後期後葉(高井東式古段階)から晩期前葉の縄文土器が主体を占める。

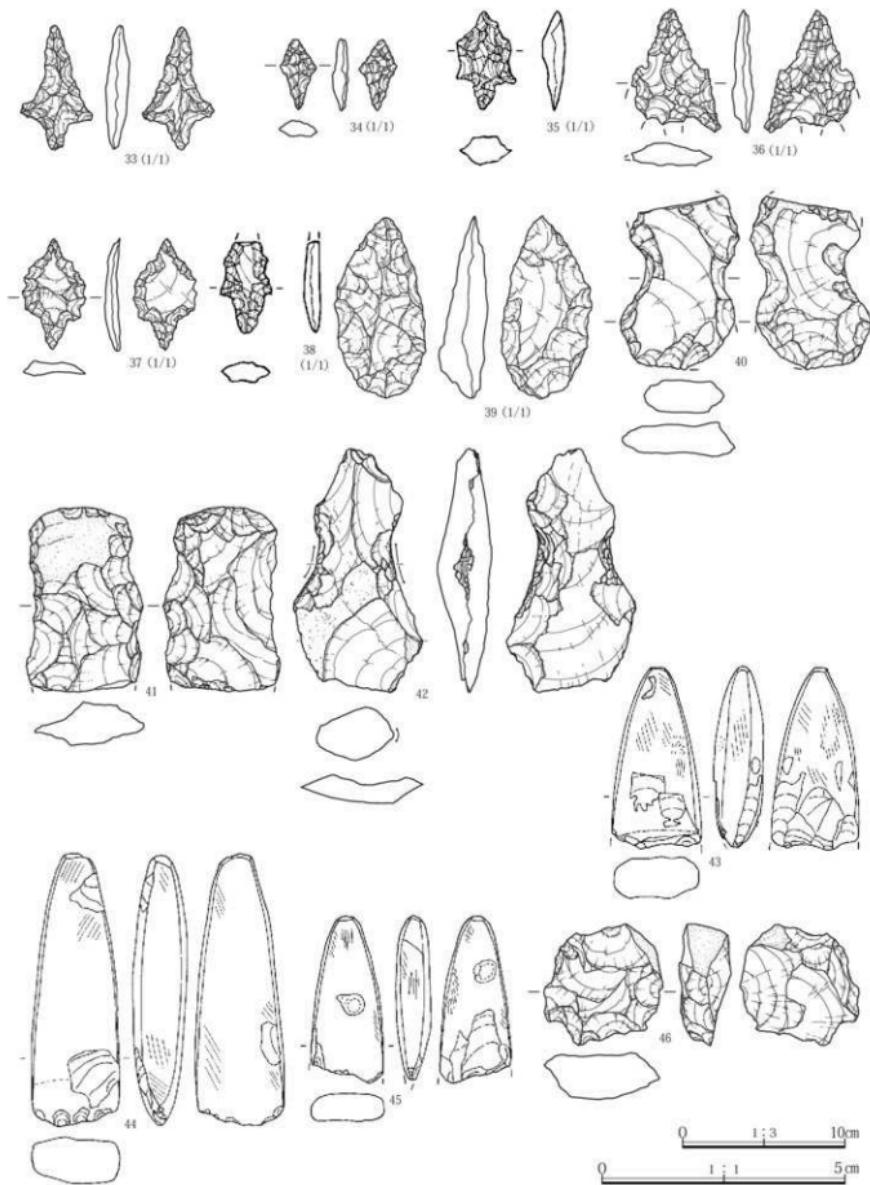
**時期** 後期後葉(高井東式古段階)から晩期前葉



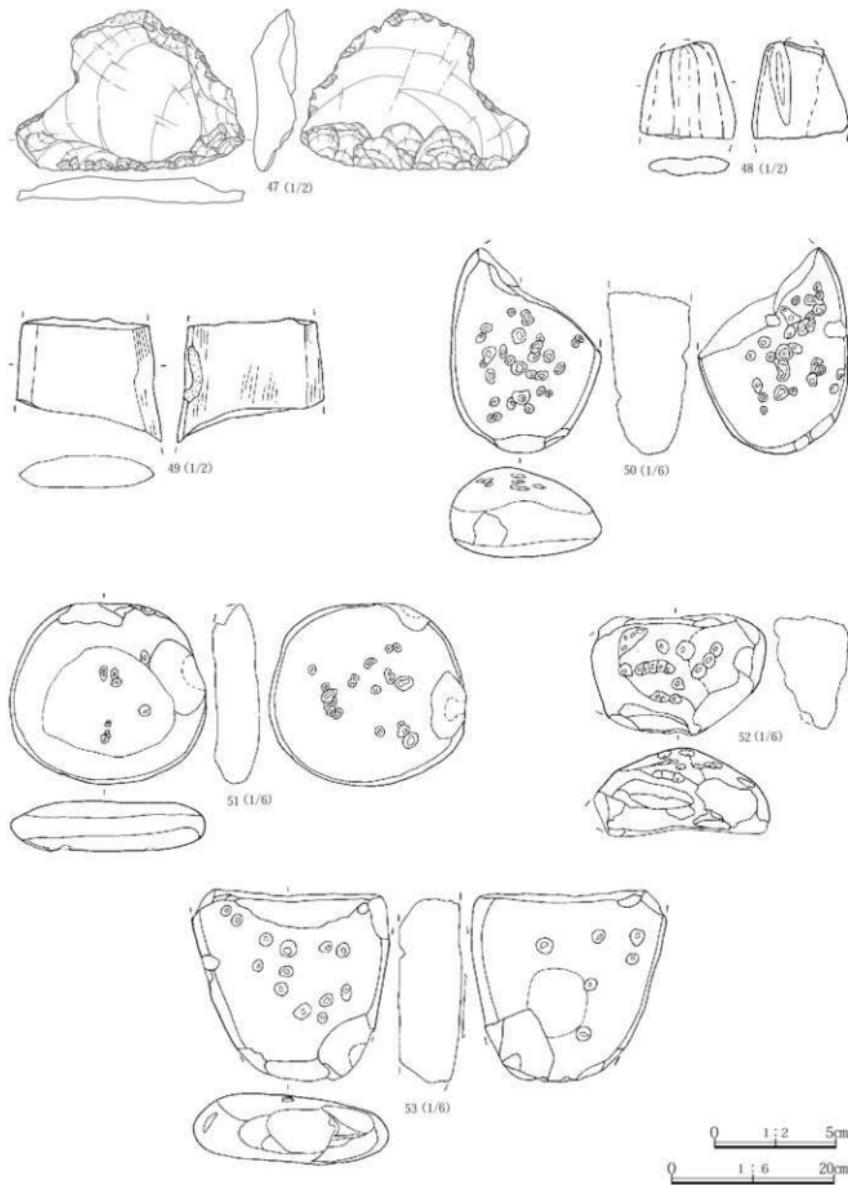
第583図 7区1号配石出土遺物(1)



第584図 7区1号配石出土遺物(2)



第585図 7区1号配石出土遺物(3)



第586図 7区1号配石出土遺物(4)

2号配石(第14表 第587~600図 PL274)

調査年度 平成29、30年度

位置 89区B-9

経過 7区東側の緩傾斜地に位置する。平成29年度調査で認識され、まとまりが見い出せたことから、2号配石A~Fまでの名称設定を行った。平成30年度調査では下部から配石墓が複数確認されたため、2号配石G~Sまで遺構番号を付けて調査を行った。整理作業時には、2号配石の個別遺構番号に配石、土坑、配石墓、集石などが混ざっていたことから、遺構名称の振り替えを行った。

規模 直径18.5mを測る

重複 133号竪穴建物を構築後、列石区画内に配石墓を構築し、その後、上部配石を構築する。

形状 不整形

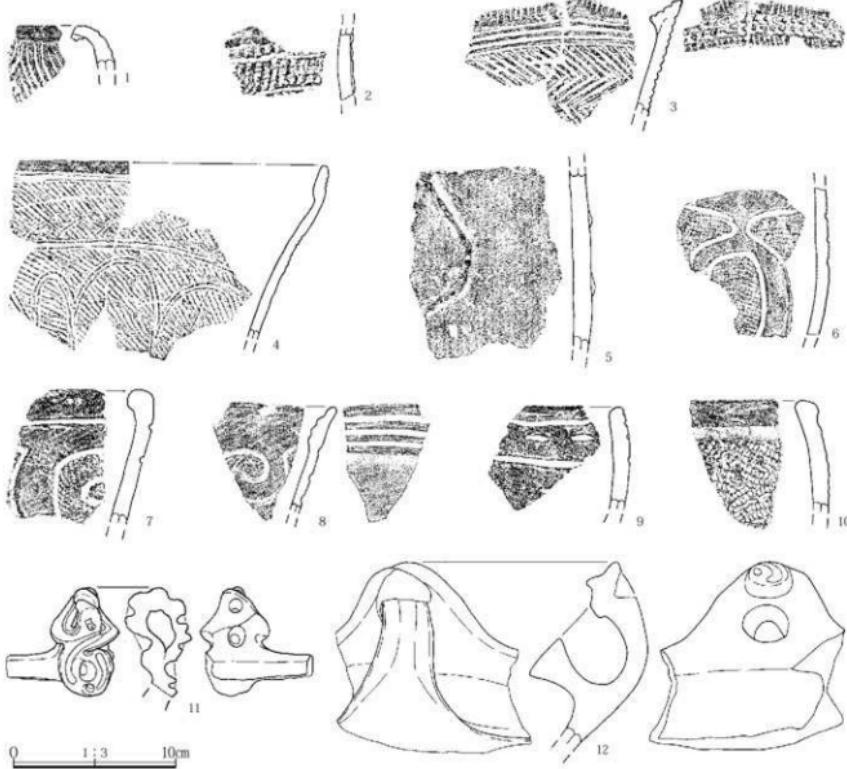
構造 配石墓蓋石上面に大小様々な縞を集積し、高いところでは、100cm集積する。2号配石Eでは空間が形成されている。縞は、河原石や地山縞の他に磨り石、叩き石などの石器類の転用、丸石を多用していた。

下部遺構 上部配石下からは、配石墓、列石が確認されている。

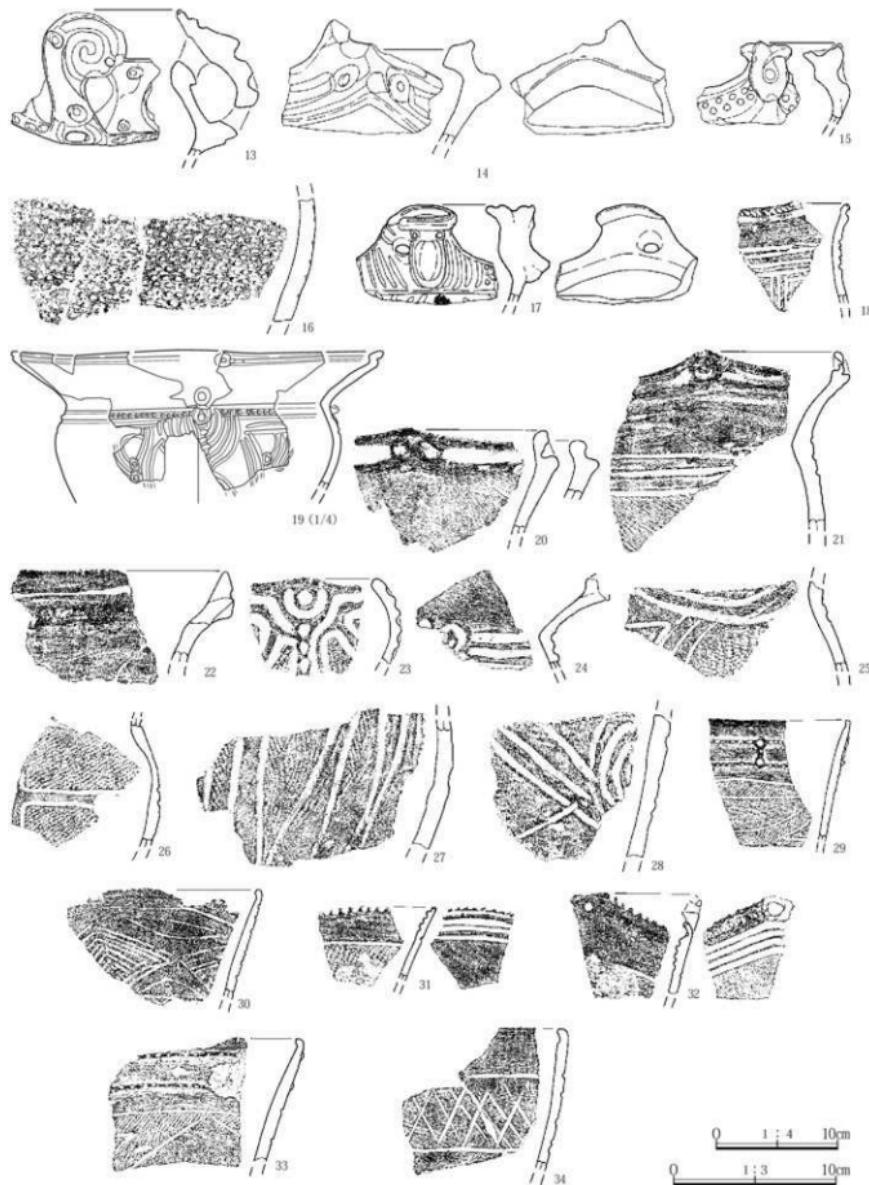
石材等 河原石や地山縞を多用する。

遺物 土器は、前期後葉から晩期前葉まで出土しており、後期後葉から晩期前葉にかけての遺物が集中する。

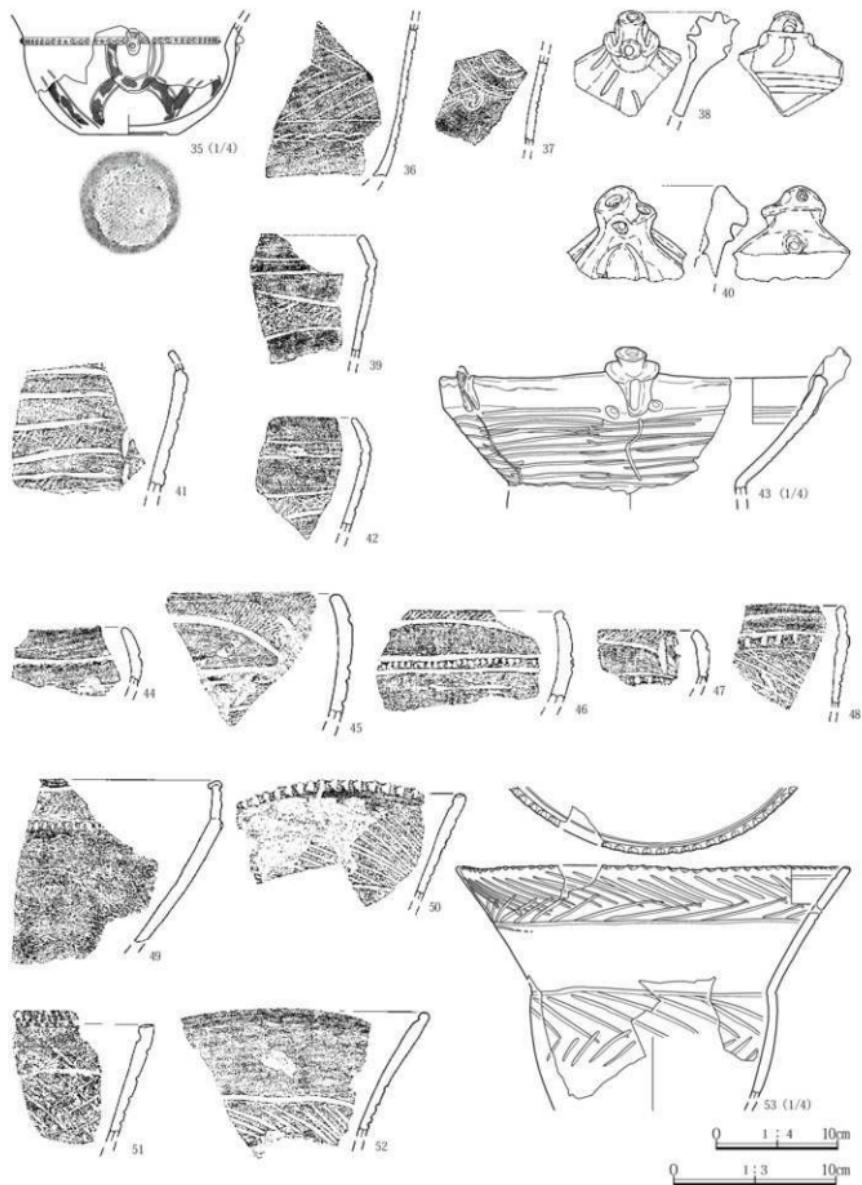
時期 後期後葉から晩期前葉



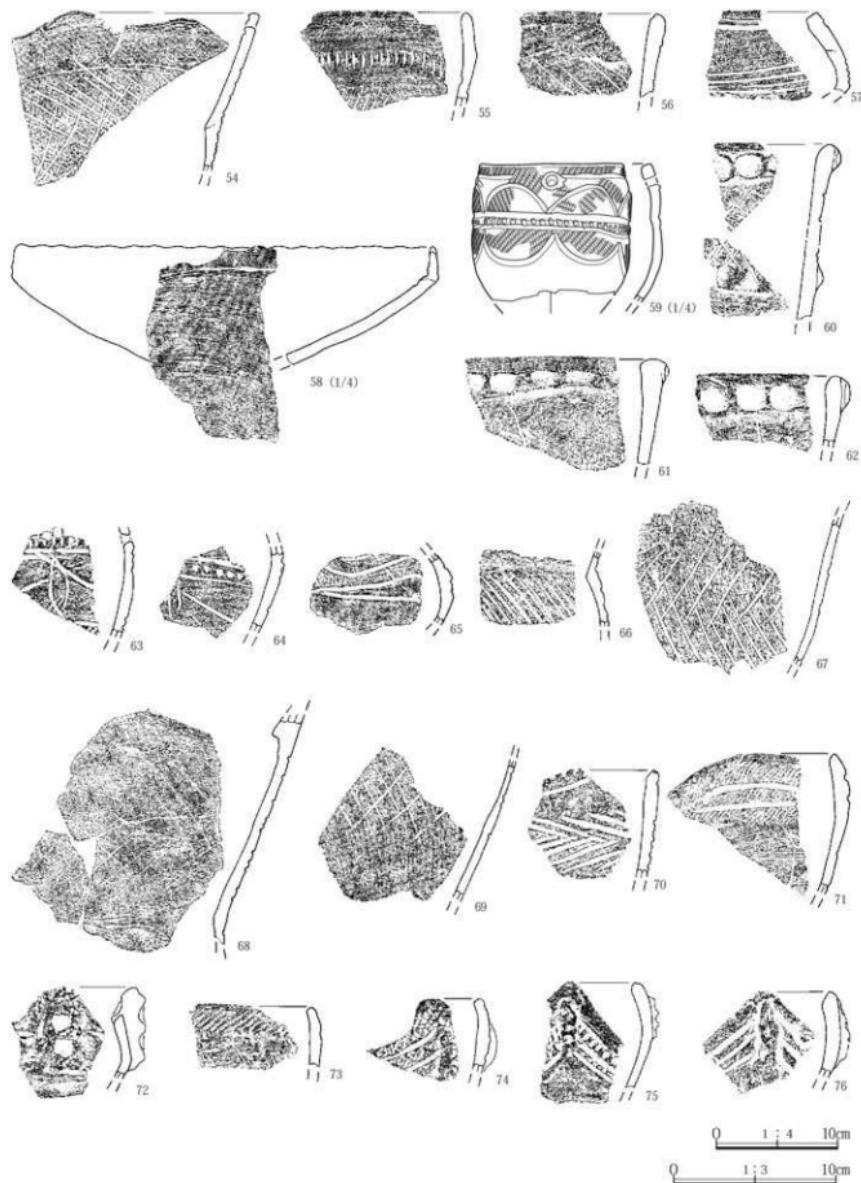
第587図 7区2号配石出土遺物(1)



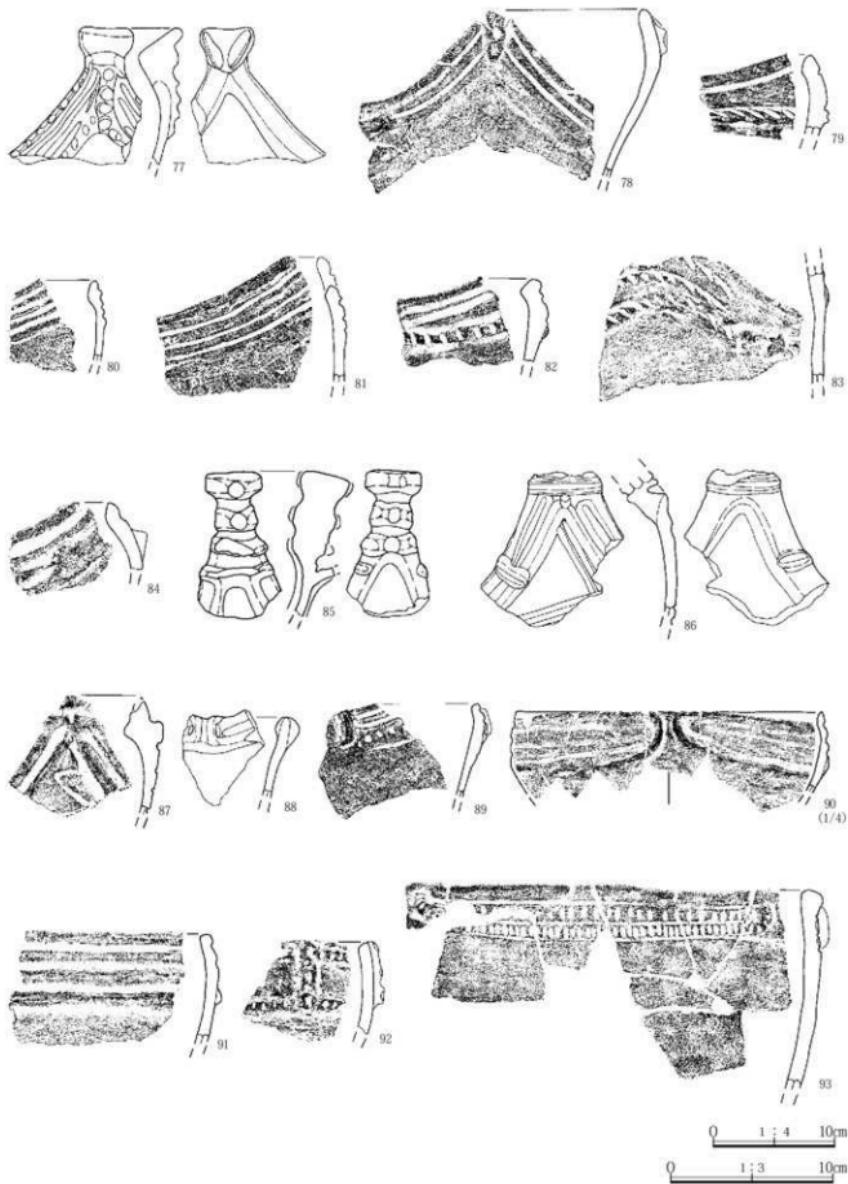
第588図 7区2号配石出土遺物(2)



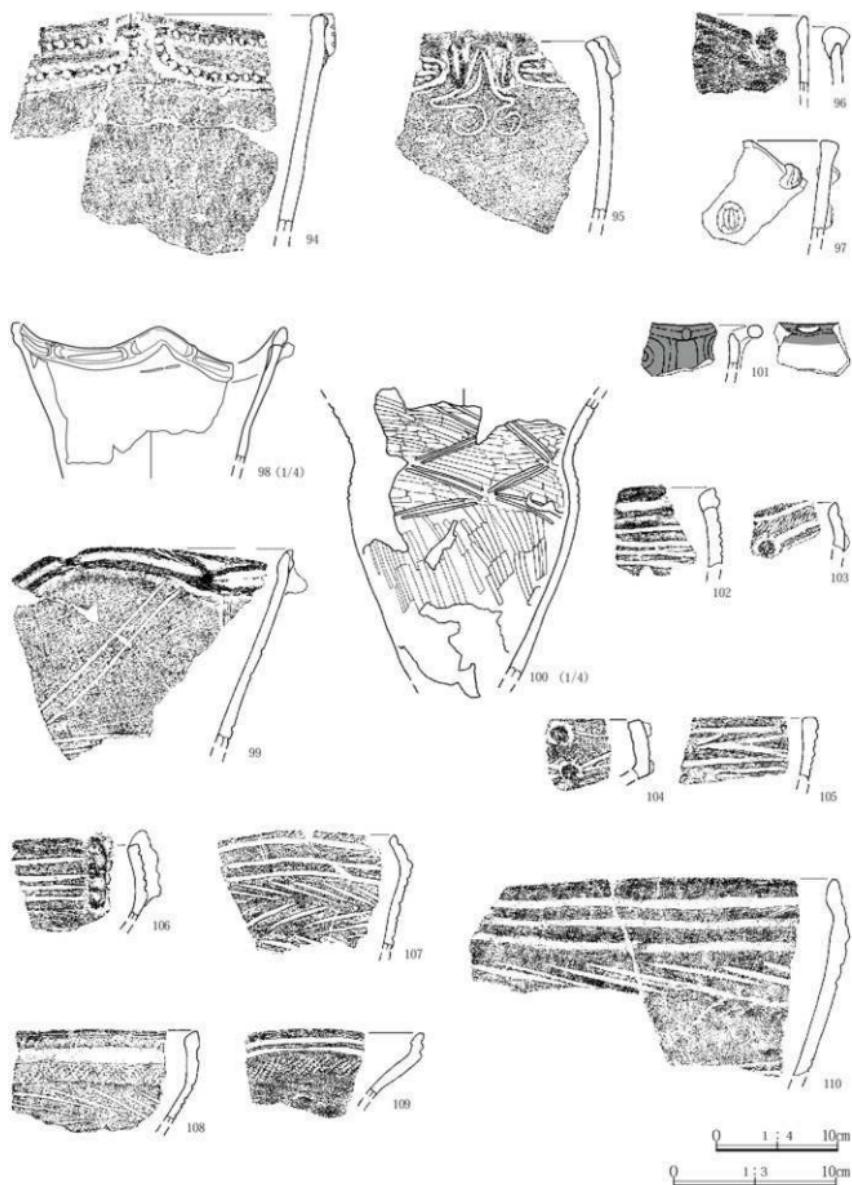
第589図 7区2号配石出土遺物(3)



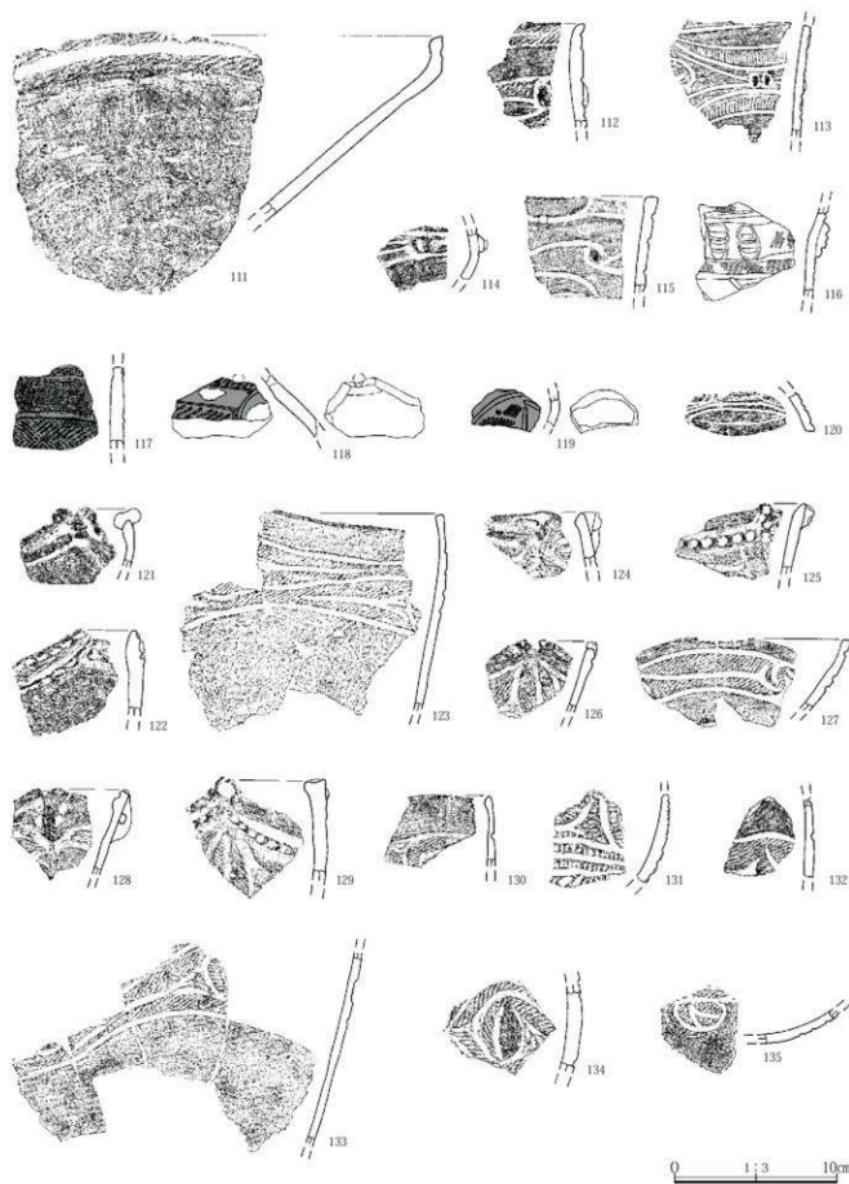
第590図 7区2号配石出土遺物(4)



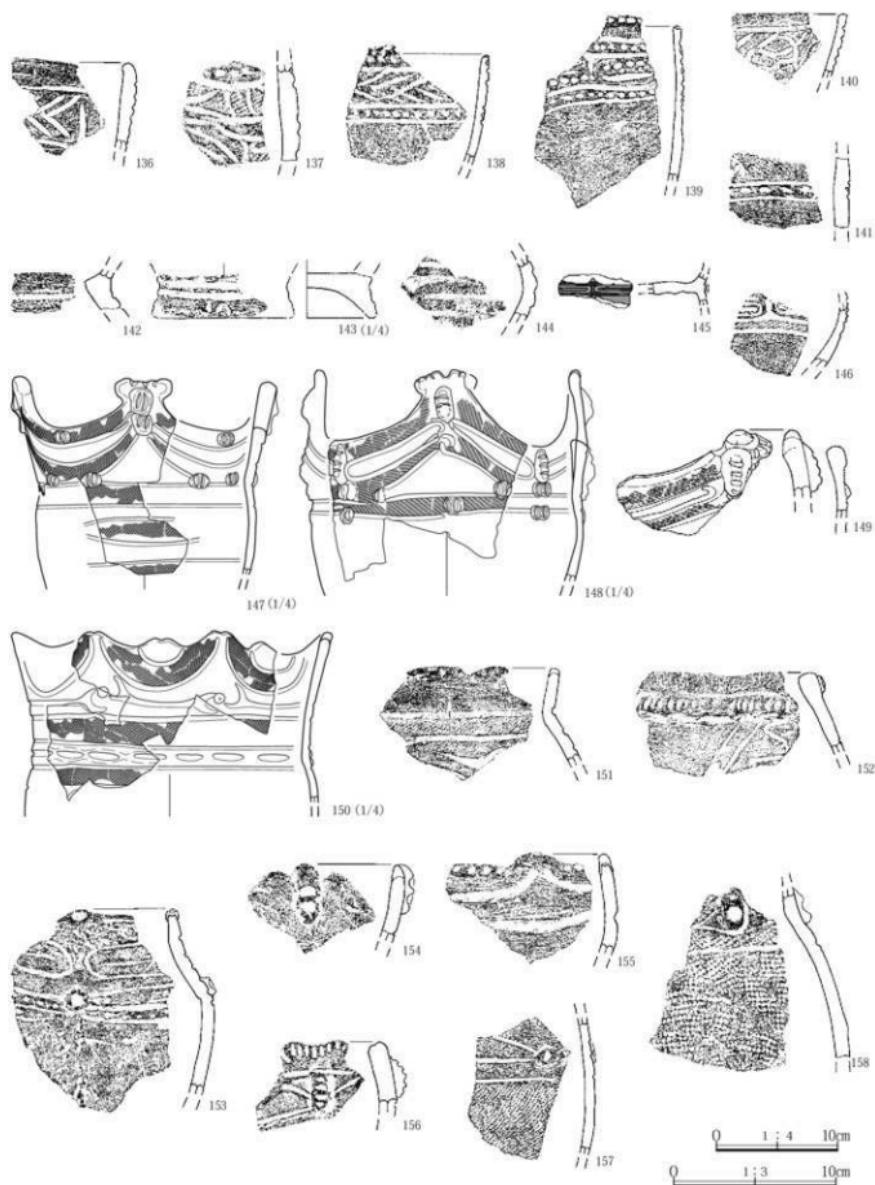
第591図 7区2号配石出土遺物(5)



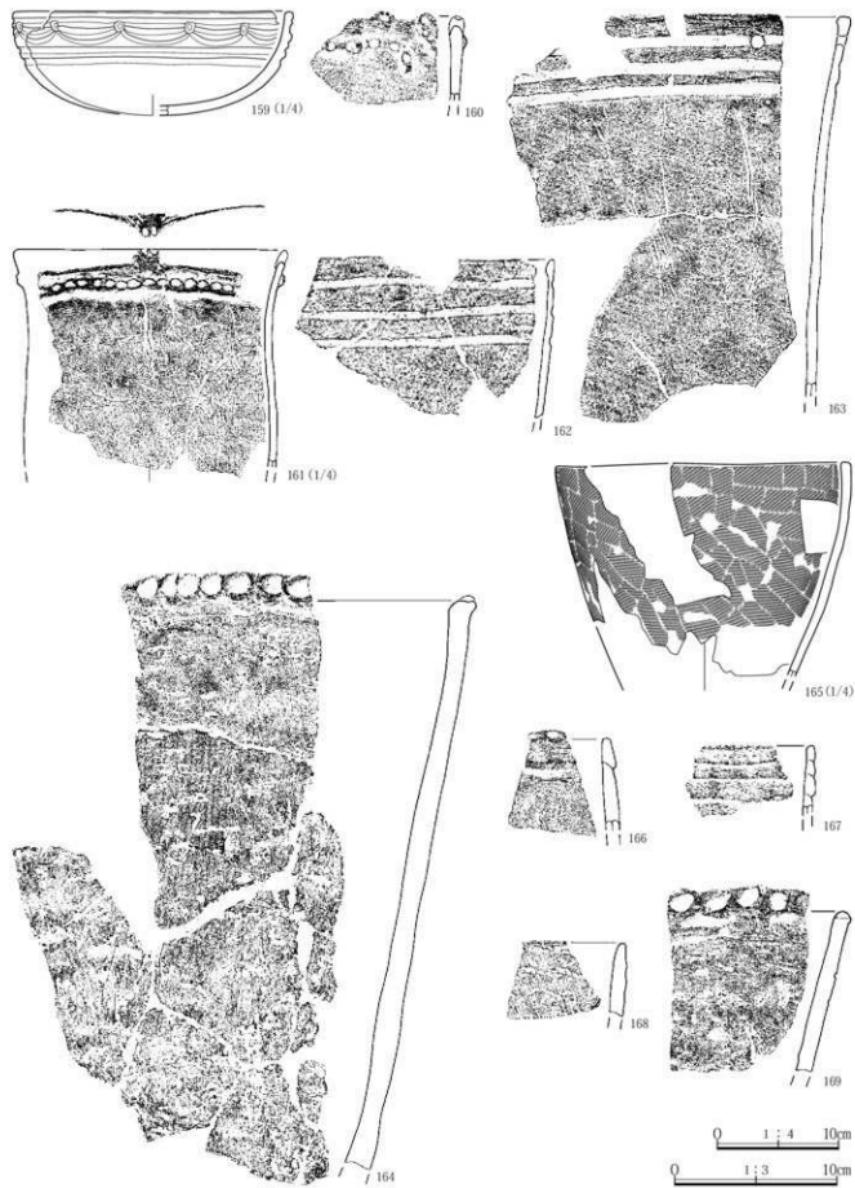
第592図 7区2号配石出土遺物(6)



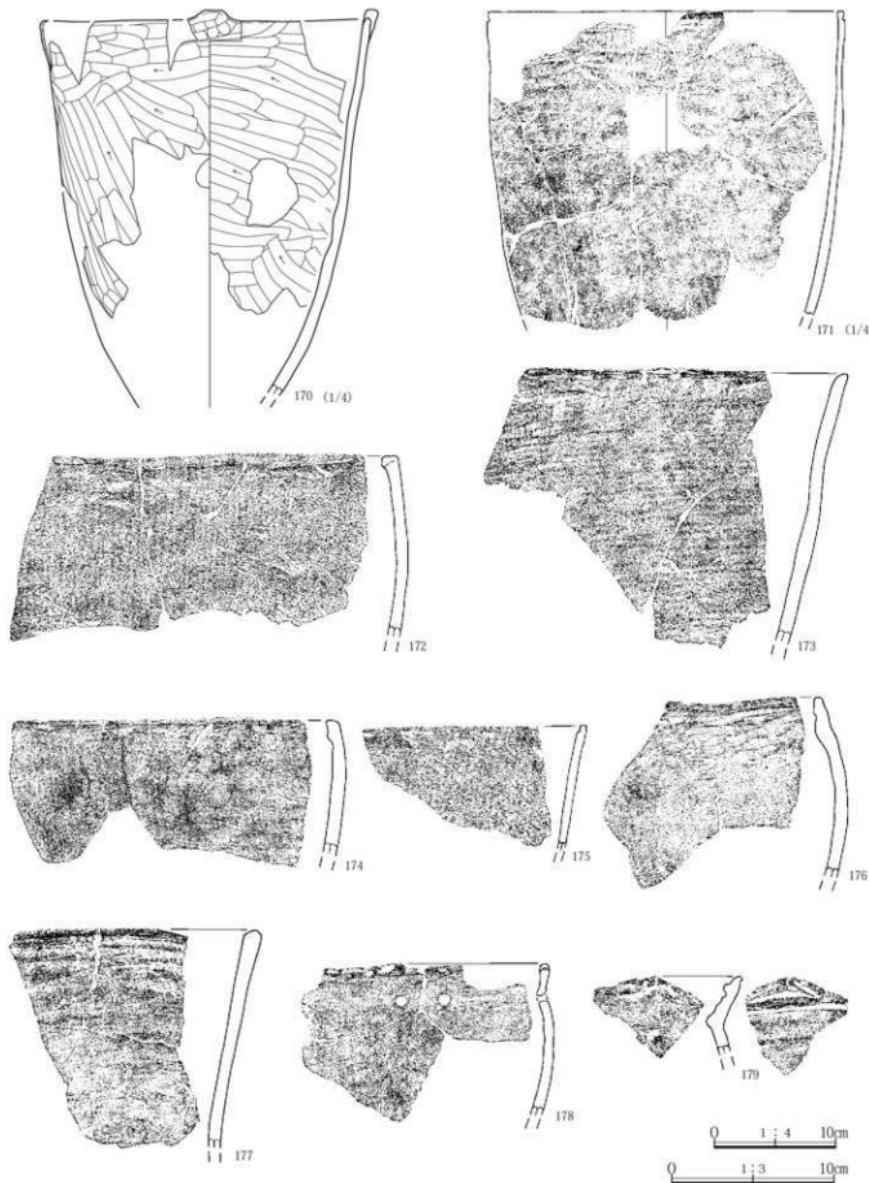
第593図 7区2号配石出土遺物(7)



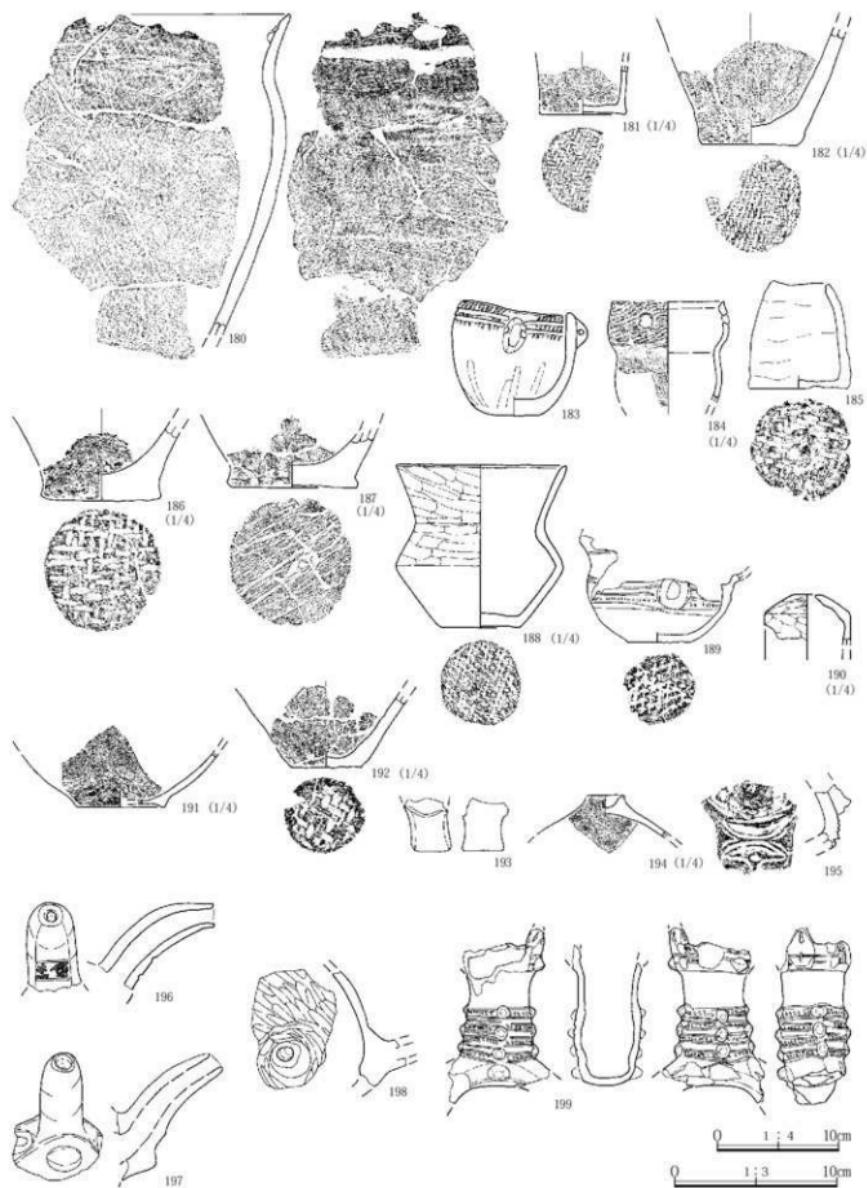
第594図 7区2号配石出土遺物(8)



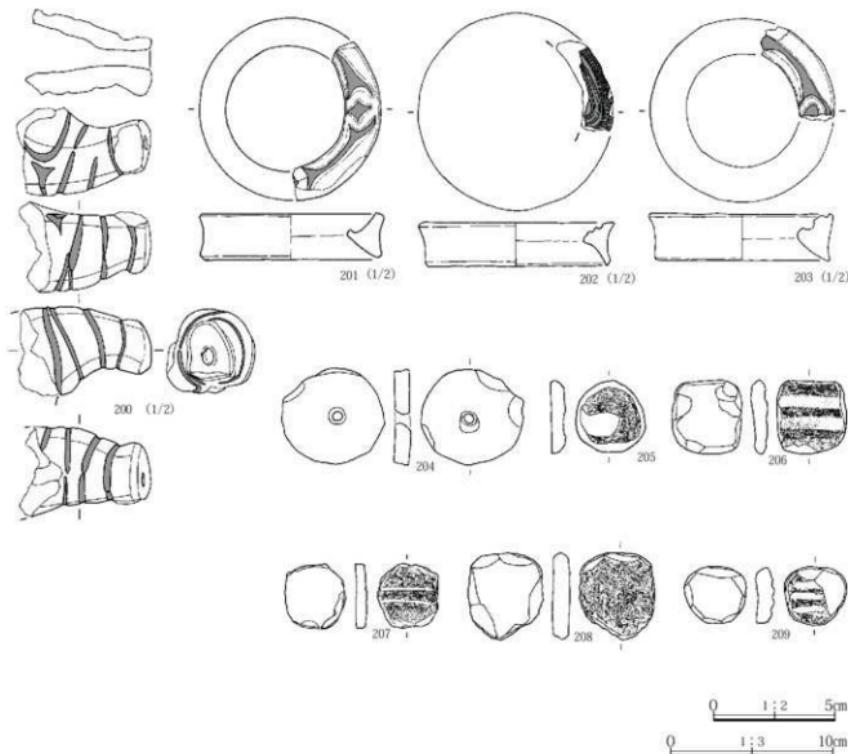
第595図 7区2号配石出土遺物(9)



第596図 7区2号配石出土遺物(10)



第597図 7区2号配石出土遺物(11)



第598図 7区2号配石出土遺物(12)



第599図 7区2号配石出土遺物(13)



第600図 7区2号配石出土遺物(14)

## 第2章 発見された遺構と遺物

### 2号配石A(第14表 第582、601図)

調査年度 平成29年度

位置 90区B-9

経過 平成29年度調査時、石にまとまりがあったことから、「2号配石A」として調査した。

規模 約10m規模の範囲に礫を集積する。

形状 不整円形

構造 個別の全体図、断面図、所見はなく、全体像を把握できない。全体図の推定線でのみ、確認でき、おそらく上部配石の一部と想定される。

遺物 1は佐野I a式、2、3は安行3 a式である。

時期 晩期初頭

### 2号配石B(第14表 第582、601図)

調査年度 平成29年度

位置 90区B-9

経過 平成29年度に「2号配石B」として調査された遺構を整理作業時に90号配石として変更した。

規模 約15m規模の範囲に礫を集積する。

形状 不整円形

構造 個別の全体図、断面図、所見はなく、全体像を把握できない。全体図の推定線でのみ確認でき、おそらく上部配石の一部と想定される。

遺物 後期後葉から晚期前葉の遺物が出土した。1～5は高井東式、6は晚期初頭の高井東式からの後続する型式、7は瘤付土器、8と9は安行3 b式、10は天神原式古段階、11は佐野I a式、三叉文を有する土偶も出土した。

時期 後期後葉から晚期前葉

### 2号配石C(第14表 第582、602～604図)

調査年度 平成29年度

位置 90区B-9

経過 平成29年度に「2号配石C」として調査された遺構を整理作業時に91号配石として変更した。

規模 約2.5m規模の範囲に礫を集積する。

形状 不整円形

構造 個別の全体図、断面図、所見はなく、全体像を把握できない。全体図の推定線でのみ、確認でき、おそらく上部配石の一部と想定される。梢円形状に礫を配置す

る形態を想定している。

遺物 後期後葉から晚期中葉までの縄文土器を中心に出土した。4は堀之内2式、7は加曾利B1式、5、6、8、9は加曾利B2式、10～13は加曾利B3式、18～25は高井東式、26は佐野I a式、27、28は佐野II式中段階、29は安行3 b式である。

時期 後期後葉から晚期中葉

### 2号配石D(第14表 第582、605図)

調査年度 平成29年度

位置 90区B-9

経過 平成29年度に「2号配石D」として調査された遺構を整理作業時に92号配石として変更した。

規模 南北に約5m規模の範囲に礫を集積する。

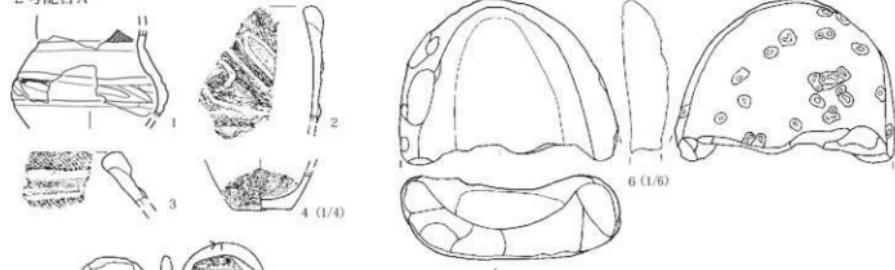
形状 不整梢円形

構造 個別の全体図、断面図、所見はなく、全体像を把握できない。全体図の推定線でのみ確認でき、おそらく上部配石の一部と想定される。梢円形状に礫を配置する形態を想定している。梢円形状内には、配石に単位がみられる。

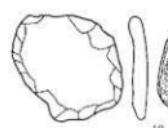
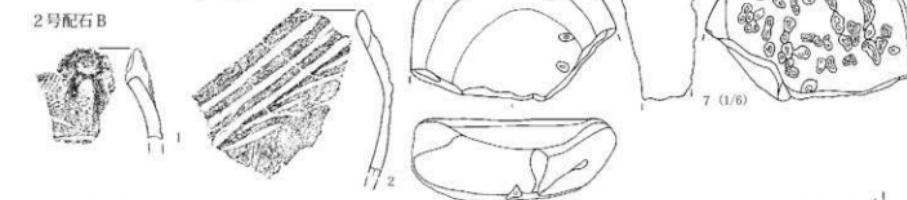
遺物 後期後葉から晚期中葉まで出土し、1～5は高井東式古段階から中段階、7の無文粗製土器は斜位の状態で出土した。

時期 後期後葉から晚期中葉

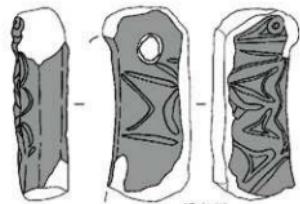
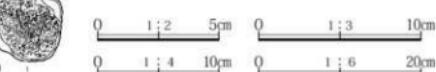
2号配石A



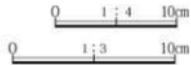
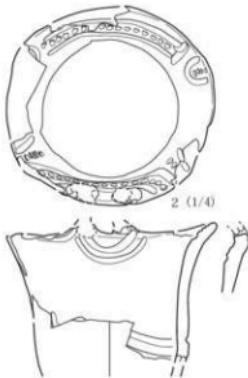
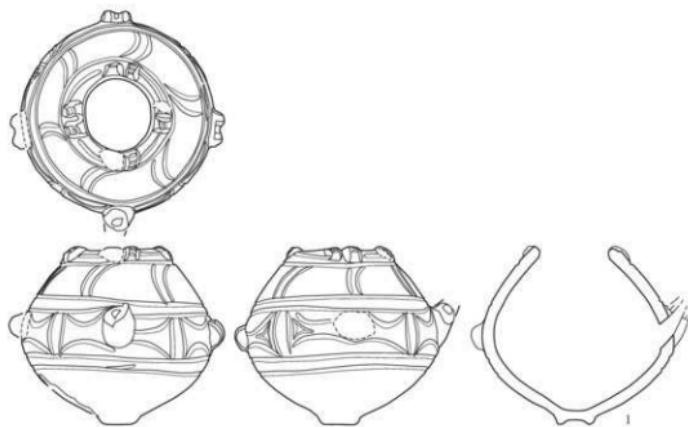
2号配石B



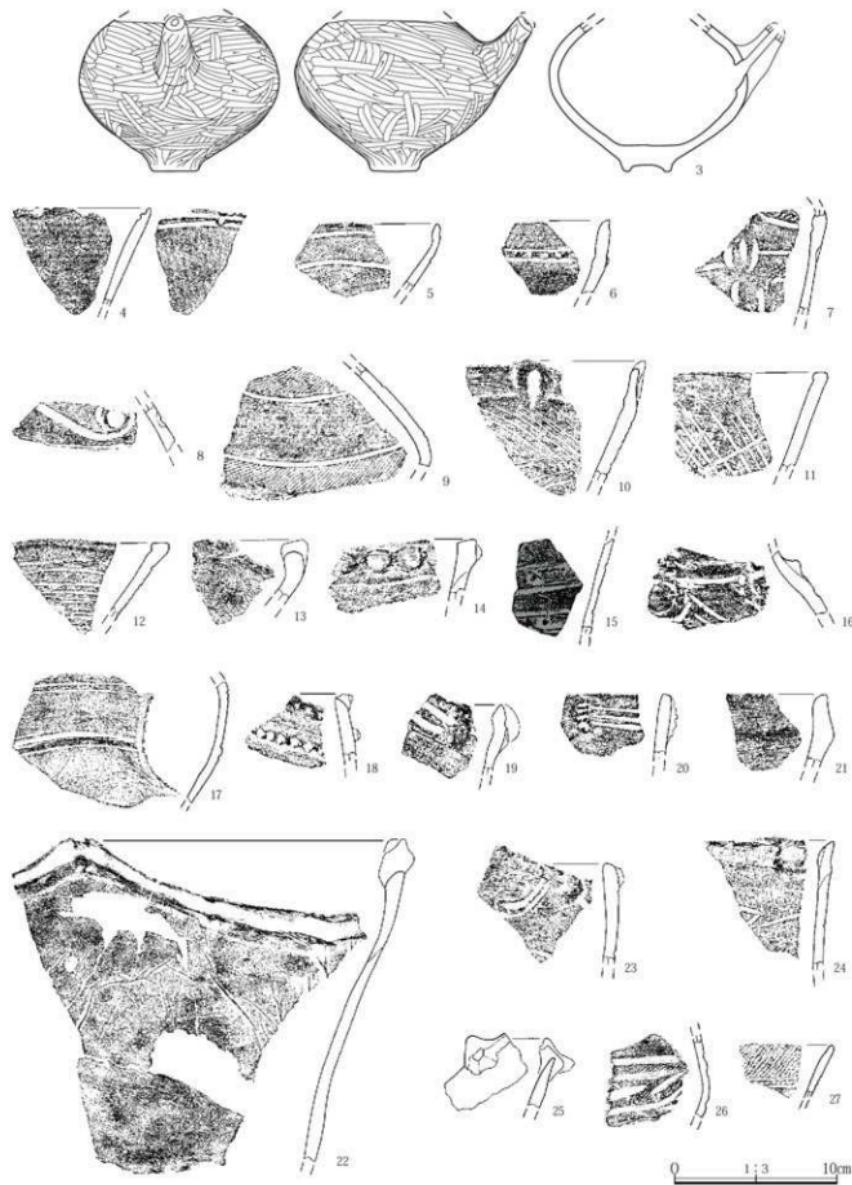
第601図 7区2号配石A・2号配石B出土遺物



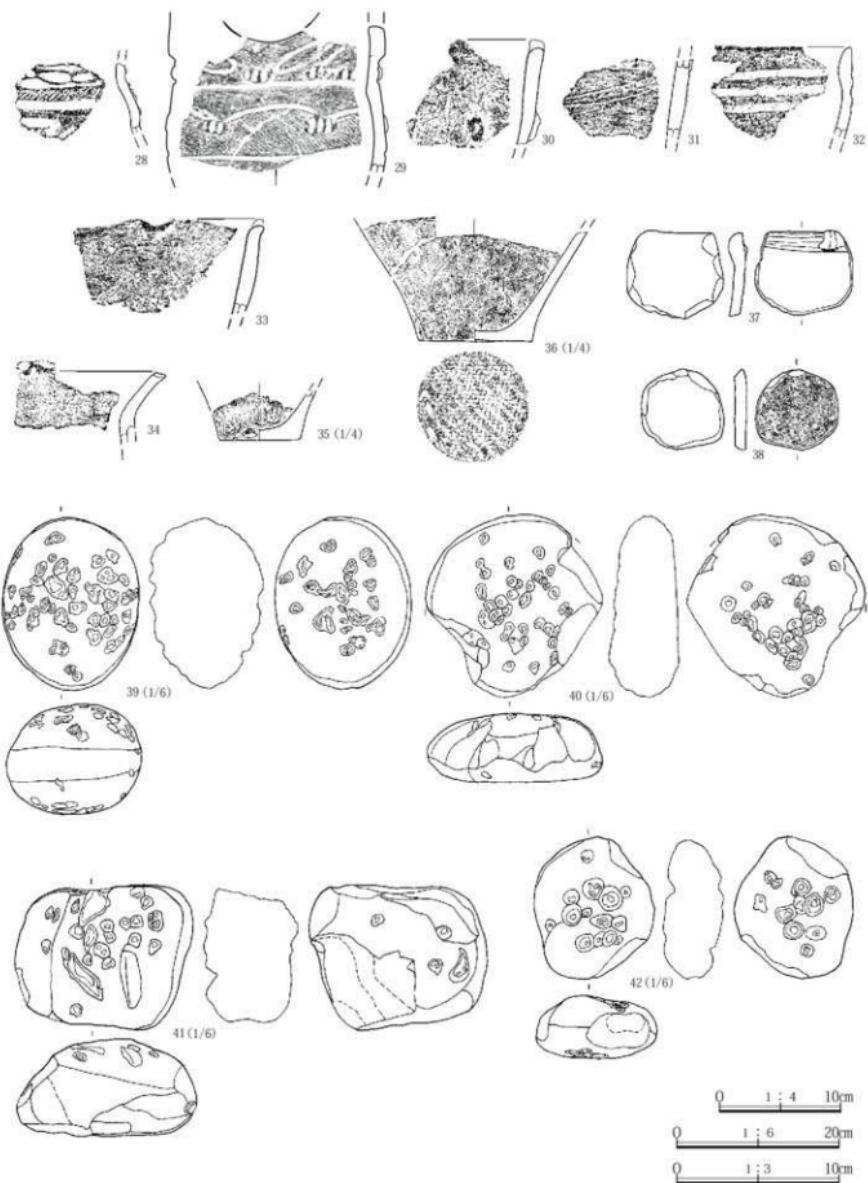
2号配石C



第602図 7区2号配石C出土遺物(1)

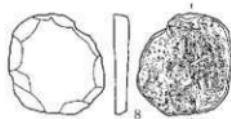
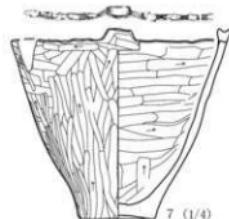
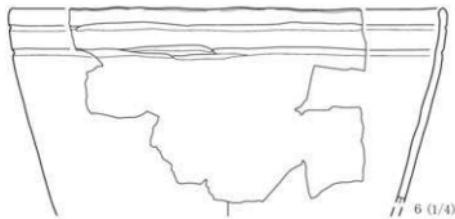
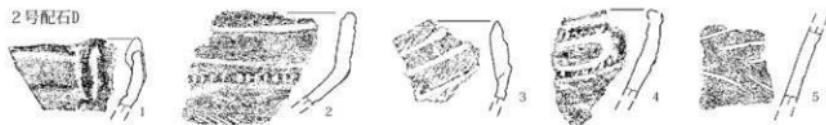


第603図 7区2号配石C出土遺物(2)



第604図 7区2号配石C出土遺物(3)

2号配石D



0 1:4 10cm  
0 1:3 10cm

第605図 7区2号配石D出土遺物

## 第2章 発見された遺構と遺物

3号配石(第14表 第582、606～611図)

調査年度 平成29、30年度

位置 90区G-3

経過 平成29年度調査では、礫を円形に巡らせる様相が確認されたことから、3号配石A～Dまで名称まで番号を振った。平成30年度調査では、3号配石Aと3号配石下位に107号竪穴建物がみられたことから、竪穴建物と変更し、新たに3号配石Eから3号配石Nまで設定した。整理作業時には、第14表の通り遺構名称の振り替えを行った。

規模 東西32m 南北18m

重複 3号配石Aや3号配石Cのように下面より竪穴建物が確認されており、竪穴建物廃絶後に廃棄場や祭祀的な施設として利用されたもの、竪穴建物の構造物の一部を形成するものなど遺構の様相は多岐にわかった。

形状 不整形

構造 3号配石は東西32m、南北18mの範囲に石のまとまりがあったことから、大枠として設定され、14箇所の枝番を設定、整理作業時にはすべて竪穴建物や配石、集石に置き換わっている。竪穴建物に振り替わった3号配石Aと3号配石Cには、竪穴建物の構築時期塗彩があるため、廃棄場として廃絶時に窪地利用を行ったと想定される。3号配石の性格は、廃棄場の他に、上部配石など意図的な配石も確認でき、出土遺物から晩期中葉に利用が頻繁になる傾向がみられた。

下部遺構 3号配石A、Cの下部からは、竪穴建物が確認されている。

石材等 河原石や地山礫を多用する。

遺物 晩期中葉の遺物が多く、この時期の上部配石と想定される。1と2は堀之内2式、3は加曾利B1式、4は加曾利B3式、5～11は佐野Ib式、12～14、18は佐野II式古段階、15、16は佐野II式中段階、19～21は佐野II式新段階、22、38は中屋2式、23～25は天神原式古段階、26～30は天神原式新段階。31～36は大洞C2式、37は大洞A式に併行する。39～52は晩期中葉併行の粗製土器である。土偶は、木菴土偶、遮光器系土偶が出土した。石器類は、石鎚(66～68)、打製石斧(69～71)、磨製石斧(72～75)が出土し、磨石や叩き石が主体を占め、一部は配石の構築材として、用いられていた。

時期 晩期中葉

4号配石(第14表 第582、612図)

調査年度 平成29、30年度

位置 90区B-6

経過 7区東側、配石墓群の南東部に位置する。平成29年度調査では、約25mの範囲に石のまとまりがいくつか確認できたことから、4号配石として大枠を設定の上、A～Gまで枝番号を設定した。平成30年度調査では、調査の進展によって、配石墓は複数確認できたことから、4号配石工まで枝番号を振って調査を行った。整理作業時には、遺構の性格を検討の上、第14表の通り遺構名称の振り替えを行った。

規模 約25mの範囲内に遺構が分布する。

重複 配石墓上面に配石が構築される。

形状 不整形

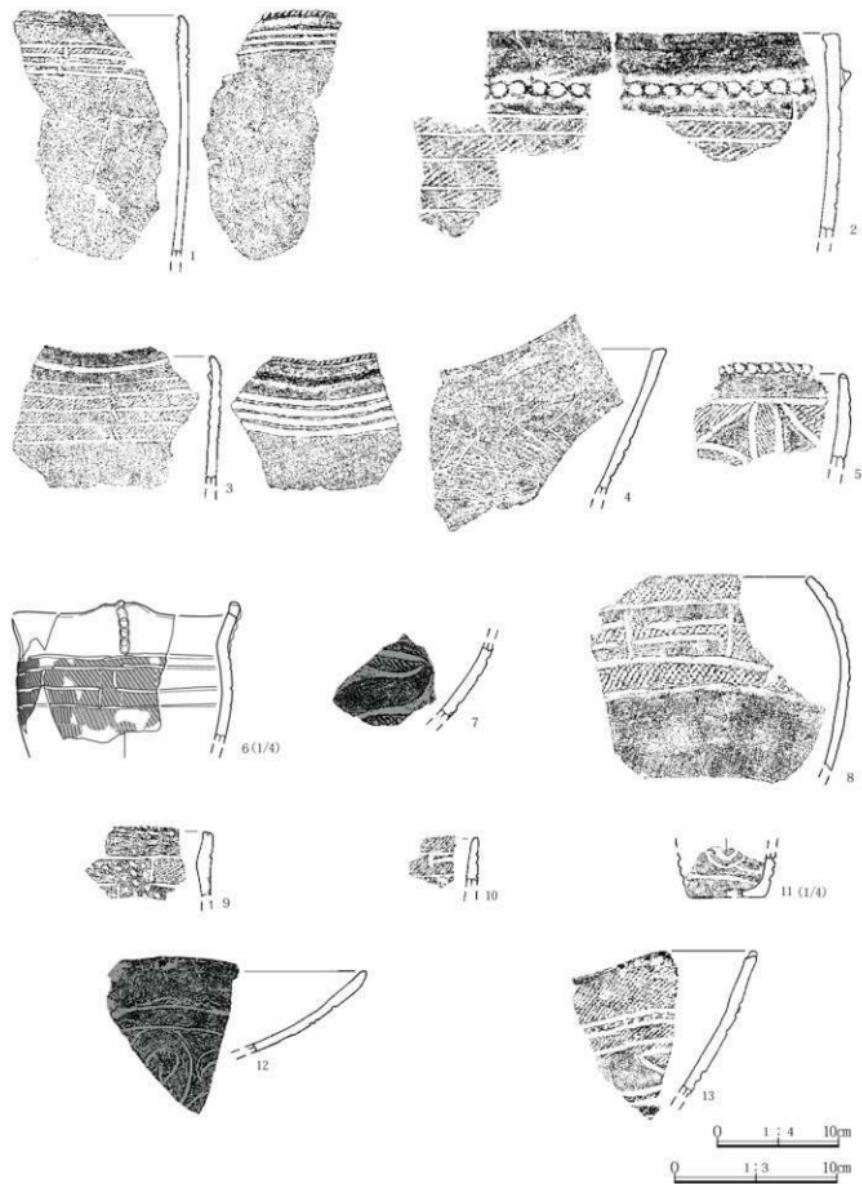
構造 平成29年度調査時に25mほどの範囲に7箇所、平成30年度調査では23箇所のまとまりを確認した。性格は、集石や配石も確認できたが、大部分は上部配石としての様相を呈していた。上部配石は、配石墓として構築された場所に礫を集積し、晩期前葉の遺物が集中していたことから、晩期前葉に人為的な行為が行われたと考えられる。

下部遺構 配石墓群

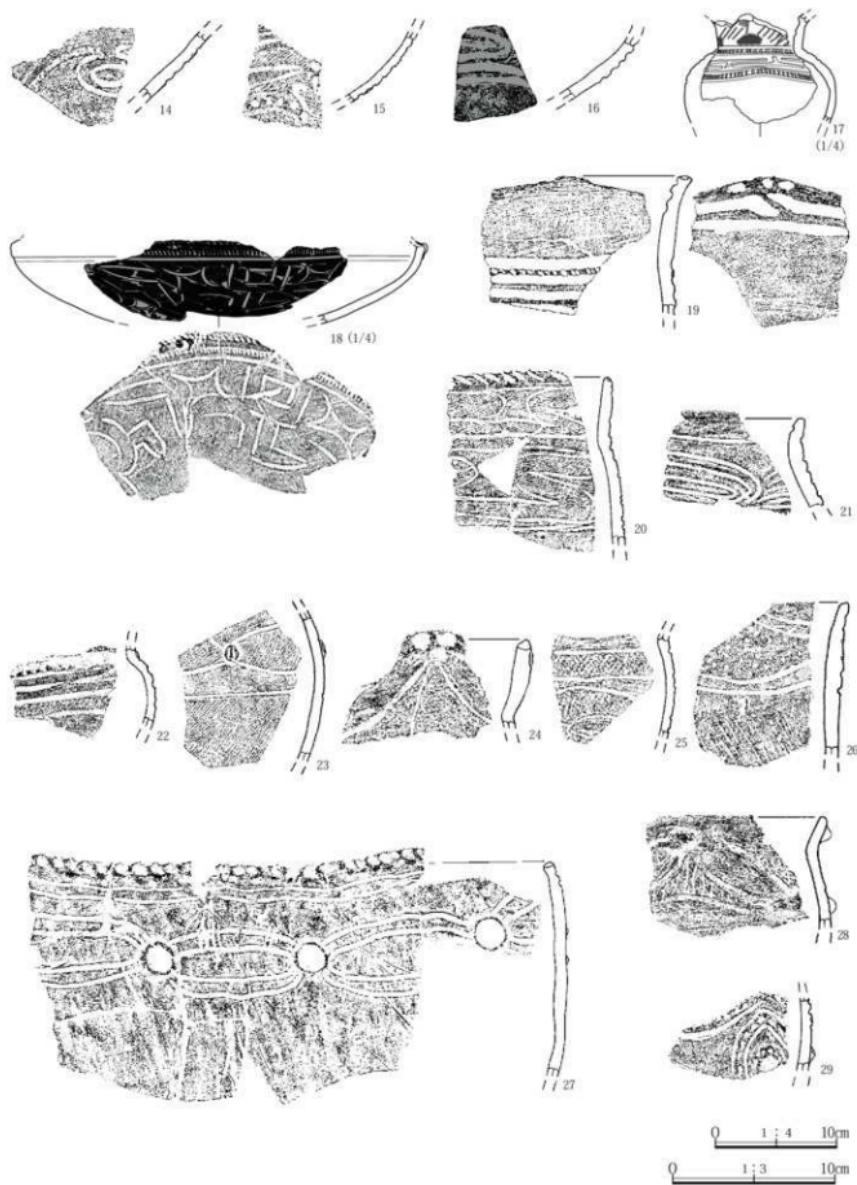
石材等 河原石や地山礫を多用する。

遺物 晩期前葉の遺物が多く、この時期の上部配石と想定される。2～4は、加曾利B1式、5は加曾利B2～B3式、6～10は佐野Ia式である。17～19は晩期に併行する粗製土器である。

時期 晩期前葉



第606図 7区3号配石出土遺物(1)



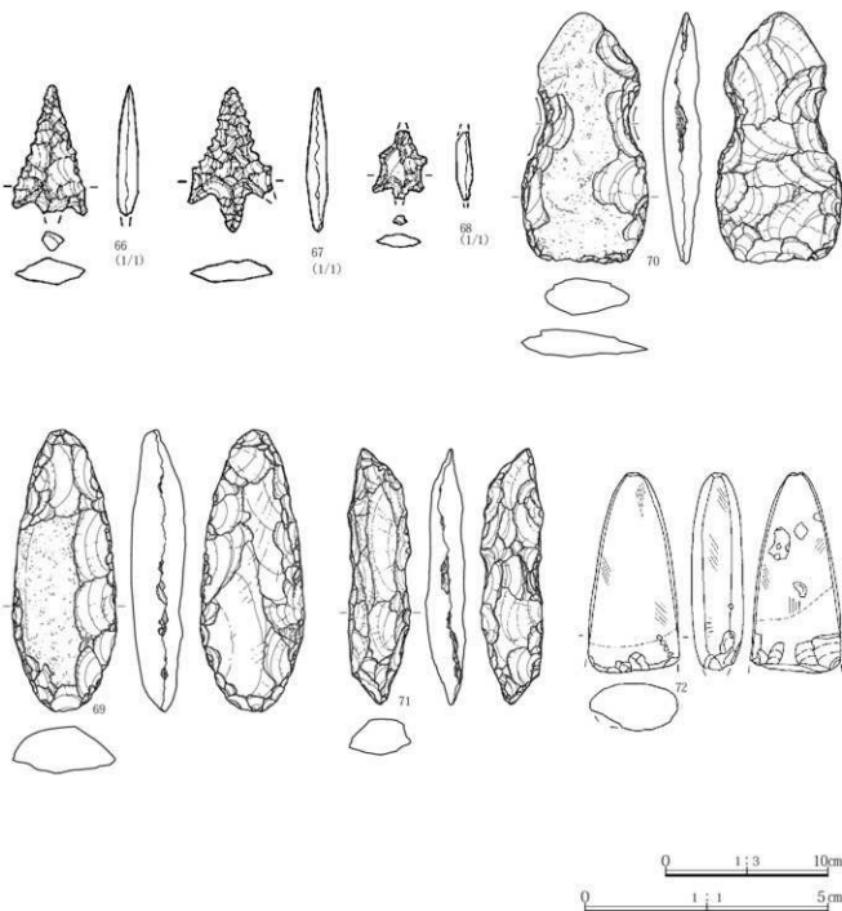
第607図 7区3号配石出土遺物(2)



第608図 7区3号配石出土遺物(3)



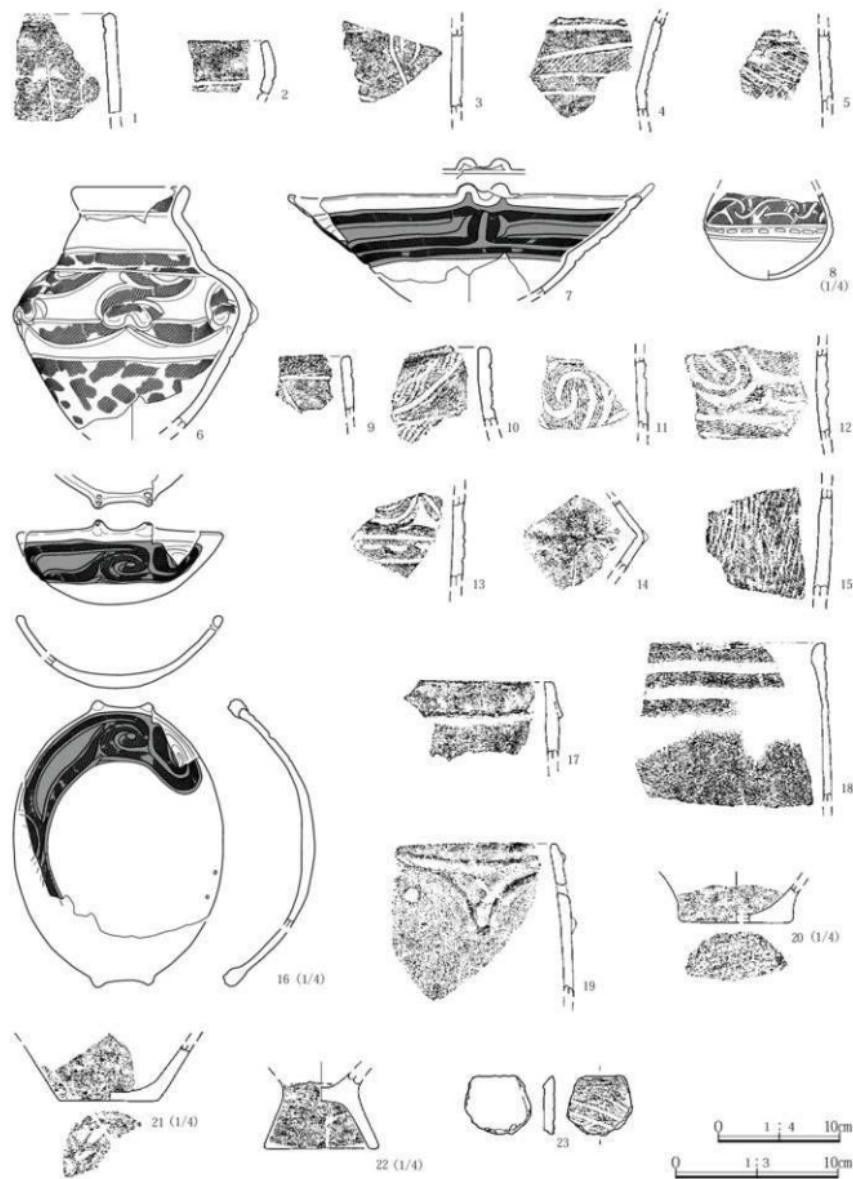
第609図 7区3号配石出土遺物(4)



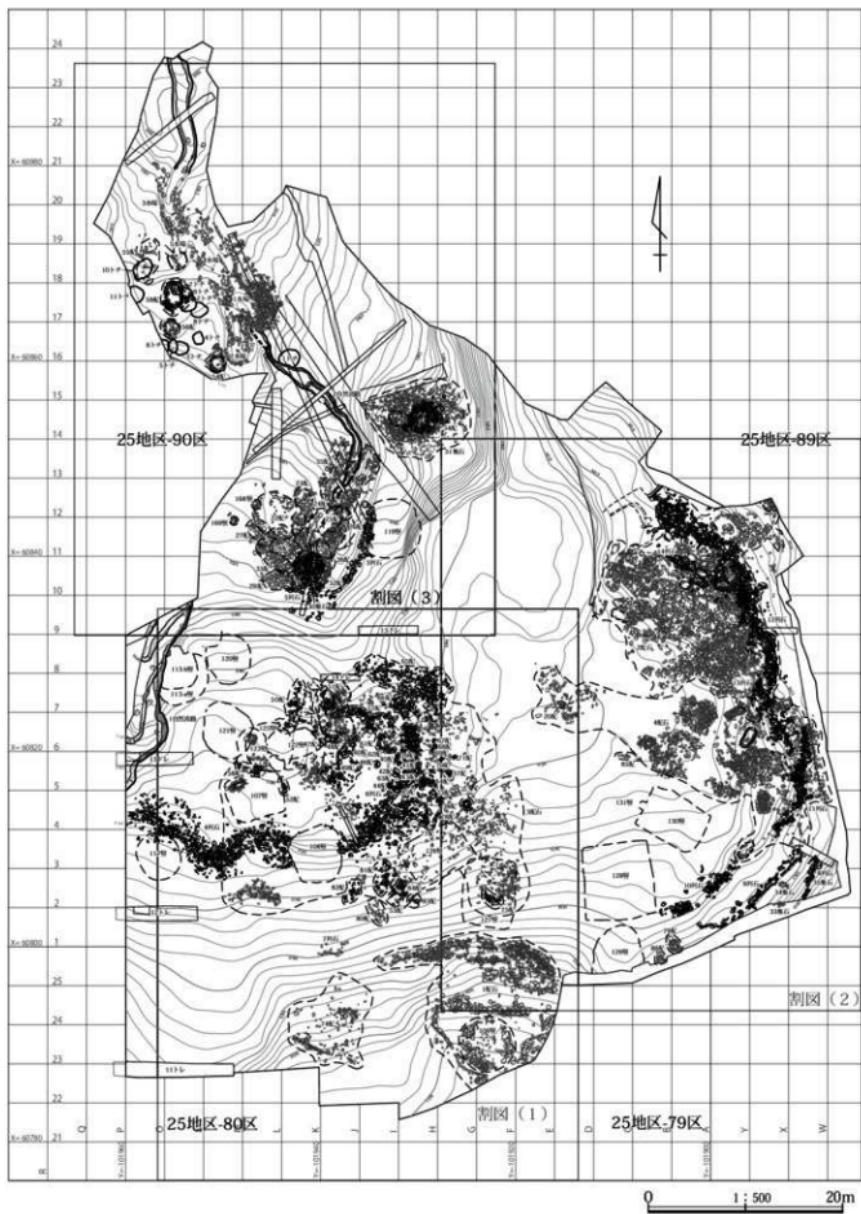
第610図 7区3号配石出土遺物(5)



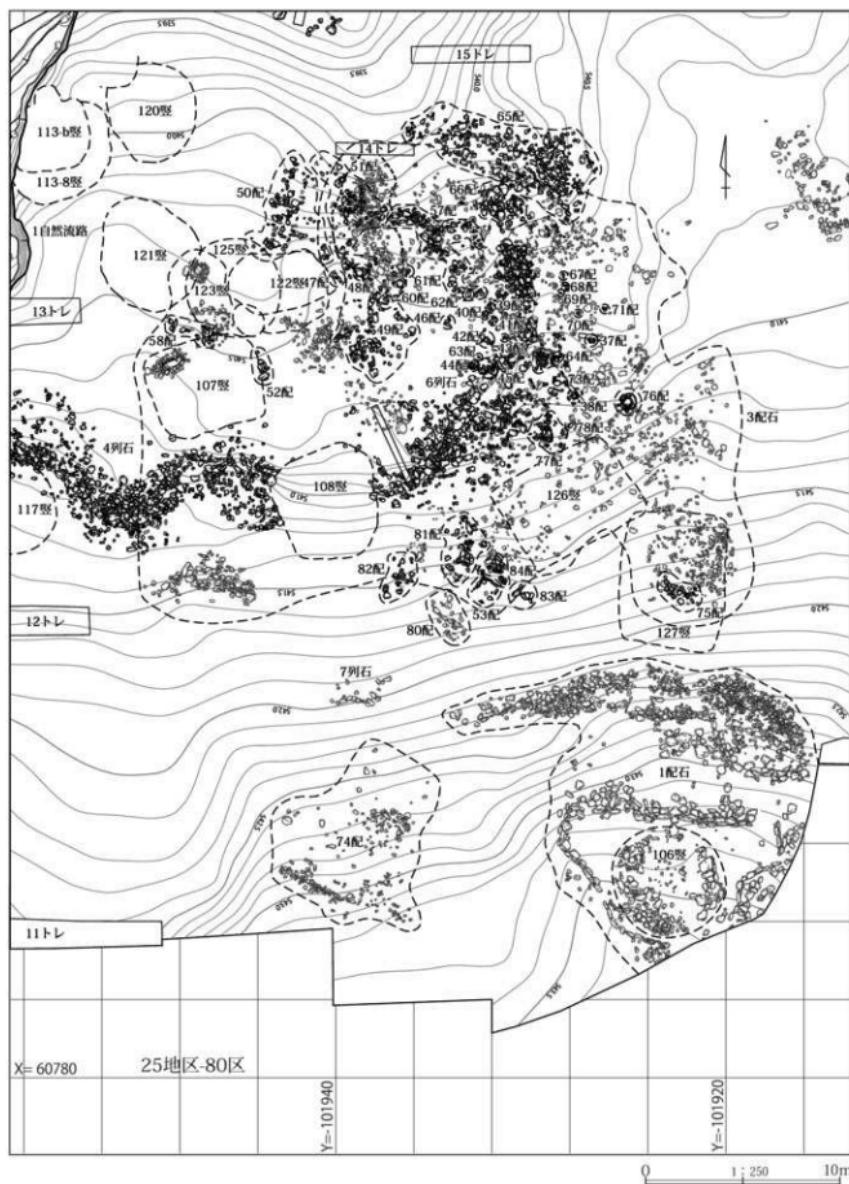
第611図 7区3号配石出土遺物(6)



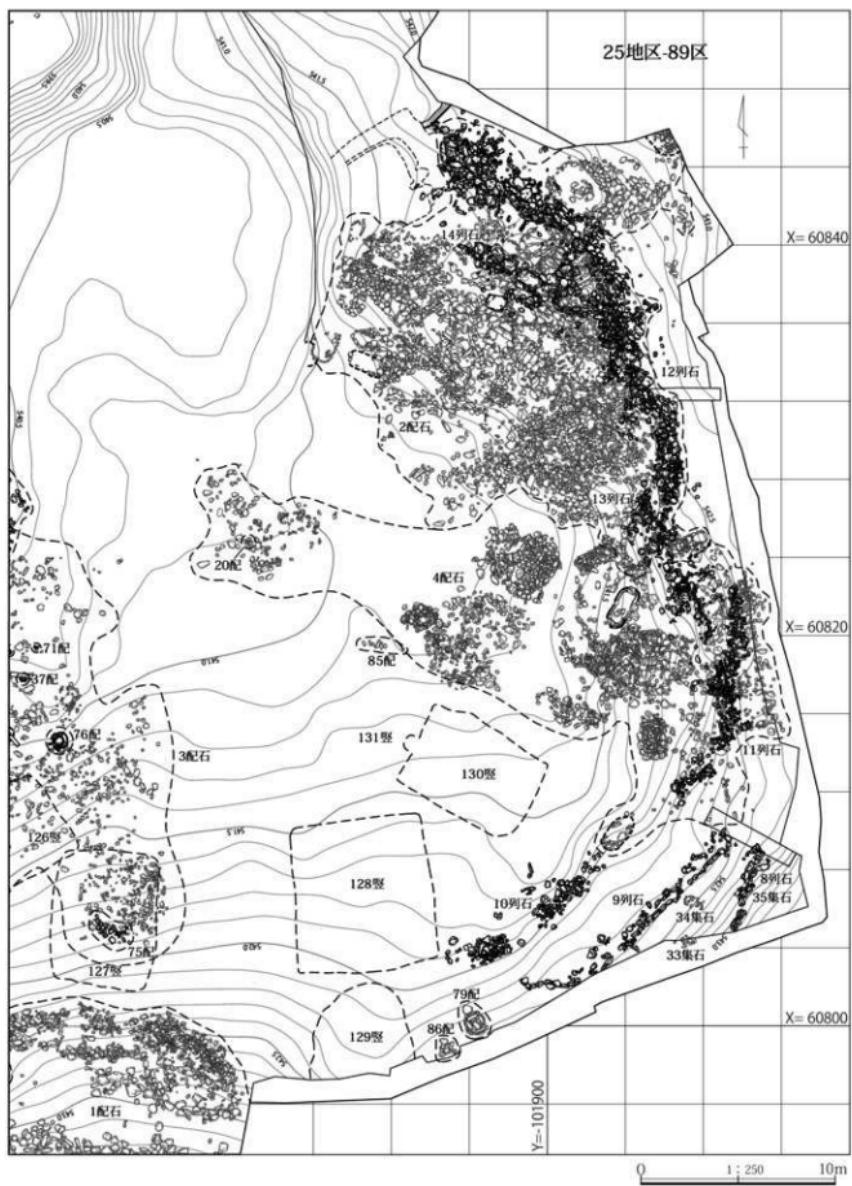
第612図 7区4号配石出土遺物



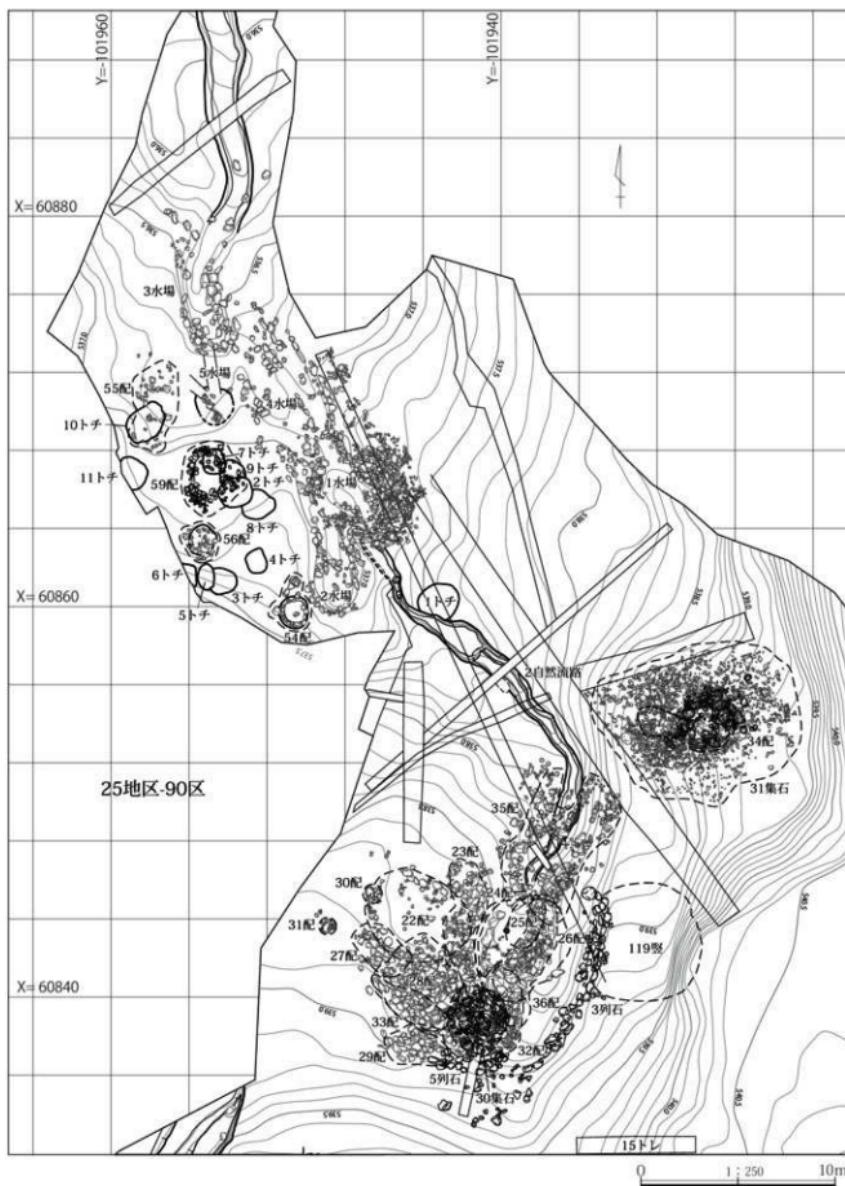
第613図 7区5面全体図(配石・列石)



第614図 7区5面全体図割図(1)



第615図 7区5面全体図割図(2)



第616図 7区5面全体図割図(3)

## 第2章 発見された遺構と遺物

22号配石(第14表 第617図 PL.275.2~3)

調査年度 平成30年度

位置 90区K・L-11・12

経過 7区東側の沢縁辺部に位置する。東側には、10号水場、南側には、27~29号配石、東側には、168号竪穴建物が隣接し、空間を伴うことから、「22号配石」として調査を行った。

規模 南北300cm×東西約250cm

重複 168号竪穴建物との新旧関係については、不明瞭であるが、土層の堆積状況から168号竪穴建物よりも古い。10号水場と28号配石との関係は、壊されている痕跡がないため、同時期に構築されていたと想定される。

形状 周囲の水場、配石の状況から、方形と想定される。

構造 北側縁辺部には、50cm前後の河原石を並列させ、中央部には、黒色土層の堆積した空間を形成する。

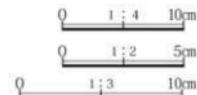
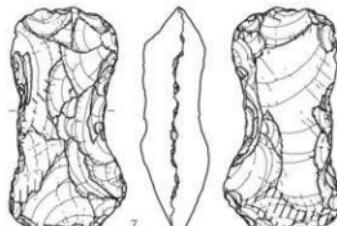
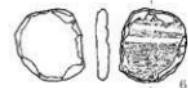
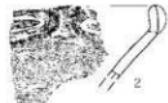
下部遺構 空間部の下部には、深さ15cm前後のピットが8基確認された。これらの上面には、168号竪穴建物が形成されており、竪穴建物に伴う可能性もあり得る。

石材等 北側の配石には、主に河原石を用いる。

遺物 繩文土器は、30点程出土し、高井東式中段階が主体としてみられた(第617図-1、2)。

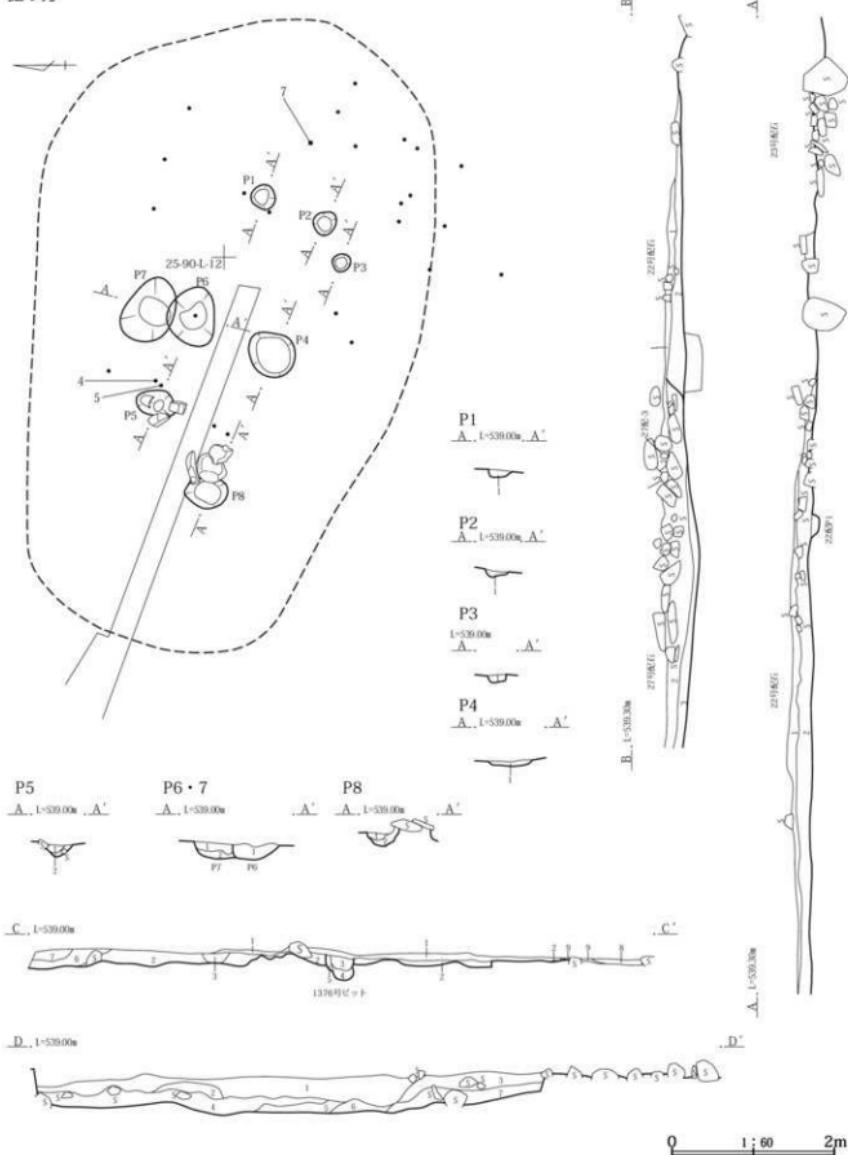
時期 後期後葉

22号配石



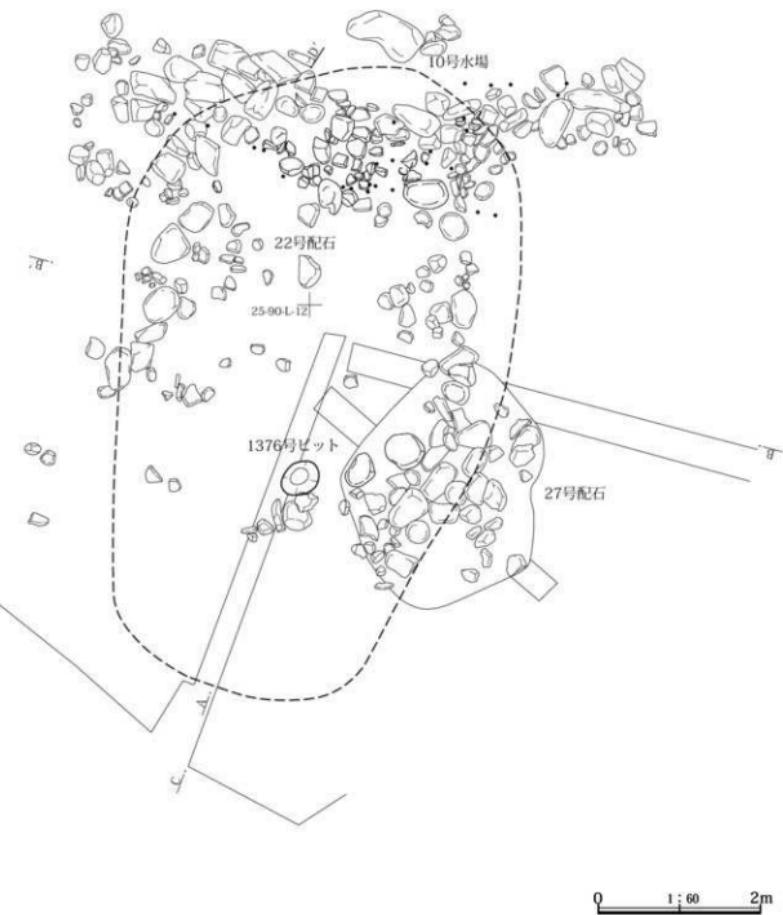
第617図 7区22号配石出土遺物

掘り方



第618図 7区22号配石(1)

平面図



第619図 7区22号配石(2)